

IS — 女装男子をお母
さんに — 改訂版

ねをんゆう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

改訂版です。

少しばかり女性的過ぎる容姿を待っただけの平凡な少年“綾崎直人”は、強引に受けさせられたIS適性検査にて見事に当たりを引いてしまう。

1人目の男性IS操縦者である織斑一夏の件で手一杯な日本政府は、彼を女性の“綾崎奈桜”として隠蔽することで平穏を保とうとするが……

目次

01	プロローグ	1
02	織斑千冬も嘆きたい	6
03	そろそろ僕も嘆きたい	12
04	織斑一夏は嘆いてる	23
05	大和撫子は絶滅していました	30
06	優しい女性は絶滅危惧種	37
07	セシリア・オルコットは褒められたい	45
08	チョロい人達	52
09	変わらない幼馴染	65
10	カレーは甘めでも美味しい	75
11	最高の良妻は誰にも負けない	80
12	かくしごと	91
13	一般人の女装生活に罪悪感付き	115
14	シチューは作る派	129
15	母と呼んでしまう	141
16	ラッキースケベをされる側	155
17	織斑一夏はカッコよくなりたい	173
18	鈴ちゃんの勘違い！1つ目☆	180

311	2 6	変わる心と変わらない想い	300
	2 5	残された者達	292
	2 4.	5 一方その頃	279
	2 4	最強は逃げ出せない	279
	2 3	紅蓮の世界	262
	2 2	過激な襲撃者	247
	2 1	一夏くんは強くなりたい	227
208	2 0	鈴ちゃんの勘違い！3つ目☆	
194	1 9	鈴ちゃんの勘違い！2つ目☆	
181			

	3 4.	変化の兆し	424
	3 3.	とろとろしやるろつと	411
	3 2.	変態の先輩として	393
	3 1.	風も廻る	381
	3 0.	酔いも回る	365
	2 9.	ラウラ	352
	2 8.	復帰の日	339
	2 7.	彼女は今	323

01 プロローグ

「実は君に、女装をしてI S学園に通って貰いたい」

「え？」

「……君に、女装をして貰いたい」

「えええ……」

お髭がふさふさとした、とつてもダンディーなお偉いさんに、真剣な顔でそんな事を言われた経験が、皆様にはあるでしょうか？

僕にはありません。

現在進行形であります。

どころか今こうして体験しています。

率直に言って泣きそうです。

綾崎直人15歳。

生まれつき女性ホルモンが強い体質なのかは分からないけれど、自他共に認めてしま
うほど男には見えない見た目をしています。

そんな少しばかり特徴的な容姿以外には取り立てて主張できることもない自分がど

うしてこんなことになってしまっているのかと言えば、話は2週間ほど前まで遡ります。

1人目の男性IS操縦者である織斑一夏くんが公に発表されてから少し経つと、各校では当然のように男子生徒へ向けた適正検査が行われ始めました。しかし僕自身は特に何かを期待していた訳でもなく、普通の健康診断だったりとかと同じ感覚で受ける予定でした。

……ところが、検査当日は弟妹達が拾ってきたインフルエンザに当てられてダウン。その数日後にある再検査すら受けることもできず、長引きに長引いた体調不良は尽く再検査の予定を食い潰し、本来ならばそれでこの話は終わるはずでした。

それなのに、

「大丈夫です！『綾崎くんならきつと乗れるーいや、むしろ乗れなきやおかしい！』という先生達の総意の元、IS委員会に頼み込んで特別に検査が受けられることになりました！」

「検査の為にIS学園まで行く必要がありますが、交通費諸々は政府から出ますし、学校も公欠になります！安心して行ってきて下さいね！」

という、

世界一ありがたくない配慮によって再々検査を受けることとなり、

その結果、

「……………ほんとに動いちゃった」

『打鉄』と呼ばれるISをしつかりと纏った僕の姿が、そこにはあった。

初めてISに触れた感想ですか？

波乱万丈の足音が聞こえました。

具体的には頭の中で警鐘が鳴り響いていたというか。

泣きそうどころか普通に泣きましたし。

ISに乗れる男性なんて、厄介事の香りしかしません。

『え？ほんとに男が？』

『じ、実は女の子だったりしない？』

『いえ、その確認は事前にしつかりと……』

『つてことは本当に2人目!?!』

『あんなに可愛いのに!?!』

『あんなに可愛い子が女の子なわけないだろ!』

『綾崎ちゃん割と本気で結婚したい……』

『男嫌いな私でもあの子なら……』

『おい誰かこいつ等つまみ出せ』

などと好き勝手な事を言われた挙句、通されたのは小さな個室。

バタバタと慌ただしい部屋の外に対して僕の心は諦観と達観でそれは静かなもので

……

そんな静けさも目の前のダンディズム溢れるおじさまの一言で吹き飛んだんですけどね！もうやだこんなの！！

「女装、してくれないだろうか？」

分かりましたよ！

やりますよ！

やればいいんでしょう！

3回も言われればやりますよ！

こんな偉いおじさまに女装とか言わせたくありませんもん！

もう！スカートだろうとなんだだろうと穿いてやりますよ！

厄介ごとに巻き込まれないためなら！

妹達に懇願されて偶に穿かされていた経験が役立ちましたね！

女性ものの衣服を着るのに慣れてるとか言わないで！お願いだから！

02 織斑千冬も嘆きたい

「あー、I S学園で教鞭を執っている織斑千冬だ。これから3年間、君を含めた問題児達の集まるクラスを受け持つ予定なのだが……」

「あはは、そうですね、大変ですよ。女装して学園に通う問題児とかいますもんね、そんなの完全に変態でもんね、普通は近付きたくもありませんよ。ご迷惑をおかけしまして本当にごめんなさい」

「……君も大変だな」

真剣な顔で女装を懇願してくるダンディーなおじさまに了承の意思を伝えて軽い現実逃避をしていると、今度は目つきの鋭いレディースーツを着た美人さんが部屋へと入ってきた。

どうやら彼女が巷で人気のブリュンヒルデこと織斑千冬さんらしい。

たしか孤児院にいる妹の1人が大ファンだと言っていたが、こうして実際に会ってみると妹が熱を入れていた理由がなんとなくでも分かるというもの。

まず世界最強であるほどの実力を持っているにも関わらず、容姿に優れ、かつ彼女の

人柄もかなり硬派な印象を受ける。

異性よりも同性に愛されるタイプというか。

男性から見てもカッコいいと感じる部分は多くある。

色々な意味でブリュンヒルデとしての期待を裏切らない人物であるのは間違いなく、むしろ彼女以外の誰にその称号が似合うのだと言いたくなる程だ。第一回モンド・グロツソから数年の時を経た今でもファンが増え続けるのも当然の話と言えるだろう。

……そしてそんな女性からの同情は、悲しいほどに身に染みる。

きつとこの件で彼女も立場上、大変な思いをしている筈なのに。

「あの、これから僕はどうなるんでしょうか？」

「あー、そもそも今回君が……その、女装をだな？して入学してもらおう理由なのだが」

「はい……」

「私の愚弟がISを動かしたという話は聞いているな？」

「織斑一夏くん、でしたよね？報道で何度も名前を聞きましたが、やっぱり弟さんだったんですね」

「ああ、そうだ。それ故にあいつは一応私の弟として、ある程度の立場が保証されている。……話は変わるが、君は男性操縦者の価値というものについてどう思う？」

「ISの謎の解明、女尊男卑主義の行末を握るとつても貴重な存在ですよね♪しかしそれと同時に各国の研究者と女性権利団体、果ては身代金目的の小犯罪集団からも狙われる可能性のある超重要人物でもあります♪一人で外を歩くことすらも危ぶまれる上に、その存在だけでも世界のバランスを崩しかねない、色々な意味で扱いに困ってしまう立ち位置に居ると言えるでしょう♪」

「……そんな超重要人物になった感想はどうだ？」

「死にたい、今すぐ全てをやり直したい……僕はただ妹達といっしょに笑って暮らしていたかっただけなのに……なんで、なんでこんな事に……」

「……なんか、すまん」

ここまで来ると最早ヤケクソである。

初の男性IS操縦者である織斑一夏くんが公表された夜に、孤児院の経営者であるマザーと討論した彼の行末が、まさか今度は自分のものにもなるなどと誰が思うだろうか。

いや誰も思うまい（反語）。

ただ、ここまで来れば目の前の悪戯な表情が一瞬で掻き消えた彼女が言いたいこともなんとなく分かる。その解決手段が女装というのがなんとも言えないが……納得は出来るというか。

「要は僕には、ブリュンヒルデの弟、の様な肩書きもなく、支えとなるようなバックも無いので、今はその存在すら隠しておくべき、ということですよね」

「ああ、加えて言うならば学園と日本政府がパンク寸前だということも理由の1つだな。私の弟ということで一夏はある程度世間に受け入れられているが、それでも我々は連日徹夜仕事が続いている。ここに何の後ろ盾も持たない一般人である君の存在が知れ渡る事となれば……」

「……死人が出ますね」

「まあ、運営に支障が出るのは間違いないだろうな。つまりそういう理由で君の存在は君がある程度の立場を確保し、世間が落ち着くまでは秘匿しておきたい。それでも身柄の安全と監視のためにI・S学園には入って貰うがな。完全にこちらの事情で申し訳ないのだが、君の存在がバレない限りは一般生徒と同じくらいの自由は保証できる。この現状では悪い条件では無いはずだ」

「一応聞いておきたいのですが、今日の結果を無かったことに……とかは無理でしょうか」

「残念だが、それは恐らく認められない。なんだかんだと言っても今の所は世界に2人しかいない貴重な男性操縦者だ。手放すにはあまりに価値が高過ぎる」

「ですよね……」

色々と文句はあったが、それでもモルモットにされるよりは比べ物にならないくらいの高待遇であることに変わりはない。

所詮は織斑一夏くんのような強力な後ろ盾もない孤児院暮らしの1学生だ、その全ての記録を消す程度のことなら容易に行えるだろう。そうしないのが単純な善意なのか打算なのかは分からないが、女装さえしていれば正常な日常が手に入るのだ。

そう、女装さえしていれば……!

女装している生活が正常と言えるかどうかは知らないけれど!

くそう! やっぱりもう正常な生活なんてどこにも無いんだ!

もうどうにでもなくれ!

「……正直なところ、我々は君の容姿に心から感謝している。初めて君の学校の教師から写真を送られてきた時にも思ったが、実際にここまでとは思わなかった。もし君が一般的な男性の容姿をしていれば、私は今頃栄養ドリンク漬けになって死にかけていただろう」

「……褒められているんですね、微妙な気分ですけど」

「安心しろ、女装のスペシャリストは既に確保してあるそうだ。君ならきつと素晴らし
い女性になれる。私も完成が楽しみだ」

「壊れてませんか?もしかして織斑さん、もう壊れてませんか?多分普段は真顔でそういう

「こと言うキャラじゃ無いですよね？」

「なに、まだ2徹目だ」

「いや寝てください！30分でいいですから！僕の相手をしていた、みたいな理由を付ければそれくらいの時間は取れるでしょう!？」

「私はな、枕が無いと眠りが浅くなるんだ。膝を貸して欲しい……」

「いいですから！好きにしてくださいですから！どんだけブラックなんですかISS学園!？」

「真耶、すまない……君に書類仕事を全て押し付けて私は美少年の膝の上で……」

「早く寝てください!!」

いくら世界最強と言えど、二徹目の昼下がりともなればどこかおかしくなってしまうものらしい。

もしかしてあのダンディーなおじさんも徹夜で頭がおかしくなっていたのではないだろうか？そう思えば、なんとかなくあのおじさんも目が虚だった様な気がして来る。

そんな考えを巡らせながら、僕は世界のブリュンヒルデを膝枕するという貴重な体験をした。流石に寝顔になるとあの険しい表情も取れる様で、如何にも美人な女性と言った顔に変わった。なんだかんだと言っても、彼女は1人の女性なのだ。

入学したら少しくらい先生の手伝いをしようかと心に決める。

願うならば、彼女が目を覚ました時に羞恥のあまり取り乱さないように。

03 そろそろ僕も嘆きたい

『乙女コーポレーション』

通称『乙コー』

化粧品から洋服、アクセサリ、大人のオモチャ、果てはマッサージ、整形、ホテル経営など、様々な分野を手広く扱っている誰も知る超有名企業である。

「誰だって乙女になれる」という言葉のもと活動しており、とあるバラエティ番組では依頼者を全力で乙女にするという謎コーナーがあるほどだ。しかし男であろうと女であろうと経営陣も含めて全力で取り組むことから、これがまた非常に人気のある企画となっていたりする。

僕もたまに妹達と共に視聴していたし、その気になってしまった妹達に衣装を着せられたり化粧をさせられたりと、それはもう好き勝手に乙女にさせられたりしていた。

……その頃から片鱗があつたとか言うのはやめて下さい。
好きでやってた訳では無いんです、本当です。

本当に僕にそういった趣味はないんです、信じて下さい。

……さて、それはさておき。

そんな超有名な会社の社長室に今どうして僕がいるのかと言えば。

「まあ、女装ですよね」

むしろそれしかない。

「女装自体は今もしているのだがな。……ふつ、なかなか似合っているぞ。服装を変えただけだが、今の時点でもどう頑張っても男には見えん」

「……千冬さん。なんだか少し意地悪な先生風吹かしてますけど、それは年下の男の子に膝枕されながら言う台詞じゃありませんよ？ 今度はどれくらい徹夜したんですか？」

「3日ほどな……どうにもお前の膝枕は心地が良い。ここに来る前に真耶にもしてもらったのだが、何処か物足りなくてな。一体何が違うんだ？」

「同僚の後輩に何させてるんですか……まあ膝枕に関しては昔から妹や弟達によくしてましたから。姿勢が悪かったりすると眠ってくれませんからね、頭の撫で方とか色々工夫した覚えはあります」

「教え子と後輩に膝枕を懇願、か。後で冷静になった時の自分が今から恐ろしいな」

「3徹は仕方ないです、3徹は。後のことは後で考えましょう」

人間3日も寝ずに働いていれば普通は発狂しそうなものだけれど、それはどうやら彼女ですら例外ではないらしい。きっと今頃、日本政府とIS学園には死体の山が積み上がっているのだらうなと思うと、なんだか本当に申し訳ない。

僕の存在がどこまで知られているのかは分からないが、千冬さんのように仕事が増え、てしまった人は確実に存在しているだろう。そちらのケアはする事は出来ないけれど、せめて目の前に居る人くらいには恩返しをしたいと考えるのは間違っていない筈だ。

「ついでに耳搔きなんかもしちやいませしようか。ホテルにあつたので持つてきたんですよ、暫く出来ていないんじゃないですか？」

「……嫁にしたいな」

「その発言は色々とおかしいですよね」

「一夏の嫁でも構わんが……」

「何も構わなくないです、むしろ問題が増えました」

「一夏が自立するまで婚活をするつもりはない……」

「最低でも3年以上はかかると思うんですが、大丈夫ですか？この時代ですし、婚活は早めの方がいいと思いますよ？」

「うう……」

「分かりました、この話題はもうやめましょう。大丈夫です、いつかきつとなんとかなります」

疲労している女性に追い打ちをかけてはいけない。

そうして僕は『あのブリュンヒルデと婚約しようと思う男性』という、あまりに高過

ぎるハードルを見て見ぬ振りすることにした。

『お金のある独身女性ほど悪い男に騙されやすい』、なんてマザーは言っていたけれど、彼女がその道を爆進している様に見えてしまったことも見て見ぬ振りをした。

大丈夫大丈夫、多分一夏くんがなんとかしてくれるから。

僕は知りません、関わりません、全部一夏くんのせいです。

千冬さんの婚活話から30分ほど経ち、ようやく始まった乙女コーポレーションとの会談。

ISの話とか男性操縦者としての話とか全部ふつとばして女装の話を進める日本政府には正直疑問しかないのだが、そんな疑問すら遥か彼方へと追い遣ってしまうほどの”ナニカ”がそこには居た。

”ナニカ”……”ナニカ”……僕にはそれをそう評することしかできない。

それくらいに僕の思考はそれを理解することを拒んでいた。

きつとこれが神話生物とやらの違いはない。

「あつらあくん♡なかなかなぶりちーな子じゃないのん♡あーしは乙女コーポレーション社長の彦星 乙女（ひこぼし おとめ）よん♡よ・ろ・し・く♡」

「……（目逸らし）」

……これは、あれだ。

悩み事とか嫌な事があつた時に空を見上げると、なんだか全部がちっぽけに思えてしまふ時と同じ感じ。

そのの苦しいバージョン。

なに苦しいバージョンって、なかなか無いよそんなバージョン。

現実逃避するかの如く視界を横にズラすと、「偶然にも」千冬さんと目が合つてしまった。

偶然だなあ……

「……綾崎、挨拶くらいしたらどうだ。初対面の相手から無言で目を逸らすなど、失礼にもほどがあるぞ」

「いえあの、目が合つたつてことは千冬さんも逸らしたつてことですよね？なに自分だけ逃げようとしてるんですか。その冷や汗は誤魔化せませんかね、死なば諸共ですからね。責任とつて下さいよ」

「うふふ♡あーしの美貌の前ではしようがないわよ♡お姉さんもあーたもなかなか美
美ツと来てるけど、まだまだネ♡早くあーしに追いつきなさい♡」

「黙れ怪物」

「辛いよマザー……」

「んまつ♡美の怪物だなんて……あーしにとって最高の褒め言葉よ♡」

「なんだこいつ、最強か……?」

「千冬さんがそう言うなら間違いなく最強だと思います、僕も泣きそうです」

「私とてここまでの精神攻撃は初めてだ」

女性用のV字水着にミニスカート、ぱつんぱつんのニーソックスにナース帽を被ったスキンヘッドの筋肉ダルマがそこには居た。

無駄に脱毛しているのと化粧が濃いのが更にキツイ。

クネクネとしたぶりっ子染みた仕草も拍車をかけ、”ソレ”と一緒にやって来た一人の男性社員が顔を真っ青にして今にも倒れそうになっている。

この空間に長時間いるのは不味い

まだ対面して数回目の千冬さんとアイコンタクトでそう通じ合えるほどに、僕達は精神的に追い詰められていた。

「……あ、あー、そうだ千冬さん！確かこの後も予定があるんですけどよね!?!忙しい立場ですもんね!」

「そ、そうだな。男性操縦者の件で学園に連絡が殺到しているからな、早めに戻らねばならない」

「あつらあくくん、そんなのお？せつかくたあくさんお話ししようと思つてたのにいん♡」
「遠慮させていただきます」

パシツと千冬さんと机の下でハイタッチを交わす。

世界最強をここまで追い詰めるとは一体彼（女）は何者なのか、クネクネと動くのを本当にやめて欲しい。

時々見たくも無い乳首がポロリしそうになるのが心底キツイ。

座っているせいでミニスカの中身が見えそうになっている事実を必死に意識外へと押しやっているだけで限界なのに、下手なホラー要素よりよっぽどS A N チェックが厳しいと思う。

あれは直視してはいけない類の妖なのだろう。

理解したら気が狂うとか、多分そういうものだ。

「とりあえず話を」

「は、はい。それでは私の方から……」

話を進めるために千冬さんが顔を真っ青にした社員さんに簡潔な説明を求めると、社員さんもまた「助かった」といった表情をして視界から奴を消し去る様にして僕達2人に説明を始めた。

段々と彼に生气が戻っていることを考えると、目の保養というか、千冬さんの様な美

人は見ているだけで心が休まるということなのだろう。

あんなのを見た後なら尚更だ。

千冬さんとしてそんな引き立て方はされたく無いかもしれないが。

……まあ！こっちはバリバリ視界の端に映ってるんですけどね！

何故かソファの上で女豹のポーズを取り始めた怪物の姿が見えてしまっているんですけどね！

マザー助けて！

目を逸らすのも心を殺すのもそろそろ限界だよ！

「…………ふ、む。要は綾崎の女装生活における必要物資から資金提供、教育、助言まで全てそちらで行なって貰えるということか。資金に関しては政府からもそれなりに出ると思うが、少し話が良すぎないか？事情は知っていると思うが、彼を広告塔として利用するのは難しいぞ？」

「ええ、それがですね……」あーたにはウチのISに乗ってもらおうと思ってるのよん♡
だから女性のままでも十分な広告塔になりうるわん♡」

「なに？」

ISという言葉にピクリと反応した千冬さん。

対して女装期間中はこの怪物と深いお付き合い(○)をしなくてはならないという事実

に完全に魂を失った僕。

そして再び始まる怪物のターンに社員さんは泣きそうになっていた。

あなたは絶対この会社を辞めた方がいいと思います。

可能なら僕もこのままお暇したいです。

「乙女コーポレーションがISだど？そんな話は聞いたことがないが」

「えー、近頃ISに関する依頼が他の企業や国家から多くてですね。主にISのデザインやペイントに関するアイデアが欲しいというものなのですが、担当者達が思いの外ハマってしまいまして……」

「だから思い切ってIS部門作っちゃったノン♡コアも1つ確保して現在鋭意作成中♡もちろん、このことは政府からOKGOGOサインも出てるわん♡あとは綾崎ちゃんの意・思・次・第♡」

知らないうちにどんどん周りが固められている件について。

これ今後、自分の身に降りかかるであろう危険を考えると拒否なんてできる訳がないのですが。

でもここで拒否しておかないと女装期間が終わっても一生この会社でお世話になるという、うーん板挟み。

貴重な男性操縦者なのだからISを提供したいという会社は多くあるだろうけれど、

そもそもそれを隠さなければいけないわけで。

政府に頼んだとしても降りてくるのは所謂量産機だろう。

本当に自分に合った、自分だけのＩＳを手に入れておくならこの機会しかない。

メリットは確かにある、それはもうたくさんある。

命を大事に生きていくのなら貰っておくべきだ。

……けどメリットが強過ぎる！

毎日のように”コレ”と会わないといけないって！

あ、”コレ”とか言っちゃった！もういいや！

だって絶対この人いろんな種類の変態装備持つてるもん！

この一種類だけなわけないもん！

毎日違った変態を見せつけられるに決まってるもん！

やったね綾崎ちゃん！飽きがこないね！

せめて飽きさせて欲しかった!!!

毎日新鮮な変態なんて絶対にお断りだよ!!!

「綾崎さん、ご安心ください。社長の衣装は毎日がこのレベルな訳ではありません。今日は少し張り切ってしまっ……その、えらいことになってますが。普段はまだ見られるレベルなのです」

「ほんとですか!? ほんとなんですよね!? 信じてもいいんですよね!？」

「……はい」

「なんですか今の間は!? 絶対裏があるじゃないですかああ!!」

一瞬だけ期待させておいて一気に落としてくる素晴らしい投げっぷり、涙目になって社員さんを問い詰めるも彼は必死になって目を逸らす。

そんな僕達を見て他人事のような雰囲気で見ている千冬さんが恨めしい。心底恨めしい。

「……綾崎、諦めろ」

「うう……毎日写真撮って千冬さんに送りつけますから……!」

「やっ、やめろ!」

こうして対ブリュンヒルデ用決戦兵器第1号が生まれた。

後にこの決戦兵器をIS学園中の監視カメラの前に貼り付けることで、対天災用決戦兵器にもなり得ることが判明したのだが、それはまた後の話。

04 織斑一夏は嘆いてる

side 一夏

(……つれえ……)

俺こと織斑一夏は現在、10数年生きてきた人生の中でも、3本指に入るほどの危機的状況に立たされている。

いや、実際には座っているのだけれど、決してそういうことが言いたいわけではない。

IS学園 1年1組

未だHRの5分前だと言うにも関わらず教室は妙な静けさに包まれている。

それはもちろん只の静けさではなく、緊張感の漂う方の静けさだ。

そしてその原因はもちろんこの俺である。

……いや、別に周りを威圧とかしている訳ではない。

ただ、クラスの30人中29人が女生徒であり、それはつまり男子生徒は俺1人だけというところが原因なだけだ。

『世界で唯一ISを動かすことができる男性操縦者』

そんな肩書きが俺に付いて以降、それはもう憎愛入り混じるさまざま視線に晒され

てきたが、今日のこれはそれまでの中でも特に酷いだろう。

教卓の目の前という位置も悪いのだろうが、自分以外の29人分の視線が一挙にこの背中に突き刺さっているのだ。指先1つ動かすだけでザワリとし、その度に冷や汗が止まらないくらいには心臓が悪い。

(帰りたいたい……)

よりもよつてなぜこの席なのか。

この先ずつとこのままなら、1ヶ月保たない自信がある。

そんな風に俺は入学初日から既に今後の3年間を憂っていた。

……ちなみに29人分の視線とは言ったものの、正確にはそれは間違いである。

実は俺の左隣の席の主は未だに來ていないらしく、同時に教室の外には俺の姿を一目見ようとたくさんの女生徒達が集まっていた。

つまり、実際に向けられている視線の数は29ではなく、(29+1+約30)というわけで。

(……いや増えてるじゃねえか！)

両目あるから×2すればもつと凄いことになるよ！

つてやかましいわ！半分でもいいから誰か引き受けてくれよ！)

もちろんこれ等を他の誰かが引き受けてくれるはずもない。

身動き一つ取ることすら戸惑われるような状態でHRが始まる時間まで、俺は亀のようにならずくまりながら待っていることとなった。

人生で初めて甲羅が欲しいと思った。

穴でもいい、入りたい。

「ね、ねえあれ見て」

「え、嘘……なにあの子、芸能人？」

「モ、モデルとかかな？ 私は見たことないけど」

それから数分が経ち、無理な姿勢で段々と肩が痛くなってきた頃、廊下にいる生徒達が突然ザワつきだした。

彼等が何を言っているのかは分からないが、恐らく担任となる先生でも来たのだろう。耳も心も塞いでいる俺にはもう何も聞こえません。

できればもう少し早くきて欲しかったが、この状況から解放されるならばもう文句は言わない。

なんでもいいから早く解放してくれ。

(……もういいかな)

これでようやく一息をつける。

ホームルームまでの僅かな時間、これが本当に長かった。

普段の3千倍くらい長く感じた。

そして、ようやく担任の先生との対面だ。

これだけはいつになっても楽しみなもので、如何にも情熱的な先生だったり、朗らかで優しいような先生だったり、勉強に厳しそうな先生だったり、これから一年がその人によって変わると言っても過言ではない。

IS学園の性質上、先生は確実に女性なのだろうが、それでも個人的にはこの荒んだ心を癒してくれるような優しい人を期待したい。

これだけの不幸な目に合っているのだ、担任の先生くらい望んでもバチは当たらないだろう。そんな微かな希望を胸に、塞ぎ込んでいた顔を上げて扉の方へと視線を向ける。

……すると、

「え」

そこに立っていた女性を見た瞬間、俺はあまりの衝撃に言葉を失ってしまった。

「はい、ここが綾崎さんのクラスですよ。担任は私なので！いつでも頼ってくださいね

！」

「あ、あはは……ありがとうございます、山田先生」

とある部分が異様に豊満な眼鏡の先生（……先生だよな？）に連れられてやってきた一人の女生徒。

確かに先生は希望通りに優しそうな先生であつた。

だが衝撃を受けた理由はそちらでは無い。

俺の目は先生の隣に居る彼女の方に釘付けとなつていたのだ。

「……う、皆さん、おはようございます」

所謂モデル体型というのか、それなりの身長に理想的な女性の体型。

加えて自身の姉や周囲の人間関係によつて、ある程度美人に耐性のあるはずの俺でも見惚れてしまうほどに整つた容姿。

長い黒髪は艶やかで、正に日系の美人だと言える。

ほんの少しの動作にすら気品に溢れ、挨拶と共に現れた笑顔はあまりにも可憐だつた。

こうしてまじまじと女性のことを見過ぎるのも失礼だというのに、そんな理性に反して俺の目は自然と彼女を追つてしまうのだから、男の性というものは本当によろしくない。

「ひえっ」

そしてそんな自分の反応と同じ様に、教室中から女生徒達の悲鳴じみた声が聞こえて

くる。

俺に集まっていたはずの視線が一気に霧散し、彼女へと集まっていた。先ほどの悲鳴染みた声を考えるに、やはり同じ女性から見ても彼女は異質なのだろう。それでも彼女はそんな生徒達の反応に対し、少し驚いただけで軽く会釈をして席へと着く。

そう、俺の直ぐ隣の席に。

(なんか、すげえ)

腰のあたりまで長く伸ばされた髪はよく手入れされているのか非常に細く美しい絹のようで、目は自身の姉とは対照的に大きな垂れ目で優しい印象を受ける。

垂れ目と言えば姉の友人に一人印象的な人が居たが、それは彼女が持つ澆刺とした類のものではなく、むしろ『物静か、お淑やか』といった言葉がよく似合うものだ。

これはそう、幼い頃から身近に美人だけれど騒がしい女性が多かった俺からしても、初めて見るタイプの女性だった。

(……弾。IS学園って、マジでとんでもない美女がいるんだな)

この時、俺は生まれて初めて友人の弾の馬鹿な言葉に共感を持った。

『IS学園の女の子は美少女ばつかなんだろ!?羨ましいぜ一夏アア!!』と割とガチめな雰囲気では親友は嘆いていたが、あの時言っていた言葉も今なら分かる。

(俺、ここにきて初めてよかったと思えることがあったよ)

心の中で今は亡き親友（生きてる）に向けて敬礼をした。

お前は間違っていないかった、お前は最高の親友だ、と。

そして次の瞬間、自身の頭頂部からしてはいけない音がした。

ドパンツ

「ぎゅぶつ……！」

「ひえっ」

さつきとは違った意味合いでの悲鳴が聞こえてくる。

「教師の挨拶を無視するだけでは飽き足らず、初対面の女性をジロジロと……なかなかの問題児のようだな？ 織斑」

「ち、千冬姉?! ……いや、これは呂布か？」

「誰が三国志史上最強の武将だ！ 織斑先生と呼べ！」

ドパンツ

「ぐぶえつ……！」

IS史上最強なんだから似たようなもんだろ、そんなことは口が裂けても言えなかった。

05 大和撫子は絶滅していました

side 奈桜

(……あれが千冬さんの弟の織斑一夏くんかあ。それにしても、千冬さんの人気はやっぱり凄いなあ)

2度にわたる方天画戟(出席簿)の攻撃によって一夏くんが沈んだ後、女生徒達のハイパーボイス(威力90)によってダメージを受けた僕は、耳を押さえながらも彼を観察していた。

背後からは「お姉様!私を罵って!」「もつと叱って!」「見下して!」などという理解してはいけない悍ましいナニカが聞こえてくるが、それ等はあえて無視することにした。見たくないものから目を背けて現実逃避をする技術は、ここ数ヶ月でしっかりと身に付けている。

それが嬉しい事なのかどうかはさておき。

……あの日、乙女コーポレーションで千冬さんと別れた後、それはもう酷い目にあつた。

毎日のように見せつけられる変態衣装。

確かにあの日見たものは特に酷いレベルのものだったけれど、通常時でも一般人のS AN値を削るには十分過ぎる破壊力を持つていた。

加えて通常の女生徒として、一般の受験を乗り越えた生徒として入学するためにISの勉強を徹底的に行い、合間合間に女性としての振る舞いを教え込まれる毎日。

勉強はまだしも後者に関しては常にあの決して理解してはいけないナニカが隣に控えていたため、むしろ現実逃避のために熱心にISの勉強を行っていたと言っても過言ではない。

おかげで基礎程度の知識は十分に身に付いたが、それをアレのおかげと言いたくはないこのジレンマ。

そんな2週間に渡る地獄の試練を乗り越えた僕は、そのままIS学園の寮へと逃げ込み、ようやく今日この日を迎えることができたのだった。

……ただ、専用機がギリギリ間に合わなかったため、近いうちに再び“アレ”が直接僕に会いに来るらしい。

ついさつきそう山田先生から聞かされた。

聞いた瞬間、思わず千冬さんに泣き付いた。

可哀想なものを見る目で見られた。

多分実際に可哀想な人間なんだと思う。

『変態からは逃げられない』

正直に言ってしまうえば、もうアレから逃げられるのなら専用機なんて要らないという気持ちもある。

ただ、ここで全てを投げ出せばこれまでの努力が水の泡。

見た目にこそ出してはいないが、僕の心は絶望と恐怖によって既に6割ほど塗り潰されていった。

「あの、綾崎さん？自己紹介をして欲しいのだけど……大丈夫ですか？」

「ふえっ？……あ、はい！ごめんなさい、少し気を抜いてしまいました……もう大丈夫です」

「そうですか！それじゃあ、お願いしますね！」

絶望へのカウントダウンによって気をやっていた間にどうやら既に自己紹介の時間に入ってしまったていたらしく、突き刺さる千冬さんの視線が痛い。けれど、僕の自己紹介と聞いた途端に突然謎の復活を遂げた一夏くんの方も少し怖い。

なぜかさつきもジツと見られていたし、女装がバレているなんてことは考えたくないけれど、一応ここで念押しをしておくべきなのかもしれない。

日本政府と学園の先生達が正常な日々を手に入れるまで、僕はなんとしても自分の正体を隠さないとけないのだ。

なぜなら、今でもあの人は本当に死にそうな顔をして業務をしているから。

彼等の命のためにも、最低でも3年間は隠し通さなければならぬ。

例えそれが僕の心を深く削る行いであつたとしても……うう。

「ふう」

何度も練習した所作でゆっくりと立ち上がり、同じく何度も練習させられた笑顔をクリックスマイト達に向ける。

そして主に一夏くんの方へ顔を向けながら、自分にできる限りの精一杯の女性的な自己紹介を頭に浮かべ、アレによつて何故か教えられた男を落とす仕草をふんだんに詰め込んでいく。

何事も最初が肝心だ。

ここで中途半端にしていたら、きつとこの先やっていけない。

ここから先はもつと辛い事もあるはずだ。

気合を入れるために心の中に業務で追い詰められる関係者の人達の顔を思い浮かべる。

そうして僕はこの日遂にこれまでの僕という概念を捨て、初めて自らの意地で私になつたのだつた。

「皆さんはじめまして、綾崎奈桜（あやさきなお）と申します。趣味は料理と裁縫、家事

に關しては一通り自信があります。もし皆さんが生活面で何かお困りのことがあれば、是非お力にならせて下さい。これから1年間、どうぞよろしくお願いいたします」

パチパチパチパチ（幻聴）

そんなものは聞こえない。

……え、なんでですか。

こんなにも頑張ったのに。

こんなにも心を削ったのに。

少しくらい褒めてくれてもいいじゃないですか。

手を叩く素振りくらい見せてくれてもいいじゃないですか。

拍手喝采！とまでは言わなくとも、面倒だけど一応叩いておくか程度のもものは期待していたのに。

それなのに今この瞬間、教室は全くの静寂だ。

そして次第に拍手どころかクラス中がどよめきだし……

「ちよ、聞いてない、私あんなの聞いてない」

「あの見た目で家事得意とか女として勝てる気がしないズラ」

「いや、流石に嘘でしょ。そんな女が今時居るわけ」

「しかしそれを裏付ける物腰の柔らかさ」

「本物だ、本物の大和撫子だ……！」

「そんな、大和撫子は絶滅した筈じゃ……！」

「母性がやばい、新妻感ヤバイ」

「寝取ってみたい」

「綺麗な意味で抱かれない」

「それよか優しく叱られたい」

「わかる」「わかる」「わかる」

……どうやら、このクラスは思っていたよりも大分ヤバイ所だったようだ。

29人中4人が僕に叱られたいと思っている。

そして29人中1人が寝取りたいと思っている。

いや、寝取りたいって何？どんな思い？

少なくとも、クラスメイトの1/6が変態だ。

というかほんとに何言ってるの？ねえ、何を言ってるの？

ちよつとその事実を受け入れるのに紅茶3杯分くらいの時間を頂きたいのだけけれど。

あと大和撫子と言うな。

その単語が出るたびに千冬さんがニヤニヤしてこつち見てくるから。

新妻とかもつとやめて。

「あの、みなさん一度落ち着いて……い」

そんな願いが叶うこともなく山田先生が必死に鎮めようとするも、結局千冬さんが動くまで僕は好き放題言われることとなった。

この間、僕に叱られたいと口走った人間が9人に増えた。

クラスの数／3が変態、自分が変態からは逃れられない運命の元に生きているという事実は紅茶何杯飲んでも受け入れられないから……

06 優しい女性は絶滅危惧種

side 一夏

「えっと、織斑一夏です。俺も料理とか結構好きで、あと家事も一通りできます！1年間よろしくお願いします！」

(……ふう、綾崎さんのおかげで助かった。)

視線が痛い、探るような目線が煩わしい。

けれど、最低限の答えは出来たと俺は安心感を抱いていた。

不満そうながらも何も言わない千冬姉を尻目に席へと着く。

実のところ、自己紹介と言われても何も考えていなかった。

もし事前に綾崎奈桜という少女のものを聞いていなければ、間違はなく再度の方天画戟を食らっていただろう。彼女の自己紹介と聞いてズキズキと痛む頭部を顧みず必死に起き上がった甲斐もあつたというものだ。

見ていると惚れ惚れするような優しい笑みを見れたこともあり、そういう意味でも個人的には嬉しい時間だった。特に偶然にも趣味が同じだったということもあり、助かったと同時に彼女への興味がより一層強くなったのも自覚している。

今の時代、実は家事ができる若い女性というのはそれほど多くない。

ISの登場によって女尊男卑の風潮が広まると、女性の稼ぎの方が多くなり、男性に求められる需要も”強い男性”から”支えてくれる男性”へと変わっていった。

それは裏を返せば、女性が必ずしも家事が出来る必要がなくなったということだ。

現実が本当にそうなっているかはさておき、少なくとも女性達の中での常識はそういった方向へと変化していった。

しかし一方で、やはり男性から女性に求める需要も”支えてくれる女性”のまま変わっていないため、最近では需要と供給が噛み合わず結婚率が急激に低下していたりもする……が、今はその話はいいだろう。

とにかく、そのせいで杜撰な生活を行う独身女性が社会問題にもなっており、それは実の姉である織斑千冬でさえも例外ではない。

どこかブリュンヒルデたる彼女こそがその現代女性の象徴とも言えるのは嘆かわしいというか、当然の話というか。結婚どころか恋人の陰すら無いのが見て取れる。

そしてこれらのことから言えるのは、男性の理想像足り得る大和撫子などという存在は、当の昔に既に絶滅しているということである。

そもそも女尊男卑の思想に染まる前ですら絶滅危惧種レベルであったのだから当たり前の話なのだが、俺自身もそういった女性への幻想は捨てつつあったし、きつとこの

世界の男性の誰もが諦めていた筈だ。

……だが、なんとという事だろうか。

今、正にその大和撫子を体現したかのような存在が目の前にいる。

内面まではまだよく分からないにしろ、今のところは完全に男の理想でしかない女性。物腰柔らかく、笑顔が綺麗で、所作も美しく、なにより自己紹介の最中にも男性である自分に笑顔を向けてくれた。しかも家事全般が大の得意だと豪語する程だ。

こんなもの恋愛感情とまでは行かないものの、少しくらい話してみたいと思うのは一般的な男の性だろう。

これを責められる男は居ないに違いない。

(というか普通に仲良くなりたい、お淑やかな女性とか今まで会ったこともないし)

そんなことを思った直後、教室内から殺意のこもった視線が2つ自身を貫いていたことを、この時の俺はまだ気付いていなかった。

「ああああああ……」

1限の終わり、俺は頭を抑えて机に突っ伏していた。

原因はこの数時間で蓄積した頭部へのダメージである。

HRが終わった後、どこか機嫌の悪そうな幼馴染である篠ノ之箒と再会したものの、喜んだのも束の間。

屋上へと呼び出され、直後に『入学初日から初対面の女子にデレデレするなど、恥を知れ!』としばき倒された。

『やはりああいった優しい女の方がいいのか……!』

なんてことを小声で言っていたが、当然だ。

優しい方がいいに決まってる。

そんなことを口に出したら再び殴られた。

そういうとこだぞ!! (涙目)

加えて1限。

参考書を電話帳と間違えて捨て、それについて完全に放置していたが故に授業に全く付いていくことができず、直後にプラスチックの溜まっていた姉によって今日三度目の方天画戟(出席簿)が振り下ろされた。

脳細胞が万単位で吹き飛んだのではないかと思うほどの衝撃だった。

『出来の悪い生徒には厳しくしてくれる人間も必要だろうか?』

なんてことを睨まれながら言われたが、厳し過ぎるのはいらぬです。

そう思ったのがバレたのか、今度は方天画戟(出席簿)でグリグリされた。

頭蓋骨が陥没するかと思った。

というか、俺の周りには俺に敵しくする女性が多過ぎる。

出来の悪い事は認めるが、実の姉くらいには優しくされたい。

(うう、このままじゃ卒業までに絶対3回は頭蓋骨が割れる……)

そんな確信をした俺だったが、やはりこの場所からは逃げられない。

1週間であの分厚い参考書を覚えなければならぬという現実を思い出して、更に更に気分は落ちていく。

前途多難、どこを見ても難しくない。

考えれば考えるほどに気が滅入る。

どれだけ将来を見据えても楽しみな事が見当たらない。

むしろ不安な事や恐怖する事ばかりだ。

よって、とりあえず全部投げ出して不貞腐れることとした。

なるようになってしまえ。

どうせ良いことなんて何も無いんだから。

「はあ、頭痛え……ん？」

そんな風のため息を吐いてうつ伏せていた俺だったが、突然大きく腫れているその頭のごぶ部分に誰かの細く冷たい指の感触が伝わってきたことに気付く。

優しく触れて、そのままいたわる様に撫でる感覚。

熱を持つている腫れに対して、ひんやりとしたその指がとても心地良い。

それに、なんとなく懐かしさを感じるそんな手つきだ。

それだけでも心の痛みが解かれていく様に感じてしまう。

「ええと……」

そうして俺がその冷たい指の主を確認しようと顔を上げると、そこには心配そうな表情をしたあの少女が腰を屈めてこちらを見つめていた。

「あの、織斑くん？大丈夫ですか……？」

「……綾崎さん、だったよな？」

白々しくも名前を確認したようにも思えるだろうが、実際にはあまりのショックで本当に頭から抜けてしまっただけである。いや本当に。

だって、だってまさか誰かに優しく慰められたいと思っていたこの瞬間に、お近づきになりたいと思っていた彼女が来てくれるとは誰が想像できるだろうか。

あまりにも驚いた。

そして嬉しくなったし、ドキドキした。

けれど、不意打ちのようにして目の前に現れた彼女に頭を撫でられているというこの事実は、俺に男としての強い羞恥心も与えていた。

「はい、綾崎奈桜と申します。頭部の腫れは大丈夫ですか？先程はかなり強いお仕置きを受けていたみたいですが……」

「あ、ああ……いや、綾崎さんのおかげでなんとか立ち直れそうだ。女神様って本当に居るんだな」

「め、女神ですか……あの、困ったことがあれば言つて下さいね？付け焼き刃ですが、勉強のお手伝いくらいならできると思えますから」

「ほんとか!?それはマジで助かる!……うう、この世界はとづくに俺を見捨てたと思つてたけど、まだまだ捨てたもんじゃないんだな」

「もう、大袈裟ですね。でも、次からはしつかり予習して授業を受けるんですよ？織斑くんは嫌でも目立ってしまうんですから、当然周りからの当たりも強くなつてしまいまし
し」

「ああ!分かつてる!」

「ふふ、それならもう大丈夫ですね。このコブさんとも今日でおさらばです♪」

優しく頭を撫でながら、そんな風に元氣付けてくれる彼女。

微笑みを浮かべながら優しく自分を咎めてくれる女性。

本当に困っていた自分に時良く手を差し伸べてくれる女神様。

俺にとっては初めての体験である。

うっかり涙が出て来そうになった。

もし仮に今まで織斑一夏と深い関わりがあった女性達が同じような立場にあれば、

『一夏！少し弛んでいるんじゃないか!? 私が叩き直してやる!』

『一夏！あんたこんなにも分かんないの!? こんなのがフィーリングでなんとなく分かるでしよー!』

『一夏。貴様はこの数週間、一体何をしていたんだ?』

『あはは、いっくんは相変わらずおバカさんだねー!』

と、ポコポコにされていたのは間違いない。

口元に手をあてがってクスリと笑う彼女は見ていただけでも癒される。

近寄りが見たいほどの美しさを持っているにも関わらず、どこか男の俺でも親しみやすい何かを感じる不思議な女性。

(これ以上情けない姿を見せたくないな……)

そう思ったのもまた、男性として当然の帰結だと思う。

07 セシリア・オルコットは褒められたい

side 一夏

「あなた、少しよろしくくて？」

「……………んえ？」

綾崎さんから注意を受け、けれどもその優しさに内心で男としての決意を固めていた頃。

俺は、突然背後から知らない女生徒に声をかけられた。

振り向けば今時珍しい鮮やかな金髪縦ロールを頭に下げた少女が1人。

如何にも西洋の美少女といった風様だが、様々な国籍の人間の集まることではそう珍しいことでもないということを出す。きつとこれがこの学園のデフォルトなだろう、日本語が通じる世界になった事だけは本当に助かると思わざるを得ない。

しかしそんな風に突然話しかけられ呆けた声を出してしまった俺に対して、金髪の少女は問答無用とばかりに盛大に高飛車な言葉をぶつけてきた。

「まあ!? なんですの、そのお返事！ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではなくて？ それともそんな常識すら分からない

いほど無知なのかしら?」

「お、おお……?」

次々と繰り出される罵詈雑言の嵐に唾然とする。

落差が激し過ぎたのだ。

お淑やかな黒髪少女から気性の激しそうな金髪少女という移り変わりは。

10秒前までの綾崎さんとの時間が天国に思える。

実際に天国ではあつただけだ。

「えつと……綾崎さん? 誰なんだこの子?」

「もう、本人の前で失礼ですよ? 織斑くん。彼女はイギリス代表候補生のセシリア・オル

コットさんです」

「代表、候補生……?」

「イギリスのIS操縦者の代表者、その候補に選ばれている方のことです。オルコット

さんは特に、イギリスにおけるIS関連の発表会に何度も出席している程の有名なお方

なんですよ?」

「そう! そして本学年の入試でももちろん首席! エリート中のエリートなのですわ! 残

念ながら貴方はそんな私のことすら知らない様ですが……流星は極東の雄猿、底が知れ

ますわね」

「ああ?」

「ふん。わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡なのですから、その幸福を噛み締めなさいな。……まあ? 例えあなたの様な雄猿でも? 頭を下げて頼み込むのであれば教えを施すのもやぶさかではないのですが? わたくしは貴族ですし」

俺の疑問に対し一瞬鬼のような形相を浮かべた彼女だったが、直後の綾崎さんの解説に気を良くしたのか胸を張って聞いてもいないことをペラペラとまくし立てる。ノリノリである。

鼻高々に、考えるより先に口が動いているという様な感じだ。

まるでテストで満点を取った時の小学生のように、嬉しげに、誇らしげに、彼女は笑う。

……それでも、ここまで言われて黙っていられる男がどこにいらっしゃいますか。

いやいる筈がない(反語とかいうやつ)。

反射的に立ち上がり、今も見下す様な表情を崩さないセスリア? オルコツツ? とか言う奴を睨み付ける。

もちろん暴力など振るわない。

口で攻撃されたのなら、口で返すのは当然の話だ。

争いをするのならば、同じ土俵で戦わなければならない。

そうして意気揚々と息を吸い込んだその時、直後にそれを遮るように綾崎さんが俺の前へと歩み出た。

「ふふ、やはりオルコットさんは凄い方なのですわね。IS学園の主席ともなれば、並みの努力だけでは掴み取ることはできませんから。さぞ血の滲むような努力をされたのでしょうか」

「……へ？」

「？」

素つ頓狂な声を出したのは俺……ではなく、オルコットの方だった。

自分から自慢しておいて褒められたら困惑する。

そんな彼女の様子に俺は怒りも忘れて首を傾げるが、こちらへ目線に向けてウイंकをした綾崎さんに口に出すのを止められる。

……というよりは、彼女のウイंकの破壊力に押されて目を背けざるを得なかった。

だつてあんなの……卑怯だろ……

頬をかいて目を背ける俺を他所に、会話は続く。

「そ、そんなことはありませんのよ？ その、代表候補生でもある私にかかれば首席程度……ゆ、唯一試験官を倒したことだつて？ その、簡単にできると言いますか、当然のこ

とと言いますか……」

「それこそ、そんなことはありません。ISに関する知識はまだまだ乏しい私ですが、代表候補生になるだけでも大変な競争だと聞きます。加えて候補生になっても驕ることなく鍛錬を続け、こうして首席を取るに至った……なかなか出来ることではありません」

綾崎さんはそう言つてオルコットさんの手を両手で包み込み、目線を合わせるようにして彼女の瞳を覗き込む。

なんとなく男の俺がこの光景を見ていていいのだろうか、という考えが頭を過ぎる。

ところでこの握り締めた拳はどうすればいいのだろうか？

なんとも居心地の悪さを感じながら俺は成り行きを見守る。

「あ、う……アヤサキ、さん……？」

「大丈夫ですよオルコットさん、私は貴方の頑張りを肯定します。貴方が誰よりも頑張つて掴み取つた貴方の居場所を、素晴らしいものと讃えます。ですので、貴方自身もどうかご自分を大切になさってください。貴女が彼に抱く感情は、きつと口にすれば貴女の孤立を招きます。私はこれからも貴方に頑張つていて欲しいのです」

「あ、あう……で、ですが、私はその男のことが……」

「実は私の妹がオルコットさんの大ファンなんです。私も妹と一緒にテレビ越しでオル

コットさんのことを見ていましたが、本当に美しい笑顔をする方だと思いました。私
は、そんな貴女の笑顔が見られない生活なんて、辛いですよ？」

「う、ぐう、そ、その言い方は卑怯ですわ……！わ、わかりました、わかりましたから！
今日はこれで引きますので、そろそろ手を離していただけますか!?せ、席に戻りますの
で……！」

「ええ、オルコットさん。これから1年間、仲良くしてくださいね？」

「……こちらこそですわ！そ、それでは……ししし失礼いたしました……！」

そう言つて顔を真っ赤にしながら小走りで席に戻るオルコット、一連の流れを見てい
た俺は訳が分からず混乱していた。

一方で綾崎さんは今もニコニコと席に戻つて突つ伏してしまつたオルコットを見
守っている。一方で見られているオルコットは顔を真っ赤にして彼女から目を背け続
けていた。

「な、なあ綾崎さん？今のつて一体……」

意を決して話しかけた俺に対し、綾崎さんは一瞬だけ考え込み、笑う。

そうして彼女は自身の顔を俺の耳元まで近づけて、囁く様な小声で息を当ててきた。

誰か助けて殺される。

滅茶苦茶いい匂いするし、顔が綺麗過ぎて直視できない。

「オルコットさんの様子が初めて会ったばかりの頃の弟の1人と重なりまして、その時の経験を生かしたままでです」

「あ、綾崎さんは、兄弟が多いのか……？」

「いえ、血は繋がっていませんよ？それでもみんな、私の大切な家族ですが」

そう言つて微笑ましいものを思いつているのか、優しい目をしている彼女に俺はもう何も言う事が出来なかつた。

ただ、この人が見た目だけの人じゃないということだけは確かに分かつた。

そして天然の魔性を持つ、とっても怖い女性だということも。

……そういえば、俺も教官倒したけど言わない方がいいよな？

08 チョロい人達

side 奈桜

(オルコットさん、やっぱり勇樹と同じタイプだったなあ……)

イギリス代表候補生であるセシリア・オルコットさん。

妹の1人が(主に彼女の西洋人形のような美しい容姿に)注目していた為、代わりに番組を録画したり、一緒にそれを見ていたりをよくしていた。

そういった経緯から僕は彼女のことを日本の一般的な人よりかはよく知っていたのだが、やはり映像と実際では受ける印象は違うものである。

彼女の行動は側からみれば、高圧的で、自信家で、女尊男卑のこの世界でよく見られるような男性を見下した典型的な過激派の女性だ。

確かに、男性を見下していることに關してはフオーローは出来ない。

けれどそれ以外の部分においては、彼女はなんとなく見覚えのある振る舞いをしていた。

それこそが今は孤児院にいる弟の1人、勇樹の行動である。

彼は6歳の頃、実の両親に捨てられて僕の居た孤児院へとやってきた。その頃の彼は

自身の学力を周りに自慢して回り、それこそ先程のオルコットさんの様に、「くしてやるから感謝しろよ」といった恩の押し付けを繰り返していた。

当然、そんな彼を周囲は鬱陶しく思い、彼は日に日に孤立していったのだが……しかしそんな尊大な言動の源となっていたのは至極単純で、とても子供らしいものだった事を僕は知っている。

要は彼は、褒められたかったのである。

もつと正しくいっているのであれば、自分の努力が認められたい。

そしてそんな自分を頼りにしてもらいたい。

たったそれだけだったのだ。

話を聞けば彼は捨てられる以前から両親との不和が続いており、テストで良い点を取って褒められた経験だけを頼りに努力し続け、何とかして認めてもらおうとしていたという。

……しかし、その努力は実らなかった。

多くの努力をし、結果を出したにも関わらず実を結ばない。

それがどれだけ辛いことか。

彼の場合は両親に捨てられたというマイナスの結果が残ってしまっただけに、認められたいという欲が歪な形で大きくなってしまったのだろう。

そしてオルコットさんも同じ目をしていた。

誇らしげに自分の功績を語り、胸を張って誇示すれど、その瞳には認められないことへの恐れが少しだけ混じっている。歪み膨らんだ彼女の承認欲求は一体どういう過程で生まれたのか、僕にはそこまでのことは分からない。

けれど、そんな彼女の内心が分かる数少ない人間が自分ならば、僕は遠慮なく彼女に踏み込んで肯定したいと思った。

（ああいう子は素直になるとお節介焼きさんになるから。周囲と溝を作ってしまう前になんとかしてあげれば、きつと皆に好かれるはず）

オルコットさんも間違いないそのタイプだ。

さっきの会話からもその片鱗は見えていた。

大きな不和さえ無ければ、彼女はきつと周りから愛される少女になるに違いない。

（それにまあ、見過ごせないから……）

自分自身にも余裕がないが、まあ見て見ぬ振りはできない。

これが染み付いてしまったお姉（兄）ちゃん気質というものなのだろうか？

ただ、こんな生き方をしていればきつとこの先の人生も苦労することになるだろうが、実はそんな自分のことが僕は嫌いではない。これから先もずっとこうして、周りにお節介をして回って生きていくつもり満々だ。

……それでも、彼女の男性嫌いだけは流石にどうにも出来ないだろう。

これに関しては自分ではなく、織斑一夏くんの方が適任なのではないかと思う。

男性嫌いを治すには、やはり男性を知って貰うしか無いのだ。

その点で言えば彼は善良で漢気のある男性、僕よりもずっとこの役割に適任である。

そう思ったので、とりあえずこれについては彼に投げることにした。

大丈夫大丈夫、彼ならきつとなんやかんやしてくれる。

なんかあれをこうして、上手いことやってくれるだろう。

そう僕は信じている。

「信じてますからね、織斑くん」

「え、なにを……?」

直後に教室に入ってきた千冬さんに流れる様に出席簿でしばかれた彼に、僕はとりあえず笑っておいた。

そろそろ頭のこぶを冷やす準備をしておいた方がいいかもしれない。

「全員、席に着いているな?それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性について説明する。……が、その前に、クラス代表者を決めねばならん。立候補する者、あるいは他者を推薦する者は挙手をしろ」

授業が始まると同時にそうまくし立てた千冬さんは、目を細めて周囲を見渡した。クラス代表者、要はクラス長である。

生徒会の会議や委員会への出席などが主な仕事だ。

それと、来月行われるクラス対抗戦。

これは各クラス代表者たちがISで戦うというものだが、クラス代表者はこれに出場することになる。

なかなかその責任は重い。

……とは言え、僕達はまだISにすら乗ったことの少ない素人集団だ。

それこそ代表候補生でもなければ誰がなっても変わりはないだろう。

もちろん、オルコットさんは例外として。

(まあ、僕は流石に遠慮したいかな。あまり目立つのも良くないし)

今のところはそんなに目立っては居ないはずだ。

しっかりと女性らしく振る舞えていると思いたい。

その割に視線をよく感じたりするけれど、これで駄目なら全部乙コーのせいである。

僕は悪くない、僕は悪くない。

「はい！私は織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「わたしもわたしも！さんせい！」

「では候補者は織斑一夏か、他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「……へ？」

僕がそうしてまた現実から逃げていると、いつの間にか流れる様に織斑くんが指名されていった。

なんとなく理由は分かる。

どうせ誰がなつても同じなら、面白そうな人を指名したくなるのは自然の摂理。

言うだけタダなら言わなきや損損、というやつだ。

これはあまりにも一夏くんが可哀想過ぎるが、巻き込まれたく無いので僕は黙って見ている事しか出来ない。

本当に申し訳ない。

「お、俺!?!え、なんで!?!」

「織斑。席に着け、邪魔だ。……さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だ」

「ちよつ、ちよつと待った！なんなんだ、一体何がどうなってるんだ!?!」

「お前は推薦された、それは期待されているということだ。期待には応える義務がある、よつてお前に拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「そんな無茶苦茶な……」

「もちろん、選んだ側にも相応の責任が伴うがな」

「「え？」」

「当然だろう、何のリスクもなく人に役目を押し付けられるとでも思っていたのか？」

言うだけタダでは無かったらしい。

やっぱり世の中そんなに甘くない。

妙に理不尽な気もするが、それはまあいいとして。

この数秒の間に驚くべき速さで事が進んでいく。

恐らく彼女達は男性という珍しさだけで一夏くんを推薦したのだろうが、こう言われてしまつてはまた事態は動くのだろう。

こういう場合は黙って座っているのが吉なのだ。

そう、今の僕のように、黙って、静かに、冷静に……

「じゃ、じゃあ私は綾崎さんに推薦を変更します！綾崎さんなら上手くやってくれと思おうし！」

「……へ？」

「わ、私も！」

「私は……織斑くんのままでいいかな」

「私は別にどつちでも……いえ！2人のどちらかがいいと思います!!」

「え、ええええ！」

なんか飛び火した。

なにこれどうしてこうなった。

なんで？どうして？火種が近いから？

そんな僕を見て千冬さんの口角が微妙に持ち上がる。

絶対この人僕の反応見て楽しんでるよ！

それどころじゃないって分かってる癖に！

僕の方の事情だって知ってる癖に！

鬼！悪魔！世界最強！

(こうなったら……)

だったらこつちにも手はある。

どうせ推薦されたのだから、こつちが推薦したって構わないだろう。

それに推薦しても責任は取れる、取る。

実際、僕や一夏くんより適任な人がいるのだから。

自分がクラス代表になるよりもずっとずっと相応しい人が、むしろここまで名前が出なかつたことこそがおかしい。

「織斑先生、私はセシリア・オルコットさんを推薦するつもりなのですが」
「!!」

僕の言葉に反応する様に、後ろの方の席から机の揺れる音がした。

「ほう？その心は？」

「私も織斑くんもI Sに關してはまだまだ初心者です。成長を期待して、というのも分かりませんが、それよりも代表候補生でもある彼女を据えてクラス全体のレベルUPを図るべきかと。彼女の実力は誰が言わずとも確かですし」

「なるほど、上手い言い訳を考えたな」

「織斑先生？ご冗談が過ぎます」

クラスメイトの前で堂々と言い訳とか言うのは本当にやめて欲しい。

フツと鼻で笑って再びクラスを見渡す千冬さん。

これは助かったのか？助かったのだろうか？僕はそう信じたい。

「当のオルコットはどう思う？綾崎はこう言っているが」

なんでオルコットさんだけ承認制!?

推薦された人は強制みたいなことを言ってたじゃないですかやだー!!

オルコットさんお願い！引き受けて!!

実際僕はほんとに目立つべきじゃないの！

いや、乙女コーポレーションで女装が完成した瞬間に『……目立たないで生活するのは諦めた方が良いな』って千冬さんに言われたけど！

僕はまだ諦めてないの!!

クラス代表なんて絶対に嫌なんです！

オルコットさん助けて!!

ちらつとオルコットさんの方へと振り返って優しく微笑んでみる。

さつきとは違う打算120%の笑みだ。

そんな僕の行動を受けて、オルコットさんは顔を真っ赤にしながら俯き、言葉を紡ぎ出す。

なんか可愛い、けどその反応はおかしい。

え、本当にどうしたの？

さつきまではあんなに元気だったのに、風邪？

女の子の体調不良は普通に心配になってしまうのだけけど。

「そ、その、お姉様が推して下さるのであれば……断る理由はございませんから……っ」
ん？

待って？

今なんて言った？

「お、お姉様?」

あ、一夏くん、君もやっぱりそう聞こえた?

これ僕の気のせいじゃないよね?

「ほう?この短期間で随分と慕われるようになったな綾崎。初日から他国の代表候補生を誑かすとは、その手の速さは織斑並みだな」

「た、誑かすだなんてそんな……お姉様つたら!」

「え?なんで俺引き合いに出されたの?」

「織斑先生、人聞きが悪過ぎます……」

加えて千冬さんからの追い打ち。

これはあれだ、後から根掘り葉掘り聞かれて思いつきり弄られるやつだ。想像するだけで今から頭が痛い。

そして追い打ちはそれだけではなく……

「まあ、あんなことされたらオルコットさんもあなるよね」

「わかるっ!私も顔を見つめられながら『貴女の笑顔が見たい』とか言われてみたい……!」

「あんたらが叱られたいって言ってた意味、あたしもなんとなく分かったわ。あれはオルコットさんが羨ましい」

やめて……やめて……!! (懇願)

思い返したら凄く恥ずかしくなってきたじゃん!!

あとその意味だけは一生分らないで欲しかった!

これで10人目ですよ!?

あー!あー!こーろーせーよー!!

もいつそ、こーろーせーよー!!

恥ずかし過ぎて顔も上げられないよお!!

「さて、綾崎イジリはこの辺にして。取り敢えずは代表者をどう決めるか。多数決でもいいのだが……オルコット、案はあるか?」

「それでしたらISで決めるのはどうでしょう? わたくしが有利な条件ではありますが、現状や将来性もハッキリしますし。決定はそれを見て決めるのが良いかと。……それに、個人的にも戦いたい方がいらっしやいますから。勿論、必要でしたらハンデを差し上げますわ」

「……だそうだが織斑、お前は どう思う?」

「むっ、ハンデなんて要らねえよ。ここでそんなの貰ったらオルコットに『男も捨てたもんじゃない』って証明できなくなる。これ以上情けない姿も見せられないからな」

「口先だけならなんとでも言えますわ」

「ふつ、そうか。ならば勝負は一週間後の月曜日、放課後の第3アリーナで行う。3名はそれぞれ出来る限りの準備をしておけ、詳細は後日伝える」

「さあ！決闘ですわ！貴方のような無知で愚かな男、その無駄に凶太いプライドごとへし折ってさしあげます！」

「やってみろ！絶対にお前を見返してやる！男を証明してやる！ここからは誰にも横入りさせねえ！俺とお前だけの喧嘩だ！」

そうして始まった熱血的な決闘の契り。

きつとこれから2人は1週間後のその日に向けて血の滲むような努力を積み重ねるのだろう。

だからこそ言わせてもらいたい。

これ僕、要らないよね？

むしろ邪魔だよね？

これ一夏くとオルコツトさんだけの喧嘩でいいよね？

この後めちやくちや授業中に千冬さんへの復讐方法を考えた。

09 変わらない幼馴染

side 一夏

オルコットの数々の発言によるフラストレーションが爆発し決闘の約束を取り付けた後、俺は放課後まで一人居残って復習と予習を行なった。

……が、特に目立った成果は得られなかった。

むしろ、何の成果も得られませんでした。

俺が無能なばかりに、ただいたずらに時間を浪費し、奴等（訳の分からないISS用語達）の正体を突きとめることができませんでした。

悲しいね。

……いや実際、綾崎さんに勉強を教えてもらうという手もあったのだが、今回の決闘には彼女も入っている。

各々やるべきことがあるはずだと思ってやめておいたのだ。

まあ、オルコットに『男を証明する』なんて言ったのに、その直後に女性の手を借りるといいうのも違うだろう。

そこは決闘とは別のプライドの問題だ。

その後は山田先生と千冬姉から寮の鍵と着替えを受け取り、部屋に入った瞬間に風呂上がりの箒を目撃してしまい、ボッコボコにされるといふ珍事が起きた。

偶然にも千冬姉が俺と箒が同部屋だということを発表せず、箒にそのことを伝えるはずだった山田先生がポンコツをやらかしてしまい、俺が部屋に入った時間帯が丁度箒の入浴時間だったというところに神のピタゴラスイッチ的な悪意を感じる。

どれだけ偶然が重なればそんなことになってしまうのか、確率とか考えたら普通あり得ないだろう。

……実際にそうなつとるやろがい！

そして現在、俺と箒は一連のやり取りで破壊してしまった部屋のドアについて報告を行うために寮長室までやってきている。

後でバレルより自首をする、怒られる時の常套手段だ。

寮長が誰かは知らないが、今日は入ってきて初日。

印象は悪くなるだろうが、そう怒られる事もないだろう。

「……………」

というか、箒も本当に強くなったものである。

木製とはいえ、分厚いドアを木刀の突きだけで、さながらウエハース相手のように軽々と破壊するのだから。

ぶっちゃけ本気で死を覚悟した。

久々に会えば前に見た時よりもずっと綺麗になっているし、あの時からの自分の成長具合と比較すればあまりにも眩しく感じてしまう。

「ところで一夏、この寮の長が誰かは知っているか？」

「え、いや。知らないけど」

「お前が一番よく知っている人物だ」

「……もしかして、千冬姉？」

「そうだ、そしてこれがつまりどういうことを意味しているかは言うまでもないな？」

「ああ、夕飯先に食ってくればよかった」

「私はここで自炊するつもりは無かったのにな、部屋に小さめのキッチンはあっても材料がない。ちなみに食堂はあと一時間で終わる」

「そうか、今日は夕飯抜きか」

「ああ」

「そうか」

「……………」

「……なあ箒、これ夕飯の後じゃ駄目なのか？」

「一夏よ、この世には空腹よりも辛い事があるのだ」

「前例は？」

「5日前、テレビ破壊隠蔽、グラウンド10周（20km）×5日間」

「よし謝ろう」

「ノックは任せた」

コンコン

半ばヤケクソになりながら寮長室のドアをノックする。

夕飯抜きと5日間連続のハーフマラソン、比べるまでもない。

いくら特訓をするとは言え、俺も流星にそこまで頑張るつもりはない。

だがこれから起きる惨劇に俺の体は血の気が引くほど恐怖に震える。

そんな風に悪い意味で胸を高鳴らせながら鬼のような顔の千冬姉を幻視しつつ待っ

ていると、中からパタパタと誰かが走る音が聞こえてきた。

それを聞いて俺と筈はまた顔を合わせる。

「……？千冬姉じゃないな」

「ああ、あの人はこう慌ただしく走るタイプでは無い。それに足音もどこか軽い」

ガチャリと静かにドアが開く。

この時点で中にいる相手は間違いなく世界最強では無い。

ブリュンヒルデならばもつと威圧感を持って現れる筈だからだ。

そうして中から現れたのは……

「申し訳ありません、お待たせしてしまいました。……あれ？どうかなさいましたか？お二人とも」

登校初日にして既に1組の母と名高い綾崎奈桜さんだった。

「え？綾崎さん、だよな？どうして寮長室に？」

「どうして、と言われましても……私がここに住んでいるから、でしょうか？」

「なに？綾崎は織斑先生と同部屋だったのか？」

「ええ、そうですよ。あまり知られて居ないようですが……あ、立ち話もなんですし、お二人とも入って下さい。丁度お夕飯を作っているところですし、よろしければご一緒にいかがですか？」

「え？いいのか？」

「もちろんです。篠ノ之さんも食べていきますよね？」

「あ、ああ……それと、私のことは箒でいい。名字で呼ばれるのは好きではないのでな」
「分かりました、箒さん。ではこちらに」

寮長室に住んでいるというだけでも驚きなのに、なんと彼女は自炊をしているらしい。

流れるように部屋へと案内された俺達は正方形の机に案内される。

キッチンからはカレーの良い香りが漂ってくるのが分かり、放課後にまで頭を使っていたせいか、活発な腹の虫がいつもより大きな主張を始めた。

「ふっ。夕食にありつけて良かったな、一夏」

「うぐ、仕方ないだろ。あんな宣言しちまったんだ、結構気合い入れて取り組んでるんだよ」

「そうか、それは喜ばしいことだ。」

「……だ、だがな一夏よ。お前はISに関する知識は殆ど無いのだから、少しくらい他人に頼ってもいいと思うのだ。たっ、例えばその、目の前にいる、幼馴染とか、な？」

「え、いいのか？ 箒」

「いいも悪いも。何を意地になっっているかは知らないが、本気で挑むのなら誰にでも頼るべきだ。私だって、その、大切な幼馴染の願いなら叶えてやらないことはないとか、むしろ叶えてやりたいというか……」

「そっか。サンキューな、箒」

「……お前と私の仲だ。今更そのような遠慮など不要だ」

再会してからずつとしかめっ面をしていた箒の表情が、この時になってようやく緩んだ気がした。

その表情が昔の彼女に重なって、ここに来てやっと改めて再会できたという実感が湧いてくる。

そしてそんな俺の気持ちを、箒も察してくれたらしい。

「……むう、この敵つい表情はどうにも直らんのだ。ここ数年、こうして気を許せる相手が殆ど周りに居なかったというのも理由の1つなのだが。どうしても取れん」

「重要人物保護プログラムだっけか。こうして俺がIS学園に来なければ、もしかしたら一生会えないなんてこともあり得たんだよな。そう考えるとIS動かして良かったって思えるけど」

「私と再会出来たその代わりに、今度は一夏が自由を奪われる羽目になったのだがな……なんだったらこのまま2人で高飛びするか？本当の自由を求めて、なんてな」

「はは、まるで映画みたいだな。……けど、まあ、もし本当にどうしようもなくなったらそうするか。旅費は今までの迷惑料ってことで束さんにでも取立てよう」

「くふふつ、それはいいな。今までの迷惑料に利息分まで含めて思いつきりふんだくつてやらんといかん。むしろ簀巻きにして他国に引き渡した方がスッキリするかもしれない」

「はは、その時は千冬姉に引き渡した方が良さそうだ」

「違うないな」

あることないことを空想して、笑い合う。

もう何年も会っていないなかったのに、それでも互いの間に壁なんて無かった。

きつと昔のままなんてことはない、箒にだって色々あったはずだし、変わったこと
だってあるだろう。

けれど、

「……ああ、やはり一夏と話すのは楽しいな。いつもは思い出すだけでも嫌な姉さんの話ですらこうして笑えるとは」

「そうか、そう言ってくれるなら俺も嬉しいよ」

こうして見せる彼女の笑みは変わっていなかった。

ならば、それでいいのだ。

それだけでいいのだと、俺は思う。

「ええつと、ごめんなさい。机の上にお皿を並べてもよろしいですか?」

「え?」「……あ!」

箒の様子を微笑ましく見ていると、そんな言葉と共に現実へと引き戻される。そして、この部屋には自分達以外にももう一人の人物がいたのを思い出した。

というか、この部屋に招き入れてくれたのは他でも無いこの人だ。
話に夢中になり過ぎていた。

「あ、あー！いや、悪い綾崎さん！全部やらしちまって！皿並べるのくらい手伝うべきだった！」

「ふふ、構いませんよ。私もお二人のいじらしい様子をバッチリ楽しませてもらいましたから。良かったですね、箒さん♪」

「な、な、な！待て、綾崎！これは違うんだ！いや、違うことはないんだが私は別に……！」

「はいはい、今日のお二人の様子はしっかりと千冬さんと共有しますから、安心してくださー」

「なにも安心できない！本当にやめてくれ!!」

ガチャリ

「いま帰つ……ん？なんだ、お前達も居たのか」

「あ、千冬さん、お疲れ様です。それより聞いてくださいよ、織斑くんと箒さんがですね？」

「ほうほう……」

「待て待て待て待て！それ以上はダメだ！」

「待ってくれ綾崎さん！なんか嫌な予感がするからやめよう！」

必死の説得も虚しく、結局全て千冬姉にバラされた俺達はめちやくちや弄られた。

綾崎さん、意外と茶目っ気があるというか、ノリが良いというか。

とりあえず、エプロン姿が似合ってたなあ……と思っていたら箒に叩かれた。

節操なしって何の話だ。

解せぬ。

10 カレーは甘めでも美味しい

side 箒

「ところで一夏、お前は何しにここへ来た？ んぐんぐ……わざわざ綾崎の飯を食いに来たという訳でもあるまい」

「あーいや、部屋の扉壊しちゃったから報告しとこうかなって思ってた。……ん、ほんとに美味しいな」

「んぐんぐ……織斑先生、一夏はデリカシーが無かったただけなのです。壊したのは自分なので罰なら私が受けます。……むう、甘めのカレーがここままでいけるとは」

「なるほどな、んぐんぐ……大体察した。まあその件に関しては真耶のミスもある、今回は不問でいい。その代わり修理はお前達で行え」

「……えーと、皆さん？ おかわりはありますし、そんなにながつつかなくても大丈夫なんですよ？」

「「おかわり」」

「あ、はい……ふふ、これだけ喜んで貰えるなら冥利につきますね」

戸惑いながらも嬉しさを滲ませて綾崎はカレーをよそいに向かう。

よくできた女性というかなんというか……

登校初日にして一部の女子が『お母さん』だなんだと言っていたが、自分の食事より他人の世話を自然に優先しているその様は、確かにかつての母の姿を思い起こさせる。

私達が話をしながらも必死に食べている姿を見ている時の彼女の顔は、正しく子供を微笑ましく見守るような母性溢れるものだった。

完全に自分が女性として負けていると自覚しても悔しいとは思えないのはそのせいなのだろうか？ いや、むしろ力量の差があり過ぎて開き直ってしまったのかもしれない。

私が男だったら間違いなくこいつを嫁にしていた。

仮に綾崎が敵に回るとなれば、私は本当にどう戦えばいいのか分からないくらいだ。一夏はなにやら彼女に憧れている節があったし、これはなかなかピンチなのではないだろうか。

「……クク、いい女だろうか？ あいつは。お前等にはやらんぞ？」

「何言ってるんだよ千冬姉……というか、もしかしなくてもこの部屋の家事は全部綾崎さんにやらしてるだろ？ 千冬姉の部屋が普段からこんなに綺麗なわけがない、それでいいのかよ先生」

「やかましい、別に私から頼んだわけではない。ただ、部屋に帰ると上着も鞆も自然と回

収されて、風呂から上がると夕食が用意されていて、気付くと次の日の衣服まで準備されている……いつの間にか自分の私物に触る機会が殆ど無くなっていったのだ。それだけの話だ」

「我が姉ながら酷過ぎる、完全に綾崎さんが嫁じゃねえか……いや、もはや妻だな」

「馬鹿を言うな一夏、世間一般の愛に溢れた新妻でさえそこまでのことはしてくれんぞ。理想を高くし過ぎるな」

「というか必要な物も言わずとも出してきてくれるこのレベルの生活で、私に一体どう部屋を汚せというのだ」

「胸張って言う事かよ……ってかすげえな綾崎さん。俺でも定期的に大掃除してたのに、ずっとこの状態を保ってるのか」

「ちなみにあいつには基本的に朝食と昼の弁当まで世話になっている。私の胃袋は今、完全にあいつに支配されていると言えるな」

「だから胸張って言う事かよ」

「なぜだ、どう頑張ってもあいつに追いつける気がしない……」

「……まあ、綾崎のことはあまり気にするな篠ノ之、後で真実を知った時に押し潰されるぞ」

「??? 織斑先生、それは一体どういう……」

「皆さん真剣な顔なさっています、何かありました？」

綾崎奈桜という人物のエピソードに私と一夏が驚嘆していると、丁度本人が帰ってきた。

大きなおぼんに3人分のカレーを乗せて不思議そうな顔をしているが、こちらとしてはお前の方が不思議な存在だと言ってやりたい。

二杯目のカレーには飽きが来るんじゃないかと、自然に塩キャベツや辛さを変える調味料の類を持ってこれるような、その察しの良さと気遣いは一体どこに行けば貰えるのだ。

おい、自然にビールを酌するんじゃない。

至れり尽くせりで千冬さんが上機嫌ではないか。

一夏ですら苦笑いしかできていないのだぞ。

良妻賢母も度が過ぎるのではないだろうか。

「ここまで来ると綾崎さんが卒業した後の千冬姉が心配になってくるな」

「冗談抜きで生きて行けないのではないか……？」

「まあ、ほら。最近は女性同士のそういうのもだんだんと認められて来てるしさ」

「それでいいのか一夏」

「独身貫かれるよりかはマシだろ、甥とか姪については俺はもう諦めてるし」

「それ絶対に千冬さんに言うんじゃないぞ」

「言えるわけないだろ」

機嫌の良い千冬さんに抱き寄せられて顔を真っ赤にしている綾崎を見ながら、私と一夏はカレーと塩キヤベツに舌鼓をうった。

一夏の言葉になんとなくライバルが減ったような気がしてキヤベツが進んだ。
なるほど、そういう世界もあるらしい。

11. 最高の良妻は誰にも負けない

side 奈桜

「……なんだ、このI Sは」

千冬さんが呆れている。

そして僕もこうして呆然としている。

オルコットさんと一夏くんと決闘前日、僕は千冬さんに連れられて専用機が搬入されてくるとされる場所に来ていた。そんな僕達の目の前には薄い青色と薄い桃色によつて着色されたI Sが一機居るのだが……

「うふふ♡すごいでしょ♡これが私達、乙女コーポレーション”が総力と性癖を挙げて作成した第三世代のI S……その名も”恋涙（れんるい）”よん♡」

そう言つて見慣れた化け物が見せてくる武装やスペックを確認しながら、僕と千冬さんは頭を抱えていた。

「この短期間で独自に第三世代作るとか、乙女コーポレーションの技術絶対おかしいですよ。速やかにフランスとかに謝罪してきて欲しいですね」

「……まあ、内容が変態的過ぎて量産には向かんがな」

「これ量産されても困るでしょう」

「使われている技術は軒並み授賞ものなのにも関わらず、どうしたらこうなる」

「高級肉を生クリームのパフエに乗せて蒸しててくるくらいの暴挙ですよこれ」

「もう♡もつと素直に褒めてくれてもいいのよん?♡」

「どこをどう褒めればいいの(いいんですか)、この化け物!」

「ああん♡ひどういん♡」

それはもうとんでもないI Sだった。

具体的には普段は汚い言葉など絶対に使わない僕でさえも社長を”化け物”呼ばわりするくらいには酷かった。

まずこの”恋涙”の特徴として、自身のシールドエネルギーを利用した特殊な銃弾によつて、着弾地点に小型のバリアを発生させる拳銃型兵器を装備している。

さらにさらに、人体に対して効果のある治療ナノマシンと精神を落ち着ける鎮静ナノマシンの2種類を噴出することが可能。

その2種類を併用することで戦闘中にも怪我人を安全に治療することができ、対象が集団であってもパニックを抑えながら保護することができるというコンセプト。

治療ナノマシンの技術とシールドバリアの変形、これはどちらもかなりレベルの高い技術であり、この実物だけでも何十億という単位の金がビュンビュンと飛び回るレベル

である。

だからこそ言わせてもらいたい。

いや、だから言わなければならぬ。

「なぜこの技術をISに使っちゃったんですか……!」

もつと他に使うべきところがあるでしょう!

怪我人の保護だってISじゃなくてドローンとかでもいいじゃない!

普通のパワードスーツとかロボットでもいいじゃない!

何をトチ狂って貴重な枠を大量に使ってまでISに実装したのか!

そもそも数の少ないISは基本的に単独戦闘が想定されてるのになぜサポート系!?

開発コンセプトから間違ってるよ!

そして終いにはこれ!これですよ!

「千冬さん。これ、僕どうしたらいいんでしょう」

「……わからん」

武装

↓鉄の棒

ドラクエの初期装備かつ!!

いや、”ひのきのぼう”よりはマシだけど!

そういうことではないの！

第三世代の特殊武装はどこにいったの!?

イメージ・インターフェイスとやらはどこで使えばいいの!?

ナノマシン打つ込む余裕があるなら他の武装入れてよ!!

せめて銃の類を入れてよ!!

なんで鉄の棒入れちゃったの！

棒術とか習ったことないよ!?

それどころか近距離攻撃とか世界で一番苦手な自信があるのに!!

もうやだこの会社!!

「うふ♡気に入っていただけただけなによりだわ♡」

「眼科へ行つて下さい」

思わず自分でもビックリするくらい低い声が出た。

見た目が嫌いじゃないだけに辛過ぎる。

いや、怪我人を保護するっていうコンセプトも好きなんだよ？

そういう優しさ溢れるISは僕だって大好きだ。

でもね？

それは攻撃する武装を減らしてまで頑張ることじゃないよね？つて。

武器が鉄の棒になってしまいう程に削らなくてもいいよね？って。

バランスって大切だよね？って。

僕はそれを言いたいだけだったの。

やめて千冬さん、そんな可哀想なものを見るような目でこつちを見ないで下さい。

「ふっふっふ、安心して奈桜ちゃん♡このギンツギンにそそり立ったガツチガチの棒は

ね、貴方がこの子と1つになることで一皮向けて真の姿になるのよん♡」

「反応するのも苦痛なのでスルーしますけど、それが特殊武装ってことなんですか？」

「そゆこと♡乙女と言えば、って武器にしておいたから、期待しててネ♡」

「は、はあ……」

とは言うが全く期待なんかできるわけがない。

この変態がつくった兵器だ、間違いなく変態に決まっている。

”変態からは逃げられない”

どうせ僕はこれからもそんな目に遭い続けるんだ。

どうせこれからも僕の周りには変態が集まるんだ。

あ！そういうえば僕も女装して高校生活を送ってる変態だった！

だったら仕方ないか！

類は友を呼ぶって言うもんね！

「あははは……」

「……お前は本当に不憫な奴だな、綾崎」

千冬さんが珍しく慰めてくれる。

もうなんかそれだけで泣きそうになった。

専用機”恋涙”

持久力重視のサポート型の第三世代。

もはやオルコットさんどころか同じ初心者である一夏くとすらまともな試合ができるのか不安である。既に2次移行をして機体性能を大きく変えてくれるのを望むくらいに不安である。

けれどこれから否が応でもこの力を使わないといけないのだ。

例えばどんな変態武器が主力になろうとも。

その武装一つだけでこれから先を乗り越えて……あ、なんか涙出てきた。これが恋涙……？

「ぎーフィッティングするわよん♡こちらにいらっしやい♡」

「うう………どうして僕だけこんな目に……」

今日も今日とてマイクロピキニガバガバショートパンツを穿いた変態野郎に身体

中を触られることになる。

できるならもうさっさと狂ってしまいたい、そう思うようになった。

side 一夏

「え？俺の専用機、まだ来てないんすか？」

「ああ、故に試合の予定を変更して、最初にオルコットと綾崎の試合を始めることにした。あいつの試合はどうせ長くなるからな、丁度いいだろう」

オルコットとの決闘当日、俺は箒と共に第3アリーナのAピットにて自身の専用機が到着するのを待っていた。

決闘当日にギリギリ間に合うとは言われていたが、既に開始20分前。

どんな機械にも初期設定というものがあることを考えると、試運転どころか試合にすら間に合わないのは確実だろう。

当然の判断だと言える。

「ちなみにですが織斑先生、それは綾崎があそこで頭を抱えているのとなにか関係が？」
「……いや、あれはただあいつが不憫な奴だというだけだ。今はそつとしておいてやれ」
「そ、そうですか……」

ピットの隅で体育座りをしている彼女は酷く目立つ。

そして箒ですら苦笑いをするくらいに話しかけ辛い。

あの人があればだけ落ち込むなんてなにかあったのか本気で気になるのだが、事情を知っている千冬姉も説明を躊躇うほどのことなのだ。

詮索するのも良くない気がする。

「綾崎！ 気持ちは分かるがいつまでも落ち込んでいるな！ さっさと行ってオルコットの相手をしてこい！」

「ふあい……」

「……落ち込んでる姿ですら様になるとは、美人は得だな」

「箒だつて美人だろ」

「なっ!?! なっ!?! なっ!?!」

箒と適当に言葉を交わしながら渋々と歩いていく綾崎さんを見送る。

というかあの人I S 展開せずに歩いてつたぞ、カタパルトとか使わないのかよ。

本当に大丈夫なのだろうか、心配だ。

「……さて、織斑。そろそろお前の専用機が到着するはずだ、試合の観戦は最適化処理と並行してやれ」

「あ、ああ、それはいいんだけど……ちふ、織斑先生は綾崎さんにアドバイスとかしなく

てよかったのか？あの人も専用機に乗るのは初めてなんだろう？」

「……あいつには必要ない」

「は？」

俺だつてここ数日何も勉強していなかったわけではない。

再発行された参考書を読んで専用機と訓練機の違い、その特殊性だつて少しだが認識している。

なにより今日行うのは素人の模擬戦だ。

戦闘なんかしたことの無い俺達にとつては、実戦経験のある人物からのアドバイスは喉から手が出るほど欲しいもののはず……

それでも千冬姉は綾崎さんにはそれが必要ないと断言した。

それはあまりにも不自然だ。

そんな俺達の思いを見抜いたのか、千冬姉はモニターに視線を移して話し出す。

「織斑、篠ノ之、お前達の入試の実技試験はどのような内容だった？」

「どんな内容つて……」

「ええと、私は試験官のシールドエネルギーを半分削れというものでした。色々と言はれましたが、なんとか」

「俺の時は山田先生が勝手に壁に向かって衝突したからなあ、正直あんまり印象がない

というか」

「うう、あの時のことは忘れて下さい織斑くん……」

「まあ、たしかにあの時の山田先生は試験官にあるまじき醜態を晒していたがな」

「織斑先生まで酷いです……!」

「I S 学園の教員というのは総じて実力者であり、相応の経験と実績を持っている者にしかねないのだと箒は言っていた。

あの山田先生すらも信じられないことに元日本の代表候補生だという。

そんな彼等を相手に、初めてI Sに乗るような人間にシールドエネルギーを半分削れ
というのだ。

もし仮に本気で相手されていたら、あの山田先生も凄く強かったのかもしれない。

「あの試験は敵がどれだけ強大であつても諦めない精神力を持つているか、加えて実際に削れるだけの技能があるのか、それを判別するためのものだ。オルコットのよう
に試験官を倒すだけの実力があれば既に精神力は問題無いからな、あいつは例外の一つだ
た」

「そういう意味だと一夏の実技試験は全く意味のないものだったのですね」

「篠ノ之さんまで酷いですよお……!」

「ごめんな山田先生、こればかりは全くフォローできない。

「それで、実技試験がどうしたって言うんだ？もしかして実は綾崎さんも試験官を倒してたりするのか？」

「いや、綾崎は試験官を倒してはいない。それどころか全くシールドエネルギーを削れなかった故に違う試験を実施した」

「……ええと、それは、」

鼻唄ではないか？

箒は言うのを躊躇ったが、言わなくとも分かる。

だからこそ、あの厳正な千冬姉がそこまでした理由があるはずで。

「……綾崎が受けた試験はどういう内容だったのですか？」

箒も同様の思考に辿り着いたらしい。

俺も箒と同様に千冬姉の反応を伺う。

すると千冬姉は就業中にも関わらず、珍しく口角を大きく上げ、酷く楽しそうな顔を
して言葉を発した。

『私の全力攻撃を15秒間耐え切るといふものだ』

その衝撃の言葉と共に俺と箒の思考が止まる。

12 かくしごと

side 奈桜

カタパルトを歩いていく。

本来ならI Sを展開して格好良く出撃するような場所のだが、昨日の疲れによって気分が大きく凹んだ現状を改善する為に、少しでも身体を動かしたくなつたからだ。

僕が勝手に凹んでいるだけならまだしも、このままのテンションで模擬戦に向かうのはオルコツトさんに失礼である。

あの後、彼女とは何度か会話をしたが、どうにも彼女は一夏くんとだけではなく僕との模擬戦も楽しみにしてくれている節があつた。

なればこそ、出来ることを全力でやって彼女の相手をするべきだろう。

……例えば、一発もダメージを与えられなくとも出来る事は全力です。弱い僕に出来る事はそれくらいしかない。

『綾崎、聞こえるか?』

「あれ、千冬さん?」

カタパルトの先が見えてきた辺りで突然千冬さんから通信が入る。

アドバイスでもくれるのだろうか？

『綾崎、今回の模擬戦だが、制限時間を設けることになった。30分以内に勝負が決まらなかった場合、その時点で引き分けとなる』

「それはありがたいですね。ですが、最終的に多い方が勝ちという訳ではないのですか？」

『一般的には一律だが、最近の専用機はシールドエネルギーの上限が機体によって異なることがあるのでな。公平を期すために引き分けという形を取ることとなった』

「なるほど……ご配慮ありがとうございます、織斑先生」

『全くだ、お前がもう少しまともに戦える人間ならばこちらも余計な変更をせずに済んだのだがな』

「ふふ、耳が痛いですね……それでは、オルコットさんを待たせてしまっているようなので、そろそろ行きます」

『ああ、勝ってこいとは言わんが、観客を楽しませるくらいのことではしろよ。ギャラリーは多いぞ』

「もう、相変わらず意地悪なんですから」

そこまで言葉を交わして通信が終わった。

最後のあれは、まあ、千冬さんなりの応援なのだろうか。

期待自体はされている……？

(まあ、どちらにしてもやることは一つだから)

この戦いでオルコットさんの戦術を丸裸にする、そして次の一夏くんにオルコットさんを追い詰めて貰う。

僕ではオルコットさんに勝てないけど、一夏くんなら別だ。

僕の今日の目標は全試合引き分け！それ以上の高望みはしない！

「ね、恋涙」

呼び声と共に薄桃色と薄水色の装甲によって全身が包みこまれる。

一般的なISと比較して小さめのカスタムウィングが特徴のサポート型IIS。

戦うのではなく、誰かを守るためのIS。

開き直った今となつては、ISとしてはあまりに歪なその在り方すら愛おしく感じてくる。(洗脳済)

「綾崎奈桜、行きます」

スペック的には平凡な速さで僕は射出口からアリーナへと飛び出した。

side 一夏

『お待たせして申し訳ありません、オルコットさん』

『いえ、色々トラブルがあったということは聞いておりますから、お気になさらないで下さいな。……それよりも、そちらがお姉様の専用機でして?』

『ええ、一応は。所属してる企業が企業だけに少しおかしなデザインをしているかもですけど……』

『そんな! お美しいお姉様にピッタリな、素敵なおドレスのようなI Sですわ! わたくし、間近で見られて光栄です!』

『そ、そうでしょうか』

「……試合開始」

『『ふえっ!?!』』

女子同士の微笑ましい会話。

決闘前には全く相応しくない褒めて照れての光景に微妙な顔をした千冬姉は、微塵の容赦もなく開始の合図を出した。

問答無用の開始の合図に戸惑ったのは当の本人どころかそれを見ていた観客達も同じだ。

『もう! まだまだお姉様に伝えたいことがたくさんありましたのに……!』

『それでも直ぐに対応して攻撃してくるオルコットさんは代表候補生の鑑だと思えます！』

『もう！お姉様は本当にわたくしを褒めるのがお上手なのですからっ！』

『ところでお姉様呼びは私少し恥ずかしいといいますがなんといいですか〜！』

「すげえ、2人ともあのテンションのまま戦ってる」

「あんの馬鹿者どもが……」

無慈悲な試合開始の合図と共に巨大なレーザーライフルを照射したオルコットに対して、綾崎さんも危なげなくそれを回避する。

オルコットの反射神経も称賛ものだが、そのほぼ不意打ち気味な超高速の攻撃を大して取り乱すこともなく回避した綾崎さんは一体何者なのだろうか。

最適化処理を実行している専用機『白式』をさすりながら、自分だったら今の一撃を避けられるかを考える。

……その一撃だけならばなんとかいけるかもしれないが、俺だったら直後に大きく取り乱して即座に2射目を撃ち込まれていたに違いない。

それ程に不意打ちを避けた後も綾崎さんには隙が無かった。

『お姉様！武器はお使いにならないのですか!?!わたくしばかりの一方通行では少々寂

しく感じてしまいますわ!』

『ごめんなさいオルコットさん、私の恋涙は少しだけ癖が強くて。武器と言えるようなものはこれしかないんです……よっ』

『そんなっ!?!』

綾崎さんが唯一の武装だと言ったのは一本の鉄の棒。

桃色の塗装が施されているが、それは一般的なブレードと同等程度の長さしかなく、槍のようにも扱えないだろう。

けれど綾崎さんはそれを取り出すと、オルコットが撃ったレーザーライフルの一撃を表情一つ変えずに簡単に弾き飛ばした。

意味がわからない。

あの速度の弾丸が完全に見えているとでも言うのだろうか。

これには隣の筈も驚愕していた。

『……お姉様、そちらの武器は一体』

『“ペルセウス”という名前の武装です。隠された力がある、なんて聞きましたが実際にはよく分かりません。現状ではただの少し頑丈な鉄の棒ですね』

『なるほど、つまり今の受け流しは純粹なお姉様の実力ということですか。レーザーによる射撃を汗一つなくいなすとは、やはりお姉様は私がお慕いするに相応しいお方です

わ……!』

『あまり期待されても応えられるか不安になってしまいます、ねっ!』

『お姉様なら応えてくださると信じております、わっ!』

オルコットのレーザーライフルの連続射撃を綾崎さんは一発残らず全て逸らしている。

まるでレーザー自体が綾崎さんを避けていく様に錯覚するほどの手際……自分だったら同じことができるか? などという思考はもはや意味がない。

あんなこと、俺にできるわけがない。

『ふふっ、お姉様! わたくし、なんだか楽しくなってきましたわっ……!』

『そうですか? それなら私も頑張っている甲斐もありますっ!』

『ええ! ですの……あと3つほど追加してしまっても大丈夫でしょう?』

『えなにそれちよつと待って聞いてないです』

『さあ! 行きなさいブルー・ティアーズ! 私とお姉様の円舞曲を盛り上げなさい!!』

『や、ちよ! そんなの聞いてなっ……!』

ぴやあああ!

綾崎さんのそんな可愛らしい悲鳴が聞こえてくる。

そのような光景を見て再び千冬姉は眉間を押さえており、山田先生は苦笑いをしてい

た。

ここに來てからずっと平静な綾崎さんしか見てこなかったからか、こうして慌てている彼女の姿はとても新鮮だ。そんな彼女を見てなのか、オルコツトも模擬戦中にも関わらず楽しそうにしている。

……ただ、この中で箒だけが真剣な顔つきで画面を見守っていた。

それは何かを見極めているような雰囲気だ。

「箒? どうした」

「一夏は、気付かないのか?」

「なにがだよ」

「綾崎が攻撃に一切転じようとしなさいことだ」

「え? ……あ」

箒の指摘を数秒咀嚼して、ようやく彼女が言いたかったことを理解した。

そういうえば彼女は試合が始まってからほとんど場所を動いていない。

彼女が言う通り本当に武装があれしかないのなら、勝つためには近づくしか方法がないのに、だ。

それでも彼女は動かない。

まるで勝つつもりすら無い、と言うかのように。

「攻撃が激し過ぎて動けない、とかじゃ……ないよな」

「ああ、言うまでもなく、綾崎の操作技術は非常に高い。それは現状の4機による遠隔攻撃を一切寄せ付けていないことから明らかだろう。普通ならばこういう場合、大きく動いて射線から逃れるのがセオリーだろうに。その場から殆ど動かず最低限の動きだけであれを成しているのは、私から見てもどうかしているとしか言いようがない」

「あ、ああ。ハイパーセンサーだっけ、あれがあつたとしても4機分の攻撃を全部避けたり流したりするのはマジですげえよな」

「……そうだな。そしてそれだけの技術があるならば、多少のダメージさえ覚悟すれば攻めに転じることは造作もないはずだ。現にオルコットは発射こそしないがライフルの照準を合わせて常に警戒しているし、近接武装も展開している。恐らく突破されることを前提に考えているな」

「ん……？ けどなんでライフルを撃たないんだ？ 照準を合わせれば後は引鉄を引くだけじゃないのか？」

「恐らく撃てないのだろう。動きを見る限りビットは自動で動いている訳ではなさそうだな。ビットの操作に相当の集中力が要されるとすれば、ライフルの反動と光量は致命的だ。恐らくだが照準を合わせているのが限界、セシリア自身もその場から全く動いていないのがその証拠だ」

「は、便利そうに見えて意外と癖の強い武器なんだな。あれを使ってる間は無防備になるとか、俺だったら使いこなせる気がしない。戦闘中とは言えその集中力をずっと維持してるオルコットって、やっぱ凄いな」

「逆に言えばそこにつけ込む隙がある。集中の途切れは思考の停止に繋がるからな。素人にとっては一瞬でも、武人にとっては致命的な一瞬。一夏ならまだしも、綾崎ほどの奴なら容易に突けるだろう」

「……やっぱり俺は無理なのか」

「一夏は隙を見つけた瞬間に調子に乗って突っ込んで、そのまま返り討ちにされるタイプだからな」

「ぐうの音も出ない豪速球を投げ込むのはやめろ」

「まあ、そういう訳で私は疑問に思っているのだ。綾崎はなぜ攻めない？ いや、そもそも攻める気もないのか？ 奴は一体何を考えている？」

俺よりも熱中して試合を見守る筈。

次の試合で戦うことになるのだから情報自体はありがたいのだが、熱中しているせいか全く遠慮の無い直球ストレートがバシバシ飛んでくる。

武人として尊敬に値する程の人間が、武人としてあるまじき考え方をしているかもしれない。

箒としてはそれを見極めたいだけなのだろう。

「篠ノ之、勘違いするなよ」

「え？」

だが、そんな箒に対して答えを与えたのは意外にも千冬姉であった。

どこか固まった表情で、姉は箒に答えを差し出した。

「あいつは攻撃をしないのではない、出来ないんだ」

「……？それはどういうことですか、織斑先生」

千冬姉の一言に箒は振り向く。

しかしその言葉の意味が分からず、首を傾げた。

俺はよく分からないので黙っておいた方がいいのかもしれない。

とりあえず箒に続いて千冬姉の方に顔を向ける。

「あいつはな、”避ける”、”捌く”、”受け流す”という技能のみで言えばその技術は

超一流だ。打鉄同士とは言え、私の全力に15秒も耐える時点でその異常性は分かるだろう。

……それこそそれは【実戦】を【何度も】体験しているのでは無いかと言うほどのもの。オマケにIS操作技術も確実に初心者ではない熟れ具合、生身よりもISの方がその技術が活かされているとも言える」

「それ、は」

「実際に実戦を経験しているかどうかは知らん。あいつの記録はとある女性に拾われる以前のものは全くと行っていいほどに存在していないからな。直接聞こうが『記憶に無い』の一点張り、真実は誰にも分からん」

「……」

「そういえば彼女には血の繋がっていない家族達が居ると聞いたが、そう言う話だったのかと納得する。」

「思いのほか重い話に俺は沈み込んでいたが、隣で千冬姉を睨む箒はまた違った感情を抱えていたらしい。」

「箒はその表情を硬らせ、じつと千冬姉の目を見ている。」

「篠ノ之、お前の言いたいことは分かる。そんな得体の知れない人間を入学、ましてや専用機を与えるなど正気の沙汰ではないと言いたいのだろう？……だがな、あいつにそもそも危険性は存在しないんだ」

「それが、綾崎が攻撃をできない話と繋がるのでしょうか？」

「そうだ。……ここまで話しておいて今更だな、良い機会か。近いうちにお前達には話しておくつもりだったからな。」

「勿体ぶらず言えば、あいつは”攻撃という行為そのもの”を行うことができないん

だ」

……？

千冬姉の言葉に疑問符を浮かべたのは筈も同様だった。

あまりに抽象的な言葉で、言っている意味がよく分からない。

そしてそんな俺達の反応も分かっていたかのように、千冬姉は手元の機器を操作する。

「例えばだが、この映像をってみろ」

そうして千冬姉が映し出したのは学園内の道場で打ち合いをしている綾崎さんと、それを見ている千冬姉の姿。

しかしその剣の振りは非常にたどたどしく、入門直後の素人小学生にも劣るレベルのものだった。その姿はともじやないが隣の画面でオルコットの攻撃を軽々しく受け流す彼女のものだとは思えない。

それなのにそれは決して遊んでいるわけでもなく、彼女の顔は必死そのものだった。映像の中の千冬姉も大いに困惑しているのが見て取れる。

「……これだけではない、銃火器に關してもそうだ。奴は時間をかけて引鉄を引くことはできて、確実に的から3m以上離れたところに着弾させる。恐らくはなんらかの精神的ショックによるものだと考えられるが、奴自身はこれを全く自覚していない」

「自覚していない？織斑先生はまだこのことを綾崎に伝えていないんですか？」

「こういった心の問題はどこに地雷があるか分からないからな。故に現状、奴は自身には極端に攻撃の才能がないと思いついでいる。剣のセンスも銃のセンスも全く無い、と。だからこそ私はあいつに教えたのだ。攻撃をする必要など一切無い。どれだけ無様を晒しても、お前は生き残ることだけを考えればいいと」

「……心の問題ということなら、こうして戦いに送り出すことも辞めさせるべきだったのではないのですか？」

「あいつには事情がある。これから先、多くの面倒ごとに巻き込まれる可能性が高い。だからこそ、この場は多少分の悪い賭けだとしても乗り越えなければならなかった。結果的には相手がオルコットで良かったというところか。変に緊張することもなく戦えている」

その言葉を最後にピット内は再び静寂を取り戻す。

画面の向こうでは未だにオルコットと綾崎さんが秘匿回線で何やら喋りながらも戦闘を続けていた。

そんな姿ですら美しく見えて、その裏に背負っているであろう何かに胸が締め付けられる。

「……千冬姉はさ、なんでそんなことを俺達に話したんだ？聞いた限りだと、他言したら

ダメな話だよな？」

「ああ、他言どころか奴の今後を考えるとこれ以上広げるべきではない話だ」

「じゃあ、なんで……？」

俺の疑問に千冬姉は俯く。

後悔、疑惑、悲しみ、諦め、慈愛、隠しきれない感情の重なったような、弟の自分ですら初めて見るようなそんな表情で。

「……綾崎は一つ、大きな罪を抱えている。いや、抱えさせられていると言うべきだな。他ならぬ私達によって」

「罪？どういふことだよ」

「私はその重みを感じさせないために努力してきたつもりだ。だがあいつもバカではない、少しずつではあるが勘付き始めているだろう。それしか選択肢がなかったとは言え、承諾したのはあいつ自身であることも問題だ」

「だからなんだよ、何の話なんだよ。何が言いたいんだよ、千冬姉」

「一夏、落ち着け」

千冬姉らしくない酷く曖昧とした態度に腹が立ってしまった俺を箒が止める。

自分でも何に腹が立っているのか分からない。

普段とは違い人前で弱さを見せる姉に対してなのか、一人の少女に何かを背負わせた

人間達に対してなのか。

それとも、その何かを背負わせているにも関わらず、これまで他人の世話を優先させていた彼女自身に対してなのか。

「そもそもあいつはこの学園に自分の意思で入学したわけではなく、篠ノ之と同様に強制的に入れられたクチだ。本来ならば奴は今頃、自身の育った孤児院で平凡変わらぬ生活をしていたはずだった」

「なっ！」

「……っ！それはつまり、綾崎もISによつて人生を狂わされた1人ということですか！」

「ああ、そうだ。そして綾崎に限つて言えば、将来的に更に困難な道が待っている。あいつにそれを強制した者達でさえも、その将来について考えることを後回しにしているのが現状だ……その不安についても、あいつはずっと振り回されているのだろう」

「なんだよ、それ……！そんな無責任なことあるかよ！勝手に引つ張り出して来ておいて後のことは考えていない!? そんなの許されるかよ！」

「落ち着けと言っているだろう一夏……それも、綾崎が何処かのスパイである可能性が無いという理由の一つですか」

「そうだ、そもそもこちらからあいつの事情を無視して入学させた。そうしなければI

Sに関わることもそもそも無かった。そして、こういった時の対応については、篠ノの方が詳しいだろう。既に世間から本来の綾崎の存在は完全に消されている、意味は分かるな？」

「……そのことを、綾崎には？」

「あいつの現状の精神状態を考え、伝えられていない。

……あいつはもう二度と、自分が育った孤児院には帰れないということ、知らされてはいない」

『ふざけんな!!』

そこまで聞いてしまえば、俺だってもう限界だった。

いくら箒に止められようとも、それ以上は我慢ができなかった。

できるはずもなかった。

「綾崎さんは、あの人は！ほんとに孤児院の子達のことを大切に思ってるんだぞ！それなのに、それなのに……!!」

オルコットとの口論の際に昔の弟のようだと語っていた彼女の顔を思い出す。

カレーライスが甘めな理由を問うた時、子供達に合わせて作っていたからだと懐かしんでいた彼女の顔を思い出す。

怒りがこみ上げる、それでも千冬姉は顔を俯けたまま言葉を発するのをやめない。

「そうだ、我々はあいつを騙した。I S学園に入学して欲しいという条件のみを出し、外部との連絡は極力制限するようにと提案した。最初の約束はそれだけだった」

「……やめろよ」

「だが実際はそうではない、その条件はI S学園への入学に抵抗をさせないためのものだった。こちらから破る前提でなされた上部だけの方便で、既にそんな契約は存在しない」

「もう、やめろよ……!」

「私達はあいつに大きな罪を押し付けただけに留まらず、最初の約束すら反故にし、伝えるべきことすら秘匿し、平穩で充実していた人生すら破壊した。全ては個人の、一つの集団の利益のために、私達はその負担を全てあいつ一人に押し付けて犠牲にしている」

「やめろつつつてんだろ!!」

I Sを纏ったまま姉の胸倉に掴みかかる。

適応化処理を行っていた白式が何が理由でかは分からないがエラーを示しているが、そんなことはもうどうでもいい。

怒りでここまで我を忘れそうになったのは生まれて初めてだった。

自分がこんなにも強い激情に駆られることも初めてだった。

……けれど、そんな感情も掴みかかった姉の顔を見た瞬間に消え失せてしまった。

「なんで、千冬姉がそんな顔してんだよ。泣きたいのは綾崎さんの方だろ……！」

「うるさい、黙れ。泣いてなどいいない。あいつはまだ泣けもしないのに、私が先に弱音を吐くことなど許されない」

そう言つて目線を逸らすことなく目つきを鋭くして見返してくる様は普段と変わらない彼女の姿だ。

ただそれを左目から流れるたった一粒の雫が破壊してしまう。

たった一滴のその雫だけで、彼女が外へ出すまいと必死に感情を閉じ込めて居る事実を浮き彫りにする。

「結局、いくらブリュンヒルデだの世界最強だのと言われても、その名で守ることができないのは精々一人が限界だ。いや、その一人すら完全に守れてはいないかもしれない」

「……………」

「だから私はブリュンヒルデではなく織斑千冬という名であいつを守つてやりたかった。それでも織斑千冬はあいつを守るところか逆に世話をかけさせる愚か者だ。織斑千冬ではあいつを守ることなどできはしない」

「……弱音は吐かないんじゃないのかよ」

「ただの事実だ。実際、この数週間で織斑千冬は奴の精神を守ることと真実を伝えることもできていない。将来のためだと言い訳をして結局こうして戦いに駆り出している」

「……俺達に綾崎さんを守って欲しいって、千冬姉はそう言いたいのかよ」

「……虫のいい話だということも分かっている、これもまた懲りずに他人に押し付けている行為だということも理解している。それでも、あいつの立場を考えるにこの事実を伝えられる人間はお前達2人以外にはあり得なかった。私が信じて任せられる人間はお前達しか存在しなかった」

表情を見せたくないのか俯きながらそういう姉は、自身がISに乗っているからなのか、いつもより小さく見えた。

ここ数年で姉の身長は越したが、それでも自分より何倍も大きく見えた彼女の姿はそこにはない。

だらしない姿は知っている、器用でないことも知っている、けれどこの姿だけは俺は知らない。

こんな姿だけは……見ていられない……

「一つだけ、条件がある」

「……なんだ」

「俺はあの人のこと、勝手にだけどもう友達だと思ってる。同じ釜の飯を食ったとかじゃねえけど、そう思ってる。だから綾崎さんを助けるのは当然だし、守ってやるのも当たり前だ」

「ならば、お前は何を望む」

「決まってるだろ！これからも千冬姉があの人のことを守ってやるってことだ！今更全部俺達に押し付けるんじゃないやねえ！俺は友達としてあの人のことを勝手に守るんだ！頼まれたからやるわけじゃないし、千冬姉が今更逃げ出すことも許さねえ！」

頼まれなくとも勝手にやる、けどこっちの要求は応えろ。

自分で言っておきながら勢いに任せたせいか破茶滅茶な言葉だ。

けど上手い説得なんて俺にはできない、自分の心をそのまま伝えるしか能がない。

だからそれだけを精一杯する、その一言に全てを込める。

そんな俺の顔を見て千冬姉は少しだけ目を見開いた。

「……ふつ、言っていることが滅茶苦茶だぞ、一夏よ」

「うぐつ、仕方ないだろ、俺は俺の言いたいことを言っただけだ。箒の方こそどうするんだよ、ヤバそうだしやめとくか？」

「それこそバカを言うな、私にとつても綾崎はもう同じ釜の飯を食べた友だ。お前は知らんかもしれないが、ここ最近の特訓についてもアドバイスや提案をしてくれていたのはあいつだ。綾崎の言葉が無ければお前は試合当日までずっと私に剣道をさせられていたぞ」

「嘘だろ!?守るところか助けられてしかいねえじゃねえか!あつぶねえ!!」

「くくつ、一夏には黙っているように言われていたが、もういいだろう。友人らしく後から文句の一つや二つ受け取ろう」

「……そりゃいいな、俺も後でお礼言つとかないと。礼も兼ねて今日は俺が夕飯を作るってのもいいな」

「そうだな、それは私も楽しみにしていよう」

最初はどこか綾崎さんを警戒するような素振りを見せていた筈から衝撃の真実を伝えられる。

けれど、”友人らしく”という言葉が凄く心に響いた。

なんだかんだ彼女には俺も知らないうちに影から助けられてばかりで、きつとまだその1割も返せてはいないのだろう。

けれど、貸し借りだのなんだのと義務的に彼女を助けるつもりはない。

助けたいから助けるんだ、自分の心のままに。

「だからさ、千冬姉。今日も寮長室行っていいよな？ 打ち上げみたいなの……もちろん、千冬姉は強制参加だけど、大丈夫だよな？」

自分たちのやり取りを呆然と聞いていた千冬姉に問いかける。

そんな俺の問いに姉は少しの間反応できなかったものの、直ぐにいつもの表情に戻って言葉を返して来た。

「……いいだろう。今日の件で仕事は多いが、必ず間に合わせてやる。その代わりに、打ち上げをするつもりならば当然お前は勝つてくるのだろうな？ 私は反省会に行くつもりはないぞ。」

「ああ、当然だ。負けて打ち上げとかできるかよ、絶対に勝つて参加してやる」
いつも通りの雰囲気を取り戻した姉に笑みを返す。

これでもう絶対に負けられなくなった。

相手は自分なんかより完全に格上だけど、そんなこと知ったものか。

男には負けられない戦いがある、それが今なのだ。

「……よし。見てろよ箒、次の試合、俺は絶対にオルコットに勝つてみろ」

『キツイイツンツツ!!』

「……は？」

「なに!?!」

気合いを入れなおそうとした矢先に鳴り響いた謎の金属音。

そして同時に鳴り響く試合終了の合図。

視界の端でその様子を見ていた箒が、その目を大きく見開いて戦闘中だった箒の画面

の一点を凝視していた。

「何が、起きた……?」

千冬姉ですら困惑する異常事態。

盛り上がっていた会場も既に静まり返っている。

結局この試合、結果は引き分け。

30分もの間、綾崎さんはあの弾幕に当たるところかブースターも最小限にしか使用していなかったのかSEを6割以上残していた。

しかし反面、オルコットは自慢のレーザーライフルを完全に破壊され、射撃で大量に消費したせいかエネルギーも底をつきかけていたという。

……そして同時に、アリーナのバリアにもヒビが入っているのが確認された。

原因は間違いなく突如として響いたあの金属音。

加えてその事実が一番驚いていたのは、他でもない綾崎さん自身だった。

13 一般人の女装生活に罪悪感は付き物

side 奈桜

「というわけで織斑くん、クラス代表内定おめでとうございます！」

「おめでとうございます！一夏さん！」

「よくやったぞ一夏！」

「……………」

波乱万丈の一日の終わり、寮監室には僕と千冬さんの他に、一夏くんに篤さん、加えてオルコツトさんも集まっていた。

なんでも今日は一夏くんが夕飯を作ってくれということ、だったらオルコツトさんも呼んでしまおうという僕の提案を皆も快く受け入れてくれたというわけだ。

まあ、肝心の一夏くんがどこかどんよりしているのは気になるけれど。

さつきまで元気だったのに、一体どうしたのだろうか？

「どうした一夏、祝われてるなりに何か言うことはないのか？」

「いや……………だつてさ？よくよく考えたら俺クラス代表になっちゃってるじゃん？」

「勝負の結果ですもの、仕方ありませんわ。一夏さんはわたくしに勝ったのですから、

誇っていただかないと！」

「つってもオルコットさんはスターライト？だっけ。あれ無しでの勝負だったろ？他の武装だって綾崎さんのおかげで分かってたし。

綾崎さんとの試合だって引き分けとは言え一回雪片ぶっ飛ばされたしさ、あれも実質負けみたいなもんだろ……」

「でしたら織斑くんは全敗、勝利者である私とオルコットさんは辞退しますからやつぱりクラス代表は織斑くんですね♪」

「なっ！だったら俺も辞退を……！」

「……それはダメ（だ）（です）（ですわ）♪」

「なんだよちくしょ……！」

そう、結局のところ、一夏くんはオルコットさんに勝ったのだ。

その前の試合で僕がオルコットさんの替えの利かないレーザーライフル”スターライトmkⅢ”を壊してしまい、彼女が近接武器とブルー・ティアーズのみで戦う必要になっちゃったのも大きいだろう。

しかしそれでも素人が代表候補生に勝ったのは事実、ならば間違いなく適任だ。

少なくとも、まともな攻撃ができない僕よりはずっと。

「そういえば綾崎、お前のペルセウスについて何かあの変態から連絡はあったのか？」

隣で寛いでいた千冬さんが思い出したように僕に尋ねる。

僕はいつも通り千冬さんのグラスにビールを注ぎながら、苦い顔になっていくのを自覚した。

あれを笑顔で報告するのはなかなか難しい。

「そうだよその武装、なんか突然光つたと思つたらオルコットさんの攻撃とか俺の雪片をぶっ飛ばすし。結局なんだつたんだ？」

「そうですね、私のスターライトに武器を貫通してアリーナのバリアにまで傷をつけるほどの威力はありませんし。一夏さんのブレードに関しては根元まで地面に突き刺さるほどの威力。わたくし、とても気になりますわ！」

2人は身を乗り出して僕に迫る。

今日はすき焼きにしたので机の中央には黒い鍋があるわけだが、熱くはないのだろうか。

とりあえずオルコットさんの指が鍋に触れそうになっていたので注意をしてから説明することにした。

流石にその綺麗な指に火傷を負って欲しくは無い。

「ええとですね。まずペルセウスはただの近接武装ではなく、その本質は対I Sを想定した反射武装だそうです」

「反射武装? どういうことだ」

「ペルセウスは衝撃を受けるたびにエネルギーが充填される仕掛けになっているようで、どれだけ早くとも完全展開に至るまで20〜30分がかかります」

「完全展開つてのは、要するにあの光った状態のことだよな? 燃費悪すぎねえか?」

「ええつと、そうですね。とりあえず完全展開したペルセウスなのですが、その光った状態の時に物体にぶつけることで、対象を指定した角度へ反射することが可能ということでした。反射の設定は使用者のイメージで調整ができる」と

「なるほどな、そんな微妙なところでイメージインターフェイスを使っているのか。対ISを想定しているというのはなんだ?」

「完全展開時のペルセウスが最も有効に働くのがISを相手に反射した場合だそうです。ペルセウスがISに直接干渉すると、一時的にブースターなどのISの一部システムが停止します。要は対象は完全に無防備な状態で吹き飛ばされるということですね」

「……は?」

「なんですのその機能……」

「言いたいことは色々あるが、その無駄に悪い燃費はそのせいかな」
「そうです。ちなみにインパクトの瞬間には金属バットでホームランを打った時のような音が流れます。『メルヘンゲット!』と叫びながら放つと状況に応じた解説と実況、B

GMが流れるそうです。私は絶対に使わないですけど」

「なんか急にネタ武装じみてきたな」

「なぜ少ないスロットにそんな無駄なAIを付けてしまったのか」

『『乙女は強くなくつちゃね!』というのが開発スローガンだったと変態社長が言っていました、全く意味が分かりませんでした』

「もういい分かった。ISの機能に干渉する武装など言いたいことは山程あるが、とりあえずこの話はここままでいい。なんだか頭が痛くなってきた」

「奇遇ですね、私も話していて頭が痛くなってきました……」

「BGM云々を抜きにしてもブルー・ティアーズ以上に性能がピーキー過ぎますわ……」
ただの棒かと思っていたらとんでもない兵器を持たされていたという恐怖。

流石に絶対防御やSEには干渉できないそうだけれど、地面に向けて打てば敵ISは受け身も取れないままに叩きつけられるのだ。

場合によっては冗談では済まされない。

それにエネルギーが溜まり次第、自動展開するという点もただだけない。

仮に今日の試合、織斑くんが零落白夜を使用したままの状態だったら、吹き飛ばされた剣はアリーナのシールドをぶち破って観客席にダイブしていた可能性だってある。

そうなれば死者が出るのは確実だ。

使いたくないが、武器がこれ以外に無いので使わざるを得ない。

本当に嫌らしい武器である。

上手くタイミングを見計らって大事故に繋がらない形で使用しなければならなくて、強力だが使い勝手が悪いとしか言いようがない。

守るだけならまだシールド付与機能のある拳銃型武装“遠距離恋愛”の方が使いやすいだろう。

……いや、名前が名前だけに使い辛いんだけど、武装としてはまだマシだ。この際プライドは捨てていく。

というか、他にも色々と微妙なものは付いていたりするので、これらをどう使っていくかは考える時間が必要だ。

だって普通の武装が無いんだもの。

そういうマニュアルも無いし、時間をかけて練っていくしかない。

使う側が考えること前提とか、ちよつと意地悪過ぎないでしょうか。

「千冬さん、また後で相談に乗って下さいね」

「……まあ、何かつまむものを用意してくれるなら考えよう」

僕が色々と考えていたことは既にお見通しだったらしく、苦笑をしながらも千冬さんは了承してくれる。

確か冷蔵庫に買っておいた枝豆があつたと思うから、それを出すことにしよう。

それとも卵焼きでも作るうか？

(そういえば卵が心許なかつたかな)

などと冷蔵庫の中身を思い出していると、ちょうど織斑くんが銀紙に包まれた料理を配膳し始めた。

なんでも千冬さん曰く、彼は非常に料理が上手らしい。

家事のできない姉に代わって掃除洗濯食事の準備、全てを一人でこなしていたという自慢の弟くんだそうです。

そんな彼の今日のメニューは鮭のムニエル。

醤油で食べてもよし、ポン酢でもよし、特製のソースでもよし。

匂いだけでも美味しいと分かるほどの出来である。

お酒に合うのは間違いないのか、千冬さんもゴクリと喉を鳴らした。

実は僕もかなり楽しみだつたりしている。

「……さて、お食事の前に少しだけお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

しかし目の前に出された料理に夢中になっていた僕達を呼び戻したのは、何故か異様に畏まった様子の子のオルコットさんだった。

食事前の良いところで声をかけられて不機嫌そうになっていた箒ちゃんや千冬さんも、彼女のそんな様子を見て態度を変えろ。

僕もなるべくオルコツトさんが緊張しないように、なるべく優しい笑顔をつくって様子を見守る。

「今回の件で、わたくしは一夏さんに対して多くの無礼を働いてしまいました。その件に関してまずは謝罪をさせていただきます。本当に申し訳ありませんでした」

「え？ いや、別に気にすんなくて。今の時代、女なら誰だってああなる可能性があるのは分かってるし……それに、今はもう違うんだろ？」

「はい……言い訳にはなりません、わたくしは軟弱だった父と両親の財産目当てに群がってくる殿方を見て、男性というものに失望しておりました。母が強い女性だったことと、そんな母に憧れていたというのも拍車を掛けたのでしょうね。あの時、授業の内容が全く分からずお姉様に泣きついていた一夏さんを見て、結局日本の男性も同じものなのだと思いますわ……」

「いや、あれは単に一夏が軟弱だっただけだ」

「えと、少しドジしちやっただけですもんね？」

「この愚弟が……」

「その件に関しては100%俺が悪いから綾崎さんのフォローすら胸が痛い……」

「ごぶっ!と親しい女性2人から冷たい視線で貫かれ、救いの手による罪悪感で内側からも攻撃を受けた一夏くんは机に頭をぶつける。

オルコットさんも少し苦笑いをしながらそんな様子を見ていた。

仕方がないのでもう一つフオローを出しておく。

「ふふ。でも、こうして実際に戦って見てオルコットさんも分かったのでしょうか? 織斑くんのこと」

「……はい。『剣を交えれば分かる』というほどの腕はありませんが、間違いありません。

一夏さんはとても強い男性でした。そして、とても魅力的な男性でもありました。

ですから、どういった形でも構いません。謝罪を受け取っていただきたいのです。そうでなければ貴方をあんな男達と重ねて見てしまった自分を許すことができません」

「オルコットさん……」

きつと一夏くんだつてここまで真剣な謝罪を受けたことはそうそうないだろう。

側から見ていた人間にとってはあのやり取りはただの喧嘩に過ぎない。

けれどそれを行った本人にとっては、その時の内心を唯一知っている自分にとっては、ただの喧嘩ではなかったのだ。

彼女の中には見えない葛藤、外には見えない心の闘争。

彼女は自身の中で様々な思いを抱き、戦い、整理してここにいる。

故にこれは大袈裟な謝罪でもなければ、割りに合わない謝罪でもない。

彼女の中で彼女が行ったことを彼女が評価したものがこうして現れているのだ。

だからこそ、そういったことを全て含めて察して、こうして直ぐに笑いかけることのできる一夏くんは、やはりオルコットさんの言う通りに魅力的な男性なのだろう。

千冬さんも少しだけ誇らしそうに、そんな彼の姿を見ている。

「ああ、わかった。俺はその謝罪を受け取る。だからさ、一つだけお願いを聞いてくれな
いか?」

「お願い、ですか? 私にできることならなんでもしますが……」

「そのだな、セシリアって呼んでもいいかな? 多分だけどき、オルコットさんとは仲良くなれると思うんだ。俺も、剣を交わしてから初めて分かった。だから、とりあえずはそこから始めていきたい」

「一夏さん……! もちろん、もちろんですわっ!!」

感謝、感涙、感激。

一夏くんからの思わぬ提案にオルコットさんは涙を流しながら喜んだ。

やっぱり一夏くんは良い男だ、いつか千冬さんが彼がとてよくモテるといふことを話してくれたが、今ならその理由がよく分かる。

僕が女で、オルコットさんの立場ならきつと惚れてしまっているだろう。

もちろん、オルコットさんもその節があるのは間違いない。

「皆さんも！よろしければわたくしのことはセシリアとお呼び下さい！お母様もです！」

「はい、もちろん分かっていますよ、セシリアさ………ん？」

オルコットさん、もといセシリアさんと一夏くんとの和解によつて和やかになった雰
囲気がピタリと静止した。僕も静止した。

……待つて？今この子、僕のことなんて呼んだ？

「どうしたのですか、お母様？どこか具合でも悪いのですか？」

心配そうな顔をして僕の顔を覗き込んでくるセシリアさん。

綺麗な容姿をしているからか、そんな動作一つすらとても魅力的で。

いや、そんなことよりも。

静止していた空間でまず最初に動くことができたのは、やはり世界最強の冠を持つ彼女だった。

「……あー、オルコット？その、『お母様』というのは、なんだ？」

「前はお姉様だったはずだが」

千冬さんに続いて箒ちゃんも訪ねてくれる。

しかしそんな当然の疑問に対しても、セシリアさんは満面の笑みで答える。

「イギリスにいるわたくしのメイドに聞きましたの。先の時代の母親達は今のように己の強さではなく、母性というもので家族を守っていたと……当初はわたくしも母性というものがイマイチよく分からなかったのですが、お母様と出会ってようやく理解ができましたわ！優しくて、けれど厳しくて、それでもいつでも見守ってください……お母様と居るとわたくしは母に抱かれていた頃のような安心感を得ることができました。ですから間違いありません、お母様はお母様です！わたくしの2人目のお母様です！大好きですお母様！」

「ひゃんっ……！」

突然ガバリと抱きついてきたセシリアさんに自分でも疑問を抱くほど自然と女性らしい悲鳴をあげることができた。

僕も染まってきたな……

それにしてもこれはマズイ、とてもマズイ。

いや、もうお母様と言われることに関してはどうでもいい。

だって孤児院では僕のことをママと呼んでくる子供達も少なからず居たから。

その辺はもうとつくに諦めているし、セシリアさんにも同じ様に対応すれば良いだけ。

だから今回も諦めるだけなら簡単だ。

同級生にママ扱いされるのは結構辛いけど、それはもうこの際いい。問題は彼女が僕のことを男だと知らないことだ。

彼女は恐らく一夏くんに恋心を抱き始めている。

けれど、そんな傍らで見知らぬ男に抱きついてしまっているのだ。

これはよろしくない、本当によろしくない。

もしかしたら今後も母にするようなスキンシップを行なってくるかもしれないし、距離感もこれくらい高くなるのだろう。

その時、僕はきつと強く抵抗することなんてできやしない。

今と同じように、されるがままにされるしかない。

そして真実が明るみになった時、セシリアさんが一体何を思うのか。

そんなことは考えなくとも分かる。

(……そうか。これは本当に、まずい)

これは僕の罪だ、人を騙すということを知り分かって引き受けたことだ。

けれど、その重さは今日というこの日まで全く理解できていなかったらしい。

自分のことながら、なんて無責任で考えのないヤツだと思う。

「いい加減にしろオルコット」

ビシッと放たれた千冬さんのデコピンによってセシリアさんは渋々と席に戻る。

そうしてようやく夕食の時間が始まった。

皆がセシリアさんの言動に困惑しながらも各々食事の感想を言い合い、僕も必死に頭の中を整理しながらそれに混ざった。

空気を壊すことなく、上手く溶け込めていたと思う。

……けれど、この生活が始まって初めて自覚し、そして今後も重ねていくであろうこの罪は、少しずつだけ僕の頭を蝕み始めていた。

これからも同じようなことはきつとたくさんある。

その時に僕は、これまでと同じように、自分のことを隠し通す事ができるのだろうか。

14 シチューは作る派

side 奈桜

「お母様！聞いてくださいましー！」

「綾崎！聞いてくれー！」

「セシリアが（箒さんが）一夏（さん）の訓練を邪魔するんだ（ですの）！！」

「……ええつと？」

金曜の19時。

明日の土曜が休みなんてことはIS学園ではありえないけれど、それでも今日もまるで休日前の夜のように寮監室は騒がしかった。

チビチビとお酒を飲んでいる千冬さんと、その横に倒れ伏している一夏くんはこの状況から意図的に目を逸らしている。

僕もバリバリ料理中なんですが……まあまあまあ。

今では一夏くんもたまに料理してくれるから、彼には文句は言えない。

「邪魔をしているのはセシリアだろう！今日は最初から私が教えることになっていたはずだー！」

「それは勝手に箒さんが決めただけですわ！代表戦までもう時間が無いのですよ！？素人の箒さんが教えるよりも効率は良いはずです！」

「綾崎さん助けてくれ、2人とも訓練中もずっとこんな感じなんだ……」

「あらあら、それは大変でしたね。今日もお疲れ様です」

「というより貴様等は寮監室をなんだと思っている、毎日毎日飯をたかりに来よつて」

「いやそれはマジで悪い、千冬姉。でもなんかこう、習慣付いてきちまったっていうか……」

「ふふ。そんなに気にしなくとも大丈夫ですよ、織斑くん。こう見えて千冬さん、皆さんがいらつしやると嬉しいのか、2人で居る時よりも少しだけ飲む量が増えるんですから」

「え、そうなのか？」

「そうなんです♪」

「……ふん、静かな晩酌ができないストレスで飲み過ぎているだけだ」

「外や職員室での食事が減ったのも理由の一つですよね♪」

「……それはお前の料理が美味いからだ」

「あら、これは思わぬ所で嬉しい言葉を頂いてしまいました。気分が良いのでおつまみにイカリングでも用意しちゃいましょうか♪」

「ぐつ、こいつが卒業した後の自分を考えるのが今から恐ろしい！」
いつものような他愛のない会話。

最近は一夏くんに千冬さんを甘やかし過ぎだと注意されることもある。

だが、少し手の込んだおつまみを出せば、いつも無表情な千冬さんが嬉しそうに微笑んでくれるのだ。

これは癖になるので仕方ない。

……なんて、そんなことを思いながら見ていたのがバレたのか、千冬さんがチラリとこちらを見て直ぐに目を逸らす。

そんな様子ももう少し見ていたかったのだが、この時間になっても元気100%な2人の子供達がそれを遮った。

「綾崎（お母様）!!どちらが間違っていると思う!」（思われますか!）」

「まだやってたのかよ2人とも……」

「あ、あはは」

一夏くんに想いを寄せる2人はあの日以来ずっとこんな感じだという。

最初は僕も微笑ましく見ていたのだが、こう毎日続けば良くないだろう。

そろそろ一夏くんもウンザリしてきているのか、溜息をついている。

一度しっかりと注意した方がいいのかもしれない。

このままでは誰のためにもならないことは明白だ。

……というか、ここでも孤児院でもやっていることが変わってない気がするの、気のせいなのだろうか。

「うーん、そうですね。私は、2人とも間違えていると思いますよ?」

「なっ!」

まずは真ん中高めのストレート。

彼女達は言わなければ分からないが、言えば分かってくれる素直な人達だ。

つつい目目の前のことに熱中してしまい周りが見えなくなってしまうのはお年頃、そんな彼等にはこうして周りからどう見えているかの視点を分かりやすく伝える事が大切である。

それに、今なら少し厳しめの注意をしても、一度くらい聞いて貰える程度の信頼は勝ち得ている筈だ。

目と目を合わせて、優しく丁寧に伝えて行こう。

「まず前提として。誰かを教える立場にある人間は、誰よりも冷静で、誰よりも周りが見えていなくてはなりません。誰が教えるかで揉めて貴重な時間を減らしている時点で、お二人は先生失格なんです」

「……ふん、その通りだな」

「うう」

千冬さんの援護も入り、落ち込む2人。

ここからはフォローだ。

けれどあまり調子に乗らせてもいけない。

あくまで自身の間違いを覚えている状態で、それでも2人の心意気を取り戻さなければならぬ。

2人の熱意だけは間違っていないのだから。

それを良い方向に持っていくのが目的だ。

「ですが、お二人が織斑くんの先生役をすること自体は、非常に適任だったりするんですよ。」

「なに?」「本当ですよ!」

「もちろんです。例えばセシリアさんは、射撃のプロフェッショナルですから。遠距離攻撃への対処を課題とする織斑くんにとっては最高の相手になりますし、攻撃側からの助言も与えられるでしょう」

「ふふん!流石お母様ですわ!」「ぐぬぬ……」

「ですが反面、剣道において全国優勝も経験している箒さんは、ブレードでの攻撃手段しか持たない織斑くんにとって最高の見本です。手合わせをするだけでも織斑くんの成

長のお手伝いができるでしょうし、武道の面からのフォローもできる筈です」

「ふふ、流石は母さ……綾崎だな!」「ぐぬぬ……」

「ん?……聞き間違いか?」

「という訳で、お二人が真に織斑くんのことを想っているのですしたら、お二人がまず協力し合うしかありません。そうでなければ I S 初心者なのに機体も極端な織斑くんは強くなれませんから。ですので、先生になる前に今一度お互いの強味と自分の不得意を認めましょう。まずはそこからです」

「むむ……」「頭では分かるのですが……」

やはり2人ともとても素直で優しい人達である。

そしてなにより、反省ができる。

それは人にとって何より重要な性質だ。

そして、ここまで来ればあと一歩。

後は彼女達がつつかえている原因を直接破壊してあげればいいのです。

「……お二人は、織斑くんの力になるよりも自分の欲を優先するような人達ではないでしょう?」

「っ!!」

バツと顔を上げた2人。

一瞬の驚愕の後、顔を赤くさせる。

少しの時間、自分の考えをまとめるかの様に俯き、悩み。

それから数分ほどして、ようやく自分の答えを導き出したようだ。

愛されているなあ、一夏くんは。

「……セシリア、すまなかつた。どうやら私は焦りのあまり本当に大切なことが見えていなかったらしい」

「い、いえ、それはわたくしでもすわ。それに、自分の不得意を棚に上げて偉そうなことを言ってしまうました」

「それに関しても私もだ、ISに関することはセシリアの方が適任だと心ではわかっていたのだがな」

「ですがそれも今日この日までです。私達は目を覚ますことができたのですから……！」

「そうか、そうだな！ならば、これからは！」

「ええ！私達2人で力を合わせて、一夏さんを世界最強のIS使いに仕立て上げて見せましよう！」

「無論だっ!!」

「……いや、どれだけ強くさせられるんだよ俺」

2人は手を取り合って誓いを立てた。

きつと明日からはこれまでのように一夏くんの取り合いなどということにはならな
いだろう。

そしてきつと、一夏くんを最強のIS乗りにしてくれるはずだ。

明日からはもつとへとへとになって帰ってくるかもしれない。南無南無。

「……とりあえず綾崎さん、ありがとな。俺じゃあどうしようもなかった」

「いえいえ、お気になさらないでください。私は育った家柄、こういったことに慣れてい
るだけですから」

「はは、綾崎さんにかかれば俺達なんてまだまだ子供ってことか?」

「もう、織斑くんは時々イジワルな言い方をしますね」

「はは、悪い悪い」

一夏くんの言葉に頬を膨らませつつも、僕は片手間にイカリングを作り始める。

確かに一夏くんの言う通り、なんとなく僕は彼女達のことを孤児院に居た時の子供達
の様に見てしまっているのかもしれない。

けれど、それは決して見下しているという訳ではない。

彼女達が分からなくて、僕が分かっていることを、ただ教えているだけだ。

逆の立場になれば僕もまた素直に教えを乞うことになる。

これはただそれだけの話。

そもそも、子供が下の立場だと思っっているのが間違いなだけだから。

いつだって僕が教えることよりも、教えられることの方が多かった。

今回だってそうだ。

彼女達は僕に、恋情が生み出す感情の強さを教えてくれた。

時には自分を盲目にさせる程に、けれど時には他のどんな欲や障害すらも押し除ける程に力強い恋の力。

これは僕1人では決して分かり得なかったことだ。

「よし一夏！早速明日の訓練なのだがな！」

「えええ、もう明日の話するのによお……」

「そんな甘いこと言ってられませんわ！時間は少ないのですよ！」

「まじかよお」

やる気の燃え上がった2人、さつきよりもずっと楽しそうだ。

そしてその間に挟まれて再びげっそりしている一夏くんも微笑ましい。

そんな彼等を見ていると、丁度作っていた今日のメイン料理がいい具合の匂いを醸し

出し始めた。

ちなみに今日のメニューに一番喜んでいたのはセシリアさんだった。

彼女が美味しそうに食べる姿を空想するだけで、思わず笑みが溢れるほどに喜んでくれている。あそこまで反応してくれるというならば、こちらも作り甲斐があるというものの。

「さて。そろそろシチューが出来上がりますし、ご飯で食べる方はこちらの大きめのお皿を、パンで食べる方は今のうちに焼いておいて下さいね♪」

「ふむ、ならば私は白米にしようか。一夏はどうする?」

「一夏さんはわたくしと同じパンですわよね! やっぱりシチューにはパンですわ♪」

「あー、悪いセシリア。俺さ、シチューはご飯派なんだ。千冬姉もそうだよな?」

「ああ、だが少なめで良い。私はシチューの方をメインに食べる方だからな」

一夏さんの返答に、ガーン! とセシリアさんが崩れ落ちる。

彼等は生粋の日本人だから仕方ないと言えば仕方ない。

確かにその辺りは人の好みにもよるもので、パスタで食べる人だっている。

しかしやはり日本人にはご飯で食べる人の方が多いような気がする。

カレー感覚で食べている人が多いからかもしれない。

……けれど、まあ、せつかくなら楽しく食べてもらいたいし。

僕にはこれといった好みもないので、今日はパンで食べることにしてもいいかもしれない。

「そ、そんな……ここにはパン派はいませんの……？」

「セシリアさん、セシリアさん。今日は私、ちょうどパンで食べたい気分だったんです。まだ手が空きそうにないので、今のうちに私の分も焼いておいてももらってもよろしいですか？」

「……も、もちろんですわ！お任せくださいお母様！わたくし、最高の加減で焼いてみせますわ!!」

パアツと花開くような笑顔を見せるセシリアさん。

こういったところも彼女はとても可愛らしい。

ウキウキで歩き出したその姿に箒ちゃん達も微笑んでいる。

……ところで、流石にセシリアさんもパンを焼くことくらいはできるよね？

若干心配になったので、トースターの前でじつとパンを見つめているセシリアさんを目の端に置きながら片付けを進めることにした。

どうやら問題は無さそうだ。

そうだよね、流石にそれは死活問題になるもんね。

トースターが壊れる羽目にならなくて良かったと胸を撫で下ろす。

「ん？」

僕がそんな風に息を吐いていると、千冬さんが2本目のビールを取り出しに台所へとやって来た。

そして千冬さんは呆れた顔をしながら僕の耳元でボソリと言葉を零していく。

「……なんといいか、お前は本当に母親くさいな」

母親くさいってなんですか。

15 母と呼んでしまう

side 奈桜

それはセシリアさんと一夏くんの和解が成立してから2日ほどが経った放課後のこと。いつも通り自室（寮監室）に戻って洗濯物を畳んでいると、部屋に1人のお客さんがやってきた。

「失礼する……む、やはり綾崎1人か」

「あら、箒さん。今日は織斑くんやセシリアさんと一緒ではないんですか？」

「うむ。一夏は授業の補習、セシリアは本国への報告で忙しいと聞いた。今日は鍛錬をする気にもならなくてな、ここに来ればお前がいると思ったんだ」

「ふふ、その予想は当たりだったようですね。今お茶をお出ししますから、たまには2人でのんびりとお話でもしましょうか」

「ああ、すまないな」

「いえいえ、お構いなく」

そうして姿勢良く座った箒ちゃんは最初こそお茶を淹れている僕の方を見ていたが、次第にキョロキョロと部屋を見回して感嘆の声を漏らし始める。

何に感心しているのだろうか？

そんなにおかしなものも置いてはいない筈なのだけど。

「どうかしましたか？」

「む、いや……本当に綺麗な部屋だと思ってな。とてもではないがあの手冬さんと生活している空間とは思えん」

「あら、箒さんはそのことを知っていたんですね」

「ああ、私が小学生の頃にな。珍しく一夏が人手が欲しいと頼ってきて何事かと思ったら、部屋の掃除だったというわけだ。当時の一夏はまだ家事など最低限しか出来なかったこともあり、本当に酷い有様だった」

なんだかその光景が容易く想像できる。

何を隠そう、この部屋も少し前まではゴミ袋と洗濯物によって床の9割が埋め尽くされていたのだから。

『教師が掃除を疎かにしてどうするんですか！』

なんて言った時に千冬さんが浮かべた現実逃避の表情は懐かしい。

「ふふ、なるほど。織斑くんの家事技術は必要に迫られて身に付けたものだったんですね」

「恐らくそうだろうな。今では家事など最低限しか出来ない私からすれば、女の面目が

丸潰れになるくらいのレベルだ。本当にあいつは何処へ向かうつもりなのか」

「ですが、そういった昔の女性らしさを今なお大切にしている箒さんを、きつと織斑くんは好ましく思うと思えますよ?」

「くくつ、それをお前が言うのか」

クスクスと笑い合う僕と箒ちゃん。

最初に出会った頃は一夏くんの隣の席だからかよく睨まれていたが、僕が別に一夏くんを狙っているわけではない(当然である)ことが分かると、こうして直ぐに仲良くなることができた。

それにここだけの話、しっかり者の彼女が時たま見せる子供のよ様な表情を、僕はとても気に入っていたりする。

「まったく、その気がなくともお前は間違いなく理想の女であることをそろそろ自覚して欲しいものだ。側から見ていつ一夏が落とされるか気が気でない」

「もう、だったら早く思いを伝えたらいいじゃないですか。箒さんだつて間違いなく素敵な女性ですよ? 私が男性だったら出会って告白して振られるまであります」

「くくくつ、振られてしまうのか。勿体無いことをするな私は。」

……ちなみにだが、私はお前が男でなくて良かったと思っている」

「……あらら、それは結構傷付きますね。一応、どんな理由なのでしょう?」

「一夏への想いが揺らいでしまう可能性があるからだ」

「……ふふ、今のは結構嬉しかったですよ？クッキー出しちゃいましょうか♪」

「千冬さんの次は私を餌付けするつもりか？有り難く頂こう」

普段は強気で、頑固で、抜き身の剣のように鋭い彼女。

けれどそんな彼女も最近はずいぶん私”の前でも笑ってくれるようになり、少しくらいの冗談を言い合えるようにもなった。

だからこそ、一夏くんの話をする時にだけ見せるふんわりとした少女の様な表情がとても際立つて見えるようになった。

とても素敵な笑顔だ。

そんな顔を引き出すことのできる一夏くんは本当に凄い人だと思うし、一人の少女にそこまでの影響を与える人間性をとても羨ましく思う。あれが恋する乙女の表情というものなのだろう、僕には多分一生縁のない言葉だ。

だって箒ちゃん言葉ではああ言ってくれたが、きつと”僕”どころか”私”にだってあの顔は引き出せないのは分かっている。引き出す資格すら無いのはさておき、きつとあの顔を引き出せるのは世界で一人だけなのだ。

だからこそ、自分では届かないその素敵な笑顔が酷く遠いものにも感じてしまう。そして同時に愛おしくも思ってしまう。

この笑顔を絶やすことのない様にしたと思うのも自然なことのはずだ。
見守っていてあげたい。

必要な時に手を貸してあげたい。

それが僕と私が求める立場。

目立たなくてもいい、ただこの子達が幸せそうに笑う未来を見ていたい、それだけなのだ。

「え」

さて、そんなことを考えていたせいか、僕は気付いていなかった。

伸ばしていた手が、無意識に彼女の頭を撫でてしまっていたことを。

……えっ、なにしてるのこの人本当に（A・セクハラ）。

「あっ」

「あ、綾崎!?何をしている!?!」

「ご、ごめんなさい箒さん!織斑くんのことを話す時の箒さんがあまりにも可愛らしくてつい……」

「あーま、待て!」

「え、え?な、何を待てばいいんです?」

「い、いや、だからその……べ、別に、撫でるのをやめないでも、いいと、言ってみたり、

だな……………？」

「へ？」

そう言つて直ぐに顔を俯ける箒ちゃん。

僕また何かやつちやいましたか？（A・セクハラ）

とりあえず、よく分からないまま彼女を撫で続ける。

プルプルと箒ちゃんが震えているけど、嫌がつているわけではないということらしく……………ないよね？

そうして数分撫で続けていると、突然箒ちゃんが何かを決心したかのように顔を上げた。

突然の行動に思わず手を上げてしまったが、僕は彼女の言葉を待った。

「あ、綾崎……………頼みを、聞いてもらえないだろうか？」

「は、はい。かまいませんよ、箒さんの頼みですもの」

「だ、だが、その……………少し、おかしな頼み事なんだ。もしかしたら、気持ち悪いと、思ふかもしれない」

「裸になれ、なんてお願い以外にしてくださいね？」

「そ、そんなことするわけないだろう！私はノーマルだ!!」

いや、冗談とかじゃなくて。

それをされると完全に人生ツムツムなので本当にダメなんですよ。

上半身だけなら多分大丈夫なんですけど、それでも気付かれてしまう可能性はある。

まあ基本的に恋人でも無い人の目の前で全裸になるのは普通にアウトな行為なので、まずあり得ないとは思うのだけど。

そしてやはり箒ちゃんが恥ずかしがりながらも求めてきた頼みというのは、そんな僕のお馬鹿な考えよりもずっと純粋なもので。

「その、だな……膝枕、というものをして欲しいんだ……い、嫌ならいいんだぞ!? 素直に嫌だと言ってくれ!!」

あたふたと顔を真っ赤にしながらも言い訳を並べる箒ちゃん。

両手をブンブンと振り回して、きつと今は内心で自分の言った言葉に後悔とかせてしまっているのだろう。

『言ってしまった、言ってしまった……!』

なんて小さく呟く彼女の姿はとても可愛らしい。

そんな様子が不器用に甘えようとする孤児院の子供達に重なって……心が温かくなる。

「もちろん構いませんよ? ほら、こちらにどうぞ。私、膝枕と耳搔きには自信があるんですから♪」

箒ちゃんから少し離れてポンポンと膝を叩く。

膝に瞬時にブランケットをかけ、受け入れ準備は既に完璧に完了していた。

そんな流れるような動作に最初こそ呆気に取られていた箒ちゃんだったが、直ぐに意識を取り戻して慌て出す。

「い、いいの!?ほんといいの!?」

「むしろ準備は出来てしまっているんです。今更嫌だと言われても私が困っちゃいますよ?」

「そ、そうなのか?困ってしまうのか?な、なら……仕方ない、よな……?」

チラリと言葉尻をすぼめてこちらを伺う箒ちゃん、焦れつたくて愛らしい。

恐る恐ると膝の上に頭を乗せるが、それもやはりまだどこか硬い。

緊張しているのか体に力が入りまくっている。

そんな箒ちゃんをリラックスさせるために頭を撫でてやると、最初こそビクビクしていたが次第に身体力が抜けていった。

千冬さん曰く中毒性があるらしい僕の膝枕を、箒ちゃんも気に入ってくれたらしい。とても嬉しい。

「……………」

性別を偽ってこうしたことをするのは良くないことなのは間違いない。

だが、断れば彼女が悲しんでしまうだろうし、精一杯の努力を振り絞って出した女の子の願いを断るのも違うだろう。

それに僕だって頼まれて嬉しかった。

……まあ、最悪の場合は僕が自分の性別を墓場まで持つていけば済む話だから、うん。一生女装しろってことですか、そうですか。

いや、最悪の場合というか、何かしらやらかした場合は本気で視野に入れる必要があるのは間違いないし。

なんだか蟻地獄にはまった気分だ。

けれど、その代わりにこうして自分の膝でリラックスしてくれる子を見ることができるとなれば、それは十分な見返りなのかもしれない。

完全にリラックスした箒ちゃんに近くにあった薄い毛布をかけ、ゆつくりと優しく一定のテンポで肩のあたりを叩いてあげる。

性格なのか、家庭的な問題なのか、どうにも彼女はこういうことに慣れていないらしいし、飢えている感じもある。

……そういえば彼女の姉はあの篠ノ之束だったか。

きつとこれまでも大変な人生を送ってきたのだろう。

こうやってくれる人が近くに居なかったのも、仕方のないことなのかもしれない。

「あ、あやさき……?」

「大丈夫ですよ箒さん、私はちゃんとここに居ますから」

「そ、そうか……重くは、ないのか?」

「慣れてますから、箒さんくらいなら何時間でも大丈夫ですよ?」

「そ、そんなものなのか?」

「そんなものなのです」

確かに長時間していると足が痺れることはあるが、座り方を少し工夫するだけで解決できる事柄だ。

慣れればこの体勢で一緒に眠ることだってできる。

流石に今回はしないけれど、それくらいには問題は無いということだ。

「はあ、なんだか自分が情けないな」

「そうですか? 私はそうは思いませんが」

「そんなことはない。実を言うのだな? セシリアにああ言っておきながら、私にも他人に甘えてみたい欲求があつたらしい」

「あら、それに選ばれたのなら光栄ですね」

「ふふ、お前ならそう言うと思つていた。」

……まあ、きつかけは昨日のことなのだがな。セシリアがお前に何かをせがむ度に羨

ましく思っている自分に気が付いた。私は姉の影響で小学生の頃から両親に会うことも出来ず、常に転居を強制されていたからな。そのせいで周りにロクに頼れる大人も居なかつた。恐らく無意識に甘えられる人間を恋っていたのだろう、情けない話だ」

「箒さん……」

ぎゅつと服の裾が握られる。

小学生なんて多感な時期に両親から引き離され、常に見知らぬ環境を強制されるといふのはどういう気持ちになるのだろうか。

自分にも両親はいない。

けれど両親のことなど覚えてもいないし、僕にはその代わりにマザーが居た。

常に自分にとって心地の良い居場所が存在していた。

だからきつと、僕には彼女の気持ちは本当の意味では分からない。

そんなふざけた環境に置かれながらも必死に自分を律し続け、曲がることなく生きてきた彼女がどれだけ凄いのかも、真に理解は出来ないだろう。

「まったく、高校生にもなつて私は……」

けれど、そんな彼女に僕にも出来ることがある。

いや、正しくはそれしか出来ないのだけれど、それでも彼女を元氣付けることが出来るのなら迷いなんて無いに等しい。

羽ばたき疲れた彼女の一休みの寄木となれるのなら、それは多分とても光栄なことだ。

「箒さん、何も甘えることが悪いことなわけではないんですよ？」

「……？だが、私はもう誰かに甘えるような年ではない。これからは自立を求められる年齢になるんだ、未だに甘えたことを抜かすのは恥ずべきことだと思うのだが」

「それが適用されるのは、これまでの人生を思いつきり甘えて育ってきた人達だけです。箒さんにはまだまだ甘えが足りません」

「あ、甘えが足りないときたか。なかなか新鮮な言葉だな」

「ふふ、私は『甘えるな』って言葉が世界で一番嫌いですから。

だから、もっと甘えてもいいんですよ？なんでしたらセシリアさんみたいに『お母様』って呼んでくれても構いません。私は人を甘やかす人間ですから、私に甘やかされても仕方ないんです」

「……人を甘やかす人間、か。確かに、あの千冬さんすら甘やかせる人間など世界に2人もいないだろう。そう考えると、私のような未熟者が綾崎に甘えてしまうのも当然のことかもしれない」

「いいことです。私だって嬉しいんですよ？だって私も箒さんのこと甘やかしたいですし、セシリアさんみたいに甘えても欲しいです」

「いや、流石にあれほどべったりとするのはな……」

「あらら、それは残念ですね」

気付けば裾を握っていた彼女の手が僕の膝を撫でていた。

少しばかりこそばゆいが、箒ちゃんは至って楽しそうだ。

5分ほどそんな時間が続いた後、彼女は一つ深く瞬きをして横を向いていた顔を身体ごと僕の方へと向ける。

突然のそんな行動に思わずビククリしてしまっただが、その僕の反応に楽しそうに悪戯な笑みを浮かべた箒ちゃんは、ニツと笑って宣言をした。

「ならば今から私は綾崎のことを『母さん』と呼ばせてもらおう。セシリア曰く、2人目の母親だ」

「箒さん……」

「ふふ、これからは思いっきり甘えさせて貰うからな？後で後悔しても取り返しはつかないぞ？私をこんな気持ちにさせたんだ、責任は取ってもらわないとな」

「おや、これはとんでもない藪蛇を突いてしまったでしょうか？」

ですが、望むところです。私こそ、たあつくさん箒さんのこと甘やかしてしまいますから。後悔しても遅いですよ？」

「するものか。母さんから甘やかしの極意をたっぷり吸収させて貰うのだからな、学ぶ

ためにも全力で甘えてやる」

「ふふふっ」「くくくっ」

そうしてこの後、セシリアさんが報告を終えて帰ってくるまで箒ちゃんの耳搔きをすることとなった。

年頃の女の子の耳搔きを恋人でもない異性がするのはどうかと思うのだが、僕は彼女の前では男でも女でもなく、母親の代わりになると約束してしまったのだ。

故に、罪の意識すら追いやって徹する義務がある。

よって全力で甘やかした、後悔はしていないけど反省はしている。

ちなみにその結果、箒ちゃんにも定期的に耳搔きをせがまれることになった。

この学園で僕が耳搔きを担当する女性がなんと3人になった。

女誑し？そんなことはありません、ただ耳搔きが好きなだけです。

単に周りの女性率が高いだけで、男性でも虜にしてみせますから。

まあ耳が性感帯の人もいるから、男のままだったらセシリアさんの耳搔きなんてできないけれど。

ああ、女で本当によかった……

……あれ？

16 ラツキースケベをされる側

「今日はI Sにおける実践的な飛行訓練を行う。各自I Sスーツに着替えてグラウンドに集合しろ。遅刻は許さん。以上だ、移動を開始しろ」

「はー!!」

……はい。

こんにちは、綾崎奈桜です。

かつては直人でしたが、今は奈桜です。

でも基本的に名字の方で呼ばれるのであまり実感はありません。

今僕は女装生活を始めれば誰しもが予想できたであろうに、何の対策も施すこともしぎず、とうとうやってきてしまったこの恐ろしい危機に直面しています。

「やだ……着替え、やだ……女の子といっしょ、だめ、ぜったい……」

だめです、これはだめです。

本当にだめな奴です。

だってこれ、超えてはいけない一線です。

この一線を超えたら、多分一生自分の性別を明かすことができませぬ。

自分の性別を墓まで持っていくなんて、そんなの僕はやーです。

お断りです。

「お母様♪よろしければ私と一緒にお着替えしましょう？それとも先にお手洗いの方に入りますか？」

どっちもいけない！

女子トイレで着替えを済ませればいいじゃん？

そう思うじゃん？

でも僕、この学園に来てから女性用トイレなんて使ったことありませんから！

だってダメじゃん！

倫理的にダメじゃん!?

トイレしてる音なんて誰だって異性に聞かれないじゃん!?

例えそれがどんな音でも!!

「お母様?」

「……セシリアさん。一つだけ、お願いを聞いてもらえないでしょうか?」

「はい?」

「こちらが更衣室ですわお母様！どうぞご自由にお使いくださいませ！」
「うう、ありがとうございますセシリアさん……」

アリーナにある本来の更衣室。

しかし今は教室で着替える事が基本となっているため、誰にも使われることのない寂れたその部屋。

そしてその更に壁一枚隔てた場所にある、かなり小さめの教員用の更衣室。

セシリアさんが紹介してくれたのは、そんな素敵な場所だった。

誰にも使われていない場所の中でも、更に人目につかないこの場所。

決して着替えを見ることも、見られることもあつてはならない僕にとっては、これ以上が無いという程に本当に最高の場所だ。

こんなのもう、いくら頭を下げても下げ足りない。

「いえ、まさかお母様が自身の肌を見せることにそこまで抵抗があつたとは思いませんでしたもの。これまで気づくことの出来なかつた自分を恥ずかしく思いますわ」

「いえ、そんなことはありません。とても助かりました。本当にありがとうございます、セシリアさん」

「そんな！お母様の役に立てて良かったですわ！……それではわたくしも教室に戻りますわね、また後でお会いしましょう」

「ええ、また後で」

そう言つて向こう側の更衣室へと走っていくセシリアさん。きつと肌を見せたくないという僕のためだろう。

彼女は本当に優しい人だ。

セシリアさんにもまた別の形でお礼をしなければならぬと思う。

「ふう、とりあえず下着を外さないで。いつも思うけどこれを付けたり外す時つて本当に心が削れるなあ」

ぶつちやけた話、他の生徒と一緒に着替えてもバレることは決してない。

それは下にI S スーツを着ているからとかいう理由ではなく（というかそもそも今日を着ていない）、僕には本当に胸があるからだ。

……胸があるからだ。

……推定BとCカップの胸があるからだ！

なんだと思いますこれ？

パッドじゃないんですよこれ。

何かを敷き詰めているものでもないんです。

そう、おっぱいなんです。

偽物のおっぱい。

その名も、《乙女の栄光パイパイン》である。

ネーミングセンスよ。

肩上から胸に貼り付けるタイプの偽乳で、本物に非常に近い触り心地と見た目をして
いる（らしい）。

特殊なジェルを使用しないと外すことができないが、貼り付けたことが分からないく
らいの驚異の偽装力を持っている。

1日に1回洗浄が必要であるが、連日使用しても皮膚に害を与えないように作成され
ているという見る人が見れば本当に素晴らしい製品だ。

正式に商品化した場合の利益は計り知れないだろう。

ちなみに開発スローガンは、

『幼気なロリッ娘が念願叶って巨乳を手に入れて喜ぶ姿を見たい』
である。

純粹に歪んだ性的嗜好100%の下で開発されたこの製品。

流石は乙女コーポレーション、気持ち悪い。

そんな胸のおかげで例え抱きつかれた所でそうそうバレることは無い。とは言え、も

ちろん下半身は別の話だ。

流石に女装のために切る勇氣は無いので、そこは仕方ない。

そこでこのISスーツの出番である。

授業まで時間が無いため急いで着替えに取り掛かる。

スクール水着型のISスーツ、ただし僕のは乙女コーポレーションの特注品だ。

なるべく女性らしい体型に見えるように調整され、かつ下半身は男性のシンボルを隠すためにスカートが普通より長めに設定されている上に素材も硬めにできているという優れ物。

……まあ、露出度が高いのは変わらないんですけどね。

肩出し脇出し太腿出し、身体のライン丸出しだけでは飽き足らず、ニーソによる絶対領域まで生み出して。

このスーツを最初に考案した人間は間違いない変態だ。

特にこれが女性が着るならまだしも、僕は男だ。

これを着るとなるともうなんか本当に死にたくなる。

しかもこれ下に何も付けてないんですよ？

肌の上にそのまま着るんですよ？

辛みしか感じないでしょう？

「はあ……」

ため息を一つついてISスーツを腹部まで上げる。

ベンチに鏡とジェルを置き、地べたに座りこんで違和感がないかを丁寧に確認していくが、こうして見ると胸一つあるだけで本当に自分が女性のように思えてくるのだから笑えない。

実際、このそこそこ大きな胸は非常に邪魔である。

こうしてスーツを着るだけでも変な形で入らないように工夫しなければならぬし、重量のせいで身体のバランスだって変わってくる。

なによりジェルの塗りが甘いと微妙に剥がれてしまうので、露出度の高いISスーツを着る時には手入れが大変だ。

「あ、(こ)微妙に剥がれてる……ん、これで大丈夫かな」

カバンから取り出したジェルで直ぐに応急処置を済ませていく。

授業まで残り3分、もう時間が無い。

女性は準備に時間がかかると言うが、この時間のかかり方は僕特有のものだろう。

「さて、急がないと」

ジェルは塗り終わった、恋涙も待機状態でここにある。

事情があるとは言え、他の生徒の目もあることだし、遅れてしまえば千冬さんに怒ら

れてしまうだろう。

そうして僕は胸を押さえながら上半身までスーツを上げようとし、その瞬間……

「やっべ!! 授業もう始まつちまう! さっさと着替えて行かねえと千冬姉に怒ら……れ、る……?」

「あ」

「え……?」

この学園で(公式では)唯一の男子生徒である織斑一夏くんが更衣室へと入ってきた。

「あ、あああ、あやさき……さん!? な、ななな、なんでここにっ!」

「あー、ええと……私、人に肌を見られるのが苦手で……」

「あ、え、あ、え、そう、です、か……」

「……………」

「ええと……その、そうじつくりと見られると照れてしまいますので、目を逸らして頂けると助かるのですが……」

「ご、ごめんっ!!」

ぱつと後ろを振り向く一夏くん。

あんなにもジツと見つめられてしまつては偽物とは言え思う所はある。身体を見られる女性つてこういう気持ちだったんですね。

こんなにも恥ずかしくなつてしまうのは自分が段々と女性化してしまつているからなのだろうか、そうでないと信じたい。

(今の、角度的に完全に作り物の乳首まで見えてしまつたんだろうなあ)

そんなことを思いつつ I S スーツをしつかりと着る。

……まあ、今回に関しては彼は全く悪く無いのでフオローはしておこう。

こういう時に咄嗟に隠す癖を付けておかなかつたのも、下調べをしておかなかつたのも、どちらも僕のミスではあるのだし。

「えつと、織斑くんは悪くありませんから。あまり気にしないで下さい。それよりも、授業に遅れないように気をつけて下さいね？」

妙にいやらしいデザインをした恋涙の待機形態であるガーターリングを素肌の上から身につけて更衣室を出る。

この気まずい空気の中に織斑くんだつてずつと居たくは無いだろう。

「……そういうところなんだよなあ。くそう、誰か俺を殴つてくれ」

更衣室を出る前にそんな一夏くんの眩きが聴こえてきたけれど、どういう意味なんだろう？

どうせ偽物なのだからあんまり気にしないで欲しい。

「では、これよりISにおける実践的な飛行訓練を行う。織斑、オルコット、綾崎、試みに飛んでみる。」

あの後、結局遅刻をしてきた一夏くんは千冬さんにグラウンド10周を言い渡されたが、『10周じゃ足りない……15、いや20周は走ります……』という謎の猛省によってクラスメイト全員がドン引きをした。

そしてそんな一夏くんは今、いつもよりもずっと気合が入っているように見える。

あの後なにかあったのだろうか？

やる気が入ったのなら良いことだ。

「ねえ恋涙」

呼びかけるようにしてガーターリングに手を添える。

すると直ぐに薄桃色と薄水色の装甲によって全身が包みこまれた。

一夏くん達ほど訓練はしていないが、セシリアさんとの戦いの後、ちよくちよくアリーナに行つて試しはしていた。

その結果、この恋涙は武装に色々文句はあるが、性格的に自分とかなり相性が良い

ことが分かった。

「ふむ、オルコットも綾崎もISの展開に問題は無いようだな。織斑は1秒を切るようになれ、ISの展開速度は操縦者の生存率に大きく直結する」

「は、はいっ！」

ビシッと背筋を伸ばす一夏くん。

男性操縦者という立場上、それは確かに大切なことだ。

千冬さんが一夏くんに言い聞かせるように言っているのはそれ故だと思われる。

それを聞いていたセシリアさんや箒ちゃんも納得したように頷いているし、恐らく今日からの訓練メニューに取り入れる気なのだろう。

あの2人もしっかりと先生をしているようで安心した。

「よし、飛べ！」

千冬さんの言葉と共に上空へと飛び出す。

ただしその瞬間、思いもよらぬことが起きた。

「あれ」

少し溜めを作る感覚で地面を蹴つたのだが、その影響なのかまるで某レースゲームのスタートダッシュの如く急発進してしまったのだ。

直ぐにブレーキをかけて目標高度で停止するか、想定外の動きに少し驚いてしまう。

上手いこと制御できていなければ空の彼方に飛んでいってしまうところだった。

『綾崎！誰が瞬時加速（イグニッションブースト）を使えと言った！』

「あ、なるほど！今のが瞬時加速なんですわね！ごめんなさい、次から気をつけます」

『「知らずにその精度（です）か……」』

「そういうええいつも頭の中は初心者だったな……危うく忘れかけていた」

いつかの予習の際に見た覚えがある、確かそういう技術があると。

後から追ってきたセシリアさんと通信で呼びかけている千冬さんが顔を痙攣らせているが、それも当然の話。確か瞬時加速による事故は非常に多いとのこと、ろくな練習もしていない素人が適当に使うものではないのだから。その証拠に千冬さんが『私が許可を出すまで瞬時加速は禁止だ』と伝えてくる。

僕だけならまだしも、一夏くんまで真似し始めたら大変なものね。

悪い見本にならないように、それは一理ある。

「う、おとお？なんだこれ、上手く飛べねえ……！」

ちなみにその一夏くんはと言えば、ぐんぐんと蛇行飛行をしながらも高度を上げて来ていた。

セシリアさんとの決闘の時は簡単に飛び回っていたのに、やはり意識の違いなのだろうか。一夏くんが追いついた所で、3人でグラウンドの上空を回るように軽く飛行す

る。

『何をやっている！スペック上は白式の方が恋涙やブルー・ティアーズよりも速度は上だぞー！』

「は、はい！……つつても、やっぱ飛ぶのつてあんまりイメージつかないんだよなあ。なんだっけ、前方に三角錐を作るイメージだっけか」

ちよくちよくバランスを崩しながら飛行する一夏くん。

こうして見ているだけでもなんだか危なっかしい。

それを見て、僕とセシリアさんはレクチャーを始めようとアイコンタクトをした。

一夏くんは考え過ぎるとダメなタイプだ。

マニユアル通りよりも自分の感覚で動くようにした方が絶対にいい。

「一夏さん、イメージは各々で異なりますわ。自分のやり易いイメージを模索するのが最適ですよ」

「そうなのか？うーん、でも最適なイメージって言われてもなあ」

「例えばアニメや特撮のキャラクターが空を飛ぶのをイメージしてみたらどうでしょうか？衝撃波を出しながら高速移動する感じですよ」

「ああ！それならなんとなく分かるかも！………こうか!!」

突如、ぐんつと速度を上げた一夏くん。

僕とセシリアさんを簡単に追い抜いて飛んでいく彼を見て、思わず呆気にとられてしまった。確かにスペック上はかなり早いとは聞いていたけど、ここまでとは誰も思えない。

あんな曖昧なイメージでここまで劇的に操縦スキルが変わってくるのだから、つくづく一夏くんは感覚的な天才なのだろうなと思わされる。

セシリアさんもこの意見には同意らしい。

『よし、大分慣れてきたようだな。織斑、オルコット、綾崎、急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表から10cmだ』

千冬さんからの新たな指令を受けて、まず最初にセシリアさんが降下する。これは一夏くんだけでなく、僕にもお手本を見せるとい感じなのだろう。先程の様なことにならないようにと、その気遣いは個人的に本当に嬉しい。

「それでは一夏さん、お母様、御機嫌よう」

軽い調子でそう言った彼女は、代表候補生の名に相応しい着地を披露して見せた。

指定された10cmピツタリと言うところにも彼女らしさを感じる。

やはり彼女の操作技術は凄い。

「それでは織斑くん、次は私が先に行きますね」

「ああ、気をつけてな」

次は僕の番だ。

一夏くんに一言かけて降下する。

素人の自分ではセシリアさんほどピッタリと綺麗な着地はできないだろうが、とりあえず勤に任せてスラストを稼働させ、完全停止を行ってみた。

恋涙自体はそこまで速くないため、仮に落ちたとしても大丈夫だと思っていたのだが、やはりグラウンドにキスすることもなく綺麗な着地が出来た。本物の手足のように自在に動いてくれる恋涙には感謝してもしきれない。

変に尖ったスペックではなく、平均的なバランスの上に突出した扱い易さがあるのがこの機体の良いところだ。

武装とか関係ないよね！いざとなれば他の人ののを借りればいいし！

「……15cmか、十分だな。よくやった綾崎」

「ありがとうございます」

千冬さんからの褒め言葉、大半は従順過ぎる恋涙のおかげなのだけども嬉しい。そう笑みを浮かべてお礼を述べていると、今度は後方に突如として白い流星が落下してきた。

白式という名の流星が。

犯人は言うまでもない、一夏くんだ。

あと数秒あの場から離れていなかったら、僕も巻き込まれていたかもしれない。どれだけ気合を入れていたのか、その速度での落下は間違ひなく不味い。

「クレーターを作り出すなんて！織斑くんは一体どんなスピード出して来たんですか……！！」

I Sの絶対防御を考えれば恐らく怪我は無いだろうけれど、初めて見る墜落事故であつたために僕は急いで彼の元へ駆け寄る。

すると外目からはそれなりに深刻な事故のようにも見えたのに、肝心の彼は頭から地面に突っ込んで非常にギヤグ的な格好をしていた。

これがギヤグによる不死身化ってやつですか……いや言ってる場合か!!

「お、織斑くん!?大丈夫ですか!」

足をジタバタさせている織斑くんを恋涙で引き上げる。

生存と元気が確認できているだけでもマシだ。

激突後にI Sが解除されていたために生身となっていた一夏くんは、僕にズルリと収穫された。

白式も最後まで責任を持ってあげてほしい。

「お、おお?おお……っ!」

不可抗力的にお姫様抱っこの様な形になった一夏くん。

しかし彼は衝撃から目を覚ますと2度3度僕を見て急激に顔を真っ赤にしてしまう。いや、これは本当に申し訳ないけれど緊急時なので許してほしい。

男性が女性にお姫様抱っこなんてされたらそうなるよね、ごめんね。でも足とか捻つてないか心配なのだから仕方ない。

一応そのまま千冬さんの下まで彼を持っていくと、千冬さんは頭を痛そうにしながら一夏くんを睨みつけた。一夏くんは度々何かを言おうとするが、その度に口を閉ざし、挙動不審という言葉がこれ以上無いほどに似合う有様。

大丈夫です千冬さん、怪我は無いみたいです。

「どうだ織斑？ 気合いを入れてグラウンドに大穴を開けた挙句、同級生の女子にお姫様抱っこされる気分は？」

「死にたいです……」

「授業が終わったらしつかりグラウンドを整備しておくように。綾崎に手伝わせるのは当然禁止だ」

「そこまで恥知らずじゃないんで……」

そう言つて一言僕に声をかけた一夏くんは授業終了の挨拶にも参加せず、逃げるようにして大穴を埋め始めた。

落下のトラウマを抱えていないようで何よりである。

ちなみに千冬さんの授業終了の合図と共にセシリアさんと箒ちゃんは一夏くんを手伝いに行った。僕は釘を刺されてしまっていたので動けなかったが、作業が終わるまでに着替えを済ませて3人のことを見守っていた。

終始一夏くんが落ち込んでいたことが非常に気になったが……大丈夫かな……？

17 織斑一夏はカツコよくなりたい

side 一夏

「というわけで、織斑くん！クラス代表就任おめでと〜！」

「「おめでと〜」」

夕食後の自由時間で、俺たちは珍しく食堂に居た。

1組の生徒で俺の就任。パーティーが盛大に執り行われたのだ。

しかしパーティー開始前からアゲアゲムードなクラスメイト達とは対照的に、俺の心は地の底の底……理由は今日の飛行訓練の際の出来事を未だに引きずっていたから以外に無い。

(また綾崎さんに情けない姿見られたアアア!!)

終始その一点に尽きる。

綾崎奈桜という少女は非常によく出来た女性だ。

それは自分だけではなく同じ女性である箒やセシリア、加えてあの姉ですら認めているほどに。

しかし彼女はISの操縦技術には目を見張るものがあるが、勉強やスポーツに関して

は特別出来るわけではなく、それぞれの分野ならセシリアや箒の方が随分とレベルが高いことは間違いない。

決して失敗を犯さないということもなく、時々小さなミスをして姉に叱られてしまうこともあり、こうして間近で見ているとその雰囲気とは裏腹に決して完璧とは言えない人であるということも分かる。

……それでも、女性としての魅力で語るならば、彼女は間違いなくその完成形なのだ。時々犯すそのドジだって彼女の魅力の一つに数えられるだろう。

全てを完璧にこなす事が出来る訳でもないという所にも、近付きやすさや接しやすさを感じられる。

そしてそんな彼女に対して自分自身、憧れというものを抱いているのを自覚している、彼女の前では格好良い自分ではないなければならないという意識を常に強く感じている。

恋愛感情、というよりは見栄を張りたいという欲だろうか？

そんな『綺麗な女性の前で見栄を張りたい』という至って平凡な思春期の男子らしい情動に、自分らしくないと思いつつも従い、ここ数週間頑張ってきたつもりだった。

……つもりだった。

(にも関わらずこれだ！俺まだ綾崎さんの前で一回もカッコつけたこと無いんじゃないや

いか!?むしろカッコよく助けられてるんだけど!? どういうことだ!!)

あれ以来毎日続いているセシリアや箒との特訓が正常に働いているのは、2人を注意してくれた彼女のおかげだ。

出された宿題の分からない場所をそのままにせず提出できるのは、俺の目線になって教えてくれる彼女のおかげだ(セシリアは教え方が専門的過ぎる、箒と一緒に教えられる側)。

そして今日だってそうだ。

訓練中にもイメージが掴めず、時々フラついていた飛行が上手くいくようになったのも彼女のアドバイスのおかげだったし、その後に調子に乗って完全停止を失敗した俺をフォローしてくれたのも彼女だった。

(恥ずかしかった!綾崎さんにお姫様抱っこされるとか死ぬ程恥ずかしかった……!でもなんかちよつとカッコ良かったのが悔しい!本来なら逆の立場がベストなのに!!)

あの後、制服に着替えた彼女がずっとこちらを優しく見守っていたという事実も辛かった。1人の男として格好良くあろうとしたのに、気付けば男ではなく子供の様に見守られているのだ。

もはや悔しいとかいうレベルは超えている。

気分は美人のお姉さんに1人の男として認めてもらいたいのに、何度も何度も空回り

をして結局は可愛がられてしまう少年っ子だ。

身長170超えの男を少年扱いできる綾崎さんは何者なんだよ。

世界の母か？悔しくて仕方がない。

「なあセシリア……カッコいい男って、どうすればなれるんだろうな？」

「ええと、突然どうなされたのですか？一夏さんは十分にカッコいい男性です、少なくともわたくしが今まで見てきた男性の中では一番に」

「お、おお、そうか……」

落ち込んでいる自分を心配してからずっと隣についてくれているセシリアに軽い気持ちで尋ねてみれば、思った以上の真面目な返答が返ってきて慌てる。

箒もそうなのだが、セシリアも最近は少しだけ気性が落ち着いてきて、こういった不覚にもドキリとしてしまう言動を自然とするようになってきた。聞くところによると、俺が補習でない時にも彼女達は綾崎さんの下にいるらしいから、きっとその影響なのだろう。

2人とも綾崎さんを見習って色々と学んでいるらしいので、多分間違いない。

こんな所にも彼女の影が……

もしこれで綾崎さんが量産されるような事態になったら、確実に俺の心がもたない。

昔は千冬姉というとびきりの美人が近くに居たせいかな、容姿の優れた女性を見ても特

に何も思わなかったが、最近は綾崎さんという衝撃（インパクト）を受けたせいで徐々にそれが揺らいで来ている気がする。

美人の多いＩＳ学園でそれでは本当に困るのだが。

「はいはい、新聞部です！今日は話題の織斑一夏さんにインタビューに来ました！織斑くんはどこかなー？」

「一夏さん、インタビューだそうですよ？落ち込むのは一旦ここまでにして、共に参りましょう！」

「あ、ああ、そうだな」

そうして何処からともなく出現した新聞部の対応に向かうべく、セシリアに手を貸されて立ち上がる。

……おい、今また自然と女の子に助けられたな？

反省してないのかお前エ！（自分）

「ええ、どうしても見せなきや駄目？」

「当たり前ですわ。作った記事は公表前に確認する、常識でしょう」

インタビュアーの新聞部の黛さんとセシリアが、インタビューについての交渉を行う。

この辺りのスムーズさはやはり国家代表候補生たる所以なのだろうか？

以前は『代表候補生？なにそれすごいのか？』だった俺だが、勉強をするにつれて段々とその辺りも理解してきていた。

まだ高校生にもならないうちからメディアや国と関わってきた彼女達は間違いないく、凄腕人物だと、改めてセシリアを見直したものだ。

俺だったら絶対出来ないし、絶対どつかで騙されてる。

自分で言いたくもないが、そんなに賢くないから。

……あれ？もしかしなくてもセシリアって普通にカッコ良くないか？

いや、だがそんなことを言えば箒だってそうだ。

姉が天災と呼ばれるようなアレで、家族から引き離されても自分を曲げることなく努力し続けて、剣道では全国大会で堂々の優勝。

その上半ば無理矢理にIS学園に入学させられ、ISの判定がCにも関わらず、接近戦では学年で5本の指に入るなんて先生達が話しているのを聞いた。

これには俺もセシリアも納得している。

加えて未だに朝の鍛錬を欠かすことなく続けており、最近綾崎さんに家事まで教わっているらしい。

しかも自分のことだけでなく、放課後は今でも俺のために訓練に付き合ってくれて

いるのだ。

これでカッコよくなないと言ったら嘘だろう。

……もしかして俺の周りの女子、みんなカッコいい？

カッコ良くないの、俺だけ？

むしろ俺、結構情けなくないか？

それどころか格好付けられたのってセシリアとの決闘の時だけだし、そもそもそれだつて綾崎さんのお膳立てがあつたからで……

「くーん」ドサリ

「お、織斑くん!？」

「夏さん! どうなさいましたの!?! しつかりして下さい!」

大丈夫だセシリア、大丈夫。

ちよつと直面したくない事実にぶち当たってしまっただけで、

事故みたいなサムシング。

もうよく分かんない。

よくわかんないけど。

でも俺、約束するから。

これから絶対カッコいい男になるつて。

口だけじゃない、本物の男になるって、約束するからさ。
だからさ、セシリア達もさ……

「止まるんじやねえぞ……」

「い、一夏さああああん!!」

その日、食堂中に悲痛な叫び声が響いた。

直後にやってきた筈によつて叩き起こされ、セシリアによつて真面目にインタビューを受けさせられる羽目になった。

しかもクラスメイト達にめちやくちや弄られた。

意外とみんな容赦ないな？俺の心はポロポロだよ!!

くそう、誰かに甘えたい……!! (鳥頭

18 鈴ちゃんの勘違い！1つ目☆

side 鈴音

私、凰鈴音と言えば現在の中国 I S 界限において将来を期待される有望な代表候補生である。

恐らく中国の I S ファンの中では知らないものはいないだろう。

ちなみに実際にその影響力は凄まじい。

具体的には想い人が I S 適性があると判明するや否や、事前に断って既に他の人間が当てられていたはずの I S 学園入学の権利を、直前になって奪い取るなどという暴挙を行なつてもお咎めが無いほどにだ。

もちろん、この辺りには私が世界唯一の男性操縦者が非常に近しい関係であり、あわよくば私と彼が、その、けけけ結婚？して？中国側に引き込んでくれるんじゃないかという打算もあるのだろう。

それでもそこにはたった一年半でここまで上り詰めた自分に対する評価も確かにあり、最新の専用機を与えられただけでなく、援助だって他の候補生の比じゃないレベルで出ている。

そんなこともあって、私は今の自分が間違いない彼の隣に立つに相応しい人間になれていると自負していた。

……ただ、もちろんそんな私のことをよく思わない人間だっている。

例えば私が無理矢理奪った入学の権利、この辺りの処理を行っていた事務の人間にとつては傍迷惑もいところだろう。

むしろ余計な仕事が増えて恨んでいたって不思議ではない。

そのせいなのか何なのか、私の手元にある指示書は非常に雑なことになっていた。

【事務行け】

「分かるかあああ!!!」

酷い、酷すぎるにも程がある。

というか純度100%の嫌がらせである。

私だつて自分の行ったことがただのワガママであり、多くの人に迷惑をかけてしまったことは分かっている。

色々な書類を準備して手渡してくれたあの女性が目の下にクマを作つて恨めしそうに私を見ていたのも、目を逸らしていたけど気付いてはいた。

だが！だからと言って！大袈裟に作られた指示書の内容が4文字って！もう少し何かあるだろう！

例えば「織斑一夏に近づけ」とか！

「織斑一夏と仲良くしろ」とか！

「織斑一夏と結婚しろ」とか！

一応これ任務よね!?

夜の8時という絶妙に嫌な時間にIS学園に到着するよう仕組まれた飛行機然り、出国を直前まで知らされなかったこと然り、付き人やガイドすら検討されなかった件然り、こんなことなら素直に最初にIS学園入学を提示された時に従っておけばよかったと心から思う。

何で意地張って1回目断っちゃったかな……

「ま、沈んでても仕方ないか」

校門を眠そうな警備員さんに通してもらい、当てもなく校内を彷徨い歩く。

『事務室はどこですか?』『あの辺』

という凄く面倒そうに対応してくれた警備員の彼女については後で絶対に学校側に報告してやることとして、とりあえずは教師か生徒を見つけて教えてもらわねばならない。

しかし、時間帯故にか門の周辺から玄関にかけて全く人気を感じない。

人の居ない夜の学校というのは灯りがついていても不気味なものであり、若干キヨロキヨロしながらも廊下を歩いていく。

暫く途方に暮れて歩いていると、前方から2人の女子生徒が歩いてくることに気がついた。

2人とも小さなダンボール箱を抱えており、荷物運びの最中なのだろう。

リボンの色からしてどうやら自分と同じ1年生らしく、不幸中の幸いとはこのことか。

遠目から見ても2人が話しかけやすそうな人達であることも分かり、私は久しぶりに天に感謝した。

捨てるものもあれば拾うものもいるのだと、彼女達に小走りで近付いていく。

(……それにしても、2人とも妙に美人過ぎない?)

そんな彼女達に近付くにつれて、まず目に留まったのは2人の容姿だった。

どちらも黒髪黒眼の純日本人らしい容姿をしているのだが、その整い具合が半端ではない。

黒髪黒眼の美人と言えば想い人の姉が思い浮かぶが、この2人もそれに負けず劣らずというレベルだ。

もつと言えば片側のポニーテールの少女が纏っている剣のような雰囲気はその女性によく似ている。

だが一方で、もう片方の女性はそれとは対照的に非常に優しげな雰囲気纏っていた。

彼女は自分と同じ年齢だと思えないほどに落ち着いており、その仕草一つとっても女としての格の違いを見せつけられている様に感じる。

……そして問題なのは、そのスタイルだ！

なんだその胸は！

なんだその身長は！

私をバカにしているのか!!

千冬さん似のポニテの少女は所謂巨乳、というかも爆乳と言ってぶっ叩いてやりた。制服の下からでもこれでもかと自分を主張し、ダンボール箱の上で踏ん返り返っているのだ。あれに比べれば微妙にしか存在しない自分の胸など、最早無いも等しいようなものである。

……いや、だれが小さ過ぎるので無視しても良いだ！数学か!!

一方で隣の優しげな女性は胸自体はそこまで大きくはない（それでも私の相手ではない！怒）。

しかしその代わりに彼女には身長がある。

恐らく165近くはあるだろう。

モデル体型っていうのはこういうことを言うんですか？

そうなんですか？

ほんとのモデル体型を目指すならその胸くらい私に寄越せよ!!

なんで胸も身長もどっちもあるんだ!

ふざけんな!!

容姿という点においては自分だつて整っている方だとは思っている。

身長と胸に関してはどう頑張つてもどうにもなつてくれないが、それでも肌や髪の手入れは怠らず、いつ彼に顔を見せても恥ずかしくないようにはしている。

どうしようもできない部分もあるが、自分なりに出来る努力は続けてきているつもりだ。

……だが! もしもこの学園の女子生徒の平均が彼女達レベルならば、私はこれから一体どうすればいいのか!? IS学園には美人が多いって聞いていたけど、誰もここまでとは思つてなかつたんですけど!?

こんな場所で一夏を勝ち取るとか難易度高過ぎない!?

もう心折れそう!

「む？見ない顔だな、転入生か？」

「どうでしょう、なんらかの事情で遅れて入学してきた方かもしれません。どうやら困っていらつしやるご様子ですし、お手伝いしましょうか」

「ふむ、そうだな。一夏のパーティまではまだ少し時間があるし、問題は無かろう」
私の心折係数がどんどん上昇していく。

え？しかもこの2人、一夏の知り合いなの？

それに呼び方からして結構仲の良いレベルの人間じゃない？

どうせ2人もまた一夏が無意識に落としてしまった女性達の1人なのだろうけれど

……

え、ちよつと待つてよ。

もしかして私、本当にこれからこいつ等と一夏を争うの？

見知らぬ女にも救いの手を差し伸べてくれるような内外両美人共に？

私の幼馴染アドバンテージ息してる？大丈夫？

「ええと、どうかなさいましたか？とても深刻な顔をなさっていますが」

「ええ、大丈夫よ……」

「本当に大丈夫か？顔が真っ青で少し涙目になっているが」

「大丈夫、問題ないわ。少し辛い現実に直面してしまっただけだから……」

優しくされるだけで辛い。

初めての経験よ、人に対して汚い部分を求めるのは。

少しくらい腹黒い所を見せなさいよ、希望を見せなさいよ。

美人は性格がブス、みたいな希望のある話を私に頂戴よ。

「ええとね。実は私、今日遅れて入学してきたんだけど、事務室がどこにあるか分からないのよ。よかつたら教えてくれないかしら？」

「なるほど、事務室ですか。うくん、ここからだと少し遠いですね。意外と分かりにくい場所にありますし……」

「あー別に忙しいならいいのよ!? 他の人に聞けばいいことだしー!」

「いえ、そういう訳には参りません。困っている方を見過ごすことなんてできませんし、なによりそろそろ事務室が閉まってしまいう時間です。……箒さん、私が箒さんの分の荷物も持っていきますので、案内をお願いできないでしょうか？」

「いや、荷物は私が持つて行こう。かあさ、綾崎は彼女を案内してあげて欲しい。こういうことに関しては私よりも適任だと思うからな、私では会話を広げられる自信が無い」

「……分かりました、重い物を押し付けてしまつてごめんなさいね」

「ふふ、私と綾崎の仲だろう、そうよそよそしくするな。それに、これでも鍛えているんだ、適材適所だと思つて行つてくれ」

「ふふ、ありがとうございます」

なによこのイイコ達っ……!!

ちよつと性格良過ぎるんじゃないの!?

普通は一夏を狙ってる女の子達つてもつとギスギスしてるものじゃん!

表ではニコニコしてても裏で唾吐いてるような奴ばつかじゃん!

なんでこんなキラキラ輝いてるの!?

薄暗い所探してるこつちが辛くなるんだけど!?

(はっ…まさか、一夏と触れ合っても一夏に惚れることのない特別種!? いや、でもそんなことありえるの!?!)けどこの2人の信頼関係は友人同士のそれじゃないし、もしかして同性愛者という可能性も? 同性愛者に一夏って効くのかしら? でもそうじゃないと説明がつかないし……)

同じ想い人を取り合っているのに、これほどの信頼関係を保てるはずがない。

ならば2人は実はそういう関係で、私のライバルではないのでは?

そんな僅かな期待によつて私の思考はあらぬ方向へと飛んでいく

そして、そんな私の思考も、次に放たれたポニーテールの少女の言葉によつて、更に銀河の彼方まで吹き飛ばされることとなった。

「それでは任せた。私は一足先にパーティ会場で待っているから、あまり遅れないように来るんだぞ?」母さん」

【母さん】

『母さん』

「母さん」

「母さん」

母さん

かあさん

かあさん?

「……………かつ!? かつ!? か、か、かあつ!?」

あまりの衝撃に「か」しか言うことができなくなってしまった私を置いて、ポニーテールの少女はどんとどんと遠ざかっていく。

何かの間違いではないかと「母さん」と呼ばれた優しげな女性の方を振り向くが、彼女もそう呼ばれるのが当然であるかのように微笑みながらヒラヒラと手を振っていた。

(え!? 親子!? この2人親子なの!? 何歳差の親子なのよ!? というかほんとに親子ならそもそも同じ学年の同じ学校に通ってるって時点で絶対おかしいでしょ!? 事情!? そこには深い事情があるの!? もしかして隠してる感じだったの!?)

もしそうならば、とんでもない事実である。

仮に本当に母親ならば、常識的に考えて恐らく隣にいるこの女性はせいぜい30代前半くらいなのは間違いない。

きつと極端に若く見えるタイプの女性なのだろう。

ポニテの子が時々彼女の名前を呼ぶ時に何故か少し躊躇う姿勢があったのは、親子だということがバレないように、慣れない言葉遣いをしていたから?

……はっ! でもそう考えてみれば、この2人の容姿が揃って美人であることも、友人とは違う雰囲気で仲がいいのも当然ではないか!

この人が同年齢の誰と比べても異様なくらいに包容力を醸し出しているのも、一児の母というならば納得できる!

こんな人の下で育ったのなら、あれくらい良い子になるのも必然だ!

なんということなの、どんだんパズルのピースが埋まっていくじゃない。

恐らく2人はさつき私の前で『母さん』と呼んでしまったことに気付いていないはず、このことはまだ私しか知らない。

私の想像(妄想)だと、ポニテの子は一夏に惚れていて、お母さんの方はそれを応援している立場のはず。そう考えればこの弱みはポニテの子という強力なライバルを引き摺り下ろすのいうってつけだ。

(……でも、そんなことできるはずないじゃない)

そうだ、きつと自分を隠して学園に通っているのにも相応の理由があるはず。

色々と大変なことがあるのは簡単に想像できるが、それでもこの2人は今現在楽しく生活ができているのだ。先ほどのやりとりを見ていれば彼女達がどれほど今の生活を大切に思い、楽しく思っているのかは私でも分かる。2人の境遇を考えれば、その今を破壊することなど到底できやしない。

(それになにより……!)

こんな良い人たちを陥れるなんて、私が許しても一夏が許さない!

私は一夏の横に立つ人間になると決めた、だったら彼に対して後ろめたい思いをするようなことは絶対にできない。

彼に報告して、胸を張れるような生活をしなければならぬのだ！

(だから！)

「大丈夫よ、あなた達2人のことは、私がしっかり守るから」

「……………」

2人の真実をバラすことなんて絶対にしない。

それどころか、見知らぬ私を助けてくれた優しい彼女達を今度は私が助ける番だ。

彼女達の真実が明るみにならないように、微力ではあるが努力をしよう。

私は言葉と共に、彼女達と想い人である一夏に対して誓った。

凰鈴音はこうして盛大な勘違いを抱えたままI S学園での生活を送っていくことになる。

真実を知ることになるのは、まだ遠い先の話……

19 鈴ちゃんの勘違い! 2つ目☆

side 鈴音

「転校生? こんな時期にか?」

「というか遅れて入学してきたって扱いみたい! 隣のクラスの話なんだけど、なんでも中国の代表候補生なんだって! クラス代表じゃないから代表戦には出れないみたいだし、助かったね! 織斑くん!」

「ま、まあ確かにそうだな……」

「とは言うが、例え相手が専用機持ちでなくとも、クラス代表を引き受けるほどの熱意を持った相手に一夏が油断できる要素など微塵も無いがな」

「そうですわね、現状の一夏さんの実力はクラス内だけでも4番以下ですし。相手の力量云々で勝敗を語るには実力が足りませんわ」

「うわあああ! I S に関する2人の評価が厳し過ぎるよ綾崎さああん!!」

「えつと……大丈夫ですよ? 織斑くんもちゃんと成長しています。ただ”ちよつと”2人の成長速度が、織斑くんよりも”かなり”早いというだけで……」

「”かなり”って言っちゃったよ!”ちよつと”はどこに行っただよ! 綾崎さんでも

フオローできないとか辛過ぎるだろ!!」

やんやんやんと騒がしい1組の教室。

けれどなんとも仲の良さそうで、この女性だらけの空間の中でも一夏はしつかりと馴染んでいるようだ。

そして、私こと凰鈴音はそんな様子を教室のドアから何処の家政婦ばりに覗き見していた。

（ぐぬぬ、中に入るタイミングを逃した。ほんとはクラス代表云々の話の所で入ろうと思っただけ……!）

昨晚、綾崎奈桜と名乗った彼女のおかげで何とか事務室が閉まる前に手続きを行うことができた私は、自分と同部屋のティナ・ハミルトンという女生徒が2組のクラス代表だということを知った。

クラス代表とは何かと綾崎に尋ねれば、選ばれた生徒は今度行われる代表戦に出場することとなり、そしてあの一夏が1組のクラス代表であるというではないか。

自分の今の実力を一夏に見せるには最高の機会だ!

そう考えた私は案内をしてくれた綾崎にお礼を述べ、早速同部屋の女生徒にクラス代表を変わつてくれるよう頼み込みに行った。

どうやら彼女も無理矢理クラス代表を押し付けられていたらしく、むしろこちらから

お願いしたいと喜んでいたので、きつと一夏も強力なライバルとして突然現れた自分を注目してくれるに違いない。

そしてそこで一夏をボコボコにすれば、指南役としての地位を手に入れることだって出来る筈だ。

自分でも惚れ惚れする程の完璧な作戦だ、私の未来は明るい。

そう思い、こうして朝からスキップをしながら1組の教室までやってきていたのだ。

「……それなのに、」

「一夏、今日から私との模擬戦の回数を増やすか」

「でしたら私と篝さんの2vs1で行いましょう。多少過酷な訓練になります、本番まで毎日続ければ嫌でも戦闘慣れすると思いますわ」

「名案だな、セシリア。一夏は頭で考えさせるよりも体に叩き込んだ方が覚えが早い、採用だ」

「殺す気か!?! 殺す気なのか!?! 訓練官達がスパルタ過ぎて明日の自分を投げ出したい!」
(……なんか、ちよつと可哀想に思えてきたわね)

ポニーテールの少女は昨日会った綾崎の子供である篠ノ之箒という名前だったか。

どこかで聞いた名前だが、立ち振る舞いからして何らかの武道に精通している人間なのだろう。

金髪の方は多分事前に報告を受けていたイギリスの代表候補生とやらだ。私はよく知らないけど、専用機を持っていることから実力に間違いはないはず。

そんな2人が一夏に対して2vs1でポコポコにするというのだ。

……いや、確かにそんな相手達と2vs1で戦うことに慣れることができれば、訓練機を扱う一般生徒を相手にするくらい造作もなくなるかもしれない。

けどそれまでは普通に地獄だと思うんだけど、その所どうなのよ。

（正直、『一夏の周りの女鑑定士』の私からすれば、ポニテの子と金髪の子は一夏に惚れる節があるのよね。綾崎はやっぱり無さそう。

でも2人とも訓練に関しては関係なく厳しいってのも不思議な話よね。こういうのって大抵、訓練相手としての立場を取り合うようなものだと思うんだけど……）

それだけ1Sに対して2人が真剣に考えているということだろうか？

それとも男性操縦者として狙われる可能性の高い一夏の身を案じて？

そんな風に彼女達の行動の理由を考察している私だったが、やはり聞いた方が早いというのが結論だった。

昨日話した感じではポニテの子はいい子だったし、一夏が仲良くしているのなら金髪

の子も性格は悪くないはずだ。いざとなれば大人な綾崎がいるのだし、自分があの輪に入っても特に問題はないだろう。

というか昨日会ったばかりなのに、綾崎が居るといっただけで何の根拠もない安心感があるのも不思議な話だ。

それも年の功というものなのだろうか。

(……よし、それじゃあ私も)

いざあ!!

そう扉私がかけた右手に力を入れた瞬間、耳に入り込んできたある一言が原因で、私の思考は世界の彼方まで吹き飛んでいつてしまった。

「と、こういった感じで一夏さんの訓練を行いたいと思うのですが、何かアドバイスを頂けないでしょうか? お母様?」

【お母様】

『お母様』

「お母様」

「お母様」

お母様

おかあさま

おかあ、さま？

「……………おっ!?!おおっ!?!お、お、おっ!?!」

あまりの衝撃に「お」しか言うことができなくなってしまった私を置いて、金髪の少女は綾崎に話を向ける。

何かの間違いではないかと「お母様」と呼ばれた優しげな女性の方を見るが、彼女もそう呼ばれるのが当然であるかのように微笑みながら一夏のフォローをしていた。

そう、つまり、あの場所にいる全員が金髪の少女のその発言に少しの疑問も持っていないのである。

(え!?親子!?この2人も親子なの!?だから何歳差の親子なのよ!?いやそれはもういいけど、綾崎の娘が金髪碧眼つて絶対おかしいでしょ!?事情!?そこにはまた海より深く山より高い事情があるの!?もしかしてまだ何か隠してる感じだったの!?波乱万丈過ぎるでしょ綾崎の人生!?)

しかし、もしそうだとすればこれはとんでもない事実である。

二女の母、そして父親は違う2人!?

この事実には彼女達は気付いているのだろうか……いやもしそうなら普通気が付くか。何を言ってるんだ私は。

いやいやそうではなくて、落ち着け私。

物事を表面だけで捉えてはならない、私はそれを昨日知ったはずだ。

考えてみれば直ぐに分かる。

綾崎は複数人と関係を持つような軽薄な女性ではない。

彼女は間違いなく生涯でたった1人の男性だけを愛し、最愛の夫を亡くした後も生涯その思いを抱き続けたまま独身を貫くような、一途だけれど切ない、存在だけで悲愛小説1本が書けるような純愛な女性だ。

きつと金髪の子が綾崎のことを「お母様」と呼ぶのはカモフラージュ。

恐らく金髪の子は綾崎とポニテの子の本当の関係を知っていて、ポニテの子が偶に

「母さん」と呼んでしまっても問題が無いように『綾崎を母親の様に慕っている自分』を演じてそのミスをかバーしているに違いない！

だってそうじゃないと綾崎が夫以外の男に望まぬ子を孕まされてゝなんて嫌な話しか考え付かないんだもの！悲愛小説が書けるって言ったけど、そんな展開の話は誰も望んでいないわよ！

これはこういう話でいいの！

金髪の子の父親が昔に手を出したのが当時従者だった綾崎で、なんて話はここには存在しないのよ！

私の中ではその話はこれで終わりなの！終わり！閉廷！

……はっ、でも待てよ？

もし金髪の子が本当に綾崎のそういう子供だったとすれば、全てが納得出来てしまうのではないか？

例えば時々綾崎がポニテの子だけではなく、金髪の子に対しても慈愛と悲しみが共存したかのような笑みを浮かべることも、そういう事情があるならば当然の話だ。（女装している自分に悲しんでいるだけ）

綾崎に夫の影が見えない事もそうだ。（無いのだから見える訳がない）

この学校にいる以上は寮生活をしなければならず、夫とは離れてしまう。

そしてそれは家庭としては問題のある状態で、綾崎ほどの女がそれを容認するとは思えない。

故に選択肢としては綾崎がこの学校に通わなければならぬ理由が相当に重いか、夫とは既に別れている二択が残る。(もつとある)

だが、もし理由が前者だとすれば綾崎のあのむしろ開き直った様な明るさはおかしい。(女装に対する開き直り)

つまり答えは後者だ。(あまりにも強引)

綾崎は望まぬ子を孕まされた事で夫からとうの昔に見放されてしまい、それでも今まで必死に女手一つで娘を育ててきたのだろう。

それに、あの綾崎のことだ。

きつと望んで産んだ子でなくとも、そのせいで箒の方の父親と上手くいかなかったとしても、両方を関係なく愛することができらるだろう。

罪の無い子供に八つ当たりなど、決してしない筈だ。

……それでも、それでもその心の内に何の迷いや後悔も背負っていないなんて事は有り得ない。

ましてや彼女は今、なんの因果が娘達と同じ学校に通っているのだ。

そんな綾崎が何を思い、どう感じているかなんて所詮は第三者である私なんかには分

かるわけもない。

ただ分かるのは、綾崎はこうして生きていくだけでも心を削っているということだけ。け。

……なんということなの、どんだんパズルのピースが私の望まない方向へと埋まっていくじゃない。(埋まってない)

ここまで来れば金髪の子と箒が姉妹なのは確実。(そんなことはない)

金髪の子はイギリスの父方の方で育ち、本妻に冷遇されながらも弛まぬ努力をして代表候補生になった。そして今、ようやくこうして、IS学園という場所ではあるけれど、本当の母親である綾崎に会うことができたのよ。

金髪の子が綾崎にあれだけ懐いていて、声をかけて貰うだけで過剰に嬉しそうなのは、それが理由に違うわ。

そして日本で過ごしていた箒と離れて過ごしていた金髪の子、2人の確執を埋める為にも私がある今日この日まで尽力していたに違いない。箒もまたそんな綾崎の姿と、金髪の子の境遇を理解して、ああして仲良くしているに違いないわ。

うう、綾崎。

いや、綾崎さん。

貴女は本当に大変な人生を歩んできたのね。

本当にそれだけで大ヒット小説が書けてしまいそう。

なんとということだ、なんとということだ……金髪の子の一言からこんなところまで繋がってきてしまうなんて。

自分の天才的な頭脳が恐ろしい。

そして自分がそんな状況なのに、昨日の私みたいな困っている人間を放っておけないなんて。綾崎の聖人具合は本当に凄い。

私の想像（妄想）だと、綾崎の心の現状については私以外に誰も気付いていないと思う。

金髪の子と箒、そして綾崎の関係を知っている人も少ない筈だ。

きつと他の人には”母親のように慕っている”とでも言っているのだろう。

勿論、その違和感に気付かれないように綾崎自身も日々気を使っている筈だ。

……だが、そんなことを続けていれば彼女はきつと潰れてしまう。

（けど待って、私は本当にここから先に踏み込むべきなの？ 見ず知らずの私がそこまで知っていると知ったら、綾崎は余計に気を負うんじゃないかしら）

そもそも、真実を知ってしまったからとは言え、彼女のためにそこまでする義理などどこにもない。

昨日の礼なら彼女達の関係を黙っているということだけでチャラなはずだ。

余計な波風を立てないためにも放っておくのが最も無難な選択だろう。

(……でも、そんなことできるはずないじゃない！)

そうだ、一言二言話したただけだが、それでも私は彼女の心根を知ってしまった。どんな環境で育てばあんなにも慈愛に満ちた女性が生まれるのか、私には想像もつかない。けれど確かに一つ確信できることは、あんな素敵な女性は世界に2人と居ないということだ。

女としてこうあるべきだという目標にするべきレベルの女性である。

どれだけの苦難を前にしても、最後まで愛を持ち続けるその強さ。

これぞ本当の女の強さというものだ、私はそれに憧れる。

そんな人を見捨てる？

こんなにも素晴らしい女性を？

バカを言うな。

代表候補生になるまでに色々と過酷なことはあつたが、それでもそこまで落ちたつもりはない。

(それになにより！)

こんな良い人を見捨てるなんて、私が許しても一夏が許さない！

私は一夏の横に立つ人間になると決めた、だったら彼に対して後ろめたい思いをする

ような真似は絶対にできない。

彼に報告して、胸を張れるような生活をしなければならぬのだ!

(だから!)

「……大丈夫よ。あなたのごことは、私がしっかり守るから」

彼女の悲しい笑顔が忘れられない。

何かを隠して、飲み込んで、それでも笑おうとする仕草が頭から離れない。

彼女はきつと、私の想い人である一夏のフォローもしてくれている。

そうでなければ一夏の周りの女達がギスギスしていない筈がない。

一夏がこの女だらけの空間で日々過酷な訓練を受けながらも頑張っているのは、きつ

と彼女のメンタルカバーがあるからだ。

いつか一夏の隣に立つ女として、私はその恩を返そう。

彼女が自責の念に押し潰されてしまうことのないように、微力ではあるが努力をしよう。

私は言葉と共に、彼女と想い人である一夏に対して誓った。

風鈴音はこうして盛大な勘違いと、あまりに失礼な思い込みを抱えたままIS学園での生活を送っていくことになる。

真実を知ることになるのは、まだ遠い先の話……

ちなみに直後に背後から出席簿で叩かれて自分の存在が明るみになったことは別の話である

20 鈴ちゃんの勘違い! 3つ目☆

side 奈桜

「一夏のバカあ!!」

そう言って寮監室から走り出る鈴ちゃん、一方で頬を叩かれて呆然としている一夏くん。そんな様子を遠巻きに見守っていた僕と箒ちゃんと千冬さんの思いは一致していた。

((一夏(くん) エ……………))

中国代表候補生 凰鈴音

一年半という短期間で専用機を持つまでに至ったというその才女は、なんと一夏くんの第二の幼馴染だったという。

直接話した感じでは真っ直ぐという言葉が色んな意味で似合うような子で、僕も非常に好感が持てた。そんな彼女とは今日の朝、1組の扉の前で千冬さんに後頭部を叩かれていたのを発見して再会した。

その後も昼食時にいつものメンバーを含めて会話することになり、先日にも事務室まで案内した時のやり取りも含めて、改めて彼女という人間の良さを掴むことが出来た。しかし、そんなこんなで終始いいムードで続いた会話だったのだが、その時に漏れてしまった『一夏ちゃんと箒ちゃんが同部屋』という情報によつて事態は一変することとなる。

「わ、私だつて幼馴染なんだから一緒の部屋でもいいじゃない！代わつてよ！」

彼女も例に漏れず一夏さんに惚れてしまった女の子だったらしい。

当然、同じ気持ちの箒ちゃんの返事はNO。

それでも納得できない彼女に寮監に相談してみることを提案してその場を収めたが、もちろんこれだけで完全に収束するわけではない。

放課後、彼女は早速と寮監室にやつて来たのだが……

「そんな我儘が認められるか。一夏の1人部屋も用意することが決まっているのだ、これ以上私の仕事を増やすな」

ズバンつと言い放たれた千冬さんの一言によつて鈴ちゃんは無残に切り捨てられた。2人は顔見知りだったらしく、鈴ちゃんは千冬さんのことが苦手なのだと言つていた。

多分この様子では寮監室に入つて顔を見た瞬間から絶望していたに違いない。

そして、そんな地の底まで落ちていた鈴ちゃんが起死回生のために切り出したとっておきの切り札。

それが彼女が昔一夏くんと交わした約束であった。

『私が毎日酢豚つくってあげる!』

とても可愛らしい約束である。

”付き合ってほしい”

”結婚してほしい”

そんなことを素直に言うことが出来ない少女が、少ない恋愛の知識を必死にフル活用して、自分でも作ることができる料理に当てはめた渾身の一言だ。

……恐らく、今以上に鈍感だったであろう当時の一夏くんに対して、その本心が伝わっている可能性は限りなくゼロに近いような気もするが、鈴ちゃんからしてみれば返事が貰えた瞬間に狂喜乱舞したはずの出来事だ。

だからほら、その後の数年間で一夏くんが約束の本当の意味について気付いてくれている可能性もあるかもしれない。もしかして「自分の言葉には責任を持つ」くらい男前のことを言ってくれるかもしれない。

そんな僅かな可能性を僕や千冬さんは願っていたのだが……

「ああ！毎日酢豚を”奢って”くれるって約束だろ?」

残念無念。

やっぱり一夏くんは一夏くんだったよ。

これには先程まで頭に血が上っていた箒ちゃんやセシリアさんも冷ややかな視線を送っていた。

……まあ、箒ちゃんに関しては特に同じ幼馴染という立場上、自分があの場に立っていた可能性もあったもんね。

同情くらいいしちやうし、一夏くんをジトツと睨めつけたくもなるよね。

だって関係ない僕ですら鈴ちゃんのことを思うと涙が出そうだもん。

パァン！

「一夏のバカあ!!」

織斑くんの頬に平手打ちを叩き込み、鈴ちゃんは走って部屋を出ていく。涙を流し顔を大きく歪めながらも、そんな自分を隠すように振り向きもせず走り去った。

一方で頬に真つ赤な紅葉を咲かせた織斑くんは、突然の出来事に何が起こったのかわからないといった顔でただただ呆然としていた。

女性陣からの視線は冷たく、鋭い。

……はい、ここからは僕の時間です。

任せてください、こういう時にしか活躍できませんから。

必ずや鈴ちゃんの笑顔を取り戻して見せますとも。

「ええと……私、鈴音さんの様子見てきますね? 織斑くん、今日の夕飯の準備、任せてしまつても大丈夫ですか?」

「あ、ああ……悪い綾崎さん……」

「いえ。それと箒さん、もし箒さんが鈴音さんと同じ立場なら、この後どこに向かいます?」

「へ? あ、ああ、そうだな……屋上か自室か? いや、会つて数日と経たない人間と同室なら自室はあり得ないな」

「なるほど、参考になります。それでは千冬さん、行つてきますね」

「毎度のことだが愚弟が迷惑をかけて悪いな」

「いえ、好きでやっていることですから」

そう言つて僕は手近にあつたタオルを手に取り、鈴ちゃんを追つて廊下へと出る。織斑くんはそんな僕を見て、なんとも言えない顔をしながら台所へと向かった。

別に迷惑とか思つてないから気にしなくてもいいのよ?

本当に好きでやっていることですし。

「ここから屋上なら直ぐだけど、あんまり直ぐに行つても良くないよね」

例えそれが気付きにくいものだと分かっていたとしても、想い人と交わした大切な約

束を、再会した喜びも束の間にその当人によって壊されてしまったのだ。きっと一夏くんと同じ学校に通えることを楽しみにしていた彼女にとっては味わう絶望も尚更だろう。

少しくらいは人の目を気にせずに泣く時間も必要だ。

僕が向かうのはある程度泣いたその後でいい。

そうして僕は一夏くんに『鈴音さんと一緒に食べるので、私の分の夕食はいりませんよ』とメールをしてから屋上へと踏み込む。

もしこれが男の身なら傷心の女の子につけ込んで下心云々……と色々言われることはあるだろうけど、今は女の身だ。純粋に彼女の心配ができるのだから、そういう意味では女装も悪くない。

屋上ではやはりと言うべきか、ツイントールの少女がベンチの上で蹲りながら泣いていた。

その小さな身体を震わせて、声を殺しながら嗚咽を漏らす。

素直に声を上げて泣かないのも、彼女の強がりなのだろうか。

僕は驚かせないためにわざと扉の音と足音を隠さないようにして、びくりと一瞬だけ跳ね上がった彼女に近付いた。

「鈴音さん」

僕の一言に反応し、鈴ちゃんは涙でぐちゃぐちゃになった顔をゆつくりとこちらへ向ける。そんな彼女を見て、僕は持つてきたふかふかのタオルを手にベンチの前にしゃがみ込んだ。

鈴ちゃんを見上げるような形で。

「あ、あやしやき……う？な、なんでここに……」

「なんでと言われましても、『友人が心配だったから』以上の理由を私は持つていませんよ？」

優しく微笑みながら彼女の涙を拭くと、僕のかけた言葉に彼女は一層悲しそうな顔を深めて涙を流し始める。

泣かせたかったわけじゃないんだけどなあ

「よければお話、聞かせていただけませんか？」

一通り涙にまみれた彼女の顔を綺麗にした後、彼女にタオルを手渡して僕は尋ねた。何が起きて何を思ったのかは大体想像できるが、こういう時はやはり吐き出すのが一番だ。

心の中に溜め込み腐らせてしまうのが一番マズイ。

僕は鈴ちゃんの顔を下から覗き込みながら話を待つ。

「……私ね、一夏のことが好きなの。ずーっと前から」

「……そうですか」

「うん、大好きなの。小学校5年生くらいの時にね、まだ日本に来たばかりで日本語が上手く喋れない私を助けてくれた一夏を見て、それ以来ずっとずっと好き。あいつのことを考えない日なんて1日もないくらいに好き」

「代表候補生になったのも、織斑くんの影響ですか？」

「……うん。私ね、両親が離婚することになって、そのせいで中国に帰ることになったんだ。大好きだったお父さんも居なくなつて、一夏とも会えなくなつて、ほんとに全部無くなつちやつたつて思つたの。でもね、偶然受けた適性検査でIS適正值がAだつてことが分かつてね、『これだ』つて思つたんだ」

「鈴音さんは何と思つたんですか？」

「私が頑張れば一夏にも自分の今を伝えることができるつて思つた。私には一夏のこととは分からないけど、せめて一夏には私のことを知つていて欲しかった。……だから私は必死に頑張つたのよ？」

それこそ、寝食以外の時間を全部費やして、先輩達の教えを請うためにたくさん頭を下げて、生意気だつて嫌がらせをしてくる奴等にも耐えて、模擬戦で見返してやつた。IS学園への入学だつて、無駄な時間になると思つて一度は断つたくらいなんだから「ふふ、鈴音さんは凄いですね。いくら好きな人のためとは言え、なかなかできることで

はありません」

「……でもね、正直、恐怖とか強迫観念めいたものもあつたのよ。あの日に一夏に助けられて以来、私はどこか一夏のことを追いかけてるイメージがあつたから。」

『頑張らないと忘れられる』、『頑張らないと一夏の横を他の女に取られる』、『こうしている間にも一夏は前を歩いてる』なんて考えがずっと頭の中にあつて、今思えば努力を続けたのもそうしていると心が楽だつたからつて理由の方が強かつたかもしれない。

挙げ句の果てに最近では自分の選択に『一夏に失望されないように』なんて、一夏に責任を押し付けるような理由付けをしてる始末なのよ。

今日の約束だつて、あの程度のことので一夏が意識するはずないなんてことは、幼馴染である自分が一番よく知っていたはず。それなのに私は自分の都合のいいように、それからずっと目を逸らし続けてただけ。一夏は何も悪くない」

「鈴音さん……」

「私はね綾崎、人様に胸を張れるような人間じゃないのよ。一夏の隣に相応しい人間に、まだなれてない。そんなこと理解してたはずなのに、それなのに、なんで私ここに来ちゃつたかなあ」

僕の手渡したタオルで顔を隠しながら、彼女は再び嗚咽を零し始める。

『何が起きて何を思ったのかは大体想像できる』なんて偉そうなことをさつきは言った

けれど、そんな自分を殴ってやりたい。

僕は彼女のことを何も分かつてはいなかった。

きつと彼女は、一夏くと別れたその日から、ずっと自分の心を絞め続けてきたのだろう。離婚した両親、引き離された友人達、もう一度会えるかどうか分からない想い人。

中学生の真っ只中という時期に、荒れ狂う心の底を誰にも打ち明けることができず、彼女はすべての感情を自己の中で処理し続けた。

その結果がこれだ。

理性が及ばないほどに強迫観念と不安が肥大化し続け、冷静な思考すらも蝕まれ、何かに集中していないと、何かで言い訳を作っておかないと、正常では居られない精神性。両親の離婚と同時に国を隔てた突然の別れをするなど、この年頃の子供には過酷過ぎたのだ。

これでは正直、毎晩しつかりと眠れているかも怪しい。

クマは見当たらないが、睡眠薬を使用している可能性だつてあるだろう。

……いや、鈴ちゃんの性格を考えると、そうしている可能性は高い。

「ねえ、鈴音さん。織斑くんの隣に立つ人は、一体どんな人が相応しいと思いますか？」
「え？そ、そうね……強くて、一夏のことを分かつて、一夏のことを支えられる人間か

しら。……まだ、私はそんな人になれてないけど」

「本当にそうでしょうか？」

「へ？」

顔を上げる鈴ちゃん、そんな彼女の頭を撫でながら僕は言葉を続ける。

それは「勘違い」だと。

「極論を言ってしまったえば、私はどんな人間であろうと織斑くんの隣に立つ可能性はあつて、織斑くんが最も求める人間になれる可能性があると思うんです。そこに女性としての条件や資格なんて存在しない、大切なのは彼の近くにいることだけ」

「……どういう、ことよ」

「織斑くんの隣で共に戦い続ける勇敢な女性、織斑くんが守りたいと思うようなか弱い女性、様々な勢力から狙われる織斑くんを守り続ける強い女性。もつと言えば、織斑くんを執拗に狙って暗殺に来る危険な女性にだって可能性はあると思うんです」

「つまり、私の努力は無駄だったって言いたいのか？」

「本当にそう思いますか？」

「……思いたくない。でも、だったらあんたはさつきから何が言いたいのよ！」

喜怒哀楽、様々な表情を見せる彼女。

それはきつと、彼女の強い長所だ。

誰だつてきつと、心を隠して何も話してくれない人より、隠すことなく表に出してくれる人と居る方が気が楽なのだから。

「織斑くんの隣に居ることのできる今、鈴音さんにもチャンスは有り続けるということですよ」

「……!!」

「織斑くんがIS学園に入学できて、鈴音さんにも入学の話が来た。これは単純な話、鈴音さんにとつて正に奇跡的な偶然でもありますが、同時に鈴音さんが自らの手で掴み取った成果でもあるんです。鈴音さんが今日まで努力して来なければ、その話は鈴音さんの元には来なかったのですから。……鈴音さんは、それを無駄にしたいのですか？」

「でも、それは……」

「鈴音さんは今までずっと頑張ってきました。駆け引きやコネ作り、そして強いIS操縦士になるための努力を。そしてようやくチャンスは巡ってきました、貴方の努力が報われたのです。ですから、これからはそのチャンスを掴み取るために、また違った努力をしていきましょう」

「ど、どんな努力をすればいいの?」

「ふふ、それはですね……織斑くんが惚れてしまうような、ステキな女性になるための努力ですよ」

「っ!!一夏が惚れてくれるような、素敵な女性に、私が……?」

「そうです、他でもない鈴音さんがです。鈴音さんが魅力的な女性になるんです。もちろん、私も手伝います」

呆然として居る彼女にニツと笑いかける。

一夏くんも羨ましいことだ、こんなにも自分のことを思ってくれる素敵な女性がいるのだから。

それに気付かないだなんて、罰当たりもいいところだと思ふ。

一瞬嬉しそうな顔を浮かべようとする鈴ちゃん。

けれど直後、鈴ちゃんは一瞬何かを思い出したようにハツとし、暗い顔をして俯きながらこんなことを言い始めた。

「……でも、いいの?だって綾崎は箒のことを応援したいんじゃないの?それに、そんなことになったら綾崎にだって迷惑をかけて」

「バカを言わないでください」

「あう」

ぐつと顔を近づけてコツンと彼女の額を小突く。

こんな時にまで私の心配をするなんて、良い子過ぎるにもほどがある。

「まず誤解を解いておきますが、私は織斑くんのことに関しては誰が勝ってもいいと

思っています。誰かにだけ偏るつもりもありません、勿論助けを請われれば協力はします
すが」

「だから！それじゃああなたに負担が……！」

「負担だなんて思いませんよ」

「っ!？」

なぜか驚愕したような表情をする鈴ちゃん。

しかし、これが僕の偽らざる本音だ。

「鈴音さんは知っていますか？誰かに頼られるっていうのは、存外とっても心が温まる
ことなんですよ？」

頼りたい、頼って欲しい、それが僕の根本だ。

だから、負担なんかじゃない、なるはずがない。

人に頼られなければ、僕は僕でいられないのだから。

「う、ううう……あやさきのお人好しいい!!」

「ひゃあっ!?!ど、どんな泣き方をするんですか鈴音さんっ!?!……もう」

抱きついてきた鈴ちゃんを受け止める。

本当にこの子は泣いてばかりだ。

渡したタオルだってもう十分に涙を拭くこともできないくらいに。

……でもこれじゃあ、もう自分の本当の性別を隠すつもりで生きないとダメだろうなあ。

ここに来てから偽りの性別で居た方が都合のいいことが多過ぎて、なんとも微妙な気持ちになるばかりだ。少なくとも、3年間の間は性別を隠し続けることがもう確定したように思う。

「……私、決めた! 次のクラス代表戦で一夏に勝って、一夏の訓練に入れてもらう! これでも私、近接戦闘も遠距離戦闘も両方こなせる天才なんだから! それに、短時間で成長したいなら私以上に適任はいないでしょう?」

立ち直った鈴ちゃんは素敵な笑顔でそう言い放った。決意を固めた彼女の姿は、女性の強さというものをこれでもかと放ち続ける。

眩しいなあ……こんな素敵な子にも思いを寄せられているなんて一夏くん、多分世界中の男性が嫉妬すると思うの。

ぎゅるるるる

「あう」

……まあ、どんな素敵な女性でもお腹は減るんだけれど。

こんな所も鈴ちゃんらしいと言えづらい。

けれど、ここから先の事ももう対応済みだ。

「さて、お夕飯を食べに行きましようか」

「え？で、でも確か食堂つてもう……」

「問題ありません、私が作りますから♪」

「……え」

さて、ここから先も僕の時間です。

「ありがとうございます筈さん、お手数をかけて申し訳ありません」

「なに、部屋を貸す程度のこと気にするな。食材だって私よりお前に使われた方が嬉しいだろう」

「またそんなこと言って……筈さんだって最近は腕を上げてきているでしょうに」

部屋と食材を貸して貰えないか筈ちゃんにメールすると、彼女も夕飯を食べている最中だというのに直ぐに駆けつけてくれた。

一夏くんもあの状態で料理を作ったというのだから流石の一言である。

「ところで、その調子ではあいつは立ち直ったのだな。流石は母さんだ」

「ふふ、彼女も筈さんやセシリアさんに負けないくらい強い女性でしたから。でも、織斑くんには『反省してください』としつかり伝えておいて下さいね？確かに分かり難い約

束でしたが、鈍感さも度が過ぎれば罪ですよ、と」

「ああ、一言一句違わず伝えよう。私達が言っても『約束は覚えていた』の一点張りだったからな、綾崎の言葉なら考えを改めるだろう。……それでは、また後でな」

一夏くんの残念な対応を伝えて箒ちゃんは去っていく。

それと同時に箒ちゃんの部屋のお風呂を借りていた鈴ちゃんが姿を現した。彼女もこのことを見越して場を去ったのだろう、氣遣いのできる子だ。

「綾崎……? 誰と話してたの?」

「この部屋を貸してくれた箒さんですよ。自由に使ってもいいとのことだったので、お礼を伝えていたんです」

「そっか……私も後でお礼をしておかないとね」

「きつとお2人なら直ぐに仲良くなれますよ。……さて、サクツと作ってしまいますか。鈴音さんはもう少し髪を拭いて来た方がいいですよ、せつかく綺麗なんですから勿体ないです」

「そ、そう? あ、ありがとね、綾崎……」

鈴ちゃんが箒ちゃんやセシリアさんと仲良くなってくれるなら、これ以上に嬉しいことはない。

きつと2人にまた違った価値観や見方を与えてくれるだろう。

見知らぬ女性だらけの空間で過ごす一夏くんにも、かつての友人として安心感を与えてくれるはずだ。

千冬さんは……また頭痛の種が増えそうだし、それとなくフォローをしておこう。

たまには存分に酔わせて膝枕のまま寝かせる事も必要かもしれない。

千冬さんが後から羞恥に悶えるから最終手段になっているけれど。

「……？」

そんなことを考えて鈴ちゃんの姿を見送ると、彼女は突然振り向いてこちらへ笑いかけた。

そんな彼女に僕は戸惑うが、同様に笑みを返す。

「……ねえ、綾崎？」

「はい、なんですか鈴音さん？」

「私のことさ、鈴って呼んでよ。いつまでも鈴音さんなんて呼ばれてたらむず痒いわ」

「……鈴さん、でどうでしょう？」

「うーん、まいつか。それとさそれとさ、私も綾崎のこと呼びたい呼び方があるんだけど、いいかな？」

ニヒヒと笑う鈴ちゃん、なんだか嫌な予感がする。

断る理由も無いから受け入れるけれど、その悪戯な笑みは少々怖い。

「いいですけど、どんな呼び方なんですか?」

とりあえずそう返すと、鈴ちゃんは言質取ってやったりとばかりに口角を上げてこう言った。

「それじゃあこれからよろしくね!”ママ?”」

あつ、そっかあ……

「え、ええ……よろしくお願いしますね、鈴さん……」

「えへへ!」

もう、好きに呼んで下さい……(諦め)

ママだろうと母さんだろうと何でもいいです。

すっかり慣れ切ってしまった自分に悲しさを覚えつつ、僕はやはり全部を受け入れてしまおうと諦めた。

21 一夏くんは強くなりたい

side 一夏

「つせやああ!!」

「よっ……あ、織斑くんそこ危ないです」

「へ?ぬあつ!こ、転けたアアアア!?」

ズガシャアンツ!!

「ふむ、流石に近接戦闘で母さんと戦うにはまだ早かったか」

「仕方ありませんわ、理由は分かりませんが受けに関するお母様の技術は各国代表クラス。今の一夏さんでは何時間やっても傷一つ付けられませんわ」

「なんだか聞きたくない2人の会話が聞こえてきたけれど、俺、織斑一夏は絶賛ISに乗りながらもすつ転んで地面に這いつくばっている最中なので何の否定もできない。」

綾崎さんやめて。

手を差し伸べないで。

心が折れそうになる。

クラス代表戦2日前。

明日のアーリーナの予約は恐らく取れないと見越して今日が最後のつもりで望んだ訓練には、珍しくあの綾崎さんが参加していた。

参加していた、というよりはこれまでの努力と成長度を確かめるためにこちらからお願したという方が正しい。

綾崎さんは入学してから訓練らしい訓練は必要最低限しか行なっていないため、セシリアとの決闘から実力がほぼ変わっていないはずだった。

それ故に自分があの時と比べてどれくらい彼女と戦えるようになったのかを確かめようと思ったのだが……

「結果はこのザマだ」

セシリアや箒が言うには、そもそもその実力差が違い過ぎるので、1000:iが100:2になったところで違いは実感できないということらしい。

そんなの俺聞いてないんだけど……乙女コーポレーションとかいう大企業から専用機貰ってるだけはあるってことか？それでも代表候補生のセシリアから長期戦で勝ちをもち取るのはよく分からない。

……そういうえば前に、綾崎さんの入学試験は千冬姉の全力攻撃を15秒耐え切ることだったって話を聞いたような。

「な、なあ綾崎さん？入学試験ってどんな感じだった……？」

「へ？入学試験ですか？」

「ああ、どんな試験だったのかなあって。千冬姉と戦ったんだろ？」

「え、ええ。確かに違う先生との試合中に突然ストップが入りまして、途中からは試験官が千冬さんに変わりましたね」

「試合内容はどうだったんだ!？」

「あ、あはは。そんなに気になるものですか？少し恥ずかしいのですけれど」

いや、誰だつてそんなの気になるに決まっている。

その話だけで新聞部は特集記事だつて上げるだろう。

いや、別に情報売ったりはしないけど。

「試合内容は確かですね……千冬さんが打鉄に乗って攻撃してきたのを必死に堪えてたんですけど、15秒くらい経ったところに千冬さんの打鉄が煙を噴き出しまして。そこで試合続行不可で中止になりました。」

きつと機体性能を限界以上に引き出してたんでしようね、シールドエネルギーも尽きる寸前だったので本当に助かりましたよ。訓練機とは言えISを15秒でお釈迦にしてしまうんですから、千冬さんは恐ろしい人です」

「そ、そうなのかあ……」

いや、恐ろしいのは綾崎さんだから！そんなとんでもない使い方してた千冬姉から！

5秒も生き残るとか実質勝ったも同然だろ！

多分その時の千冬姉、マジのガチだったろ絶対！

俺が試験受けに行った時に異様に嬉しそうな顔をしてたのはそのせいか！そのせいで直後にへマをやらかした山田先生が大いに睨まれてたのに！

「えっと、織斑くん？どうかしましたか？」

「いや、先は遠いなあと思ってたさ……」

「??？」

綾崎さんを守れるようなカッコいい男になりたい。

そう思っていたのに彼女自体の防衛能力が高過ぎてむしろ邪魔になりそうという現実。

ぶっちゃけこのままでは逆に守られてしまうまである。

まだまだ道は長い。

「案外、カッコいい男になるのって大変なんだな……」

オロオロとしている綾崎さんを横目に仰向けになる。

とりあえずは2日後、鈴に勝つこと。

話はそれからだ。

結局自分がどれくらい強くなっていたかは分からなかったけれど、ここまで支えてく

れたセシリアと箒のためにも、勝たなければならない。

いつまでもカッコいい女性達に守られているわけにはいかないんだ。

俺もそろそろカッコいい所を見せないと。

「というところで私達も含めて、少々手詰まりを感じているのです」

「はあ、手詰まりですか。ですがお二人はまだしも、織斑くんはまだまだ学ぶべきことは多くあるのでは……？」

「うっ……」

俺がいろんな意味でボコボコにされた後、話は綾崎さんへの訓練の相談に移った。自分はそのような大層な人間じゃない、なんて彼女は言っていたけれど、ぶっちゃけ綾崎さんの意見を俺も聞きたかったのだから無理を押し通すことにした。

……なんかまだボコボコにされる予感がする。

「ああ、そうだな。一夏の実力はまだまだ未熟、機体の性能で誤魔化しているだけだ。その機体を乗りこなすにしても練度も工夫も足りない」

「ぐふっ」

「そうですね、一夏さんはここぞという時には頑張れるのですが、普段の訓練では打鉄

に乗った箒さんの足元にも及びませんわ」

「ごぼおっ」

あらゆる角度から打ち込まれた直球ストレートによつてやはりゴコゴコにされる俺。いや、確かに模擬戦をやつていても箒には全く勝てないし、セシリアとも武装が元通りになつてからは一度も勝てていない。

何の否定もできないのだけれど、もう少しなんかあるじゃん？

……は？雪片？

そんなので近接戦闘で箒に勝てると思つてんのか!!

当たらなければ意味は無いんだよ!! (涙目)

「なるほど、つまり織斑くんが思つていたよりも伸びてこないということですか」

「ええ、そういうことですわ。どうしたらよいのでしょうか？」

「私としては実践を繰り返せばいいと思つていたのだが、何も考えずに突っ込んで来る故に何の成長も見られなくてな。惜しい所までいったとしても直ぐに調子にのる」

「その辺りの精神面の問題もどうしたらよいものか」

……死にてえなあ。

つてかこの話題も今更だよなあ。

本番2日前に伸びて来ないと言われる俺のメンタルよ。

もつと早く言つて欲しかった。

いや、自分でもなんとなく分かつてたから2人を責めるわけではないのだけれど。手遅れ感が否めないこの今よ。

「うーん、そうですね。でしたらまず、目標とする自分を明確にしてはどうでしょうか？」

「目標とする自分？」

「ええ、そうです。具体的な自分の目標の姿を決めて、立ち振る舞いだけでも改善するように意識してみれば、何も考えずに突っ込んでしまうなんてことも無くなると思いますよ？」

「死にてえなあ」

「いや、死なないでください織斑くん。大丈夫ですよ、私も協力しますから」

優しい、優し過ぎてむしろ心が痛い。

「お母様。ちなみにそれは、具体的にはどういうことなのでしょう？」

「そうですね……例えば最初はセシリアさんでやってみましょうか」

「わたくしで、ですか？」

「ええ、まずは私達の考える最強のセシリアさんというものを創ってみましょう。……
こういう時には男の子の想像力が頼りになりますから、期待してますよ？織斑くん？」

「……!!あ、ああー!任せてくれー!」

先ほどまであれほど死んだ目をしていたのに、『期待している』という一言で飛び起きる俺の体。

自分で言うのもあれだが、少しチョロすぎないだろうか？

でも嬉しくなってしまうたんだもの、これは仕方ない。

「例えばですが箒さん、セシリアさんと戦う時に最も厄介なものは何んですか？」

「それは当然BT兵器だろうな、あれが一つでも残っているだけでこちらの意識を割かねばならない。今はまだセシリアもライフルとの同時使用は出来ないが、その弱点を克服した時のことは考えたくないな。そうでなくともセシリアの射撃精度は一流なのだから」

「まあ、それは俺も同意見だ」

「改めて褒められると少し気恥ずかしいですわね」

とは言うが、セシリアも段々とその弱点を克服しかけている節が見られる。最近は並列思考能力を鍛えるためにとルービックキューブをしながら本を読んでいたりと、両指で異なる動作を行うトレーニング等もしているらしい。

その成果は徐々に現れて来ているし、BT兵器とライフルの同時使用も何度かチャレンジしている所を見かけている。

完全に使い熟す様になるのも時間の問題だろう。

……あれ？

というかその訓練方法も綾崎さんに教えてもらったとか言ってたよな？

いつの間にそんなアドバイスを貰ってたんだ？俺は貰って無いのに。

「では、そんなセシリアさんのBT兵器。脅威度を増すためにはどうしたらいいでしょう？はい、織斑くん」

「へ？そ、そうだな……単純に使用できる個数を増やすだけでもキツイんじゃないか？正直4つ同時に攻撃して来る今でさえもかなりの制圧力だし、一つ増えるだけでも一気に難度が変わってくると思う」

「なるほど、では最強のセシリアさんは10機以上のBT兵器を同時使用しながらスターライトで精密射撃して来るということにしましょう」

「うわぁ……」

想像しただけでも顔が青ざめる。

戦場が青い光で埋め尽くされる光景なんて見たくない。

消し炭にされるまで焼き尽くされそうだ。

「さて、箒さん。ちなみにセシリアさんの一番の弱点はなんですか？」

「ふむ……まず間違いない近接戦闘だろうな。機体自体が射撃用ということに加えて、

セシリア自身も武道の心得は無い。母国にいた頃に多少訓練は受けたそうだが、現状での単純な近接戦闘能力はやはり経験のある一夏の方が上手だ」

「そうですわね、それはわたくしも痛感しておりますわ……」

「ということ、最強のセシリアさんは近接戦闘でも十分に打ち合えるくらいの能力を持つてにします。当然のように10機のBT兵器を引き連れて切り掛かってきますので、インターセプターを受け止めても次の瞬間には蜂の巣です」

「「うわあ……」」

絶対に戦いたく無い。

遠距離武器のない白式だと近寄ることも出来ないどころか、向こうから近距離戦を持ち込まれてボコボコにされるレベルだ。

箒もセシリアも自分で想像してドン引きしている。

実際、相手にした時の対処法が思いつかないというのもあるだろう。

正に1人軍隊、これは確かに最強のセシリアだ。

「……と、このような感じで最強の自分を作り上げ、そこに向けて努力を重ねるんです。足りないものを一つ一つ埋めていき、そうして目標とした自分を完成させていく。……どうですか？そう聞くと出来る気がしてきませんか？」

「そうですわね……道は長そうですが、自分の戦闘スタイルの究極は正しくそれだと思

いますわ。なるほど、目標が見えると具体的な訓練案も出てきますわね！なんだか急に身体を動かしたくなりましたわ！」

グイツと腕を上げて目を輝かせるセシリア。

え？まじ？

これだけでそんなにモチベーション変わるの？

ちよっ！俺もそれやって欲しい！！

「か、母さん！次は私！私のだ！」

「なっ、箒！俺のための訓練じゃなかったのかよ?!」

「はいはい、順番にやっていきますので大丈夫ですよ？箒さんの後に織斑くんのこともちゃんとやりますから、安心してくださいね」

「う、うう……」

セシリアを見て我先にと手を挙げるが、箒に一足越されてしまう。

元々は俺の訓練のためだということ忘れてるんじゃないだろうか？

けれどそんな俺の意見も綾崎さんの微笑みによって封殺された。当たり前のように頭を撫でて笑いかけてくるのは普通に反則だと思ふ、そんなの勝てるわけがないじゃないか。

「そうですね、箒さんにはやはり剣の達人という武器があります。加えて同じ流派に千

冬さんというIS操縦者としての完成形の1人が居ますから、最強の自分というものを比較的想像しやすいのではないのでしょうか？」

「ふむ。だが流派が同じとは言え、私と千冬さんではタイプが異なるからな。……ちなみになのだがセシリア。私と模擬戦を行う際、どういった時が一番困る？」

「そうですね……やはり接近戦に持ち込まれた時でしょうか。箒さんの反射神経は普段から常軌を逸しているのですが、接近戦に持ち込まれると最早未来予知のレベルで当たらなくなりますわ。距離を離そうとしても読まれているかのように潜り込んで来ますし、その時点で半分詰みみたいなものですから」

「それすげえ分かる」

「正直な話、“零落白夜”を使用している一夏さん以上に接近戦に持ち込まない様子を遣っていますわ」

「なるほど、セシリアの懐になかなか潜り込めないのはそこまで警戒されているからなのだな……ちなみにそれは未来予知ではなく、セシリアの視線や体捌きから次を読んでいるだけだ」

「それでも十分に異常ですわ」

これが全国大会優勝者、篠ノ之流剣術の正式後継者か……

マジで何も考えずに突っ込んでる自分が恥ずかしくなってきた。

それは箒に勝てないわけだ、だって俺そこまで考えて戦ってないし。
ボコボコにされても仕方ない。

「それだけ聞くと、性能の良いISを使用するだけでも箒さんは化けそうな気がしますね」

「正直これで適正Cというのが信じられませぬわ。この前なんてスターライトの弾をただのブレードで切り捨てたんですのよ？信じられます？お母様」

「い、いや！あれは流石に偶然だ……！」

「つまり、最強の箒さんは実弾だろうがレーザーだろうが関係なく切り捨てながら、どんな攻撃も物ともせず接近してくるタイプですね。あらゆる武装による戦術を手に持つ剣一本でねじ伏せ、無言で敵を完全封殺しながら、戦況的にも精神的にも敵を追い詰めていく。乗るISは取り敢えず打鉄を想定していますが、それでもこんな感じに、千冬さんとは違うタイプの剣の使い手になることも可能でしょう」

「……それを目指す場合、私はどうすればいい？」

「あらゆる武装の知識を詰め込んで、その対応策を考える癖を付けましょう。そしてそれを実行できるだけの繊細な操縦技術を身につけましょう。射撃武器持ちとの戦闘経験を増やして、ついでに千冬さんのように人間の限界を超えちゃいましょう♪」

「なんか最後にサラッととんでもない言葉が聞こえた気がする」

「なるほど。IS知識の蓄積と対応策の考察能力の会得、操縦技術向上に遠距離戦のエキスパートとの戦闘経験、加えて無謀とも言える挑戦をしつつも、千冬さん並みの成長をしろと。……ふふ、母さんは相変わらず優しくも厳しいな」

「攻撃を避けたり捌くのは私も得意ですから、偶にでしたら手伝いますよ?」

「ああ、そう言われるとなんだか急にやる気が出てきた……!」

「ズ、ズルイですわ箒さん!私だってお母様に手伝って欲しいです!」

「大丈夫ですよ、セシリアさんのお手伝いだってしますから」

「やりましたわ!!」

「ちよつと待ってくれ!俺は?!?!」

「あ……」

「いや忘れんなよ!ちよつと寂しかったんだぞ!!」

完全に忘れられていた。

俺の特訓のために来てくれていたはずなのに、逆に俺のことが完全に無視されているのはどういうことなのか。

いや!次は俺のを考えてくれるはずなのは分かってるけど!

それとこれとは話は別だ!

マジで寂しかったんだからな!?

「そうは言いますが、一夏さんの最終目標は機体の性能から考えても織斑先生しか見えませんし……」

「うっ……」

「とうか一夏自身も千冬さんの戦い方に憧れている節があるだろうか？」

「ううっ……」

「そう考えると一夏さんは織斑先生の映像を見てイメージを固めた方が早いかもしれませんがね」

「ぐううっ……」

「だから私は一度くらい千冬さんに直接アドバイスを受けた方が良いと言っていたのだがな」

「ぬ” ううっ……!」

分かっている、2人の言い分は正しい。

ぶつちやけ現状の自分ではどう頑張っても千冬姉の劣化版になるしかないだろうし、俺も千冬姉の戦い方に憧れている所はある。故に千冬姉の戦い方を真似することが一番早い上達法だということも普通に間違いない。

けど、俺だつて！

俺だつてさ!?

綾崎さんに色々考えて欲しいし、綾崎さんといつしよに訓練したいんだよ！だってこのままじゃ千冬姉に教わりながら千冬姉とマンツーマンの訓練になる未来しか見えねえんだぞ!?

嫌だああ！そんなの嫌だああ!!

俺だって綾崎さんに優しく手取り足取り教わりたいいい!!

そんな必死の形相を綾崎さんに見せると苦笑いをされた。

救いはないですか!!

「ふふ、自分の理想なんてものは常に変わり続けるものですから。セシリアさんも箒さんも今日想像した理想は常に更新し続ける必要があります。織斑くんだってもし第二の千冬さんという将来が嫌なら、今後の努力次第では最強の織斑くんを見つめることだって可能なんですよ。まずはガムシヤラに打ち込んで、自分を知ることが大切です」

「自分を知ることなあ……つつつても、自分のことって自分が一番よくわかっているとと思うんだよ」

「それはないな」「ないですわね」

「あり得ないな（ませんわ）」

「2人してそこまで言うかよ!?!」

俺の自論を速攻で否定されたことはさておき、綾崎さんの言いたいことはなんとなく

分かった。俺は確かに千冬姉に憧れているけど、千冬姉に手取り足取り教えられて千冬姉の劣化品になることは御免だ。

俺が求める理想の自分は劣化品なんかじゃない、その先だからだ。

けど現状の俺はIS技術において自分の長所短所すら掴めていないし、必要な技術も前提も足りない。

何もかもが中途半端で、セシリアや箒のように突出したものすら無い。

この中で一番速度が速いというものはあるが、それはあくまで白式の特徴だ。

自分のものではない。

……しかしこう考えてみると、ISにおける自分の長所が本当に思い浮かばない。

適正が一応Bはあることくらいか？

けど適正を重要視するなど千冬姉は言っていた。

それを他の誰よりも箒が実践している。

そもそも自分は銃火器なんて使ったこともなければ、近接戦闘だって多分この中じゃ素人のセシリアより少し上のレベルだ。

いくら速度が出ようとも飛行技術だってあの有様だし……

あれ？マジで俺、何ができるんだ？

「織斑くん」

考えているうちに段々と沈んでいく俺の感情を読んだかのようなタイミングで、綾崎さんが声をかけてくる。

「今すぐ答えを出す必要はありません。それに、長所が思い浮かばなくても悲観する必要はありません。無ければ作ればいいんですから」

「綾崎さん……」

首を傾けながら優しく微笑んで彼女はそう言った。

ドクつと心臓が高鳴る。

その顔は本当に卑怯だと何度言えば。

先までの落ち込んだ感情が彼女の笑顔一つで吹き飛んでしまった。

本当に破壊力が高過ぎる。

これだからこの人には敵わないのだ。

また情けないところを見せてしまった事を悔しく思う。

「綾崎さん！俺、自分の長所を作りたい！自分の強みが知りたい！だから頼む！俺に力を貸して欲しい！」

「織斑くん……分かりました、織斑くんがそこまで言うのでしたら。流石男の子ですね、とつてもカツコイイです」

「うっ！」

突然カツコイイなんて言われてしまって、思わず顔が赤くなってしまふ。

ようやく彼女に自分のカツコイイ所を見せられたのだろうか？

その言葉を、その言葉を聞きたくて頑張ってきた……

ようやく聞いたその言葉に、嬉しさのあまり男泣きしそうになる。

しかし次の瞬間、そんな俺のトキメキも吹き飛ぶこととなった。

「それでは、これから一時間、全力で私に攻撃してきて下さい」

「……は？」

優しい微笑みから物騒な言葉が聞こえてきた。

「あ、大丈夫ですよ？ 零落白夜を使われない限りは私は問題ありませんから。箒さん、セ

シリアさん、お2人は織斑くんがへばってしまった時に気合を入れてあげて下さい」

「分かりましたわお母様！」

「任せろ母さん！」

「え？ は？ え……？ なんで？」

「本当の自分は限界を越えた先に居るんです。織斑くんがそれを見つけたというのなら、気は進みませんが追い詰めるしか方法がありませんから……」

「ちよ、ちよっと待ってくれ綾崎さん！ いつも優しい君はどこに?！」

「私は甘やかす人間ですから。織斑くんが本当に望むことなら、例えそれが自分のポリ

シーに反していても甘やかして叶えます……!!」

「流石お母様、慈悲深いですわ……!!」

「くっ、これが母さんの懐の広さか……!!」

「いや!絶対おかしいから!俺一度もそんなこと頼んだことないから!!」

「さあ!かかってきて下さい織斑くん!私は全力で貴方を限界の彼方まで追い込んでみせます!!そして代表戦までに、必ず貴方の最強を作り出してみせます……!!」

「は、話を、話を聞いてくれええ!!」

この後めちやくちや追い込まれた。

その後もアリーナの予約が何故か2日連続で取れたので2日連続で追い込まれた。

死ぬかと思った。

というか途中で3回くらい死んだ気がする。

なお、代表選には間に合った模様。

22 過激な襲撃者

side 奈桜

クラス代表戦当日、僕はアリーナの観客席に座っていた。

本来なら誘われていた故にピットに行ってもよかったのだが、一夏くんの訓練にロクに参加していない自分がそんな特等席に座らせて貰うことに抵抗を覚えたために断つたのだ。

あの日から2日ほど、一夏くんは地獄のような訓練をし続けたのだが、その甲斐もあつて彼は何かを思いついたのか、考えを纏める様な仕草を取り始めた。

どんなことを思いついたのか？何を悟ったのか？

それを遂に僕達に語ってくれることはなかったのだが、何かを掴んでくれたのなら頑張つて厳しくした甲斐があつたというものだ。

実際やっていて僕も辛かった。

試合の方は1回戦から一夏ちゃんと鈴ちゃんやんが戦うという最初からクライマックスな組み合わせとなったのだが、そのせいかアリーナは満員御礼。それはもう夏前のこの時期でも暑苦しいくらいの人口密度。

観客席の一角に陣取った1組の女子生徒達に端の方の席を譲って貰ったおかげで大分楽はできていますが、朝からこれだけ人が集まる注目度の高さが嫌でも実感できる。

そんなことを考えながら試合が始まるまでの数分を手持ち無沙汰に待っていると、いつの間にか隣の席に座っていた何処かふわふわとした感じの少女が僕に話しかけてきた。

彼女のことは僕もしつかりと覚えている。

そのふわふわとした感じが、なんとなく好きだったからだ。

「ねえねえ、あやのんあやのん?」

「あ、あやのん?……ええと、布仏本音(のほとけほんね)さんですね、どうなさいましたか?」

「あやのんはさ、しののん達みたいにピットで見ないの?」

「ええ、私は彼女達ほど織斑くんに貢献していませんから。ただ仲良くさせて頂いていてるというだけで、その権利を頂くわけには参りません」

「うーん、考え過ぎだと思っけどなあ」

「いいんですよ、そのおかげで今日はこうして布仏さんのような可愛いお方とお話できてるんですから」

「わー!あやのんに口説かれた〜!」

そう言つて、ぐあつとこちらへ引つ付けてくる彼女。

どうやら彼女はスキンシップが激しいタイプらしい。

……まあ、少し触ったくらいで性別がバレることはないけど、こういうのは本当に困るんだよなあ。

罪悪感が凄いの、下手に断ると傷付けちゃうし。

仕方ないと割り切るしかないとは知っているけれど。

一通りわふわふして気が済んだのか、布仏さんが顔を上げたところで丁度一夏くんと鈴ちゃんがカタパルトから射出された。

そろそろ試合の始まりである。

今は互いに大声で色々と言ひ合っているが、それでもその雰囲気は決して悪いものではなく、どちらかと言えばライバル同士のような熱血的な感じだ。

2人が自分の意思を溜め込むことなく向かい合っている様子を見ると、自然と私まで嬉しくなる。

「あー、あやのんがまたお母さん顔してる〜」

「お、お母さん顔ってなんですか?」

「えつとね、じゃれあつてる子供達を見るお母さんみたいな顔? すつごく優しい顔してるから、みんなお母さん顔って言ってるんだよ〜?」

「そ、そうだったんですか……」

自分の知らない所でそんなことを言われているとは思わなかった。

僕、そんな顔してたのかな。

なんだか自分の居ない場所でそんな風に言われていると知ると、途端に恥ずかしくなってしまう。

衝撃の真実に僕が困った顔をしていると、2人の準備が整ったのか開始の合図と共に試合が始まった。

始まりの合図と同時に正面からぶつかり合う一夏くんと鈴ちゃん。

2人はそのまま青龍刀と雪片を幾度もぶつけ合う。

戦術もへったくれもない2人の苛烈なその様子に、アリーナの歓声は増していくばかりだ。

「おー、なんか凄い」

「そうですね……でも、お2人らしい戦いです」

2人は笑いながらその武器を打ち付け合う。

弾かれれば直ぐに体勢を立て直し、弾けば全力で追い打ちをかける。

防衛や回避なんてほとんど考えていない。

ただひたすらに攻撃を考える。

まるで自分の感情を叩きつける様に。

きつと武道に精通している人達から見ればもどかしい光景だろうが、少なくとも一夏くんは昨日よりもずっと良い動きをしていた。

互いに近接武器同士であるというのもあるだろうが、それでも代表候補生の鈴ちゃんと互角に渡り合っているのだから、素晴らしいの一言に尽きる。

精神的にも肉体的にも良い状態で望めているようだ。

そんな状態がしばらく続き、一際大きな衝突があつた頃、最初に攻防を制したのはやはり地力と武装のある鈴ちゃんだった。

『そこだ!!』

アリーナ中に響く様な声で鈴ちゃんは叫ぶ。

青龍刀に弾き飛ばされ体勢を立て直すのに失敗した一夏くんが、その瞬間に何の前触れもなく吹き飛ばされた。

まるで見えない弾丸に撃ち抜かれたように。

思いもよらぬ攻撃に、一夏くんは少しも反応することが出来なかつた。

「……反動? いえ、圧縮された空気でしょうか?」

「多分だけど衝撃砲じゃないかなあ」

「衝撃砲、ですか?」

足をプラプラとさせながらニコニコしている布仏さんにそう尋ねると、彼女は人差し指を上げて得意げに解説をし始める。

「どうやら彼女はＩＳについて詳しいらしい。」

これは頼りになる。

「中国の次世代兵器でそんなのがあった気がする。空間に圧力をかけて砲身を作つて、衝撃を撃ち出すんだって。360度全方向に、目に見えない弾を撃てるんだよ。」

「それはまた、すごい兵器ですね……」

「うん。でも空間圧縮兵器なんて燃費が良いわけではないし、弾丸の威力も実弾やレーザーには劣るんだあ。」

「なるほど……布仏さんは詳しいんですね、とても助かります」

「えへへ、もつと褒めて。」

グイグイと頭を押し付けてくる彼女に苦笑いをしながら撫でてあげると、ふにやつとした声を出しながらこちらに倒れこんでくる。

「この子は猫か何かなのかな……?」

いつのまにか膝枕の体勢になった彼女を撫でてしているとゴロゴロと喉を鳴らし始めた。なんだその特技、すごく可愛い。

ドンドンドンツとアリーナに3発の衝撃音が突き刺さる。

一夏くんはなんとか複雑な軌道をすることで直撃は避けているが、やはり見えない弾丸に手を焼いているようだ。鈴ちゃんも衝撃砲の燃費の悪さは分かっているのか、1発1発を無駄にならないように丁寧に射撃している。

中国での訓練で満遍なく優秀だったというのは本当らしい。

近距離戦闘だけでなく、射撃の精度もまた見事だ。

『ぐうっ、このっ!!』

しかし、それでも最初の一発以外を全て回避している一夏くんもやはり凄い。

あの決闘の日から今日までセシリアさんの射撃を嫌という程受けていた彼だ、多少見えない程度でその感覚は揺らがらないのだろう。箒ちゃんと近接戦闘しながらセシリアさんに撃たれるというところでも訓練の成果も、こうしたピンチや極限状態でこそ発揮されているに違いない。

鈴ちゃんの顔も楽しそうであっても余裕はなく、一夏くんに対して本気で向き合っているように見える。

本当の本当に、2人は真剣で全力だ。

こうして見ているだけでも惚れ惚れするほどに、彼等は良い試合をしていた。

「ん、おりむーどうしたら勝てるかな〜?」

「……気持ち、でしようか。攻撃を受けている側は体力よりも精神力の磨耗の方が甚大です。敵が隙を見せるまで折れることなく集中力が維持できれば、まだ可能性はあります。特に彼には零落白夜がありますから」

「お、なるほど。そういえばあやのんは攻撃受けるの得意だもんね、やっぱり辛い？」

「ふふ、それはもう。私の場合は反撃もできませんから、ただひたすら押されるだけなので毎回擦り切れるくらい精神力を使っています。……まあ、最初から攻撃を諦めているので、これでも少しはマシなんでしょうけどね」

「……そっかあ」

「？」

なぜか声を落とした彼女を不思議に思いながらアリーナの方へと目を向けると、丁度一夏くんが衝撃砲による土煙を利用して鈴ちやんへと迫っているところだった。

土煙の中で軌道を変え、予想外の場所から斬り掛かる一夏くん。

以前までの彼ならば、間違いなくそのまま正面突破していただろう。

そしてその成長こそが、チャンスへと繋がった。

鈴ちやんは一夏くんのことをよく知っている。

故に必ず正面突破してくると踏み、青龍刀を構えて張っていたのだ。

目に見えるほどに動揺し、衝撃砲のチャージ時間も足りない。

一夏くんの奇襲は成功した。

刀身が光っている。

零落白夜が発動している。

あれが当たれば一夏くんの勝ちだ。

しかしカウンターに成功すれば間違いないく鈴ちゃんも勝てる。

ここで勝負が決まると確信した僕は、思わず身を乗り出して行方を見守ろうとした。

そうして、少しだけ立ち上がって、2人の接触到集中していた……筈だった。

「っ!？」

しかしその瞬間、何故か思考とは別に、僕の身体は布仏さんを守るように身を屈める。

目の端に映った不自然な光源に、僕の体は反射的に動いた。

ただの勘だったのか、それとも本能だったのか、どれも分からないけれど、僕の身体

は思考よりも先に何かを感じ取っていたのかもしれない。

「あ、あやのん?! きゃっ!!」

バリーインツッ!

アリーナを囲んでいたシールドが弾ける。

フィールドに真つ赤な光の柱が突き刺さる。

風と土煙と衝撃波、光と砂の嵐と共に、様々な破片がアリーナ中に吹き荒れる。

「あぐつ……!」

突如として熱を持つ左腕。

見れば何かの破片が二の腕に突き刺さっていた。

もし行動を起こしていなければ布仏さんに刺さっていただろう。

今ばかりは勝手に動いたこの身体に感謝するしかない。

「あ、あやのん?何が起きたの……?」

「つ……ぐつ……布仏さん、今すぐクラスの人達をアリーナ外に避難させて下さい。外

部からの侵入者です、早急に行動しなければ犠牲者が出ます」

「あ、あやのん!?!怪我してるの!?!」

「問題ありません、私のISにはナノマシンが搭載されていますから、放っておいてもどうにかなりません。……そうだよね、恋涙」

ISを展開し、ナノマシンを散布する。

治療用のナノマシンと精神鎮静用のナノマシンを、自分にはなく周囲に向けて見境なく。なぜ周囲に撒く必要があるかと問われれば、なにより初めにパニックを起こしている生徒達を落ち着かせ、出口へ向けて誘導しなければならぬからだ。

布仏さんも僕の怪我を見て一瞬だけ硬直していたが、直ぐに気を取り直して誘導を手伝ってくれた。やっぱり彼女は普段はほんわりしているけれど、色々と頭を回すことのできるとても賢い人だ。

こんな状況でも冷静に対応してくれるのだから、本当に頼りになる。

「原因は、あれですか」

アリーナ内を見ると、そこでは鈴ちゃん和一夏くんが謎のISと対峙していた。

きつとあのISが今回の騒動の原因だ。

シールドを抜いたレーザー兵器は気になるが、鈴ちゃんがいるなら一夏くんは無茶をさせることはないだろう。一夏くんだって成長したのだし、落ち着いて対処できる筈だ。

……とは言え、2人のエネルギー状態からは目を背けられない。

あれだけの戦いの後だ、十分に残っているとは考え難い。

それに、増援は多い方がいいに決まっている。

せめて避難が完了するまでの間だけでも、あのレーザーが射出されないように敵の攪乱をしなければならぬ。あの規模のレーザーがアリーナの壁面に向けて放たれたりしてしまえば、それこそ本当に大量の負傷者が出てしまう。

「布仏さん……ここは任せます！」

「あやのんは!？」

「織斑くん達の増援に向かいます! シールドの穴が閉じる前に入らなければなりません!」

「……! 気をつけてね!!」

布仏さんに手を振り、アリーナ中にナノマシンを全開で散布しながら穴の開いたシールドへと向かう。

距離と修復速度から考えて、穴が閉じる前に入れるかどうかはギリギリだろう。あと十数mというところでペルセウスを取り出し、瞬時加速を準備する。

中では2人が話し合っている姿が見えるが、混乱している様子はない。

どちらも冷静に話し合っており、作戦を立てているらしい。

やはり2人は自分のすべきことをよく理解しているようだ。

……今の一夏くんはとても頼もしく見える。

向かって最初に贈る言葉はこれにしよう。

僕が彼の立場なら、これを言われて嬉しく無いなんてことは無いのだから。そう思っ
て今やギリギリの大きさになってしまったバリアの穴へと手を伸ばす。

これならば間に合う、そう確信した瞬間だった。

「がっ……!？」

シールドが目前まで迫ったその瞬間、今度は突如として目の前に現れた二本のブレードによって僕は吹き飛ばされた。

あまりにも早く、あまりにも重いその一撃に、僕は体勢を立て直すこともままならず、そのままアリーナの屋根へと叩き込まれる。

まるで鉄球を打ち当てられたような衝撃だった。

ブレードによる攻撃だとは思えない、これほどの攻撃は箒ちゃんですらしてこなかった。

「ぐっー！」

「あやのん!!」

布仏さんの悲痛な声が聞こえる。

彼女の視点から見れば、心配になるのも仕方ないかもしれない。

けれど、心配しなくても大丈夫だからと笑って手を振って返す。

結果的にアリーナの屋根に突っ込んでしまったが、一応ブレードの攻撃自体はperlセウスで防いでいたからだ。シールドエネルギーの損傷は最低限で済んでいるので、戦闘に支障は無い。

……ただ、やはりこれほどの出力は、例え一夏くんの白式がエネルギーを全てパワーに振ったとしても出せないだろう。

それほどに異常な一撃。

これを繰り返した相手のことを考えると、お世辞にも大丈夫とは言えないかもしれない。

「はっ！所詮は学生かと思つてたのになかなかやるじゃねえか、今のを防いだのは褒めてやるぜ？」

屋根の瓦礫の向こう側、土煙の間から見えるフルアーマー型のIS。

音声から聞こえる高飛車な女性の煽り声。

……間違いなく、あれが今回の僕の敵だ。

そして恐らくではあるが、自分の手に負える相手ではないだろう。

機体もまた、どうやら普通ではないらしい。

「……さて、どうしましょうか」

だからと言って、自分以外の他の人の手でならば抑えられるかと言えば、それもまた別のお話だ。少なくとも今の一撃で相手の実力と機体の性能があまりに規格外なものであることは明らか。実力のある先生方が出て来たとしても、機体の性能差でどうにもならないように思う。

もし仮に千冬さんが出てこれたとしても、打鉄では全力稼働可能時間の15秒以内に勝負を決することは出来ないだろう。

……どう考えても、これは自分が抑えなければならぬ。

少なくとも人を集めるための時間稼ぎだけは、僕がやらなければいけないことは明白だった。

2 3 紅蓮の世界

「別に殺す気はなかったんだがな……それでも私の完全な不意打ちを防いだのは驚いた、お前なかなか面白いな」

黒色の装甲に黄色の線が走ったスマートなフルフェイス型の I S。

しかも左右に2本ずつの腕が生えており、それ等が恐らくイメージンターフェイスで動く擬似腕であることが予想できる。ああいった擬似腕は本来人間に無い部位であるために扱いが難しいとされているが、こうして見ている限りではまるで違和感無く動いているように見える。

(やつぱり、搭乗者のレベルもかなり高そう)

何の前触れもなく背後に現れた方法は分からないが、先程の一閃は間違いなく実力者のそれだった。

この状況で現れたのだから戦う以外の選択肢はなく、既に思考は戦闘用に切り替えているが、状況はかなり厳しいだろう。

あの I S は間違いなく恋涙よりも高性能なものだ。

搭乗者の実力で言ってもこちらが勝っているなど口が裂けても言えまい。

（大丈夫、落ち着いて。勝てなくてもいい、負けないことが大切だから）

そうだが、そもそも僕の戦い方に勝利という文字は存在しない。

増援が来るまでの時間稼ぎをし、相手を引き止める。

強いて言えばそれが達成された時こそが勝利だ。

なるべく時間を稼いで相手の情報を得る、あまり欲張らないで、いつも通りにやればいい。

「おいおい、私の褒め言葉を無視かよ？言葉くらい喋れるだろ？」

「……お褒めに預かり光栄です。ところで今日は一体どのような用件でしょうか？」

「やっぱ面白くねえなお前、もつと子供らしい反応できねえのか？……ま、別にお前や学園に用はねえよ。私達が用があんのは織斑一夏の方だからな」

「やはりそうですか、彼は本当にモテるんですね」

「まあ、私の好みじゃねえけどなあ」

口調と声からして自分より年上の女性であることは間違いない。

しかしやはり素性までは分からなさそうだ。

……それにしても、やはり男性搭乗者というものは狙われるものだなと改めて思
い知らされる。

「彼を、どうするつもりですか？」

「そう気を荒立てなくても、今回は誘拐しようだとか殺そうだとか思ってたねえから安心しろよ。お前だってここに大人しく座っててくれれば余計な手を出すつもりは無えよ」

「……その言葉を信じろと？」

「信じられるわけねえよなあ？そりやそうだ、こんな怪しい見た目の侵入者の言葉なんだからよお？信じる奴は相当なバカか頭のイカれた平和主義者のどっちかだろうよ。……で？お前はどっちなんだ？」

「……貴方を捕らえて情報を引き出す一般人、とかどうでしょうか？」

「くははっ！気に入った!!」

「っ!？」

凄まじい破壊音と共に再びアリーナの屋根へと押し込まれる。

馬力とスピードが段違いだ、ただブレードを防いだだけなのに反動だけでかなり大きく押し込まれる。衝突の瞬間にこちらも全力でブーストしなければまともに打ち合え無さそうだ。

「オラァー！んな所で寝てる暇なんざ無エぞ！」

「うっ、この……!？」

瞬時加速で追い打ちをかけようとする敵機に対して、こちらは右側のブースターにだけ瞬時加速を適用し、瞬時にその場から身体を回転させながら跳ね飛ばす。

瞬間、無茶な瞬時加速を行なったせいで身体が悲鳴を上げた。骨が軋み、喉の奥から血が滲み出してくる。

だがその追撃からは逃げ切ることができた。

しかしここで戦闘が終わるわけではない。

より一層歓喜の雰囲気を含めた敵機が二本のブレードを屋根に突き刺し、無理矢理身体を反転させてこちらへ突っ込んできた。

「あははははは！いいじゃんいいじゃん！面白いじゃん!!ほら！どうする!?!次はどうする!?!」

2本の腕の武器をブレードから鞭型の武装へと変え、残り2本を銃へと変える。2方向からの鞭攻撃と前方からの精密な射撃、棒切れ一本では防ぎきれない攻撃の嵐だ。

先ほどの様な一撃必殺では無く、こちらを削ることを目的とした戦法に瞬時に切り替えることが出来る辺り、相手は相当に機体慣れしている。

(けど、それなら……)

こちららも咄嗟に左手に拳銃型のシールド付与武装を展開し、目の前を飛んでいた屋根の破片に向けて3発撃ち込む。そうして球型のバリアが3つできたことを確認すると、それをペルセウスで正面に打ち出して銃弾の弾幕を突破した。

更に直後に左から迫る鞭を棒で絡み取り、右側の鞭へと向けることでそのまま防ぐ。

敵の鞭で鞭を防ぐ形になったので盾にした方の鞭はその拍子に破壊されたが、こちらへの被害は全くない。

多少賭けの部分は多かったが、上手くいったようだ。

そして、そんな一連の動作を見た敵機はもはや狂喜乱舞で……

「あはっ！あははははははははっ！いいよ！いいよ！お前え！なんだよなんだよ！最高じゃんかよお！！こんな奴がいやがったのかよ！顔も好みで腕も立つ……くははっ！気に入ったア！！」

「まだ来ますか……！」

4つのブレードを持って切り掛かってくる彼女を、再びペルセウスで迎え撃つ。

凄まじい速度の連撃、一撃一撃の重さも桁違いだ。

4本ものブレードを一度に迎撃するのは無理だが、それでも擬似腕のブレードの操作が本来の腕よりも若干甘いことを利用して、本腕のブレードへ向けて邪魔をさせるように弾いて対応することで、何とか危機を免れる。それでも常時2〜3本の腕を相手しているために精神力はゴリゴリ削られていくし、軌道をズラして直撃は避けてもシールドエネルギーはどんどんと削られていく。

そんなことを続けていけば、直ぐに限界が来るのは当然の話で、

「あぐっ……！」

やはり先に折れたのは当然ながら僕の方だった。

布仏さんを庇った時にできた左腕の傷が今になって悲鳴をあげる、一瞬の油断もできない今になって。

「ほらほら終わりかアア!？」

「っ」

拳銃型シールド付与兵装” 遠距離恋愛”。

あまりに長つたらしいので”遠恋”と呼んでいるが、僕は咄嗟に左腕に持つていた遠恋を手首だけで上部へ向け、同時に振り上げたベルセウスに向けて撃ち込んだ。

ベルセウスから球状に発生したバリアは3本のブレードを防ぎ、ブースターを完全に停止させたことで、その反動で僕は大きく後方へと弾き飛ばされる。

なんとかではあるが、これで距離を取ることができた。

瞬時加速の兆候が見られないことを確認して、安全圏へと入った直後にブースターを入れ直して態勢を立て直す。額に浮かんだ汗を拭いながら敵を見れば、それはもう楽しそうにブレードを振るっている機体がそこには居た。

「マジかよ、マジかよ……!アラクネに乗った私の本気の攻撃を無傷で凌ぐのかよ!つはあく!織斑一夏なんかよりもよっぽど面白え奴が居るじゃねえか!なあおい!お前名前なんて言うんだ!？」

「教えるわけないじゃないですか。教えたなら貴方、しつこく私に付き纏うつもりでしょう？」

「当然だ！よく分かってんじゃねえか！」

……そうだ！次はお前が攻撃して来いよ！私ばかりやってても面白くねえ!!」

そう言つて受け身の態勢を取る敵機。ノリノリだ。

……しかし、攻撃できない、なんて事実を敵に晒したくはない。

本音を言えばこのまま増援が来るまで喋つて時間を稼いでいたい。

だが問題があるのだ。

そもそも増援はいつになつたら来るのだろうか？

ここは一夏くんや鈴ちゃんとは違う、アリーナのバリアの外だ。

教師陣のISだつて専用機持ち達だつて本当なら直ぐに来てくれるはずだった。少なくとも僕の予想ではどうの昔に着いているはずだった。

なぜ、1人足りともここへ来てくれないのだろうか。

教師陣はともかく、セシリアさんくらいは無理矢理にでも来そうなもの……しかもそれどころか千冬さんからの通信も来ない事に關しては最早意味が分からない。隔離されているわけではないのに、他から隔絶されているように感じてしまう。

こちらから見えるのは一夏くんと鈴ちゃんが二手に分かれて左右から敵を翻弄して

いる姿だけ。バリアに隔絶されていないこちらの方が孤独を感じているのではとすら思う、それほどに外部からこちらへの干渉がない。

そんな僕の思考を読んだのか、敵機の操縦者がこんなことを言ってきた。

「あ、ちなみにだけど援軍とか来ねえから」

「……貴方の仕業、ですか？」

「正しくは私達、だな。IS学園で管理されてるISは細工をして動かないようにしてあるし、専用機持ち共は今頃校舎の方に現れた無人機の相手してんだろうよ」

「無人機、ですか」

「私の周辺にはジャミングかけてっから通信も届かない、校舎の方に送った無人機は耐久型の奴だからあと30分は稼げるだろうな。頼みの綱のロシア代表殿も今頃空港に釘付け……ほら、諦めて私の相手しな」

ガチャガチャと四丁の銃を取り出してこちらを挑発する敵機……あと30分も時間を稼げるだろうか？

アリーナの障害物を生かせば可能性はあるかもしれない。

だがアリーナにはまだ生徒達が大勢残っている、その様子からするに扉の鍵が開かずにアリーナから出ることができないのだろう。障害物なんて使えば彼等がどうなるか、考えなくとも想像できてしまう。

「……私は、」

「あん？」

「私は、攻撃することができません」

「……どういうことだ？」

それでも、時間を稼ぐ。

30分、時間を稼いでみせる。

例えここで自分の弱みをバラすことになったとしても、せめて生徒達がここから出られるまで時間は稼ぐ。

それが自分にできる唯一の足掻きだ。

「私には攻撃の才能が絶望的にありません、故に私にできるのは、避けて、捌いて、時間を稼ぐことだけです」

「……バカにしてんのか？それだけの実力があつて攻撃だけが出来ないなんざあるわけねえだろ」

「試してみます？」

ぐつとペルセウスを握る。

それに合わせて身を構えた敵機に向けて大きく振りかぶつて飛び込んだ。

……しかし、次の瞬間、僕はやはりアリーナの隅に叩き込まれた。

呆気なく、みつともなく、それまでの攻防が嘘のように。

「お前」

「ごほっ……これで、分かりましたか？ 私には攻撃を行うことができないんです」

背後や遠くから僕を呼ぶ声が聞こえてくる気がする。

けれどそんな声を気にしている暇はない、ナノマシンを散布しながらの戦闘を行なっているのにこれ以上集中力は割けないのだから。

「テメエ、PTSDか……」

「……？ 精神的外傷のことですか？ 身に覚えはありませんが」

「チツ、しかも無自覚かよ。タチが悪いつてレベルじゃねえな、クソ勿体ねえ……」

ぐっと立ち上がった僕に今度は哀れみの目を向けてくる敵機。

PTSD？ ト라우マ？ 彼女は一体何の話をしているのか。

記憶にある限りでは僕にそんなものは無いはずだ。

意味がわからないという視線を向けると、彼女はため息を一つ吐いて頭を掻きながらこちらへ顔を向けた。

「……おいガキ」

「なんででしょう？ 私が攻撃を行うことができないことは分かってもらえたと思うのですが」

「んなことあどうでもいいんだよ。……お前は強え、それは私が認めてやる。けどな、攻撃出来るようになればもつと強くなる」

「……ですから、攻撃はできないと」

『だから出来るようにしてやるよ』

「っ!？」

ゾクリと背筋に悪寒が走る。

さっきまでとは次元の違う威圧感がこちらを飲み込もうとしてくる。放たれたそれはきつと彼女のモノだけではない、彼女の纏うISからも放たれる凶悪な殺意。

『アラクネ・Q（クイーン）』

その一言と共に装甲に走る黄色の線が赤へと変わり、スマートだったフォルムがどんどんとその体積を増していく。

4本だった腕は8本まで増え、刺々しく重々しいその姿とは対照的に巨大なブースターがその機体の速度を明確に主張してくる。目の部分のアーマーは真っ赤に染まり、節々から紅い粒子を零し始めた。

「変形可能な、IS……?！」

『テメエが抗わなきや、全員死ぬぜ？』

言葉と同時に胸部の中央にポツカリと開いた大穴に眩い光が急速に収束し始める。周囲の空気が揺れるほどのエネルギーがそこに集まっているという事実には本能と理性の両方が警告を叫ぶ。

『逃げなければ死ぬ』と。

だがそれでも、『ここで避けたら不味い』と理性も同様に叫んでいる。

自身の背後に逃げ遅れた生徒達が居ることを確認して咄嗟に空中へと身を上げれば、待っていたとばかりに女は砲身をこちらへと合わせた。胸部に集まった光は最早小さな太陽と言ってもいいほどの熱量を有して居る。

周囲の光が乱れるほどの光景に僕は言葉を失った。

『メテオクイーン・サラマンドラ』

瞬間、直径20mに渡る超極太の紅色の高密度レーザー砲が空間ごと消し去る勢いで彼女の胸部から放たれる。

その速度は人間の知覚できる速度を完全に超えていた。

空気すらも存在することは許さない、そんな意思すら感じるほどの圧倒的なエネルギーの奔流。ISであろうとも瞬時に操縦者ごと溶解させてしまうような、正に死そのものと言える攻撃だった。

『ペルセウス……!!』

完全な無意識。

意思の介在しない反射の領域。

腕も口も脳でさえも、思考するより先に動き出す。

そしてそこに運もまた味方した。

真つ白な思考の中でレーザーに”抵抗する”ように、”弾き返す”ように、明らかに”攻撃を目的”に振り下ろされたペルセウスは、それまでの打ち合いによって完全展開されており、超高密度のレーザー砲の一部を反射し続ける。

それでも、完全に防ぐことなど当然出来やしない。

反射に失敗した一部が身体を削る。

反射していても熱によって身体が焦げる。

反射をしているのに伝わってくる反動によって身体中の骨が軋む。

周囲に散布していたナノマシンを治癒ナノマシンに変更して、全力で自身を回復させながら耐え続ける。

次々と削られていく自分の身体に、次々と治されていく自分の身体。

破壊と再生の両立は精神に強い負荷を与え、思考を破壊していく。

1秒が何十年にも感じるような地獄、真つ赤に染まった視界に恐怖と絶望と孤独を感

じながらも段々と溶解していくペルセウスを握り続ける。一夏くんや箒ちゃん、セシリアさんや鈴ちゃん、それに千冬さん。ここに来て会った人達の顔が次々に目の前に現れ消えていく。

涙も鼻水も残らない。

自分の中から一つずつ大切なものが消えていくそんな感覚を味わいながらも、この脳は一つの光景を”僕”に取り戻した。

『私”の代わりに、貴方が、生きて……？』

(……そうだ。こんな所でまだ、”私”は死ねない！)

まだ挫けることは許されない、ここで終わることは許されない。

他でもない自分が許さない。

この命はこんな所で費やすべきものでは無いのだ。

この命は自分の一存で捨てていいものでも無いのだ。

例えこの先でどれほど苦しいことがあつたとしても、この命だけは。

その罪の償いのためにも、途切れさす事は許されない。

次第に晴れていく視界が薄れていく。

焼き切れた思考が消えていく。

聞こえる誰かの声が理解できない。

それでも死ぬことだけはできないと、最後まで溶解した棒切れを手放す事だけはしなかった。

『……流石に殺しちまったと思っただが。やっぱり面白いわ、お前』

圧倒的な赤のエネルギーが空を焦がした後、そこに残っていたのは真っ黒に染まった少女だった。

全身を焦がされ、着ていたISすらも装甲が黒く炭化していたが、それでも彼女とISは生きていた。

このアラクネQという機体に乗ってから初めて使用した超高密度エネルギー砲”メテオクイーン・サラマンドラ”は思いの外パワー調整が難しく、本来ならば5%ほどのエネルギーで射出しようとしたものの、80%以上の出力を出してしまい、操縦者も内心で実はかなり焦っていた。

殺す気がなかったというのは本当だ。

最悪の場合は殺してしまってもいいと思っていたのは事実だが、それでも善良な強者

を好き好んで殺したくはなかった。小さな脅しを何度か行い、その中で何か感じるものでもあればいいと思っていたのだが、まさかこうなるとは思いもしなかったのだ。

(……ああ。こいつは絶対に欲しい、ここで死んでもらうては困る)

だが、それでも彼女は生きていた。

自分が同じ立場なら確実に諦めているような状況の中でも、彼女は最後まで諦めることなく生き続けた。その事実は女にとって、どんなに強いISや技術を持っていることよりも価値の高いものだった。

『私のナノマシンをやる、だから絶対に死ぬんじゃねえぞ。次会った時には全力で勧誘してやるからよ、生きて顔見せろ』

なんと身勝手な言葉なのかと自分でも思うような言葉を吐きながら、血塗れになって落下して来た少女を抱き抱え、緊急用を持ってきていたナノマシンを乱暴に噴射する。

これは奴のお手製だ、効能に関しては問題ないだろう。

ISに関しては最早作り直した方が早いレベルだろうが、そのことに関してはそつちでどうにかしてもらえないかな。今回の件に関してはこの少女に非はないのだし、大丈夫だろう。

背後から走ってくる数人の足音を聞きながらピクリとも動かない少女の顔を見つめる。

戦闘中にも思ったのだが、やはりとても綺麗な顔をしていた。

こんな顔を傷付けたことに思うところはあがあるが、今はそんなことも言ってもらえない。それでも、少しでも胸が痛むのも事実で……

(まあ、今度会った時には手土産の一つくらい持って来てやるか) そう考えながら女は一瞬でその場から姿を消した。

24 最強は逃げ出せない

side 千冬

織斑千冬にとって綾崎奈桜（直人）という少女（少年）は不思議な人間だった。

出会いは4カ月ほど前。

本来ならばあり得ないIS適性の再々検査という非常識なものが、ある少年を対象に行われるということを聞き、偶然にも同じ場所に居た彼女は興味本位で（＋休息のため）その場に立ち会った。

彼の学校の教師陣は『女性にしかISが動かせないのなら、女性よりも女性らしい彼にISが動かせないはずがない』という訳の分からない根拠を元に再々検査を希望したという。

その話を最初に聞いた時には彼女も素直にこの国の将来を憂いたものだが、実際に試験会場に現れた彼を見て目を疑った。

（……………あれが、男……………だと……………？）

服装こそ一般的な男子学生が着るような私服であったが、彼の容姿はそれこそ女性よりも女性らしかった。

後ろ手に纏められた長い黒髪はよく手入れされているのか非常に美しく、その細い身体は自分から見ても男性味が薄い。顔付きと自然と作り出される表情の具合は、普段から狼だとか鬼神だとか言われてしまう容姿をしている彼女が羨ましくなるほどに優しい美人を体現していた。

(男装をした女……うーいや、酷く分かり難いが骨格は間違いなく男だ。つまり彼女、いや彼は本当に男だというのか……)

適性検査について説明を受ける彼は、高めの地声とゆったりとした丁寧な言葉遣いのせいか、見れば見るほど男性というイメージから乖離していく。

丁寧で物静かな所作から、あれが自身の問題ばかり起こす弟と同一年だという事実はどこか頭の痛くなる千冬だったが、そんなことを考える余裕すら消えることとなってしまった。

案の定というべきか、彼はISを動かしたのだ。

それも適性Bという、自身の弟と変わらず、一般的な女性と比較しても高水準なレベルで。

更に問題だったのはその後のことだ。

再々適性検査ということもあってか、その場に居合わせた人間は3人の研究員と千冬、加えてもしもの為にと別部屋に待機していたとある与党政治家の秘書だけだったの

が原因の1つでもあるだろう。

この事実を隠蔽することが決定された。

そもそも織斑一夏という例外が現れたことですら日本政府の処理能力は限界だったのだ。

ブリュンヒルデの弟であるためになんとか各国や委員会、国民との関係も上手いき、平和的な路線を保つことに成功していたが、そこに更にもう1人となるとどうにもならない。もし彼が日本ではなく他の国で見つかっていたならば話は別だったが、同国から2人目は流石に無理だ。

「君に女装をして欲しい」

仮にも政治の一端を担う大臣が真剣な顔をしてそう頼み込む姿に、千冬もこの世の終わりだと嘆いた。

もちろん、本当に終わったのは千冬の次の休みだったのだが。

その後、彼の世話役を任された千冬は内心複雑な気分であった。

別に休みが潰されたからとか、余計な仕事が増えたからとかいう理由は少ししかない。

まず、与党の掲げる男性操縦者に対する基本的な意識は、野党とは对象的に『非研究・要保護』だ。

それは日本がISの先進国として女性操縦士の育成と地位向上に多くの金と労力を注ぎ込んできたことが理由の1つであり、万が一でも男性までISを操縦できるようになれば、全てが無駄になると恐れられたからだ。

そういう理由で彼の存在は現状、総理と大臣、そしてその秘書。当日居合わせた千冬と3人の研究員に加えて、彼の生活サポートを要請した乙女コーポレーションの社長と幹部社員、そしてIS学園の上層部のほんの一部しか知らないという状態になっている。

彼の学校の方には『IS適性はなかったが卒業後に研究員として雇用する』と通達し、卒業式のみ参加するという方向性になった。

だがこの時、本当に問題になったのが彼の実家、つまり孤児院の方だ。彼は貴重な男性操縦者であるため、その危険を可能な限り排除する必要がある。

それ故に孤児院で生活する子供達が人質に取られないよう重要人物保護プログラムが実行されたのだが、その時の子供達の荒れ様には千冬ですら胸が痛くなった。

彼が帰ってこないと知って泣き喚く子供も入れば、怒り出す子供達、果ては殴りかかってくる子供までいた。

偶然にも孤児院を経営しているマザーと呼ばれる人物が乙女コーポの社長と面識があったらしく、彼女の説得は簡単だったのだが、子供は理屈では動かない。

最終的にはマザーの言葉によって場は収まったのだが、そこにいたほぼ全ての子供達が泣き出してしまおうという現場で一人棒立ちする千冬の姿がそこにはあった。

この時が千冬が彼に罪悪感を抱いた最初の瞬間だった。そしてそこで小さく芽生えた千冬の罪悪感は、彼と関わる時間が増えるほどに増大していくこととなる。

今思えば死にたくなるくらいに恥ずかしいことを、眠気や疲れに任せて彼にしてしまったことは置いておく。それでも一時的な世話役として彼と関わり出したことで、千冬は彼との相性が存外良いということに気付き始めた。

普段は親しい人間の前でさえも真面目を貫く彼女だが、自分の恥ずかしい姿をこれでもかと思わせてしまい、その全てを受け入れ飲み込んでくれた彼だからなのか、彼がIS学園に転がり込んで来る頃には少しの冗談を交わすくらいの仲になっていたのだ。

(……お前がもう少し意地の悪い人間だったならば、私も楽だったんだがな)

あまりにも汚れが無さ過ぎる。

何の罪もない彼に多くのことを押し付けている身としては、その人柄の良さを見せ付けられるほどに自分の罪を自覚させられる。

千冬と言えどもどんな人間でも大切に思うわけではない。

身内に対しては強い愛を持つ彼女だが、そうでなければ一歩引いた目で見る事がで

きる人間だ。そのため本来ならば何の問題もなかったはずだたなのだが、例外はたった数ヶ月で彼が自分の身内の領域に踏みこむことができるほどに千冬との相性が良かったことだろう。

『母』と形容されることの多い彼だが、その真骨頂は一般的にイメージされる”母性”というものを誰よりも強く有していることだ。それが原因となつて彼を母として慕う人間が多く、その傾向は母を失った、又は求める人間に顕著に現れる。

……それは千冬ですら例外ではない。

いや、甘えられる存在というものを持ってなかった彼女だったからこそ、誰よりも強くその深みにハマった。

そしてハマればハマるほどに、彼女の中の罪の意識は増大していった。

(できるならば、全てをお前に話してしまいたい、甘えてしまいたい。そんな考えを持つてしまう自分が愚かしい。本来ならば支えるべきはずの私が、なぜお前に甘えている……)

別の出会い方をしていたならば、こうはならなかったかもしれない。

教師と生徒として、年上と年下として、果ては女と男として。

何の憂いもなく、歪むことのない純粋な思いを抱けただろう。

ただ最初の出会いで間違えたが故に、たった1つの判断をしてしまったが故に、彼女

は歪んでいく。彼女の愛も、彼女の心も、その信念でさえも、彼が傷付き、自分を犠牲にする度に捻じ曲がっていくのだ。

彼が戦い傷付く宿命にあるにも関わらず。

「綾崎!!」

IS学園の地下に存在する政府の緊急治療室に運ばれる彼の姿を見て、織斑千冬は大いに取り乱していた。

そもそも事の発端はクラス代表戦中に突然出現した2機の無人機と1機の有人機だった。

学園全体のシステムが掌握され、学園中の訓練機が機能を停止していた状況の中で、学園内で自身の機体を持っている生徒達は1人残らず校舎付近に現れた無人機の対応に駆り出されていたのだが、そこに彼の姿が無かったのだ。

シールド内で戦う自身の弟に対しても強く心配はしていたが、そこには仮にも一国の代表候補生まで上り詰めた少女が居た上に、通信は問題なく届いていたのでまだマシだった。

だがもう1人、観客席にいた彼については通信にも繋がらずISの反応すらも探知で

きないという有様。監視カメラすら機能しない中でなんとか肉眼を用いて彼の姿を発見した時、織斑千冬は絶望した。

明らかに高性能なISにのった実力者に対してたった1人で応対する彼の姿。

彼には攻撃できる手段がない。……どころか、そもそもこうした命懸けの戦闘自体を避けるべき精神状態である。

にも関わらず、彼はアリーナに閉じ込められた生徒達を守るべくその身で一心不乱に時間を稼いでいた。

かつてこれほどの無力を味わったことが織斑千冬にあっただろうか。

いくら彼が時間を稼いだところで、増援を送ることなどできやしない。訓練機すら動けない今、自分で向かうこともできず、ジャミングをされているのか通信によつて声を伝えることもできない。ただそれでも、見ているだけ、祈るだけというのも自分の立場が許さない。

織斑千冬は唇を噛み締め、血が滲むほどに拳を握りしめながら指示を出していく。

驚異的な戦闘力を見せる有人機相手にひたすら時間を稼ぐ彼を見捨てて、弟と避難誘導の為に指示を下す。意図的に視線を逸らそうとしつつも、それでも常に意識だけは引つ張られていた。

そうして短くも長い時間が過ぎ、弟達が辛うじて無人機を倒し、セシリア達が無人機

を押さえ込み始めた頃に、異変は起きた。

大気を震わすほどのエネルギーを収束させた敵有人機がその矛先を彼に向けたのだ。

「なっ……!!」

彼は自身の背後に生徒達が居ることを確認し、直ぐに上空へ飛び立った。

自身に死が迫るその瞬間でさえも、彼は他者のことを考えていた。

「ふざけるな!!やめろおおっ!!」

ゴツと紅い閃光が放たれた。

空を染めるような圧倒的なエネルギーの奔流に彼は飲み込まれ、気付いた時には彼女はその場に座り込んでいた。

（何がブリュンヒルデだ……! たった一人の子供を救うことができず、何が世界最強だ……!）

治療室の外で壁に頭をぶつけながら千冬は歯を噛みしめる。

自身の無力さは彼と出会ってから何度も痛感していた。

何もできない自分の弱さだって嫌という程に理解していた。

だが、それすらもしていたつもりだったということに今更気付かされた。

自身の弟とその友人の少女が彼を見つけた時、それは酷い有様だった。全身を黒く焦がされ、血と火傷に塗れながら稼働するナノマシンによってなんとか生かされている状態。溶解したI Sの装甲が皮膚と同化し、引き剥がすことも困難というレベルの大怪我。

乙女コーポレーションから治療用ナノマシンが急遽送られてきたことにより、現在は緊急治療室内で溶解したI Sを摘出しながら慎重にかつ早急に再生を行なっているが、何かしらの後遺症が残ってもおかしくないことは容易に想像ができる。それに例え身体に障害が残らなくとも、これほどの苦痛を味わった精神がまともであるはずがない。

そもそもナノマシン自体が万能ではないのだ、この規模の再生を行えば一体どれだけの負担が彼の身体にかかるか……

「私はお前に、何もしてやれない……いや、違う！何もしてないんだろう！何をしていたんだ私は！私は、お前に、貰うばかりで……何も！」

自分は誓ったはずだった。

ブリュンヒルデとしての自分で弟を守ることになる、故に非力ではあるが織斑千冬としての自分で彼の力になろうと。こちらの都合で巻き込んでしまった彼くらいは、自分の手で守ってやりたいと。

けれど蓋を開けてみれば守られていたのはいつも自分だった。

知らずうちに自身の生活に幸福と安らぎを与えてくれて、知らずうちに自身の弟とその周辺の緩衝材となってくれていて、知らずうちに教師としての自分のサポートすらも行なってくれていた。

……反面、自分自身が彼に対して出来たことなど数えることすらできなかった。それほどに織斑千冬という人間は戦うこと以外に能がなかった。

(その戦うことさえ満足にできなかった私に、一体何の価値がある……!!)

これほどの苦痛を与えてしまった彼にまだ隠していることがあるという事実には苦しんだ。これほどの苦痛を味わった彼が今後ともまだ性別を隠すなどという苦しみを味わい続けなければならない事実には、千冬は自分の首を絞めたくなくなった。

けれど死ぬことは許されない。

それは全てを投げ出し逃げ出すことと同義だからだ。

織斑千冬は逃げ出せない。

逃げ出してしまえば自分以外の全ても道連れにすることに繋がるから。

(ああ、やはりそうなのか)

……故に、織斑千冬はこの結論に至るしかない。

この結論以外に至るべき場所が存在しない。

なぜならそれが織斑千冬だからだ。

そうでなければ織斑千冬ではない。

携帯電話を取り出し、弟やその友人達からかかってくるコールを意図的に全て無視して、たった1人の……親友と、今でも呼びたいとは思っている相手に電話をかける。

数分のコールの後に出了どこか余所余所しい彼女に気にすることもなく、ただ決心を固め、その用件だけを伝え、電話を切った。

「……東、暮桜を動かせるようにしてくれ」

圧倒的な力による自己実現。

例えば世界の全てを敵に回すことになったとしても、自身の理想の実現のために織斑千冬は力を振るう。

そうして彼女は実現する。

世界を実現せざるを得ない方向へと捻じ曲げる。

それが天災の友人であるが所以、

類に呼ばれた友であるが所以、

彼女自身も天災の1人である所以。

(結局私には、力しかない……)

こうして最強は取り戻す。
理想実現のための手段と、苦しみを。

24. 5 一方その頃

side??

「あーっ！やっちゃまったあああ!!」

青白く照らし出された薄暗い一室、埃と機材に塗れたその部屋に現れたのはIS学園へ襲撃を行った1人の妙齢の女だった。

全身装甲型のISを解除すると茶の長髪を後ろ手に縛りながらソファーに雪崩れ込み、片手にひっ掴んだ缶ビールを掻っ食らう。

思い出すのは先程まで対峙していた相手。

一般的な国家代表候補生程度なら片手間にボコボコにできる實力を持っていると自負しているはずの自身と、互角以上の戦いをしてみせた1人の美しい少女の顔。

(マジでよく生きてたっつーか、あんな逸材殺してたら悔やんでも悔やみきれねえわ……)

事実、今回の戦闘において自身が終始優勢に立ち回っていたのは機体性能の差という一点に尽きる。

少女の乗っていたISは、広域殲滅兵器『メテオクイーン・サラマンドラ』に抗って

みせた棒状の武装を除けば特筆すべき特徴は一切無く、それどころか機体の基本性能に關しては打鉄やラファールと変わらないか、一部では劣るレベルで平凡だった。

それに対してこちらは最新の技術をこれでもかと積み込んだ『第四世代機の魔改造型』。

基本の機体性能はあらゆる機体を過去にするレベルで完成されており、いくつかの兵装はそれ一つで従来の I S 程度ならば例え何体居ようとも一撃で確実に葬ることができるとの威力を誇っている。

それほどの圧倒的な性能差があったからこそその先の戦闘であり、同じレベルの機体でぶつかり合うことを想定すれば、やはりあの少女は自分に匹敵するかそれ以上の実力を持っているかと断言することができた。

（しかもただ強いってだけじゃねえ……この私が見惚れるくらいの美人で、呆れるほどの聖人ときた。トラウマ抱えてたみてえだが、今考えるとそれすら魅力の1つってか。あー、なんかマジで欲しくなってきた）

女は同性愛者であった。

異性もいけるのかという所は関係無いので今は伏せておく。

とにかく、本来ならば事が終わるまで足止めするだけで良かったにも関わらず、ああして機体の性能を公開するリスクを犯してまで戦闘を続行したのはそれが理由でも

あったのだ。

あまりにも誠実過ぎる好みの美少女に興味をそそられ、色々な表情を見てみたかったという理由だけでちよっかいをかけてみた。そうしてみればあれやこれやと魅力を見せ付けられ、いつの間にか夢中になっていたというのが今回の顛末である。

それ故にもちろん、自分のISが想定以上の威力でレーザー兵器をぶっ放した時には内心驚愕と絶望で大混乱を起こしたのだが……

「ちよつとO（おー）ちゃん!!とんでもないことしてくれたね!!」

女が缶ビールを飲み終える頃、ガシヤアアン!と自動ドアを蹴り飛ばすという原始人も真つ青な方法で部屋に入ってきた人影があった。

真つ青なドレスにうさ耳という、いい大人がするにしてはあまりにも痛々しい格好をした、これまた妙齢の女だった。

「あー? ナノマシンのことか? 仕方ねえだろ、あれに関しては反省も後悔もしねえぞ?」
「違うよ! Oちゃんかぶっ放した女の方だよ!! あれオトちゃんの所のお気に入りだったんだよ!! オトちゃんから激おこで連絡来たんだけど!」

「はあ!?! 嘘だろオイ!?! んなこと聞いてねえぞ?」

「束さんだつてさつき知つたよ!! しかもあのちーちゃんが物凄く溺愛してる子だから、バレたら冗談抜きでぶっ殺されるって言われたんだけど!?! 束さんどうしよう!?! 正直今

まで生きてきた中で一番テンパってる!!」

「ブリュンヒルデもかよ!! あいつマジで何者だ!?! つつーかこのままだと私等確実に死ぬじゃねえか!!」

「たつたたつ束さんは関係ないもーん! 全部このOちゃんがやったことで、束さんは全くの無関係です!!」

「テメエこら! お前の作った兵器が威力の調整もできねえポンコツだったから悪いんだろが! お前も共犯だ!!」

「はー!?! 練習すれば調節くらいできるようになりますー! ただの練習不足ですー!」

「あんな凶悪なもん何度も練習できるか! つつーかそれなら事前に使い方くらい教えとけや!」

わーぎやーと言い争ういい年をした2人の女。

そもそも今回の計画自体がほとんど独断であったということが2人（主にうさ耳の方）の焦りに拍車をかけていた。

一応最新型のナノマシンを最速で学園まで届けたとは言え、もし例の少女が亡くなっていれば文字通り2人は様々な方面から木っ端微塵にされることになるだろう。

加えて唯一の親友から失望と憎悪の目で見られ、その弟と実の妹から完全な敵として認識されるまでが実際の現実である。

うさ耳はもう必死だった。

……そんな時、

ひねもす♪ひねもす♪もすもすひねもす♪

ひねもす♪ひねもす♪もすもすひねもす♪

彼女の携帯電話が鳴り出した。

表示された名前はもちろん……

【織斑千冬】

「ひえっ!?!」

「い、いやああ!!ちーちゃんからの電話とか何年ぶりなのに今は絶対に出たくないいい!」

「出ろ!出るんだバカウサギ!今出ないとむしろ怪しまれるぞ!!」

「もう怪しまれてるんだよこのバカ!この世界に無人のISを作る天才なんて東さんしかないだろ!!」

「だから有人機使えって言っただろうがああ!『ゴーレムくんの初出勤だー!』なんて

言つて強行したのはお前だろ!!」

「うわああ!!!」

止まらない言い争い、終わることのない責任のなすり付け合い。

そんな中、携帯電話の着信が2周目に突入した。

コールは未だ止むことはない。

「……ウサギ、大丈夫だ。死ぬ時はいつしよだ」

「絶対?絶対なんだよね?東さん一人で惨殺されるのとかごめんんだけど」

「どうせ死ぬんだ、諦めていこうや」

「うう、なんであんな女1人殺しかけただけでこんなことに……」

そんな認識だからこうなるのだ、なんてことを言える人間はこの空間には存在しなかった。ちなみにその女が実は男であることを知っている人間もここにはいない。

そもそもこうして今日に至るまで彼女達にとっては綾崎奈桜など、ただの一般的な女生徒という認識すらないほどに興味の無い存在だったのだから。

うさ耳の女は震える手で電話を取る。

「も、もすもすひねもしゅく?ど、どつたのちーちゃん?珍しいね?たつ、東さん今忙しいんだけどな?」

震える声で嘯みながらも冷静さを装い、世界で唯一の親友からの言葉を待つ。しかし

親友からの返答は無く、代わりに何かを堪えるような呻き声が聞こえてくるばかり。

普段のビシバシと直球ストレートを次々と顔面に投げ込んでくるような態度とは違う有様に、うさ耳は困惑した。

「……………えつと、ちーちゃん？」

『……………頼みがある』

「た、頼み!? な、なんだそんなこと!?! 任せてよ! ちーちゃんのためならこの束さん、なんだってしようじゃないか!!」

責められるのではないかと、殺害予告をされるんじゃないかと、『お前を殺す』と言われるのではないかと恐々としていたうさ耳はその言葉にホツと息をついた。

殺されるくらいならどんな頼みを聞いてもいいと。

今なら専用機だろうとなんだろうと最新の技術で作ってやろうと。

それくらいにテンションが上がっていた。

しかし次の瞬間、そんな気分は地の底へと叩き落される。

『……………暮桜を動かせるようにしてくれ』

(あ、これ殺害予告だ)

それから先の会話は殆ど覚えていなかった。

真つ白に染まったバカウサギは適当に相槌を打ちながら電話を終えると、心配そうにその様子を見ていた茶髪の女性に向かって倒れこむ。

「おい！どうした！傷は浅いぞ!!」

「ちーちゃんが、ちーちゃんが暮桜を直せって……東さん知ってる、これ絶対『直した暮桜で兎狩りを始める』って言葉の暗喩だよ。『使える中で最強の武器で貴様を殺す』って言葉の暗喩だよ。東さんの死が確定しました」

「バカウサギ!?バカウサギイイイ!!」

その日から2人の新人が乙女コーポレーションに入社した。

2人の新人はIS開発のために1ヶ月間人間らしい生活の一切を奪われ、まともな睡眠すら許されない監禁生活を余儀なくされたという。

25 残された者達

side 一夏

「一夏!!」「一夏さん!!」

「箒にセシリア……無事だったんだな!」

クラス代表戦中に起きた襲撃事件。

その最中に起きた悲劇を見てしまった鈴と俺は、他の生徒と接触することで余計な情報が錯綜しないよう、共に寮監室に軟禁されていた。それは箒やセシリア達も同様らしく、2人は教師達に押し込まれるようにして部屋へとやって来た。他の専用機持ち達も違う部屋に押し込まれているらしく、今回の件の重大さというものを改めて感じる。

徹底的な情報統制。

怪我人が1人も出ていないのならこうまでにはなっていないなかつた筈だ。しかし実際には混乱中での押し合いや無人機の最初の一撃で小さくとも怪我をした者達が確かにいる。そして加えて……此度の重大さという観点におけば自分達以上に痛感している者も他にはいないだろう。

「私は上級生の先輩方と校舎の方に出現した敵機の対処に当たっていましたの。先輩方

との協力もあって何とか無力化には成功したのですが、増援には間に合いませんでした。申し訳ありません……」

「私は山田先生と連携して生徒の避難誘導を手伝っていた。それ故に全体の状態はある程度掴んでいたつもりだったが……一夏よ、何が起きた？ 死者は出ていないのではありませんか？」

(……流石に箒にはバレる、か)

なるべく感情を表に出さないようにしていたのだが、付き合いの長い箒にはお見通しだったのか彼女は心配げな顔をしてこちらを見ていた。俺の反応と現状から見ても彼女は大方の事情を予測してはいるのだろう。

……そもそも感情を隠すなんて器用な真似が自分にできるはずもないので、こうなるのも当然と言うべきか。

俺自身、先程まで握り締めた拳から零れ落ちる血液を鈴に指摘されるまで気付かないくらいには、無意識に冷静さを失っていたのだ。多少落ち着いたとは言え、心の中は今も大いに乱れている。

「確かに死者は出てないけど、それも」今の所は” って話よ。大多数の生徒は無事だったけど、怪我人は確かに出てる」

「……つまり、私達が聞いているよりも事態は深刻だということか」

「生徒を預かっていている性質上、余計なことは言えないでしょう？ I S 学園自体の信頼性が疑われるから。……まあ、完全にシステムを乗っ取られた時点で信頼性もへったくれも無いんだけどね」

つまりはそういうことだ。

最初に聞いた時には自分も納得できなかったが、教師陣の苦労を考えると何も言えなかった。それほど彼等も憔悴しきっていた。

「……一夏さん？ それよりもお母様は、お母様はどこにいらつしやいますの？ ここに来るまでもに見当たらなかったのですが……織斑先生のお手伝いをなさっているのですか？」

セシリアが核心を突いてくる。

思わず身体に力が込み上げるが、俺の手を握る鈴がそれ以上を許さない。

……情けない、こんな非常時にあつても自分は誰かに助けられているのだ。もう一度心に鞭を入れ、あの光景を思い起こしながら2人に視線を向ければ、セシリアも今の自分の言葉で何かを察したのか、目端に涙を溜めていた。

(……クソッ！)

俺には真実を伝える義務がある。

少なくとも、彼女を慕っていたこの2人には彼女の身に何が起きて、今どんな状態に

いるのかということ伝える必要性がある。

『今回のことは誰の責任でもなければ、敵以外の誰を責めることもできない』

鈴には何度もそう言われたが、それでも目の前で散っていった彼女を見ていることしかできなかった自分に責任が無いと思うことはできない。

だからせめて、この役割は俺がしたい。

この残酷な事実を伝える役割を、守られることしかできなかった俺が引き受けたいと思っただ。

……鈴だって同じことを思っているだろうということから目を逸らしてでも。

「綾崎さんは今……学園の治療室で緊急手術を受けている最中だ」

俺達はその異変に気付いたのは、無人機だと発覚した敵ISを、鈴とのコンビネーションによって無力化した直後だった。

無人機との交戦は本当にギリギリの戦いだった。

幸いにも敵のレーザー兵器は早い段階で潰していたために問題はなかったのだが、それでも敵の基礎性能の高さもあってかなりのエネルギーと時間、そして思考を費やすこととなり。

最終的には鈴が投げ飛ばした瓦礫の裏に隠れて接近し、衝撃砲のサポートを受けながら強引に斬りに行くことでなんとか勝利を勝ち取った。

しかしその時点ではエネルギーも体力も集中力も消耗し切っており、情け無いことに立ち上がる気力すら無く。勝利の余韻と安堵感に浸りながら冷静に周囲を見渡した時に、何故かバリアの外である筈のアリーナが異常に損傷していることに気付いたのが最初のきっかけだった。

「おりむー！あやのんが！あやのんが!!」

アリーナから逃げ遅れた生徒達の中にいた布仏さん、おかしな名前を付けることに定評のある彼女が指し示した名前に俺達はハツとした。布仏さんが叫んだ名前に俺が戸惑っている、その間も冷静に事態を見極めようとしていた鈴がハイパーセンサーによつて2つの機影を発見する。

「一夏！あそこ!!」

鈴の言葉に釣られて自身もその方向へと視線を向けると、専用IS”恋涙”をその身に纏った綾崎さんが、強烈な発光を伴って佇む一体の巨大なISから、逃げる様に上空へと身を翻す光景が目映った。

『メテオクイーン・サラマンドラ』

いつの日にか聞いた覚えのある女の声。

けれどそんなことに構っていらられるのも束の間、文字通りに世界が真っ赤に染まった。

たった一機のISに撃つにはオーバーキルが過ぎるあり得ない広範囲殲滅兵器、それがその悍ましい程の赤色の正体だった。

背後から響く鈴と布仏さん達の悲鳴と叫び、通信から千冬姉の声も聞こえてきていたが、そんな中でも俺は何が起きたのか理解することすらもできず、受け入れることすら頭も心も拒んでいた。

目の前で起きた光景があまりにも現実離れし過ぎていて、あまりにも受け入れることに難があり過ぎて、脳が自然とその動きを停止していた。

10秒にも満たないその時間の間、布仏さんは引き止める友人達を振り解いて建物の影から飛び出し、鈴は行く手を阻むアリーナのシールドを必死に破壊しようと努力していたが、俺はただ呆然としておくことしかできなかつたのを覚えている。

今思えばあまりにも情けない。

赤く塗り潰された空が普段の色を取り戻した時、そこに残っていたのは血と火傷に塗れた、以前の美しかった容姿をほとんど残していない彼女の姿。薄桃色と薄水色の淡い色彩を帯びていた彼女のISも黒色に変色しながら溶解しており、最早身体もISも機能しているとは言い難い状態だった。

本来ならば一定のダメージを受ければISは自動的に解除されるはずだが、それさえされることなく残り続けていたのは驚異的な熱量によつて絶対防御を含めた根幹のシステムから破壊され尽くしていたからだろう。

それとも、彼女の身を守り続けたのはIS自身の意思とでも言うべきか……

無防備に落下してくる彼女を敵機が確保し、アリーナの壁に横たわらせた状態で何かを噴射していたが、当然俺はこの時動くことなどできていない。完全に魂が抜けていた俺がようやく自分を取り戻したのは、鈴が涙を浮かべながら殴ってきた時だった。

『いつまで呆けてんの！あんなならシールド壊せるんでしょ!?自分に出来ることすらしないで寝惚けてんじゃないわよ!!』

その言葉によつて自分を取り戻した俺は、残りのエネルギーを使用して零落白夜を一瞬だけ発動させることでシールドに穴を開ける。同時にエネルギー枯渇によつて白式は待機形態に戻ったが、鈴の甲龍を追つてフラフラの身体に鞭を打ちながら彼女の元へと向かった。

……酷い怪我、としか言いようがなかった。

全身に皮膚が爛れるほどの大火傷を負い、特に両手は指先から手首にかけて大部分が炭化してしまっているほどの重症。溶けたISと皮膚が同化しており、ISを取り外さうとすれば皮膚ごと引き剥がしてしまう様な有様。

呼吸は浅く、辛うじて生きていることは確認できたが、それすら今直ぐに止まってしまつてもおかしくないほどに微弱なもので。

光の消えた瞳は何も認識できていないのか微動たりともしない。

……記憶の中にある美しく優しかった彼女と重ねようとすればするほどに、どうしようもない喪失感が胸を走つた。

「っ！千冬さん!!怪我人が1人、今直ぐ治療が必要よ!!救急車なんかじゃ間に合わない!!……学園の地下!?!医者は!?!……分かりました!直ぐに運びます!手配の方は任せますから!」

「リンリン!開かない扉は壊していいって許可貰つてきたから急いで!あっちの扉なら人が少ないはず!」

「よくやったわ!あんたは他の生徒達をお願い!!……死ぬんじゃないわよ、綾崎!!」

……結局、そんな惨状を前にしても俺は何もすることができなかった。

親しい友人が瀕死の状態でも居るにも関わらず冷静に上官に判断を求めた鈴に、ここへ向かつて走ってくる間にもこの状態を予測して手筈を整えていた布仏さん。

2人は1秒足りとも時間を無駄にすることなく、的確な判断をしていた。

(俺は、何も考えずにただ突つ立ってただけだ。時間を無駄にして、思考することもしないで、見ていただけの愚か者。もし2人がこの場に居なかつたら、俺は彼女を……!)

死なせてしまっていたかもしれない。

……いや、今も死の淵に彼女はいるのだから、その考えすら間違っている。あの時、俺が呆けていたせいでシールドを破壊するのが遅れてしまい、あの一瞬の遅れのせいで彼女は助からないかもしれない。

地下の緊急治療室に彼女を送り届けてから追い出される様にして鈴木もこの部屋に送り届けられた。

彼女の今の状態を知っている人間は恐らく姉以外には存在しない。

しかしその肝心の姉に対しても連絡はつかない。

恐怖と不安に押し潰されそうになる。

俺達の加勢に入ろうとした瞬間に突如現れた敵有人機。

驚異的な性能を持ったそんな相手に対し、彼女は時間を稼ぎながら逃げられない生徒達に被害が及ばない様に立ち回っていたそうだ。もしそんな性能の敵の有人機がこちらに加勢しに来ていたらと考えると寒気が走るし、全滅していたのは間違いないだろう。

(……やっぱり、守られちゃった)

そうなることは予想していた。

いつかこうなる日が来ることは分かっていた。

けれどそれでも、想像していたよりもずっと早く来たその日に、実際に感じる無力感
は思っていたよりもずっと凄まじかった。

一連の説明を終えてセシリアと箒の方へと目を向けると、2人は思っていたよりも大
きな取り乱し方はしておらず。

ただ俯き、拳を握って自分の心を抑え込むだけ。

きつと数週間前までの2人なら大きく怒りや悲しみを表に出していただろう。

……恐らく、2人が今感じている感情は自分と同じものだ。

自分にもつと力があれば何か変わっていたのではないかという酷い後悔。誰よりも
優しかった彼女が誰よりも傷付いてしまったという残酷な結果への悲しみ。特に俺と
箒は彼女が抱える悲しい現状の一端についてを千冬姉から聞かされていただけに、より
一層その思いは強かった。

なぜ彼女1人がここまでのことを背負わされなければならないのか、と。

「……幸い学園には最新の医療設備が揃ってるし、医師免許持ってる教員が何人か居た
から直ぐに対応ができたわ。乙女コーポレーションからも最新のナノマシンが届くつ
て千冬さんが言ってたし、問題は無いはずよ」

「そうか……嵐、お前がいなければと考えると私は恐ろしくて仕方がない。的確な処置

を行ってくれたこと、本当に感謝する」

「わたくしからも、ありがとうございまして鈴音さん……」

「お礼なんて言わないで、私だつて綾崎に助けられたクチだもの。あの子には……ママには、死んで欲しくない」

その言葉に何かを察したのか暗かった表情を少しだけ綻ばせる筈とセシリア。俺はその輪に入ることとはできない、3人とは多分、彼女の捉え方が違うから。

母を知らない俺では、彼女を母として見ることができないから。

(もう、1秒たりとも時間を無駄にはできない。本当に彼女を守りたいと思っっているのなら、今までの様にただ呆けている時間を作ることとは絶対に許されない)

もつと強くならないと。

もつともつと賢くならないと。

口先だけの覚悟を並べる時間はもう終わった

俺はもう覚悟を決めなければならない

全てを守るだけの力を得るために、自分を捨てるだけの意思と決意を

26 変わる心と変わらない想い

side 奈桜

夢を見た。

この手にとった剣で、誰かを殺してしまった夢だ。

目の前で驚愕の表情を浮かべるその誰かに対して、僕は「違う」「そんなつもりじゃ」と言葉を並べる。

そうして腕の中で息絶えた大切な誰かに向けて、僕は何度も何度も謝るのだ。誰かの血に塗れながら、声にならない叫びを上げ続ける。

私の代わりに、貴方が生きて……？

彼女はその言葉を最後に残した。

残された僕を責め立てる者など居ない。

それでも、そんな状態になっても迫り来る者達が居る。

悲しみに浸る暇も無い。

謝まり後悔する時間すら与えて貰えない。

彼女の死を悲しむ者は何処にも居らず、

彼女の生きた証は何処にも残される事無く、
僕が引き起こしたたつた一度のミスによって、
彼女の全てがこの世界から失われるのだ。

僕が彼女を殺した。

この世界の何より大切だったにも関わらず。

後に残ったのは冷たく鉄臭い不快な血と臓物の感触だけだ。

彼女に関する物は何一つ残りはしなかった。

戦う度に思い起こす

剣を振るう度に思い浮かぶ

目の前で

自分の手で奪ってしまった

大切な誰かのその顔を

そうして振れなくなった

そうして戦えなくなった

全てが終わった時には自分のした事を理解してしまっていて

頭も身体も心も、生きている事を拒み始めた

僕は全てから逃げだしたかった

けれど、彼女が残した最後の一言が僕がそうすることを許さなかった

あの言葉が僕にとつての救いだったのかは分からない

ただ一つ確かなのは、

僕という存在もまた、あの瞬間に彼女と一緒に死んでいたのだ

今ここに居る”僕”はきつと、————

「……………」は………」

目を開けると真つ暗な知らない天井。

妙な夢を見た気がするが思い出すことはできない。

ただ、自分がどうしてこんな場所にいるのかということは簡単に思い出すことができた。

（ああ。”私”、生き残れたんだ）

あの時自分を襲った赤の奔流、身体中が溶かされていく感覚を感じながらも生きなければと自分を鼓舞して立ち続けた。

その甲斐もあったのだろうか。

自分はこうして生き残り、外の静けさから考えて騒動も無事に収まったと想像できる。

(……でも、身体中包帯だらけで、ところどころまだ動かない。とても無事とは言えないかなあ)

少し声をあげただけで喉が痛くなる始末だ。

包帯の隙間から見える右目の視界もボンヤリとしていて、無事である箇所の方が少ないんじゃないかというくらいの状態。間違いなく千冬さんや一夏くん達に心配をかけてしまっているだろうと思うと途端に気が重くなる。

それでもあの会話の流れから突然あんな攻撃をぶつ放してくるなんて誰にも想像できないと思う。あれにはいくら避けるのが得意な私だって全く反応することができずに直撃を食らってしまった。

私のトラウマを治す的な会話をしておいて全力で殺してくるとか、あのお姉さんは頭がおかしい人だったのだろうか。

それとも『お前を殺せばトラウマも殺せるだろ！』的な？

どちらにしても狂人なことに間違いはない。

戦っていたのがペルセウス持ちの私で良かったというべきだろう。

(いや、よくないですよね……私のIS、もう絶対原型ないだろうし……)

どうやって言い訳しよう？

許してもらえるかなあ……

許されるわけないよなあ……

これから借金地獄の毎日かなあ……

最悪の場合、乙女コーポレーションで一生変態チツクなコスプレ生活を送らされる可能性もある。そんな人の尊厳を投げ捨てるような真似はしたくないが、死ぬよりはマシなのだろうか？……どっこいどっこい？

そんな風にこれからの将来を憂いていると、少しでも動かした左手が何か当たったことに気がつく。

左目には包帯が巻いてあり、かつクビすら満足に動かすことができないので見て確認することはできないが、未だ臆げな触覚を頼りに何度かそれに触れると、それが人の手のような形をしていることが分かった。

「……あや、さっき……」

「ちふゆ、さん？」

「つ！！綾崎！起きたのか！！」

私の掠れた様な声もしっかりと聞き取って飛び起きてくれた千冬さんに嬉しさを感じる。

ただ、そんな泣きそうな顔をしないで欲しい。

ボンヤリとしか見えなくても分かる。

せつかくの美人が台無し……なこともない。

そんな顔も綺麗なんだから美人って凄い。

「大丈夫か!?どこがおかしな所は!?!」

「……だい、じよ、ぶ、です」

「っー声が、出しにくいのか……!?!」

「すこ、し……?!」

あの熱空間で呼吸していたのだから当然と言えば当然なのだが……いや、むしろこうして呂律が回らないのは、暫く声を出していなかったからなのだろうか? 感覚的にはそんな気がする。

(……?)

そういえば、自分がどれくらい眠っていたのか私は知らない。

近くに時計はあるはずだが、一時的に視力が落ちているのかよく見えないし……

「なんにち、ねむって……?!」

「……2週間ほどだ。最初の1週間はナノマシンで修復した部位を定着させるために意図的に意識を落としていたが、その後も意識が元に戻らず最悪も想定していたところ

だ。……よく頑張ったな」

2週間、それだけ眠っていればこんな状態にもなるだろう。

ペルセウスを握っていたが故に一番損傷の激しかった両手が、多少の感覚の違いはあれど回復していたのはナノマシンのおかげだったのか。

だとすればこの大袈裟すぎる包帯の下もそんなに酷い状態と言うわけではないのかもしれない。

ただ感覚が薄いだけだとすれば、それは嬉しい。

ちなみにナノマシンナノマシンと言っているが、実際にはそんなにいい事ばかりではない。単純に言えば一般的な治癒ナノマシンとは、欠落した部位の細胞に働きかけ、修復の方向を指示しながら回復力を飛躍的に向上させるといふ非常に高度な技術だ。

だが、本来ならば長期間かけてゆっくりと行うべき修復を無理矢理負荷をかけて高速で行なっているのだから、当然身体に良いわけが無い。

特に私はあのレーザー兵器に巻き込まれた時、通常ナノマシンの回復速度を最大にして、破壊されていく身体を同時に修復するなんてことを行なっていた。

……実際、どれくらい自分の寿命が縮んでいるのかなんて考えたくも無い。

それにまだ分からないだけで普通に考えれば確実に多少の後遺症は残っているだろうし、あの状態での強制再生など何処かで修復にミスがあってもおかしくないのは当然

だ。

2週間という大き過ぎる時間の損失も、そういう面で見れば徹底的な検査を行うことが出来て好都合だっただろう。

(それでも、勉強の遅れは絶望的かな……)

そんなことを考えていると、千冬さんが突然私の胸に顔を押し付けるように倒れ込んできた。

普段の彼女からは考えられない様な行動に、(あれ、寝不足で眠っちゃったのかな……?)なんてことも考えたが、未だ本調子でない耳でも小さな嗚咽が聴こえてくるのだ、誤魔化すことはできない。

「……ごめん、なさい」

心配をかけてごめんなさい

勝手なことをしてごめんなさい

迷惑をかけてごめんなさい

色々な意味を込めた私の謝罪に、千冬さんは顔を擦り付けるようにして首を振る。

嗚咽は一層大きくなる。

そんなつもりじゃなかったのに。

「違う、違うんだ! 謝るべきはお前じゃない……! 私に力が無かったから、私がお前を見

捨てたから……！お前を守ると誓ったのに！私はお前に助けられてばかりいるのに！！」

私の顔に涙をこぼしながら懺悔する千冬さん。

その大きく崩れた表情はまるで泣きじやくる少女のよう。

貴女のせいじゃないと。

貴女は教師として正しい選択をしたと。

私だって貴女に助けられていると。

そう伝えたいのに、言葉にならない。

伝えたい言葉が喉から出ない。

未だ本調子に戻らない自分の身体が恨めしい。

それでも、今にも壊れてしまいそうな目の前の彼女のために何もしないなんてことは

私の信念にかけて有り得ない。

例え彼女が私より年上の女性だったとしても、私には何の関係もないことだ。

当然のように、当たり前のように、私は彼女に手を伸ばす。

「ち、ふゆ、さん……」

震える両手を懸命に動かし、彼女の後頭部に手を回す。

そのまま重力に任せて彼女の顔を私の胸へと落とし、出せる限りの力を尽くして彼女を抱き締めた。

「あやさき……私は、私は……！」

「あり、が、とう……！」

「……っ!!」

私の言葉に一瞬だけ肩を跳ねさせた後、千冬さんは布団を握る力を強める。何かを噛みしめるように、何かを悔やむように。

きつと今度は『この状態で綾崎に気を遣わせるなど、私は教師失格だ』とでも思っているのだろうか。

真面目なところは彼女の良い所だが、こういう時にはよろしくない。

こんな言葉では私の本心は伝わらないのだ。

まだ数ヶ月しか共に時間を過ごしていない彼女には、伝えられない。

……だから、私はこう言おう。

ちよつとだけ大袈裟な言葉で。

けれど、嘘偽りのない私の本心を。

貴女だけじゃなく、私だってそう思っているということ。

少しだけ短いけれど、

私は貴女に伝えたい。

「だいすき、です、よ……っ？ちふゆ、さん」

貴女が私のことを大切に思ってくれているように、

私だって貴女のことを大切に思っている。

貴女が私を心配してくれているように、

私だって貴女のことを心配している。

いつも誰よりも真面目に仕事をして、

誰かの心配ばかりをしている貴女を。

……だから、そんな顔をして泣かないで欲しい。

私は貴女が偶に見せるあの笑顔が、たまらなく好きなのだから。

「お前は、卑怯だ……！ 私はどんどんお前に引き込まれていく。お前のせいで、私は知らないうちに弱くなつていくんだ！ 今だってそうだ！ 私はお前の前では強く在れない！」

「かまい、ません。つよく、なくても……」

「お前が近くにいると、私は直ぐに軟弱になる！ 私は甘えているんだ！ 教師でありながら、生徒であるお前に！ 守るべきお前に！」

「いいん、です。あまえて、も」

「私はお前に酷いことをしている、酷い負担を押し付けている！ 無能な私では何も返すことができない！ こんな私にはお前に甘える権利など……！」

「もんだい、ない……です」

「わたしが、あまやかしたい、から……」

そろそろ喉が限界だ。

腕にも力が入らなくなってきた。

強烈な眠気に襲われ、意識が薄れていく。

今いい所だったのに、自分のものながら融通の効かない体である。

消えゆく意識の中で、千冬さんが何かを言っていたような気がする。

けれど、それを聞き取ることも許されず、私の意識は落ちてゆく。

明日起きたらまた話をしよう。

その時にはきつと、楽しい話を……

たくさん笑って、たくさん話すんだ。

千冬さんが言いかけたことだって、きつと、教えて、もらえる……

27. 彼女は今

その日の放課後、一夏を含めたいつものメンバーは授業が終わると同時に物凄い勢いで廊下を爆走していた。

その理由はただ一つ単純な話で、それまで一切の接触が禁止されていた綾崎奈桜への面会が今日やっと許可されたからである。その話を真耶から聞くや否や、それまで予定していた全ての事を放り出して走り始めたのは彼等全員一切の打ち合わせもなく同じだった。

当然と言えば当然、今日この日をどれだけ彼等が待ち望んでいた事か。一夏でさえも唯一面会を許されていた自身の姉が羨まし過ぎて何度か直談判に行つたくらいだ。その度に『あいつに今負担をかける様であれば実の弟と言えど殴る』と直接的に言われ、『いや、殴る自体はいつもやられてるんだけどな』と返していたのも今や懐かしい思い出である。

「着いたー！」

「ここか!? ここの病室なのだな!? 一夏!？」

「3週間ぶりのお母様! 退きなさい鈴さん! 私が一番最初に会うんですわ!」

「いい加減にしなさいよ！あたしが先にママと会うのよ！ちよつ、そのデカイ尻で押さないでくれる!？」

「デカいとは失礼な！安産型と言つて下さいまし!!……あれ?」

「え?」

辿り着いた病室の前。

事前に一夏から手渡されていた紙には確かにその部屋に奈桜が居ると書いてあるのだが、そうして騒いでいる間にセシリアが扉を開けようとすると、ガタンツと音を立てて鍵が閉められている事に気が付いてしまう。そう言えばと病室に掛けられた札を見てみれば『e m p t y』の文字。つまり空である。果たしてこれは一体どういうことか、意味の分からない現状に4人が首を傾げていると……

「綾崎に負担を掛ける様であれば殴る。私は確かにそう言つた筈だな、一夏」

「……ひっ!?!」

「全員歯を食いしばれ、一撃で許してやる」

「……ぶはあっ!?!」

背後から全員の頭部に向けて水平に薙ぎ払われた出席簿。

紙で出来ている筈のそれは鋼の様な威力を持つて4人の頭部を打ち、全員を平等に水

平に吹き飛ばす。

千冬は奈桜への面会が許可された日、恐らくこの4人が馬鹿騒ぎを起こして騒がしくするという事は事前に予想していたのだ。それを見越して事前の一夏に対して本来奈桜が眠っている病室の向かい側の病室を教えておき、こうして背後からそれを襲撃する算段を付けていた。

つまり彼等はまんまとその罠に嵌った訳である。

千冬によつて開けられた部屋の中で、そんな彼等を苦笑いしながら見守っているのは当然にその彼等が待ち望んでいた奈桜だ。

「あ、綾崎さん……！」

「母さん！」「ママ！」「お母様！」

「ええと……『お久し振り』と言った方がいいのでしょうか？何分ほんとうに昨日意識を取り戻したばかりで、その後もつききまで検査ばかりを受けていましたので、全然日付の感覚が無くて」

「まさかあの夜に私と話してから3日も眠り続けることになるとは思わなかったが、これで私も漸く心を落ち着けられる」

「千冬姉マジで毎日綾崎さんのこと見に行ってたしな」

「そうなんですか？千冬さん」

「余計な事は言わなくていい」

「痛っ!?!さっきより痛っ!?!」

久しぶりにあった奈桜は、未だに全身に包帯を巻いている痛々しい姿ではあるものの、彼女自身はそれなりに元氣な様に見えた。

被害が酷かった両手と両足は今も素肌すら見えないくらいに包帯が巻かれており、左目に眼帯、そして髪も一部が焼け焦げてしまったのか少しだけ短くなっている。何より彼女自身もそれなりに痩せてしまっていて、決して無事とは言い難い現状だろう。

それでも本当にいつも通りといった様に笑い、話す彼女の姿を見れば、一瞬息を止めた4人の雰囲気も少しだけ柔らかくなる。むしろ込み上げて来るのは、生きていた、また会えた、という嬉しさ。

抱きつきに行ったのは女性陣だ。

当然男である一夏はそんなことは出来ないし、したら問答無用でボコボコにされてしまうのが目に見えている。

「……本当に良かったよ、綾崎さんが無事で」

「ええ、おかげさまで。」一夏くんも元氣そうで何よりです、本当に良かった」

「ああ、それこそ綾崎さんのおかげで……ん?」

一瞬の驚きの後、一夏は千冬の方を見る。

しかし千冬も他の女性陣も、むしろ奈桜すらその変化に気付いていないのか、皆同様に不思議そうな顔をしていた。確かに本人でなければあまり意識しない事ではあるのかも知れない。

突然奈桜が一夏のことを名前前で呼び始めたなんて。

「ええと、箒ちゃん？一夏くんは何に驚いているのでしょうか？」

「ほっほほっ！箒ちゃん!!」

「？」

そして箒に対するその言葉と共に、一夏の気付いたその変化は他の者達にも共有され始める。

それにいち早く渋い顔をしたのは千冬だ。

様子をおかしく思った鈴音達も箒に続いて言葉を掛ける。

「あ、あやさ……ママ!?!私の事は!?!」

「?どうしたんですか、鈴ちゃん？」

「り、鈴ちゃ……!?!」

「お母さま！私は！私はどうでしょう!?!」

「えっと、本当にどうしたんですか？セシリアさん？」

「私だけ普通なのですが!?!何故!?!どうしてですか!?!」

色んな意味で混乱し始める状況。

不審に思った一夏は密かに千冬の元へ行き、小声で疑問を投げかけた。

顔色が悪いのが千冬自身であるとは知りつつも。

「千冬姉、ほんとに検査には何の問題無かったんだよな？」

「検査の結果についてはまだ把握していない、書面としても降りてきていないのでな。私はお前達と同じ、ただ他者と面会をする程度ならば問題無いという事しか聞けていないんだ」

「検査って昨日まで一度もしてなかったのか？」

「今回の治療にはまだ市場にも出ていない様な最新のナノマシンを使用したのだが、その働きの完了するまでは一切患者に触れるなど作成者から達があった。今思えば恐らく綾崎が昏睡していたのもそのナノマシンの影響だろう。……検査の結果は今日医者から直接結果を聞かされた綾崎本人しか居ない、明日には正式な書類として私の元に来るだろうが」

そうして壁にもたれ掛かっていた千冬は身体を起こし、箒と鈴音とセシリアに抱き着かれながら困惑している奈桜の直ぐ目の前に顔を向ける。真剣な表情、嘘は許さないと言った様相だ。

奈桜もまた千冬のその様子に思わず背筋を正してしまう。

「綾崎、正直に言え。検査の結果はどうだった」

「……………良かった、とは言えませんが」

「具体的には？」

「まずはこの両手と両足、最も損傷が酷かった部分です。これについては殆ど作り直した様な物なので神経がまだ上手く機能していません。筋肉量も相当落ちていたので、今後かなり長期間のリハビリが必要になるとの事です」

「他には？」

「……………左眼の色素が回復していません。視力も壊滅的に落ちています。後天性のアルビノ症候群とでも言えますか、強い光を目に入れる事すら防ぐようにと言われました。こちらの回復の目処は立っていません」

「つ、最新のナノマシンを使用してもそれか」

「私が戦闘中に自分に使っていた物も含め、2種類のナノマシンが同時使用された訳です。その辺りが原因ではないかと担当医さんは仰っていました。ただ完全に見えなくなってしまう訳ではありませんし、こうして眼帯で隠していれば問題ありませんから。そう悲観する事でも無いですよ」

悲観する事はない。

果たして本当にそう言えるだろうか。

片目を失うという事は視界を狭めるだけでなく、立体的な感覚すら狂わせる。基本的に大抵のスポーツでは片目を失う事は致命的だ。ISを操作する場合ならばハイパーセンサーの影響もあり問題は少ないだろうが、ISを使用出来ない私生活では決してそういう訳にはいかない。

「えと、一応……こんな感じですよ」

そうして眼帯を外した場所には、確かに真っ赤な背景を背負いながらも白い花が滲みながら咲く様にして広がっている奇妙な瞳が存在していた。

アルビノ症候群について殆ど知識の無かった一夏は真っ白な瞳が存在しているのかと思っていたが、アルビノ症候群というのは細胞の色素が不足している状態を指す。目の色素が抜けた場合、そこに残るのは真っ白な肉と毛細血管などの明確な血の色のみ。

単純な宝石の色ではなく血肉の色を直に写しているのだから、少しの生々しさも人によつては感じるだろう。衝撃を受けたのは当然だ。千冬でさえも少し顔を顰めながらその瞳を覗いている。

「……精神的な影響は？」

「そちらについては簡単な検査では問題ありませんでした。ただカウンセリングや筆記で分かることも多くはないので、長期的に見ていく必要があると」

「……なるほど」

普通に考えて、ISのバリアを突き破って機体と皮膚が同化する程の攻撃を受けた人間が、精神的にノーダメージなどという事はどう考えても有り得ない。その日会ったばかりのカウンセリングでは分かるはずもない、恐らくは節々に発生しているであろう異常。長期的に見ていくという言葉には、きつとそういう意味も含まれている。それが確実に発生しているという意味も込められている。

(記憶の混濁か……?外に発していた敬称と、内で発していた敬称が入り混じっていると考えるのが妥当。しかし本人がそれに気付いていない事を見るに、他にも同様の混濁が生じている可能性は高い)

どこまでダメージがあるのか、その中に致命的なものはあったりしないか。今直ぐにそれを知って把握しておきたいのに、やはりそれを知るためには医者言う通り長期的に見ていくしかない。

しかしこの菌痒さはどうにもならないし、その上そんな風に長期的に見て行かなければならないのは他ならぬ自分である。自分以外には出来ないし、任せるつもりもない。少しでも彼に関しての責任を持ち、少しでも彼を守りたいと考えるのなら、千冬がやる以外あり得ない。これは自分の仕事であると自覚している。

「千冬姉……?」

「……いや、なんでもない。とにかく暫くは様子見だ、お前達の面会は認めるが何かあれ

ば直ぐに私に報告しろ。お前もだ綾崎、少しでも違和感を感じたら私に言え」

「は、はい」

まあ、彼が素直に伝えてくれるとは思ってはいないけれど。

「……あー、千冬姉？他の人をここに連れてくるのって、もしかしてあんま良くなかったりするかな」

「他の人間を？……人物によるとしか言いようが無いが、出来るならば退院するまでは控えて欲しいというのが本音だ」

「そっか、じゃあシャルを連れてくるのは後の方がいいな」

「シャルさん、ですか？」

「ああ、フランスから来た俺と同じ男性のIS操縦者だよ。少し前に転入して来たんだ。2人目やっぱり居たんだったさ」

「……千冬さん？」

「いや、まあ、その件に関しては後で説明する」

「私が納得出来る説明をお願いしますね？」

「ああ……」

「「「？」」」」

珍しく千冬に怒った様な雰囲気を出す綾崎に首を傾げる4人であったが、それが理由

なのか今日の面会はここまでだと千冬に言い切られてしまい、病室から追い出されてしまった。

とは言え、今の奈桜に対してこれ以上騒ぎ立てる様な事は流石にしない。また明日にでも訪ねに来ればいいからと、彼等は取り敢えず身を引くことにした。

何はともあれ、今のところは大きな異常もなく命の危機もなく意識がある状態で生きているのだから。これ以上のことはないし、今日まで想像したどの最悪と比べてもマシンな方だ。……特に千冬が想像していた最悪と比べれば、随分と運が味方してくれた方だ。それほどに、ここ最近は綾崎の病室以外では殆ど眠れなかったほどに、心を乱されていた。

「一先ず……命に別状がなくてなによりだ、綾崎」

「そうですね、私もまさかここまで綺麗に治るとは思いませんでした。科学の進歩は凄いと云うか、実はもう不老不死の人間はいます！なんて言われても信じてしまいそうです」

「……ナノマシンの治療といえど、万能では無い」

「……………」

「今回の治療がお前の身体にとってどれほどの負担になっているか、そこまでは私ではわからない。だが考え方として、お前の先の寿命を前借りして得た回復だというのは決

して間違つたものではないだろう」

「まあ……それくらいなら安い物なんじゃないですか？死ぬことに比べたら」

「安い筈があるか！それが私ならまだしも、お前はまだ若いんだぞ……今はよくとも、後からその時を迎えた時に、お前は必ず後悔をする」

「……千冬さんもまだお若いじゃないですか」

「そんなことが言いたい訳じゃない……」

分かつているくせに。

確かに寿命が減つてしまつたと言われても実感は湧かないだろうし、高校生になりたての相手にそれを理解させようというのも難しい話だと分かつている。

それでも、大したことないでは終わらせられない。

それがこの話だ。

終わらせたくないと、少なくとも千冬は考えている。

「でも、やつぱりそんなに気にする事でもないと思います」

「何を根拠に……」

「だって私、もし寿命が関係するほど長く生きる事が出来たとしたら、その最後はきつと満足していると思うので」

「……………」

「私は結婚をするつもりもありませんし、子供をつくるつもりもありません。ただ自分の育った孤児院を継いで、沢山の子供達と出会って、最後にそれをまた次の人に引き継ぐ事が出来ればそれでいい。それが私の人生の目的ですから、その目的が達成出来れば他には何も望みません」

「っ」

彼はそれを、心の底から、本気で、本気で言っている。

きつとそれが彼にとつて本当に人生の主軸となつていているのだろうから。

きつとそれが彼にとつて理想の人生の在り方であろうから。

だから彼はそう言い切る事が出来るのだろう。

……もうその希望が叶うことは無いという事も知らないで。

もう彼がああ孤児院に戻れる事はない。

どころか、あの孤児院に居た者達は既に離散しており、各々が今は別々の孤児院に居るといふ事は当然の様には知らない。

全ては綾崎直人という人物の記録を抹消するために。

いきなり彼だけが姿を消せば怪しまれる……だからこそ彼の孤児院を離散させる事で、彼がI Sの適性検査の結果で消えたのではなく、孤児院の都合で姿を消したという事にする必要があった。千冬がそれを聞いたのは、全てが終わったあと。もう彼等がそ

れぞれにどの孤児院へ行ってしまったのかすら千冬には分からない。元々孤児院だったあの場所も、今ではもぬけの殻だ。

……綾崎直人が帰る場所は、そして彼の人生にとって最も大切だった場所は、どこにもない。

「……あ、綾崎」

「?なんですか、千冬さん」

「そ、そのだな……」

「はい……?」

伝えなければいけない、言わなければいけない。

そんなことは分かっている。

長く隠すほど彼にとつて残酷な事だ。

だが一方で、千冬はこうも思った。

それは今こうして衰弱している彼に対して伝えなければならぬ事なのか、と。それこそ別に、もっと彼が回復してから伝えるべきなのではないのか、と。

そんな言い訳が出来てしまった。

そしてその言い訳はもつともなものだった。

「……………」

「千冬さん？」

だから千冬は口を閉じる。

逃げる。

蓋をする。

普段の彼女に似つかわしくなく。

中途半端に。

弱気に。

弱々しく。

小さく。

そうして半端な事をしてしまったが故に、大きな失敗をしてしまった過去があるというのに。

「……先程の転入生のシャルル・デュノアについての話だ」

「あつ、そうでした！教えて下さい千冬さん！一体どうなってるんですか!?!」
千冬の抱える罪は日に日に大きくなっていく。

けれど彼女はそれを打ち明ける事が出来ない。

打ち明けた時、彼がどんな反応をするのが怖いから。

絶対に怒ったりしない。

絶対に笑いながら許してくれる。

だからこそ、それが怖い。

ただ1人その絶望を心に秘めて笑うその姿が、想像するだけでも恐ろしくて仕方がない。そんな絶望を彼の心に植え付けたりしたくない。

(……もしこの世界からISが無くなったら、お前は幸せになれるのか？綾崎)

もう決して彼の思い描いていた幸せに辿り着くことは無いと知っていながら、織斑千冬はただただ現実逃避を続けていく。

28. 復歸の日

「と言う訳で、今日から綾崎が復歸する事となった。……とは言え、暫くは車椅子生活、とてもではないがISの実習にも参加させる事も出来ない。適時お前達がフォローしてやれ、以上だ」

奈桜が検査を受けてから5日後。肉体的に大きな問題はなく精神的な問題も見当たらなかった事から、彼は身体を動かす様な事はしないという条件付きで退院する事となった。

彼の退院が早まった要因として乙女コーポレーションから送られて来た最新鋭の車椅子の存在が大きく、幾つもの機能が備わったコンパクトなそれは、両手足の神経が未だ殆ど回復出来ていない奈桜でも移動を簡単に行う事が出来る代物である。

授業の遅れは大きい、それでもまだ間に合わないという程の話ではない。今日までリハビリと検査だらけであった奈桜としては、この短い間で復歸が可能になったというだけで何より喜ばしい事だったという事は言うまでもない。

「うう、あやのん良かったよう……生きてて良かったよう……」

「あ、あはは。布仏さん、そんなにくっ付かれると困っちゃいますよう」

わざわざ教室の前まで来て抱きつきに来た本音を、奈桜も苦笑いながらも抱き留める。

恥ずかしがる彼ではあるが、彼女からしてみれば本当にどれほど心配した事か。せつかく仲良く話せたと思つたらあんな事があつて、最後に見た姿は生きている事が不思議なくらいに酷い有様。奈桜が本音を含めた生徒達を守る為に動いていた事を知つていたからこそ、彼女は余計に責任を感じていたのだ。

今日ばかりは千冬もそれを咎める事はしない。

何人かの生徒もよかつた良かつたと小さく涙を拭いていた。

(……おや、もしかしてあの2人が)

そうして教室を見渡していた奈桜の目に、見慣れない2人の女子生徒の姿が映りこむ。事前に話は聞いていた、自分が入院していた間に2人の生徒が新たに転入して来たという事は。

長い銀髪と左目に付けた黒の眼帯が特徴的なドイツからの転入生であるラウラ・ボーデヴィツヒ。

一方で金髪の中性的な容姿を持つ、なんと世界で(公式では)2番目の男性IS操縦者だというフランスからの転入生であるシャルル・デュノア。

彼等2人はどちらも専用機を持ち、それなりの実力のある者達であると奈桜は千冬か

ら聞いていた。……そして当然、2番目の男性IS操縦者だと自称するシャルル・デュノアの正体についても、千冬から事前に聞かされている。

(うん、まあ、あれは男装……)

色々和努力の跡は見えるものの、その全てが結局は独学。素人が個人で出来る限りの事をしようとした形跡はあるが、所詮はそこが限界だ。

常日頃から女装だの男装だのを考えて、それこそ自分でもそれを使用する様な変態開発者達を見てきた奈桜が言うのだから間違いない。それらを常に使用して、新商品が出来るたびに送られて感想を求められている直人が言うのだから間違いない。

そもそもシャルル・デュノアを名乗る女性は、決して男装に向けた体型をしている訳ではないのだ。それを隠す為には普通の努力では足りない、あれでは鋭い人間や同種の変態には1発でバレてしまう。

(……あれ、その括りだと私って同種の変態扱いなのでは)
心が折れそうになる。

今更の話ではあるのだけれど。

そもそも鋭い人間や同種の変態にしか分からないのなら、変装としては十分なラインに達していると言ってもいい訳で。むしろ彼女の場合は少しくらい粗雑な方が遺伝子的に女性に近いからISに乗れるという無理矢理な言い訳も立ちやすい訳で。そこま

で徹底して女装をしている直人の方がおかしいまでである。変態としてより高い位置に立っていると云つてもいい。

(と、取り敢えず！彼女にも事情はあるでしょうし、今はノータッチで。大体の目的は予想出来ても、彼女の本心までは分からないですから)

積極的に助けることはしないが、いつでも助けられる様にはしておきたい。もしかして彼女も自分と同じように無理矢理変態行為を強制されている被害者である可能性もあるから。……同じ変態行為を。

一方で、そんな風に心の中で密かに落ち込んでいる彼を、もう一人の転入生のラウラ・ボーデヴィツヒはジツと見ていた。転入初日に一夏を殴り付けたという彼女は、それは真剣な面持ちで怪我人の奈桜を。

「綾崎さん、ちよつといいか?」

「はい?どうかしたんですか、一夏くん。」

授業終わりの昼食前、教科書を片付けていた奈桜に一夏が声をかけてくる。

挨拶と同時に席を立つたセシリアと箒も丁度集まつてきており、布仏も立ち上がったものの突如鳴り響いた電話によって泣く泣くその場を立ち去っていった。彼女も普段

はゆるい子ではあるが、意外と私生活は忙しそうでギャップを感じたりもする。

「ほら、しようと思つてて出来なかつたシャルルの紹介をしておこうと思つてさ。シャル、こつち来いよ」

「え？あ、うん！分かつたよ一夏……！」

「むう……お母様に殿方を紹介するのは気が進みませんわね……」

「安心しろセシリア、母さんは少し容姿がいいからと言つて簡単に浮つく女性ではない」
（まあ、そもそも男性にそういう興味を持つことはあり得ないので、その辺りは心配しなくても大丈夫なんですけどね）

そこは心の中でもしつかりと否定しておく、否定しておかないと何か大変なことになる日が来てしまいそうだったから。……それはそうとして、一夏に言われて小走りで行つてきた金髪青眼の少年（仮）。

やはり、見れば見るほど女性である。

男装があまりにもわざとらし過ぎる。

果たしてどうなっているのか、この学園の入学審査。

機密情報を多大に扱っているのだから、もう少し厳しくして貰いたい。

もしかしたらこの2人以外にも性別を隠している人間が居ても不思議ではないくらいだ。身分や所属組織を隠している人間はもう普通に居そうなレベルであるというの

に。

「はじめまして、シャルル・デュノアです。綾崎さんのことは一夏達から色々聞いてるよ」

「こちらこそはじめまして、綾崎奈桜です。ところで一夏くんがどんな色々のことを話していたのか、私とても気になりますね」

「い、いや！別に変なこととは言ってないからな!?なあシャル!?!」

「とつても綺麗な人だつて言つてたよ？あとは凄く優しく、家事も上手で、正に理想の女性像だつて。結婚するならあんな人がいい、みたいなことも言つてたかな」

「「なっ!?!」」

「あらら……一夏くんは私のことをそんな風に思つてくれていたんですね。周りにこんなに可愛い子達を連れているのに、罪人です」

「ちつ、違うんだ綾崎さん！俺は例え話とか、そういうつもりで言つたというか……!おいシャル！そういうことを本人の前で言うなよ!」

「おい一夏、貴様本当にそんなことを言つたのか?」

「ぐぬぬ、相手がお母様だけに同意せざるを得ないのが悔しいですわ……」

「あはは、綾崎さんは本当にみんなから慕われてるんだね」

「ええ、こんな私を気にかけてくれるのですから、優しい友人達に恵まれて幸せもので

す。シャルルさんも仲良くしていただけると思えます」
「うん、もちろんだよ！」

一夏の言葉から現実逃避しながら奈桜はシャルルと会話を続ける。

一見は笑顔を装っているが、その内心の動揺は凄まじい。

(え?なに?一夏くん私と結婚したいの?嘘でしょ?ちよつと待つて!?女装生活で女性に迷惑をかけることは考えていたけど、男性にも迷惑をかけるパターンがあるなんて聞いてないのだけど!?というか女装してるのに惚れてくる男性が居るとか普通は思わないでしょ!?まさか一夏くんはそういう倒錯した趣味を持つていたんですか!?!いやそもそも一夏くんは私が男だつて気付いていないからこれも普通の反応!?!どうしよう!こんな千冬さんに顔向けできない!!)

そんな表面上には出さないが盛大にパニックを起こして居た奈桜に助け舟を出してくれたのは、件のシャルルくんだった。外見では普段通りでも、今は全く頭が回らない。彼が話題を提供してくれる人間であった事はなによりの助けであった。

「……えつと、そういえば綾崎さんはあの乙女コーポレーションの専属なんだよね?噂だとIS部門を作つて1年もしないうちに第三世代機の試作機を造つたつて聞いたけど、本当なのかな?」

「乙女コーポレーションですか?……ああ、そういえばシャルルさんはデユノア社の方

でしたね。やはり気になるものなのですか？」

「……まあ、そうだね。なにせうちの会社はそれが上手くいかなくて困ってるくらいだから」

……その辺りが理由なんだろうなあ、と奈桜は思う。

彼(女)は心情が表情に出やすいタイプらしく、今の一瞬で顔が歪んだのが分かった。第3世代関連でデュノア社の経営状況がよくないことはISに携わっている者ならば誰でも知っている。それほどに第3世代のISの開発というのは困難を極める。デュノア社と言えばあれほどに第2世代IS開発のトップを走っていた会社だと言うのに、世代が一つ上がっただけで資金だけでは追いつかなくなっただけだから。つくづくISというものは技術の極みなのだと思うされるし、そうなると簡易的な物とは言え、いとも簡単に第3世代を作り上げた乙女コーポレーションの変態性もよく分かる。

「うくん……詳しい内情までは言えませんが、あそこには世間一般では決して受け入れられることの無かった変態達が多く収容されていますからね。無理な話ではないと個人的にですが私は思っていますよ」

とは言え、奈桜ではシャルルの思惑を判断することはできなかつたので、とりあえずできる範囲で事実をぶちまけることにしておいた。

「え……変態……？」

シャルルが困っている。

そう、その表情が見たかった。

奈桜だつてそうだ、最初はそんな顔をしたものだ。

「例えばシャルルくん、乙女コーポレーションには1人の天才がいます。彼は有名国立大学を院まで行つて卒業し、直後から繊維系等の様々な分野で多くの成果を出していました。そんな彼が研究や所属していた大学を辞めてまで乙女コーポレーションで作りました。そんなものがあつたんです。さて、それは一体なんだと思えますか？」

「へ？え、ええと……繊維系に詳しいつてことは、ISスーツとか？いや、でもIS系の仕事なら他の所の方が……」

「学生用スクール水着です」

「……え？」

「学生用スクール水着です」

「……え？」

2度も聞かれた。

けれど2度とも同じ答えを返した。

「ここが何よりも大事なところだから。」

「彼は所謂口リコンという方でした。幼・小・中学生前半くらいの女性が大好きだという

世間的に見て少しばかり異質な人種です」

「え? え? え? え?」

「そんな彼が最も好物としていたのがスクール水着というものでしたのです。彼は乙女コーポレーションに入って女子生徒用スクール水着に関連したものを全力で開発し始めました。まるでそれまで抑圧されてきた欲望を解放するかのように」

「待つて? ねえ待つて? 僕の頭が追いつかないよ?」

「最初は水着のデザインや素材だけだったものの、途中からは専用のパッドや帽子、ゴーグル、果ては子供用の日焼け止めやオイルなど、様々なものに手を出し始めました。それもこれも、全てはスクール水着を着る小さな女の子のため。彼女達がスクール水着を着る際に最も輝くことができる様、あらゆる分野を勉強して取り組んだのです」

「え? なに? 感動系の話だったの? これそういう話だったの?」

「その結果、乙女コーポレーションはスクール水着シェアの最大手となりました。そして子供用の日焼け止めやオイルは未曾有の大ヒットを記録し、そのコストと安全性、手入れのし易さから海やプールでもスクール水着を着る少女が増えたそうです。今では引きこもりがちだった彼も積極的に外に出て日焼けをする様になりました。めでたしめでたし」

「めでたしかどうかは賛否両論だよね!」

「ちなみに現在はビート板事業に手を出してます。海水浴でもビート板を使って泳いでいるスク水少女達が見たいそうです。ライフガードの資格にも挑戦していましたね」

「それだけのために!?!元々繊維関係の人じゃなかったの!?!人の欲望って怖い!!」
私だつて怖い、奈桜は心の底からそう思う。

今話したのは乙女コーポレーションのほんの一部、こんな人達が大半を占めているのが乙女コーポレーションだ。つまり何が言いたいかというと、あの会社は社長を含めて変態しか居ないということだ。

そして昔から言われている通り、変態と天才は紙一重なのである。

どちらが先かは分からなくとも、間違いなくその2つには関連性がある。

「……まあ、変態云々はさておき、母さんの言いたいことはなんとなくわかった」

「え?」

「ふふ、箒ちゃんも流石ですね。皆さんに説明して貰ってもいいですか?」

「……気は進まないが。要は乙女コーポレーションにいる社員達は特定の欲望が強く、その欲を満たすためならばどんな努力でも行い、会社にもそれを可能にするだけの環境があるということだろう?しかも社員達も才能ある人間達だということが更に拍車をかける」

「加えて彼等自身が今までその欲を抑圧されてきた、またはその欲によって迫害され続

けてきたということもあります。その爆発力と連帯感は私も怖くなるほどでしたから」

それが乙女コーポレーションの原動力。

それが乙女コーポレーションの技術力。

そしてその根本となるのが乙女コーポレーションの社長の眼力。

乙女コーポレーションの新作は考えるより先に使ってみろ、そう言われる所以がそれだ。

IS部門が急成長しているのも、1年という歳月で第3世代の試作である”恋涙”をつくることができたのもそんな理由からだろう。

もちろん、恋涙の性能が変態的な方向に偏っていた理由も……

「ですから私がデュノア社のためにお伝えすることができるのはこういった会社の特徴くらいですね。参考にはならないと思います」

「いいや、そんなことはないよ。なんとなく今のデュノア社が行き詰まってる理由も分かったし……:…:なにより、乙女コーポレーションからは企業スパイが帰ってこないって噂の理由も分かったから」

「そんな噂があつたんですね……」

ちなみに現在進行形で奈桜の頭を悩ます問題もある。

千冬から聞いた話では、奈桜が乗ることになるであろう次のISも既に製造の段階に

入っているようだ。破損してからまだ1月も経っていないというのに、既にもうその段階。

自分の知らないところで自分に関係あることに何十億というお金が動いていると考えると、奈桜もなんだか怖くなってくる。何処からそのお金が出てくるのか、それに合う働きを出来るのか、なかなか緊張感強い。

「なんかよく分かんねえけど、シヤルも綾崎さんも仲良くなれそうではよかったぜ」
「わたくしとしては微妙な気持ちですが……」

「ふふ、そうですね。もしかしたら一夏くんよりも仲良くなれるかもしれませんよ？」
「なっ!? 負けねえからなシヤル!？」

「えっ!? えっ!? 一夏が訓練の時よりも怖い顔してるんだけど!? 誰か助けて!」
「くっ、私も早く母さんの様な女性にならなければ……!」

加えてあの事件以来、千冬の過保護も増してきたが、なんだか一夏達も少しずつ過激派になってきているような気が奈桜はしている。

とりあえず自分の両端を囚われた宇宙人の様に取り囲むのはどうにかして欲しいし、それはもう普通に恥ずかしかつた。

美人に囲まれて役得ではあるが、今やもう罪悪感の方がずつと強い。

29. ラウラ

午後の授業が終わり、奈桜はセシリアに車椅子を押されながら部屋へと戻る道を進んで行く。退院初日の授業は特に何か大きな問題があつた訳でもなく、周囲の人間に助けを求めながらもなんとかこなす事が出来た。幸いにも今日は実習はなく、これから部屋に戻つてまた復習と予習をすれば明日からもう少し余裕を持つて授業を受けることが出来る。

周囲の助けもあつて、授業の遅れはどうかかなりそうだった。

勿論、今こうして車椅子を押してくれているセシリアこそが、その復習と予習に付き合つてくれる友人である。

「ありがとうございます、セシリアさん。大切な放課後の時間を頂いてしまつて申し訳ないです」

「ふふ、構いませんわ。わたくし、お母様のためなら何時間であろうと何日であろうとお付き合ひする事が出来るよう、既に本国への報告は粗方片付けておきましたもの」

「それは……嬉しいです、お言葉に甘えさせて貰いますね」

「はい！任せてくださいいな！」

単純に奈桜の役に立てること。

そうでなくとも奈桜と一緒に居られる時間が増えること。

セシリア自身、今日一日とは言えこの役割を自分が担えた事に対する嬉しさが大きくあつた。

いくら一夏に首つたけの彼女であつても、それと奈桜への憧れは別の話だ。女として尊敬しているし、母の様にも慕っている。一緒にいられる時間の幸福もあるし、セシリアは何より奈桜に何かを教えてもらい、それについて褒められる事が好きだった。

奈桜が困っているのならば、自分の要件をいくら後回しにしようとも彼女は助けるつもりがある。……女として、友人として、母娘として。

「……お母様は」

「は……」

「お母様はあの時、勝算があつて立ち向かつたのですか？」

「！」

「あ、えと、ごめんなさい。少し前からずっと気になっていました」

車椅子を押されながら、ふとそんな事を聞かれる。

彼女がどんな顔をしてそれを聞いているのかは分からない。

しかし同時に奈桜がどんな顔をしているのかもセシリアは分からないだろう。

「勝算なんて、何処にもありませんでしたよ。私はただ、あの時に動ける人間が自分以外には居なかった。そう思ったから動いただけです」

「……そう、ですか」

「力を持った責任”なんて大層な考えがある訳ではありませんが、”その時が来た”とは思いました。力を持った以上はいつかは前に立たないといけない日は来る訳ですから、きつとセシリアさんだつて同じ状況なら同じ事をしたでしょう?」

「……はい」

「だから、あれは私の仕事でした。セシリアさんにはセシリアさんの仕事がありました、どうしようもない状況だったんです。……セシリアさん、私の責任まで負おうとしないで下さい。セシリアさんは自分のすべき事を十分にこなしたんですから」

「はい……」

ずっと気になっていたのかもしれない。

どうにかして助けられなかったのか。

どうにかして一人にさせるのを止められなかったのか。

しかしあの状況では無理だと奈桜は知っている。

なぜなら敵がそれを狙っていたから、技術力的に敵が圧倒的な上のあの状況では、敵の手のひらの上で最善を尽くすしかなかったのだ。

セシリアは最善を尽くした。

奈桜にはそれが出来なかった。

話はただそれだけの事だ。

「……お母様、もしよろしければあの時にお母様が戦った相手のことを」

「私にも聞かせて貰おうか、その話」

「……貴女は」

廊下の曲がり角から突然声を掛けて来た人物。

身長は高くない、けれど確かな存在感を有した彼女。

彼女を前にした途端にセシリアは奈桜の前に立ち塞がり、一方で彼女はそんなセシリアを面倒臭そうに見上げた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒさん、ですね」

「ああ、知っていたか。ラウラで構わない」

「ラウラさんも私を襲った相手のことを知りたい、という理解で構いませんか？」

「そうだ、話が早くて助かる」

「お母様！この方は……!!」

「大丈夫ですよ、セシリアさん。いくらなんでも怪我人を相手に手を上げる様な人ではありませんから」

奈桜は事前に千冬から彼女の事は聞いていた。

ドイツの軍人であり、かつては千冬の教え子であった時期もあったという。非常に優秀で、非常に真面目、しかしそれ故に頭の硬い部分もあると聞かされていた。どうも転入初日に一夏をパアンツ！したらしいが、恐らくそれも何か勘違いか思い違いをしているからだろう。

いくら手が出るのが早い気質であっても、彼女も軍人。

怪我人に手を出すようなことをする筈もなければ、一夏とは違い奈桜に対する嫌悪感などは今は全く感じない。むしろ彼女が奈桜を見つめる目はどこまでも真つ直ぐだった。だからこそ、奈桜はそれを受け入れる。

「ラウラさんがその相手のことを知りたい理由は？」

「私がこの学園に来る以前に襲撃があったという話は聞いていた。しかし、その詳細までは聞かされていない。貴女が戦った相手が桁外れの戦闘力を有していたという事だけは軽く耳にしたが、その話がどうにも胡散臭い物ばかりだった。それ故に直接聞くのが一番だと判断した訳だ。相手の立場に関する情報はなくとも、私と敵対する可能性は十分にあるからな」

「なるほど……そういう事でしたら。寮監室に行きましよう、ここでは少し話しづらいお話なので」

「本当によろしいのですか、お母様？」

「……言っておくが、私とて初対面の、しかも怪我人を相手に拳を振るほど腐ってはいない。織斑一夏に対するそれは値する理由があつたからだ。特に私は彼女に対して一定の評価をしている」

「評価……？」

ラウラの言葉に2人は意外な顔をするが、ラウラからすればどうもそれは当然の話と
いった様子で。

「ISに乗り始めて1年にも満たない一般人が、突然のISによる襲撃にも冷静に対処し、多くの傷を負いながらも敵の最大戦力を押さえ込んだ。軍人ならば勲章が与えられる程の業績だ、教官のお気に入りでなければうちの部隊に勧誘していただろう」

「それは駄目です！」

「だから今はそのつもりは無いと言つた。……お前と話すのは疲れるな、さつさと寮監室とやらに案内してくれ。周りの視線も鬱陶しくなってきた」

奈桜の前に立ち塞がる様にして立っていたセシリアを躲し、同時に彼女から奈桜の車椅子を押すという役割すら奪い取るラウラ。その行動に一瞬呆けたセシリアは意識を取り戻すと拳を握つて『ぐぬぬ……』としていたが、奈桜を本当に気遣つた様子には少しの感心も抱いていた。

怪我人をこうして労わる事が出来る良心を持つているのなら、どうしてあれほど一夏には問答無用の暴力を振ったのか。そこにどんな理由があるのかは、奈桜もまた疑問に思っていた。

「……ふう。ありがとうございます、ラウラさん、セシリアさん」

いつの間にか完全なバリアフリーになっていた寮監室へ戻ると、奈桜は2人の手を借りながらベッドの上へと腰掛ける。ベッド一つにしても起き上がりやすい様に手摺の付いた物になっていたり、千冬がどれほど奈桜の為に部屋を改造したのかがよく分かる。逆にこれほど熱意のこもった改造を見せられてしまうと、その過保護具合に少しの苦笑いと心配をしそうにもなってしまうが、まあそれも今は仕舞い込んで感謝の言葉で返すのが一番の礼になる。それくらいは奈桜も千冬の性格を理解していた。

「……というのが、大まかな相手の情報になります。参考になるかどうかは分かりませんが、一応全て私の認識内の話ではありますが事実です」

「……特殊な変形機構に条約禁止レベルの広域殲滅兵器、圧倒的な基礎性能に加えて国家代表レベルの操縦者、か。聞けば聞くほど目を逸らしたくなる様な話だな」

「むしろ私はお母様がよくそんな相手から生きて戻られたと……ISが完全に破壊されてしまった事も当然の話ですわ」

一先ず座布団の上に座った2人に対して奈桜が今回の襲撃事件の一連の流れと敵に関する詳細な情報をザツと話すと、セシリアは顔を青ざめさせ、ラウラは事態の深刻さを理解したのか軍人の顔になって思考を回し始める。仮に奈桜の話の全てが本当ならばこれは既に国家レベルで対処すべき問題であるのだし、聞かされた敵のISの性能は間違いなく第四世代と言ってもいい代物。加えて敵の高域殲滅兵器は複数のISを纏めて焼き払う事が出来るほどの威力と来た、たった一機でも小国程度ならば滅ぼす事が出来る戦力であると考えた方がいい。

「だが、ここまで馬鹿げた性能のISを造ることが可能な人間となると限られて来る。セシリア・オルコットと言ったか？貴様も確か戦闘に参加していたのだったな、その辺りについてどう思う？」

「……そうですわね、わたくしもラウラさんの意見に同意しますわ。

あまり大きな声では話せませんが、わたくし達が戦った機体は所謂無人機でした。それも正攻法では太刀打ち出来ない程の高水準のAIと機体性能を持ち、それが複数体も同時に出現した。そんなものを造れる人物は一人しか思い浮かびませんわ」

「やはり、か。このことについて教官は何か言っていないのか？」

「千冬さんは……少なくとも私は何も聞いていません、ただ知っていて黙っている可能性もあります。今回の件で私が大怪我を負ってしまいましたし、箒ちゃんがそれを知れ

ば色々大変なことになることも予想できませんから」

「奴の妹か……面倒な、単なる一般人ならば切り捨てて話を進められたものを」

どう考えても今回の主犯は篠ノ之束以外にはあり得ない。

むしろ彼女以外にそれを成すことは絶対に出来ない。

それは当然千冬は気付いている筈だし、今は情報を伏せられている筈でさえも、一夏達から話を聞き、情報を整理し始めれば当然に気付く筈だ。その時になれば筈は姉のしたこととは言え責任を感じるだろうし、奈桜の怪我を理由に姉との関係も悪化するだろう。関係が悪化すると言えば千冬と束でさえもそうだ。親友という間柄と言えど今回の奈桜の怪我で一番心を痛めているのは間違いない千冬である。千冬が今何を思い、何をしようとしているのか、それは誰にもわからない。

「ちなみにだが、襲撃の目的は何だったのだ？」

「わたくしは知りませんわ、お母様は何か？」

「……一夏くん、だったそうですね。本命は一夏くんと無人機を戦わせることだと、有人機に乗っていた女性は言っていました。自分はそれを邪魔する者を抑えるために来たというようなことも」

「またあの男か」

「ということはお母様はそれに反抗したんですの？それはなんと云いますか……」

「彼女の言葉に確信も持てませんでしたし、時間稼ぎくらいは必要だと考えました。それに一夏くん達も劣勢でしたから、万が一を思えば加勢に入りたくて……ただ、相手の方が思いのほか舞い上がったのか、結果的にはあんなことになってしまいました」

「貴女の判断は間違っていない。戦場で相手の言葉を鵜呑みにするなど愚か者のすることだ。相手の力量を測れなかったことが致命的であったとしても、結果的に抑え込んだ上に敵の性能まで測れたのだから文句を言われる筋合いはない」

「……ありがとうございます、ラウラさん」

ラウラのフォローに奈桜は微笑む。

奈桜として自分がミスを犯したということは理解している。

もし奈桜があの時あの女の言う通りに何もせずに静観していれば、戦闘にまで発展することは無かっただろう。いくらあの時にはそれを十分に判断できなかつたとは言え、その言葉を考慮して行動するという選択はあつた筈だ。結果として余計な被害を増やしてしまつたという事を奈桜は悔やんでいたし、悩んでもいた。

そこで与えられた軍人でもあるラウラの言葉は、思いの外身に沁みるものであつたに違いない。

「……とは言うが、こちらに打つ手がないというのも事実か。話を聞いた限りでは私とて時間稼ぎが叶うかどうか、こちらの戦力が束になつてかかつても纏めて焼き払われる

のがオチだろうな」

「相手が篠ノ之博士となれば、同じ程度の戦力を持つI Sが他に複数あっても不思議ではありませんもの。悔しいですが、無人機相手に手も足も出ない様では戦力になれる自信はありませんわね……」

「私も暫くはI Sに乗れませんし、乗れたとしても以前ほどは動けないと思います。私達の実力不足は当然ですが、機体の性能も違い過ぎますからね。今の状態では相手にすること自体を避けるべきでしょう」

「……ちよつかいを掛けてきたのは向こうから、というのがまた面倒なのだな」

結論として、どうしようもない。

今は自分の実力を高める事に集中し、最低でも機体の性能を100%引き出せる様にしておく事くらいしか出来ない。操縦者の技能が伴わなければ、機体の性能の向上も現実的ではないからだ。

奈桜に願われてセシリアが（冷蔵庫と棚からそのまま）出したお茶と煎餅を食したらウラは、一先ず話を切り上げて立ち上がる。時間もそろそろ夕方、いい頃合いだろう。「とりあえず、情報の提供感謝する。突破口が見つけられるかどうかは怪しいところだが、有益ではあった。貴女とは今後も良い関係を築いていきたい」

「ええ、私もです。ご覧の通り、私は寮監室に住み込ませていただいていますので、いつ

でもご気軽ににお訪ねくださいね。夜は少々騒がしいですが、いつでも歓迎しますよ」
「機会があればそうさせてもらおう。……失礼する」

そう言つてラウラは部屋から立ち去つていった。

話の最中はずっと険しい顔をしていたが、『いつでもお訪ねください』と言つた時には一瞬だけ嬉しそうな顔をしていた様にも見えた。

しかしきつとあれは奈桜にはなく、千冬に会うことに対する喜びだろう。

とは言え、奈桜自身も彼女とは仲良くしたいと思つていた。

一夏を殴つた件はさておき、いつでも歓迎はするつもりだ。

「さてさて、それでは時間も時間もすし、今日のお夕飯の支度をしましょうか。冷蔵庫には何があります……」

「お母様？そんなことを私が許すでも？」

「……やっぱりだめですか？」

「心を鬼にしても止めさせていただきます。そもそも自分で立ち上がる事もまともに出来ない身で何を仰つているのですか」

「悲しいなあ……」

珍しくセシリアに怒られた奈桜は、澁々頷いてベッドの上に横になる。

そろそろ料理がしたい。

そろそろ掃除がしたい。

家事をしていないと落ち着かない。

きつとこの気持ちは他の誰も分らないだろう。

……あんなゴミ箱に大量に入れられているカップラーメンの空の容器を見せられると、その思いはより強くなってしまうのだ。

30. 酔いも回る

「あ、美味しい……」

「ほ、ほんとか母さん!？」

「ええ、とても美味しいです。また腕を上げましたね、箒ちゃん」

「ふ、ふふ……そうか、そうか! 母さんが居ない間も手を抜かずに毎日自炊をしていたのだ! 頑張った甲斐があつた!」

「ぐぬぬ……」

「あ、あはは……」

その日の夜は料理の出来ない奈桜に変わって箒が皆の分の夕食を作ってくれた。こうして寮監室に集まることも奈桜が気絶していた間は無かつたらしく、久しぶりにこうして共にする夕食を皆が楽しみにしていた様な雰囲気があつた。

特に今回はシャルルという新しい仲間も増え、寮監室は普段より一際騒がしい。その分の狭さも今となっては愛嬌だ。

「はい千冬さん、お注ぎしますよ」

「ん? ああ、すまない。……お前にこうして注がれるのも久しぶりだな」

「ふふ、そうなんですか。私としては目が覚めたら何週間も経っていたので、つい先日のことの様に思えてしまうのですが」

「こちらにしてみれば数年待った様な心地だ、何度お前が帰ってこない悪夢を見て飛び起きたと思っている」

「あら、そんなに心配されていたんですね。なんだか嬉しくなっています」

「お前が居ないと私の食事が貧相になるからな」

「もう、直ぐそういうこと言うんですから」

頬を膨らませる奈桜にお酒を飲みながら薄っすらと笑みを浮かべる千冬。そんな私達を他の人達は微笑ましそうに見守っているが、きつと彼等にとっても千冬と同じ様にこの週間は長い時間だったのだろう。

奈桜としては本当に申し訳がなく、そしてそれほどに思われていたということが何より嬉しい。

「そういえば、そろそろ学年別トーナメントがあるんですけど。千冬さん、私は「許さん」……はい」

有無を言わず却下されたのはともかく、優秀な生徒達の実力を測る事が出来るこの大イベント。加えてトーナメントとなれば、特にこの部屋にいる生徒達はやる気に満ちていることだろう。その証拠に、その単語が出た途端に女性陣と一夏の目の色が変わっ

た。以前の様なクラス代表によるものでは無いため、実質的にトーナメントの優勝者がこの学年の最強を名乗る事が出来るということ。細かい事は抜きにしても、各国の代表候補生である彼等が最強の称号を欲しているのは当然の話。

「今度こそ勝ちますわ」

「私だって、必ず優勝してやるんだから」

「私とて負けるつもりはない、足手纏いになるのはもう御免だ」

「俺だって負けてられねえ……もつと強くならないと駄目なんだ」

「あ、あはは……」

箸を折るのではないかという程に各々がやる気を見せ、バチバチと視線とやる気を打ち合わせる。元より自尊心の高いセシリアや鈴音に、足手纏いであった自分に対して憤る筈と一夏。きつと彼等こそが今回のトーナメントの中心となる、奈桜はそれを確信している。

……ただそんな中、1人だけその外で愛想笑いをしている人物もいた。

まあ彼（女）の内心を考えれば、その気持ちも分からないこともない。

彼（女）にしてみれば、今はそれどころでは無いだろうから。

「一夏くん、一夏くん」

「ん、んえっ!?ど、どうしたんだ綾崎さん!」

バチバチとしている一夏の服を指で摘み、クイクイツと引つ張る。

奈桜のそんな行動に何故か妙に驚愕している彼であるが、そんなことは気にせず生徒手帳を取り出して奈桜は彼の耳元で囁いた。

(生徒手帳の42ページ、困った時に見てみてくださいね?)

「えっ? えっ? ……!?!」

盛大に困惑しているが、今はこれでいい。

シャルルが善人か悪人かは分からないが、その判断は一夏にして貰えばいい。こういう女性が絡んだ時の彼は期待が出来る。

生かすも殺すも彼次第……それでも彼の判断なら、きつと悪い事にはならないはずだ。奈桜はただその判断がされるまでのフォローに徹していればいい。勿論、見ていて限界が来れば手を差し伸べるとして。

(フアイトですよ! シャルルちゃん!)

シャルルの方にも顔を向けて手を振り、その場を離れる。

そのまま千冬の隣へと戻り反応を確かめてみると、しかし意外にも千冬の顔は妙に神妙で……

「お前は悪女の才能があるな」

「……?」

一体何の話をしているのだろうと奈桜は普通に困惑した。

消灯時間の1時間前。

この時間になると決まって千冬は騒がしい子供共を自分達の部屋へと追い返す。寮監室で集まることはまあ良いとしても、それが理由で消灯時間もフラフラしているととなると体裁が悪いからだ。

楽しく遊ぶのは構わないが、それが理由になつて規則を破つてはならない。自由には責任が伴う。……それとまあ、いつまでも居座られていと素直に邪魔だという気持ちも少しくらいは無くはない。そうでもしなければ綾崎と2人で静かに話し合う時間が無くなつてしまふそうでもあつたから。今では入学前にしていた様な2人つきりで語り合える時間もなかなか取れなくなつているのだ、これくらいの時間は確保しておきたい。

「……ふう、今日も楽しかったですね。千冬さん」

「ふつ、相変わらず騒がしくて仕方ない。これでは昨日までの静かな夜が少し恋しくなつてくるな」

「またそんなこと言つて。ほら、口角上がってますよ?」

「……見るな」

「ふふ、はくい♪」

いつもの事ではあるが、皆が帰った後、この部屋は一気に静かになる。

正直に言えばその落差に少しの寂しさを感じる事はあるが、少しだけほっとするのもまた事実だ。

2人で向かい合って座って、他愛のないことを話し、酔った千冬が世話を焼かれて、千冬もまた珍しく他人に少しだけ甘える。ちっぽけな平穩ではあるが、そんな時間がたまらなく愛おしく、自分が幸福な時間を生きているのだと実感することができる。

そう思っているのが自分だけではないと嬉しく思うが、それが自分だけでは無いと分らせてくれるのがまた綾崎だ。こんな恥ずかしい事を考える事も普段はないが、少し酔った時くらいは千冬だって浸りたい。

「……綾崎、久しぶりの授業だったが、何か変わった事はなかったか？困った事でも構わない」

そうして自分の思考の恥ずかしさを隠すように、目の前でニコニコと笑っている綾崎に声を掛ける。千冬も1日出来る限りフォローはしたつもりであったが、ずっと付いていることなど立場上来るはずもなく、実は気になっていたことでもあった。何より今の彼に出来る限り不便さを与えたくない、それは隠しようもない本音である。

「そうですね……メモが取れない分、先生方から資料も頂けましたし、特に問題はありませんでしたよ？実技に参加できないのは少し寂しいですが」

「それはせめてトーナメント後のリハビリまでは我慢しろ。事情が事情だ、筆記と補習で成績もカバーする。まあ、成績に関してお前の心配はしていないが」

「教えてくれる先生が優秀ですから、当然です」

「……媚びても頭を撫でてやるくらいしかできんぞ？」

「いいんですか？私には十分過ぎるご褒美になりますけど」

「うっ……」

自分で言い出しておいて、このザマである。

しかし千冬としてもこんな返しは卑怯だと言わざるを得ない。

頭を撫でるなど一夏にすら数度くらいしかした覚えがない。

つまり慣れていないのだ。

こいつはそれを分かって言っている。

意地が悪いように思えるが、きつと“十分な褒美になる”という言葉も嘘ではないの
だろう。それも含めて卑怯だと言うのだ。

こういつた小さな事でも綾崎には勝てる気がしない。

というか今や千冬が彼に勝てる事の方が少ないくらいだろう。

ぶっちゃけ彼に頼まれれば大抵のことは成してしまうのが今の織斑千冬だ。

「……………全く。ほら、こっちにこい。」

「ふふ、やりました♪それではお言葉に甘えて……………」

わっしわっしと若干乱暴にだが頭を撫でる。

自分の不器用さが嫌になるくらいに無骨なものだが、それでも嬉しげに受け入れるのだからそこもまた好ましいというかなんというか。

「……………」

だが一方で、その嬉しさの感情を素直に受け取ることが出来ない自分もいた。

そんな好ましきさとか、愛らしきさとか、そういったものをそれだけで全て台無しにしてしまうような一つの大きな違和感。

それがあの日からずっと千冬の心の内に蠢いていたからだ。

きっと他の誰でも気付くことはできない。

他ならぬ自分だからこそ気付くことが出来た、小さな変化。

小さくて目立たないものにも関わらず、考えれば考えるほど嫌な想像ばかり掻き立てるその疑問は、着実にこの和やかな空間を蝕んでいる。千冬はそれに耐えきることができず、この日遂にそれを言葉に出すことを決めていた。色々と考えた、なんとなくだが予想は付いている、しかし確かめなければならぬと理解はしていても、それに指を入

れる勇氣だけが湧いて来なかったのだ。一度でも触れてしまえば、壊れてしまいそうで。

「……………綾崎、聞きたいことがある」

「聞きたいことですか？ふふ、千冬さんの質問になら私、なんでも答えてしまいますよ」
「正にそれについてだ」

「へ…………？」

キョトンとした顔の綾崎から手を離し、真っ直ぐにその瞳を見つめる。

何が何やらという顔をしているが、千冬はむしろ信じられなかった。

本人がこの変化に気付いていないということに。

むしろ”彼”こそが一番のその変化を意識していないことに。

「綾崎…………」

「は、はい。なんででしょう、千冬さん」

「お前の一人称は、いつから【私】になった？」

「……………？なんの話ですか？」

「っ！」

気付いていないなんて話ではなく、覚えていない……………？

まさかそんなことが……………あり得ないとは思うのに、そんな夕子の悪い冗談を綾崎が言う筈もないというのも事実で。

「お前はこれまで私の前では、口調が元のものに戻っていた筈だ。そんな女性がかつた笑い方もしなければ、自身を“僕”と呼称していた。覚えていないのか……………？」

「えっと、そう言われましたも……………。千冬さんが嘘をついているとは思いませんが、その……………記憶が曖昧で」

「バカな……………」

「千冬、さん……………？」

確かに振り返れば目を覚ました直後、彼の他者への敬称が変わっていた事はあった。しかし精神鑑定の結果で問題が無かったが故に、それは多少の記憶の混濁の影響に過ぎず、警戒はする様にしていてもそれほど大きな影響があるとは考えなかった。

……………だが、これは違う。

これは記憶の混濁程度で済まされる問題では無い。

綾崎が心の中で呼んでいた他者への敬称が表に出て、綾崎が外面で示していた一人称

が心の奥底まで染み込んでしまっている。それはつまり、彼の表と裏が滅茶苦茶に入り混じり、互いに互いを喰らいあつてしまったと言つてもいい。

「わたし」が、あまやかしたい、から……」

(つ!!あの夜にはもう既に……!?)

千冬がああの夜、目を覚ました綾崎に泣きついた時、綾崎は既にこの状態になっていた。それはもう間違いない、間違いようがない、けれどだとしたら自分はどれほど間抜けだと言うのか。

もし千冬の仮説が正しいのだとすれば、綾崎の元の人格は半分程度しか残っていない。男の人格であつた綾崎は、新たに作り出した女の人格である綾崎に半分を塗り潰された。

人格が半分も変われば、それはもう別物だろう。

以前の綾崎はもう居ない、記憶すらも曖昧なまま。

きつと綾崎が自覚しているよりも大きく記憶の混濁は生じている。

もつと深く探れば、過去に出会つた人間の記憶すらも消えている可能性は十分に高い。……そして、もしその中に彼の孤児院の兄弟達が居たとしたら? 最悪だ、考えたく

もない、その時に綾崎がどれほどの絶望に襲われるかなど千冬は想像したくもない。

(どうすればいい、どうすればいい!! 私は一切どうすれば……!)

思考は正常、性別の認識も問題ない。

そもそも女性の人格を作ったのが綾崎自身なのだから、根本的な行動方針や人格の基盤も変わらず、それこそ大きな変化は人格くらいのもになるだろう。事実、今日の綾崎を見ても一夏達は何の違和感も覚えていなかったようだし、この変化に気付くことが出来るのはこの学園の中では唯一千冬だけだ。

(……だが、今の綾崎は以前の綾崎ではない。別人格とはなんだ? その名の通り別人なのか? 前の綾崎はもう死んだ、というのか?)

綾崎の女性的な振る舞いは、例えばそこに嘘偽りが無かったとしても、自意識的に誇張して作り出していたものに過ぎない。元の主人格とでも言うべき彼は間違いなく男性的なものであったし、敬語を使うタイプではあったが、ここまで畏まった使い方はしなかった。

ここにいるのは、一体誰なのか。

本当に、綾崎直人という少年なのか?

きつと酔いのせいもあつただろう。

綾崎が心配そうに見つめる前で、千冬はただ呆然と鈍い頭を回す。

(心優しく、素直で、誠実で……いや、駄目だ。これでは今の綾崎も同じ、人間性では2人を分ける決定的な何かにはなり得ない。

……そもそも、今の綾崎と以前の綾崎の違いはなんだ？2人の間にある違いなど、それこそ言葉遣いや呼称程度のものしか無い。何も違わない、何も変わらない、少し言葉遣いが変わっただけの同一人物。そうだろう。私は消えてしまったからという理由だけで以前の綾崎の人格を惜しみ、今の人格に嫌悪感を抱いているだけだ。どちらも憎むべきものではなく、どちらも愛すべきものであるにも関わらず、愚かにも2人を区別する様な事は間違っている。そもそも分けて考えることがおかしいのだ。今の綾崎も以前の綾崎も、どちらか一方を疎かにしていいものではない。

……っ!!

いや、待て、前提を履き違えるな！そもそも以前の綾崎の人格はもう戻って来ない！殺されたと表現してもいい！それを悲しむ事は当然だし、それを知っている私が今の綾崎に違和感を抱くのは当然の話だ！私が好意を抱いたのは以前の綾崎で、私に救いと安らぎをくれたのも！

……いや、今の綾崎も十分に私に安らぎをくれている。例え消えてしまったとしても、今の綾崎にも以前の綾崎の人格が僅かながら残っている。だったら私はそれを受け入れるべきだ。悲しんででも受け入れるべきだし、余計な区別などするべきではない。

消えた事を悲しんだところで、元の彼が帰ってくる訳でも決して無い。馬鹿か私は
思考が混乱している。

様々な思いが渦巻き、暴れ、治まる。

実際、千冬が考えるほど複雑な問題では無い。

起きた出来事は単純に、綾崎の心が壊れたというだけだ。

そしてそれは女装を隠すのに皮肉にも好都合な方向へ。

それでも以前の綾崎が壊れてしまった事を千冬がどうしても受け入れることが出来
なかつたのは、そこにはやはり千冬の綾崎に対する並々ならぬ執着が理由にある。

以前の綾崎が壊れてしまったというのに、自分以外の人間は誰一人としてそれに気付
く事すらない。むしろ本当の彼を知る者が居ない以上、彼は本当の意味で死んでしまっ
たとも考えられる。

加えて彼が死んでしまった事によって男性の一人称が変え、万が一の心配が一つ消え
た。彼が死んだ事によって、不利益は生まれず、利益が生まれてしまった。

そして最後に決定的に……彼という人格が消えたところで、自分以外の人間には何の
変化も現れない。そうしたの自分だ、千冬だ。千冬のせいで、彼の死を惜しみ悲しむ
物は一人も存在しない。女装という提案は彼の尊厳を奪っただけでは止まらず、彼の死
を惜しむ声すらも奪ったのだ。好意を抱いていた相手を、誰よりも酷く凌辱したのだ。

その死すらも、最低な形へと変えてしまった。

全ては千冬に責がある。

他人はそう言わないだろう。

しかしどう考えても責は千冬にある。

女装を止めなかったことも。

彼をISに乗せたことも。

彼を守らなかったことも。

彼を助けなかったことも。

そもそもの話、この世界にISを普及させた事も。

全て千冬のせいだ。

誰もがそれを否定しても、千冬自身がそう信じてならない。

そう、思えてならない。

他ならぬ千冬自身が誰よりも目の前の彼を殺しているのだと、今の千冬には……

「……千冬さん」

「っ」

「そろそろ夜も遅いですし寝る準備をしましょう？ 久しぶりの学校で、今日は

”僕も”

疲れてしまいましたから」

「!？」

懐かしいその響きに、千冬は勢いよく綾崎の方へと振り返った。

けれど彼は既に後ろを向き、フラフラと覚束ない足取りで壁に手をつきながら洗面所の方へと歩いていった。まだ上手く歩く事さえ出来ないだろうに、無理をして千冬から距離を取って、千冬はそれにすら気付く事は出来なくて。

「綾、崎……？」

そんな何かを求めするような情けない声をかけた彼女に、彼はピタリと立ち止まり、こちらへと振り返る。

「……………お風呂、先にいただきますね。千冬さん」

酷く寂しく、何かを堪える様な悲しい笑顔で綾崎はそう言った。

胸に添えられた片手が強く握り締められていたことには、辛うじて気付くことができ
た。

……………それなのに、もつと大切なことを見失っていたことにまでは、気付いていなかった。

31. 風も廻る

「……風が強いな」

その日の昼時は酷く風が強かった。

初日に織斑一夏に行った所業が原因なのか、食堂に行けばやけに絡まれることが多い。ラウラは最近ではこうして購買で買ったものを適当な場所で食べる事が多い。

どこへ行ってもああいった愚か者はいるが、相手にするだけ無駄であるという事は知っている。アレに構っている時間があるならば、非常時に備えて一帯の建物の構造を把握している方が余程有意義だ。

またいつ何時襲撃が起きるのか分からない上に、前回の功労者が動けない今、次の犠牲になれるのは自分以外にはいない。彼女の代わりになれるのは自分しか有り得ない。ならば今からでも詰められる所は詰めておくに越したことはない。ラウラはそんな責任感という布で隠した千冬に対する執着を胸に校内を見回っていた。今も綾崎の代わりに”教官のお気に入り”になるという計画は変わっていないし、むしろこうして積極的に行動をし始めている。

そうして牛乳を片手に付近を散策していると、ラウラは珍しく修繕中のアリーナの近

くで一人の女生徒を見つけた。

立ち入り禁止のこの区域に入っていることは問題であるが、同じ立場の自分が言えることではない。故に特に気にせず立ち去ろうとしたところ、ラウラはその女生徒に見覚えがあることに気が付いた。

(綾崎、奈桜か……?)

そこには前日に訪ねた、例の彼女が居た。

車椅子を近くに置き、木に背中を預けて座り込んでいる。

特に何かをする様子もなく、人の近づくことのないその空間で、彼女はジッと学園を取り囲む海へと目を向けていた。

何を考えているのかは分からないが、そんな彼女の方へと自然とラウラの足は動いていく。この学園に来てから他人に積極的に関わりに行くなど、初日に織斑一夏を叩きに行った時以来ではないだろうか。

あの時の間抜け顔を思い出しながらも、ラウラは彼女に声をかける。

「こんな所でなにをしている」

「……あら、ラウラさんでしたか。こんにちは。私は少し、海を見ていただけですよ？」

「海を?……こんなもの、いつでも見られるだろうに」

「いつでも見られるものですが、いつでも見つくりと見られるものではありませんから。」

人の記憶は磨耗するものですし、偶にこうして記憶に焼き付けておかないと忘れてしま
うんですよ」

一瞬こちらに顔を向けるが、彼女は直ぐにまた視線を元に戻した。

ラウラも彼女の隣に立ち、同じ様に海を見てみるが彼女の言っていることはよく分か
らない。彼女が何を思っているのか、こんな海を見たところで何を感じることもあるの
か、ラウラにはそれは理解できない。

「海を忘れたくない、ということか？理解に苦しむな」

「ふふ、そんなに難しい話ではありませんよ。嬉しい記憶、楽しい記憶、綺麗な記憶、そ
れをなるべく長く残しておきたいというだけです。それに支えられている自分を守る
ためにも」

「……それは、分からなくもないな」

「そうですか？」

「ああ、私にもある」

忘れられない思い出はある。

それでも忘れてしまうのが人間だ。

自分が人間である限り、あの日あの時に自分を救い出してくれた教官との記憶も色褪
せていく。ラウラにとってはそれが何よりも苦しく受け入れ難いものでもあった。

故にそんなことがあってたまるかと思つて日本に來たが、記憶にある教官とこうして会つた教官との違いはやはりと申すべきか存在していて。

そしてそれは、存外悲しいものでもあつた。

あれだけ大事にしていた記憶が知らぬうちに薄れてしまつていたという事実は。そして理想としていた女性は、実際にはそのままの姿では存在していなかつたという事実も。

「……例えばの話なんですけど、ラウラさんは誰かになりたいと思つたことはありませんか？」

「……いきなりなんの話だ？」

「いえ、これも他愛のない雑談です。嫌でしたら無理に答えなくても大丈夫ですよ」

「嫌、ではないが……そうだな。できるならば私は、教官の様になりたい」

「千冬さんに、ですか？」

「そうだ。私は教官の様な強さが欲しい。一点の曇りもない圧倒的で完璧な強さ、私が憧れる唯一無二の存在だ。教官の様なになれるのなら、私はどんな努力も厭わないだろう」

「……どんな努力でも、ですか」

「そういう貴女はどうなんだ。こんな話をしたからには、何かあるのではないのか？」

自然と彼女の隣に座り込む。

なぜかは分からないが、彼女と共にいる空間は嫌ではない。

ラウラはそう思った。

安心感、ではあるのだろうか、教官と一緒にいた時とはまた性質の違うもの。なにをする訳でもなく、ただこうして座り込んでいるだけでも悪くない。余計な言葉を発さなくてもいい、否、発さなくても、間違えても、全てを受け入れてくれるという確信がある。まだそう話したこともない癖に、そう思わせるだけの包容力が彼女からは感じられたのだ。

「……そうですね。正直に言ってしまうえば、今現在なりたい人は居ます。けど出来ることなら、その人になることなく、自分のままで、その人の立場になりたいですね」

「また随分と難しいことを言うのだな」

「要は『一夏くんになって千冬さんに愛されたい』か、『一夏くんの立ち位置になって愛されたい』か、という様な違いです。私は私のままで居たい」

「ああ、それならば私も後者だろう。……ふむ、そう考えれば私の強さについても同様か。理想を言うならば、私も私のままで教官の強さを得たい。教官そのものになりたいという思いも無くは無いが、そうなってしまえば教官に憧れて変わる事が出来た自分も消えてしまうからな」

「そうでしょう？それに実はこれ、前者よりは断然簡単で現実的な話なんですよね。なのに私達はまず始めに、前者の『誰かそのものになりたい』と安易に咄嗟に考えてしまいます。自分は自分以外の誰にもなれるはずなんてないのに」

「自分は自分以外の誰にもなれない」か。その立ち位置になるだけなら、努力さえすれば届く可能性は十分にあるにも関わらず、人はまず最初にその誰か自身になりたいと考える。……織斑一夏の立ち位置を密かに羨んでいる私にとっては、酷く耳の痛い話だな」

「私も同じ様なものです。なんでこんな簡単なことに直ぐに気づかなかつたのかなあつて、海を見ながら考えてたんですよ。それくらい本当に、お馬鹿なことをしてしまいましたから。……あんなことをしても、誰も幸せにはなれないのに」

自嘲するように笑う彼女は、以前よりもどこか気力が無さそうに見えた。

しかしそんな事を考えている間にも、ゆっくりと立ち上がってヨタヨタと車椅子へと戻ろうとするものだから、こちらも焦って手を貸してしまう。案の定、バランスを崩して倒れそうになるのだから放って置けない。ラウラがここまでの保護欲を感じたこともまたはじめての経験であった。

「ありがとうございます、ラウラさん」

「……存外、貴女もこんなつまらない失敗をするのだな」

「ふふ、ラウラさんの期待を裏切ってしまったでしょうか。私だって人間ですから、失敗くらいはたくさんします」

「それもそうか……なんというか、どうも私には無意識に他人に自分のイメージを押し付ける悪癖があるらしい。特に最近は感情的になっていたこともあって、余計にな」

「人間ですもの、仕方ありません」

「……人間、なのだな。私も」

先程まで眼前に広がる大海原に囚われていた彼女の視線が、今は逆に捕らえる様にしてラウラへと向けられている。

けれどそれは決して不快なものでもなく、こちらを見通す様なものでもなく、ただただ自分を受け入れる様な抱擁感に満ちていた。

これまで多くの人間を見て、見られてきたが、ラウラはこんな雰囲気を持つ者に出会ったことはない。彼女と向き合っているだけでささくれ立った心の棘が溶かされていくのを感じて、警戒心などほんの少しも抱くことができなくされてしまう。

無意識のうちに開いていく自分の心、けれどそれを止めようとする気力すら湧くことはない。彼女の前では、軍人で作り物である自分でさえも、1人の人間で居てもいいと思わされてしまった……

「……その、普段の教官は、どうなの？ 教官も、失敗をするのか？」

あれだけ馬鹿にしていた『兵器を扱う覚悟のない女生徒達』のように、『織斑一夏に群がる愚かな代表候補生ども』のように、ラウラは彼女に、なんでもない普通の、まるで学生の様な質問をしてしまった。

それは単にその視線から逃げるためのものだったかもしれないし、単純に見つめられて恥ずかしかつたからかもしれない。けれどそれはラウラにとつて、自分の憧れの千冬の姿しか知らないラウラにとつて、何より気になる事であったことも間違いない。

「……ふふ、それはもちろんです。いつも仕事が終わって部屋に戻って来ると、『生徒を叱り過ぎてしまったのではないか』とか、『忘れていた仕事があつて明日から地獄だ』と嘆いていたりするんですから。千冬さんだつてたくさん失敗はしていますし、それどころかむしろドジをする事が多いタイプだと私は思います」

「そ、そうなのか?」

「ええ。それでも、そうやって失敗してしまったことをしっかりと反省をして直そうと努力しているからこそ、今の千冬さんがあるのも間違いないんですよ。千冬さんの強さは、そういった所にも支えられた強さなのではないでしょうか。自分のした事を素直に反省出来るからこそ、人は次の選択を正解に導く事が出来るんですから」

「……そう、か。その視点で教官を見て考えたことは無かつたな。思えば私は教官の上辺だけしか見たことがない……いや、見ようとはしていなかつたのかもかもしれない。それ

どころかむしろ、私の勝手なイメージを押し付けて……ああ、だとすれば今の教官の私を見る目も納得出来るな。それは困る筈だ」

「そうだとすれば、それはラウラさんの失敗です。……けどそうなれば、千冬さんの様な強さを身に付けたいラウラさんが次にすべきことも、自然と見つかったんじゃないですか？」

「……なんというか、貴女は感心するほど口が上手いのだな」

「ふふ、褒めてもこの身体ですから。何も出せませんよ？」

「馬鹿を言うな、怪我人に何かを求めるほど私は落ちぶれてはいない。いいから大人しくしている」

「あわわ……」

動きの鈍い両手と両足を見せびらかす綾崎を、ラウラはグイツと車椅子に押し付ける。大人っぽさの印象は強いのに、時たまこうして子供らしさがあるのも可愛げというものなのだろうか。

この女が皆に慕われている理由が、今日のこれだけのやり取りだけでラウラは十分と言うほどに分かってしまった。自分でさえも、こうしてペラペラと余計なことを語って、その返答を何の抵抗もなく受け入れてしまう程に気に入ってしまったのだから。

「この女の代わりになって」教官のお気に入り」という立場を奪い取ってやろうと考

えていた過去の自分が、僅か数分で如何に愚かな物だったのかと改心させられてしまったのだから被害は甚大。”教官のお気に入り”という立場になるのに、彼女の代わりになるのは間違っていると、他ならぬ彼女に教えられてしまったのだから。最早どんな顔を向けていいのかも分からないほどだ。

「……まあ、それはさておき。とりあえず今日のところは車椅子を押す役割くらいはさせて貰おう。貴女をこのまま一人で返せば明日の朝には海の藻屑になっていそうだからな」

「もう。それこそ意外と意地悪ですね、ラウラさんは」

「ふつ、事実を言つたまでだ。その身体であまり彷徨くな」

「はーい、反省します」

……ああ、全く。

これは自分を差し置いて教官のお気に入りになるわけだと納得する。

この僅かな間で、あれほど他人に固く閉ざしていた心を開けられてしまった。純粹な戦力以外でこの女に勝とうとするのは、きっと教官とサシで戦うくらいに無謀なことだろう。

もうしばらく、こいつの隣に居たい。

もう少しだけ、こうして話していたい。

「え」

「……普通に困らないでくれ、冗談だ」

「よ、良かったです。もしかしたら迷惑だったかなと思ってしまって」

「………はあ」

嫌いではない。

嫌いではないだけだ。

まだ。

32. 変態の先輩として

放課後のアリーナ。

ここで一夏や代表候補生達が毎日のように訓練に励んでいると聞き、シャルはこっそりとだが足を運んでいた。

目的は言うまでもなく、一夏の乗っている白式のデータ……本当ならば乙女コーポレーションの恋涙のデータも目的の一つではあったものの、それについてはシャルが転入してくる以前に損壊してしまつたらしい。とは言え、そのおかげでシャルに命令されたデータの奪取の難易度も幾分かマシになった。彼女もとい彼としてそれは喜ばしい事だろう。

「……やっぱり、想像してたより動きが鋭い」

そうしてしばらくの間、一夏達が一体どんな訓練をしているのか物陰から伺つていたのだが、意外にもその練度は思わず感心してしまう程には高い。代表候補生2人と篠ノ之博士の妹が付きつ切りで教えているのだからある程度は当然なのかもしれないが、それにしてもISに乗り始めて数ヶ月とは到底思えないほどの慣れた動き。

そこには才能だけでなく、彼自身の努力もあるのだろう。

(とは言え、)

それでも仮にそんな4人の訓練を見て一つだけ問題点を上げるとするならば、教官3人の教え方が絶望的に下手だということだろうか。

技術一つ教えるにしても、

箒は擬音で全てを表現してしまう感覚系。

鈴音はなんとなくでしか言葉を表現できない天才系。

セシリアはあらゆる動作を細かく数値で表す理論系。

どれも一夏に教えるのに向いているタイプではない。

彼等が基本的に模擬戦を主体として訓練を行っているのはそれが理由の一つなのだろう。それでも教えて貰うことが必要になる時はあるのだが、その度にこうして一夏が頭を悩ませているのだからそれは普通に問題だ。優秀な選手が優秀な指導者になるとは限らないとは言うが、優秀な人間がこれだけ揃っていても優秀な指導者が1人も居ないというのは素直に同情するしか無い。

(……よし、それなら)

シャルは実際のところ、あの輪に入る瞬間をずっと狙っていた。

機体のデータを集めるのなら実際に戦闘してみるのが一番容易い。

集めたいデータのために必要な練習も近くで撮影する事が出来る。

そう考えれば、指導役としての仲間入りは最善だろう。

ついでに一夏に模擬戦を申し込んで見れば、時間稼ぎをする事でそれなりの長時間戦闘で白式のデータを取る事ができ、最早言うことなしだ。

「お疲れ一夏、いい勝負だったね」

シャルは密かに心臓を鳴らしながら4人のもとへと近付いていく。

意外にもそれに嫌な顔をする者は居らず、一夏に関しては何の疑いもなく笑顔で手を振りながら受け入れてくれた。彼からしてみれば唯一の男性の同級生なのだから当然なのかもしれないが、実際そんな彼に不義理を働いているシャルにしては心が痛くなるばかりである。

「おうシャル、負けちまった。あー、クツソ。こんなんじや駄目なのに……やっぱまだ遠距離持つてる奴相手だとキツイなあ……」

「ま、まあ基本的にみんな遠距離武器は持つてるものだと思うんだけどね」

「それなんだよなあ、どうしたもんか」

「それじゃあ次は僕と試してみない？ 近距離も遠距離もそれなりに出来る自信はあるよ？」

「おつ、それは助かる！頼むぜ！」

そうして模擬戦に持っていくのはやはり簡単だった。

順番に横入りされた事に不満そうな鈴音も居たが、シャルの実力が気になるということもあってか、彼女も言葉としては何も言わない。

そして事前の情報通り、やはり一夏は武器を一つしか持っていないかった。しかしそれでも、ブレード一本でここまで勝負を長引かせられたというのはシャルにしても普通に驚くべきこと。武装の数で押し潰していけば、てつきり一方的な試合になると思っていたのだが、思っていた以上に一夏の練度は高く、シャルの攻撃を避ける避ける。

最後の方には瞬時加速で直進しながら相手の引鉄と銃口の位置から軌道を予想し、弾丸を剣で弾き飛ばすなどという全く訳の分からない芸当まで行うのだから目を見開くしか無い。

あんなこと一体誰が教えたのだろうか。

それを実践しようとする一夏もおかしい。

そもそも近接戦闘もそれなりに出来て、事前に白式の一撃必殺を知っていたからこそ対処出来ただけで、一般的な操縦者ならばその時点で負けていた程だ。やはり彼も天才の部類、ブリュンヒルデの弟というのは伊達ではない。

「あれ？綾崎さんだ……！」

「え？」

そんなことを考えて一夏と打つかり合っていたからか、一夏がそう言つて気付くまで

シャルも件の彼女が来ていることに気がつかなかった。

乙女コーポレーションの専属搭乗者にして、あの織斑千冬のお気に入りに入り。箒達が慕い、一夏が憧れる、巷では母性の化身と呼ばれる嘘みたいな少女。

そんな彼女が車椅子に乗ってアリーナへと入り、一夏とシャルの模擬戦を見ていた3人と何やら話し合っていた。3人の様子は妙に真剣で。

（あれ？なんでみんなでこっちに近付いてくるの？……え？しかもこれ、一夏じゃなく僕の方に来てない？）

「……シャルル、お前に言いたいことがある」

「え、え!?ええつと、な、何かな……?」

いきなりシャルの目の前に仁王立ちした箒は、その鋭い目つきでこちらを睨み付けて立ち塞がった。

他の2人もその横に立ち、何やら只事ではない雰囲気を出している。

……これはもしやデータを取っていることがバレて、そのまま学園から追い出されるなんてことになるのでは？

まさか綾崎がそれに気付いて3人に教えていた？

やっぱり綾崎は自分のことなんてとつくに？

冷汗をだらだらと流して顔を青くする。

無理矢理笑顔を作ってはいても、動揺は止まらない。

綾崎はそんな彼女達の後ろでニコニコと笑うだけだ。

聞くにこの学園で起きた襲撃事件で最も活動したのは彼女、織斑千冬からも信頼されている彼女ならこんな素人の男装を見破ることは容易いだろう。それこそつまり、自分が乙女コーポレーションの情報を探っていたのもバレていて、あの時に聞かされた乙女コーポレーションの内情は全て偽り。そうでなければあんな頭のおかしい話がある筈がない。

凄まじい威圧感に晒されたシャルの頭はもう限界だった。

取り繕える方法が見当たらない、このまま追放されれば父親から見放される。全てお終いだ。もうこうなったら日本式土下座でもなんでもして何とか協力をお願いする以外に方法なんて無くて……

「シャルル！ 私達と一夏の訓練に付き合って貰いたい！」

「……………へ？……………え？は？」

だからもう、何が何だか全く分からなくなってしまった。

「え、ええと……………え？……………え??！」

「その、恥ずかしながらね、どうも私達の教え方って他人には分かりにくいらしいのよ」「私達はそのやり方でやってきましたけれど、3人とも独学で登ってきたタイプですか

ら。万人受けはしないとの事で……」

「というか、母さんの教え方を聞けば比べるまでもなく私達にセンスが無いことが分かかってしまった。だが見ていたところ、どうもお前の教え方は一夏も理解しやすいらしい。つまりスカウト、というところだ」

「え、ええ……？」

先程まで「なぜ分からないのか、これが分からない」といった感じでやんややんやと言っていた3人とは思えない変わり身っぷり。それこそシャルとしてはデータを取れる機会が増えるし構わないものの、今は驚きと困惑の方が強いというか……

「シャル！俺からも頼む！どうか手を貸してくれ！」

「頼む！」

「お願い！」

「お願いしますわ！」

「わ、わかった！わかったから！みんなでそんなに近づいて来ないで！怖いよ！」

頭を下げられながら追い詰められるという恐ろしい体験をしているシャルの対面では、今も変わらず綾崎がニコニコと笑いながら見守っている。

どうも彼女はこれを狙っていたらしい。

それはつまりそう、まだバレてはいない。

信じられないような逸話ばかりを持つてゐるせいか、警戒し過ぎていたのかもしれない。

それでも如何にも頑固そうなこの3人をこんなにも簡単に説得してしまうのだから、その影響力の強さは理解出来るというところ。

未だ警戒を弱めてはいけなだろう。

パンパンパンと三発の銃声

一夏の放った銃弾が的を掠めていく。

『まずは銃を理解する事が大切』というシャルの意見の元、一夏は実際にシャルが貸した武器を使用して試し撃ちをしていた。何度か試すうちに精度が上がっていくのは彼の才能故なのか、それとも日頃からイメージしていたりもしたのか、その成長速度は見ている側にしても気持ちがいい。

そうして一夏が何度か何度もそれを繰り返しているのを見ると、今度はシャルの背後から車輪の音が聞こえてきた。

その音は直ぐ隣で停止して、相も変わらず人の耳を溶かす様な優しい声で車輪の主は語り掛けてくる。

「一夏くん、なかなか筋がいいみたいですね」

「うん、ブレード固定なのが惜しいくらい。もしかして綾崎さんが教えた事があつたりするのかな？」

「いえいえ、まさか。私は銃は使えませんから。きつとセシリアさんの仕業だと思いますよ」

「……？綾崎さんも銃火器は使わないの？」

「ええ、私は攻撃するのが下手ですから。剣だつてまともに使えません」

「あの、それつてどうやって戦うの……？」

「ふふ、秘密です」

「えー、そこで隠されたら気になるなあ」

シャルルのことを疑つて情報を隠している……わけでは無いらしい。

本当に単純な、軽いイタズラの様なものなのだろう。

こうして話していれば彼女はただ人より少しだけ良く気が利く女の子といった印象でしかなく、とてもではないが先程までの自分があれほどまで警戒していた意味があつたのかと思つてしまうほどだ。

なんというか、離れていると冷静に警戒してしまうのに、いざこうして近付いて話してみれば簡単にとさほぐされてしまうのだから不思議なものだ。近くに居るだけで心

が温かくなるというか、話しているだけでストレスを忘れられるというか、如何にも色々でありそうな彼女にはそんな奇妙な力がある。第一印象から心を許せる雰囲気というのは、それだけで特別な能力と言ってもいいだろう。

「……そういえばシャルルさん、一つだけなのですが、質問をしてもいいでしょうか？」

「ん？ なにかな。僕に答えられることなら答えるよ？」

「シャルルさんは女の子じゃないですか？ 一夏さんと同部屋で困ったりはしていませんか？」

「うーん、そうだね……一夏はスキンシップが多いところがあるけど、それ以外は別に何も……え？」

「え？」

「え？」

「え？」

だからこそ、これも彼女のその能力のせいに違いなかった。

シャルとしてはそう思わずにはいられなかった。

……そう思わせて欲しかった。

「ええええつとおおおお?!?! なななな、何の話かなああ?!? 綾崎さん!!」

「ふふ、これでも私、乙女コーポレーションの専属搭乗者ですから。そんな初々しい男装

では私の目は誤魔化せませんよ?」

「ききき気のせいじゃないかなあ!!ほ、ほら!僕昔から女の子っぽいって言われるし!」
「知ってますかシャルルさん。乙女コーポレーションの社員の1割は性別を偽って生活しているんですよ?それも最新の技術を使っているので、その道の専門家でもなければまず見分けられません。アレに比べればシャルルさんの男装なんて可愛いものです。例えばそうして包帯で胸を無理矢理押さえ付けるのは、胸の形が崩れてしまうので専用の道具を使った方がいいですよ」

「あ、ああ、あああああ……」

絶望した。

油断していた。

そこまで頭が回っていなかった。

彼女が色々とすごい人物であることは知っていた。

けれど、本来なら彼女が自分の変装を見破る可能性も十分に考えるべきだったのだ。だって彼女はあの乙女コーポレーションの専属操縦士なのだから、変装に詳しい可能性は誰だって考えられた筈なのだから。

(ど、どうすればどうすればどうすればどうすればああああ!!)

先程まで彼女に完全にときほぐされていた自分を責めたい。

冷静になった今になって心から後悔する。

事前に何度も確認していたはずなのに、彼女がただの女子生徒では無いという事なんて。彼女こそが襲撃事件で敵の最大戦力を押さえ付け、あの織斑千冬のお気に入りとまだ言われる人間だというのに。

どこのどんな情報を見ても心を許せる相手ではなかったのに。

「……シャルルさん、私からあなたに伝えたいことは一つです」

「は、はいっ！な、な、な、なんででしょうか……!?!」

運良くこの場にはシャルと彼女の2人しか居ない。

他の3人は2人よりも後ろにいるし、どうやらこちらの話も聞こえていないらしい。いやむしろ、彼女がその条件を作り出した可能性だってある。というか他の3人が近寄ってこない時点でそれはもう確実だ。

きっとこれから何かしらの条件を突きつけられ、そうでなければ追放を宣言されるのだろう。当然だ、そもそもが犯罪なのだし、彼女からしてみれば自身の友人である織斑一夏と共同生活をしている相手なのだから。危害を加える対象だと考えられていても仕方がない。

（せめて、せめて条件にして欲しい！どんな酷い条件だとしても、言うことさえ聞いていれば何とかなるから！だから……!!）

だから、今この一瞬だけは心から願った。

彼女が正義に満ち溢れた人間ではなく、脅しや脅迫をしてくる様な邪悪な人間であることを。

「本当に性別を隠したいのなら、自分が安心して居られる空間を作ることがオススメします。いくら努力したところで体調不良でバレてしまつては元も子もありませんからね！」

「……………へ？」

ただ、まさかそれは予想していなかった。

出来る筈もなかった。

彼女が正義に満ち溢れた人間でもなく、邪心を抱いた悪人でもなく……………そんな小さな事も全部まとめて受け止めてしまうほどの、人間だという事なんて。

「え……………え？」

「ほら、目の下にクマができて始めてます。ダメですよ？せつかく綺麗な顔をしているのに、勿体ないです」

「い、いや、あの……………」

「それに肌にも少し出てきてますし……………全くもう、何を抱えてたら短期間でこんな状態

になるんですか。……もしかして、一夏くんが近くににいるせいで手入れも疎かにしちゃってませんか？」

「え、えっと、お風呂の中で出来る事は……けど、日本の男の人は肌の手入れとかしないって聞いて……」

「そんなことはありません！少なくとも私は……じゃなくて！少なくとも、やる人はやりますから！気にしないで今日からはしっかりと手入れをして下さい！分かりましたか？」

「は、はい……」

綾崎のマシガンのような言葉の数々に、シャルはろくに反応することができない。

さつきまで男装がバレて、それを理由に追い出されるか、脅されて、酷い命令ばかりされると思い込んでいた彼女には、こんな風に優しく頬を撫でられながら氣遣われ、ほんの先日出会ったばかりの彼女に心の底から心配していると分かるほどに澄み切った目を向けられている現状が全くもって信じられないのだ。

いつそ夢か何かだと言われた方が飲み込める。

だって自分は許されないことをしていたのだから。

それこそ、誰かに軽蔑されるのは当然だし、もつと言えば完全な犯罪。自分が生きるためとは言え、それでも断ることはできたはず。それを自分の意思で承諾してここに来

た時点で、彼にできる言い訳はない。バレた時点で全てが終わるか、良くても酷い目に合うのは当然だと思つてここまでやってきた。

(助けてくれる人なんて居る筈がない……)

デュノア社が絡んでいる時点で、この男装がバレれば誰にでも何のためにそんなことをしているかは分かる。そうすれば協力した時点でその人もまた共犯者になるのだ。

だから、だからきつと、この人もそのリスクを負つても得たい利益があるから優しくしているだけなんだと。

そう思いたい。

そう、思いたいのに……彼女の目だけが、どうしても、どうやっても疑えないほどに、優しくして。

「ああ、この状態はちよつと見ていられませんね……今からお時間取れますか？私の部屋にある化粧品をいくつかお分けしますから、皆さんが来ないうちに使い方のレクチャーだけでもしてしましましょう」

「ま、待つて!!?こんなことしたら綾崎さんまで……!」

「共犯に、とでも言いたいんですか?」

「っ!」

やっぱり、彼女はシャルのしていた事を知っていた。

けれどそれでも、彼女の瞳に宿る温かな光は変わらない。

「問題ありませんよ。私はただ新生活に慣れずストレスを溜めてしまっている同級生のフォローをしているだけです。他の人から見ても不審に思われることはないでしょう」

「そう言う問題じゃなくて……!」

「シャルルさん、知っていますか?」

「っ!?!」

ふわりと頭の上に彼女の手が乗った。

細くて、艶やかで、冷たく綺麗なその手に慣れた様に優しく撫でられれば、怒鳴られたわけでも睨まれたわけでもないのに、シャルの言葉はこれっぽっちも喉から出なくなってしまうて……

「私は皆さんに”お母さん”って呼ばれているんですよ?こんなに可愛い女の子が泣いているのに、放っておけるわけがないじゃないですか♪」

重なる。

見えてしまう。

胸から湧き出た情動が、一気に目頭まで上り上がった。

そう言う彼女の笑顔は、あまりにも温かくて、柔らかくて、あの日以来冷たく凍りついてしまっていた心をこんなにも簡単に溶かしていく。

(だって、卑怯だよ……)

その笑顔も、

その撫でも、

優しい言葉遣いも、

こちらを見る目も、

その目から伝わってくる心、

全部。

全部全部。

全部全部全部……

……もうこの世にはいない母と、本当に一緒のものなのだから。

「うつ、うつ……うつ”う”く……!!」

「あらら……一夏くくん! シャルルクんの体調が悪そうなので私達は先に戻っていますねー!」

「なっ! 大丈夫かシャルル!? 俺も着いて行って……!」

「鈴ちゃん、箒ちゃん、セシリアさん、先程も相談させて貰いましたが、後はお願いしませね」

「任せろ! (任されたわ!) (任されましたわ!)」

「さあ一夏！銃の練習はそこまでにして剣をやるぞ！」

「そうですわ一夏さん！せっかく学んだのですからその身で試さないとなりませんわ
！」

「心配しなくてもいいわよ！私は両方できるんだから！」

「い、いや！俺はシャルルを……待て待て待て待て！3人は無理！3人は無理だつて
……！うわあああ!!綾崎さあああん!!」

一夏の叫び声を後に、シャルルは手を引かれるままに綾崎に連れて行かれる。車椅子に
乗っているのに、こうして自分を先導する彼女の背中はとても大きく見えた。頭の中に
過ぎるのはもう既に朧げになってしまった小さな記憶……あの時も自分はこうして、”
母”に手を引かれていた。

33. とろとろしやるろつと

「どうですか？そろそろ落ち着けました？」

「…………ぐすつ。う、うん、ごめんね綾崎さん。こんな風に泣きついちゃって」

「気にしないでください。私の膝なんかでよければ、いつでも貸しますから。好きなだけ使ってくださいもいいんですよ♪」

「うう、みんなが綾崎さんのことを”お母さん”って呼ぶ理由がやっと分かった気がする……………こんなの勝てないよう……………」

「ふふ、素直に甘えられるのはいいことですよ。ほくら、もつともつと甘えちゃいましようね♪」

「ううう、だめになつちやうよお……………溶かされちやうよお……………でも離れられないよお……………」

あの後、寮監室に招かれたシャルは、その流れのまま彼女の膝に泣きついてしまった。

部屋に入ると直ぐにベッドに腰掛けた時は不思議に思つて戸惑つたものの、膝上にブランケットを掛けて『さあ、どうぞ？』と言われてしまえば行くしかあるまい。事実行つ

た、何の躊躇もなく。

あんなにも慈愛に満ちた表情で手を広げられれば、恐らく一夏であつても、織斑千冬であつても抗えない。だから自分は悪くない、そんな言い訳が簡単に出来てしまう。

ブランケットのかけられた彼女の膝はとても柔らかくて、強く抱き締めたら折れてしまいそうなほどに細いのに実際にはとても頼り甲斐があつて……ぎゅーつと頭を抱き抱えられて頭を撫でられているともう本当に駄目になつてしまう。

ストレスとか悩みとか全部吹き飛んでしまつて、同級生にこんな甘え方するのは良くないと思つて離れようとしても、彼女がこれでもかと甘やかしてくるので全く逃げられない気がしないのだ。

これこそ母性の暴力。

こんなことをされては、一生彼女から離れられなくなつてしまう。

そう思わずにはいられないし、今現在そうなっているのが分かる。

それなのに、それなのに……

「んっ……今日も一日頑張りましたね。今だけは辛いことも悲しいことも全部ぜんぶ忘れて、私に身を任せてください」

「……綾崎さんの鼓動が聞こえて、すごく落ち着く」

「大丈夫、大丈夫です。私はここに居ますから。私がこうして近くに居る間は、シャルさ

んの事は私が守つてあげますからね」

「うう……好き……」

さり気なくとんでもないことを口走つてしまったが、この部屋には彼等2人しか居ないから問題ない。むしろこの空間だからこそ思考とか感情が滅茶苦茶になつてしまつていゝのである、完全に色々暴走している。

ただそれでも、彼女の仕草や言葉の一つ一つが死んだ母を思い出させて、シャルの心に張られていた氷を溶かしていくのだ。これくらいは許して欲しいし、彼女がそれを許してくれるのだから他の人間の許可などもう必要ない。

「ふふ、そう言つてくれると私も嬉しいです。そんなシャルルさんにはもつともつとご褒美しちゃいましょうか」

「ああああああ……」

もうだめで、おしまいだった。

世界の真理はここにあつた。

彼女の膝と胸の間こそがこの世界に残された最後の楽園だった。

ここに居れば全ての負の感情から解放される。

ここに居れば全ての嫌なことを忘れられる。

もう何も怖くない、一生ここで暮らしたい。

全てを解き放つて彼女の優しさに浸るのは、凄まじい安堵感があった。

お母さん、ごめんなさい……

僕にももう一人のお母さんが出来てしまうかもしれない。

でも、お母さんのことを忘れたわけじゃなくて、ただ僕がこの母性に抗えないというだけの話なのです。

むしろお母さんが居たからこそ、2人目のお母さんができてしまったというか、僕は悪くないというか、僕じゃなくてもみんななこうなるはずだというか、だから、だから……
「はい、シャルルさん？耳掻きしちゃいましょうか？」

「ま、待つて……そんなのだめ……」

「ふふ、そうは言つても抵抗する気が無いのは分かってますよ？大丈夫です、頭の中真っ白にして、ただされるがままに私に身を預けてください」

「あ、ああああああ……」

他人に耳の中を見られてしまうなんて、普通は汚れていないかとか気にしてしまうものなのだが、勿論どうにも逆らえない。強過ぎず、弱過ぎず、浅い所から深い所まで彼女の手によって遠慮なく暴かれていくのだが、それなのに自然と指の一本にも力が入らなくなるほどに骨抜きにされてしまう。

この間、僅か数分

しかしその数分で、意識は完全に飛ばされる。

真つ白になった頭の中に、甘い彼女の声だけが溶け込んでくる。

耳から入って、全身に巡って、身体の全てに染み渡る。

もう麻薬である。

彼女は麻薬だった。

彼女の全身は麻薬だった。

ここに着て偶然にもシャルは、その結論に行き着いてしまった。

「……………ん、よく取れました。シャルさん、引き抜きますからね」

「あつ、あつ、あああ……………」

ゆつたりと耳垢を取った綿棒が引き抜かれ始めると、それに呼応する様に身体全体が震え始める。ピクリピクリと跳ね上がるそんなシャルを見て綾崎はクスクスと笑っているが、その手を止めようとはしない。

「さ、ふーってしちゃいますよ。びっくりしちや駄目ですからね」

「まって、まって……………」

「はい、ふーっ……………」

「ひあああああつ!?!」

無理だと、これ以上は本当にもう無理だと。

この締まりのない顔を見てどうか分かって欲しい。

これ以上情けない顔を見せたくないという最後のプライドを汲んで欲しい。目で訴えかける。

最後の理性が歯止めをかける。

彼女の服をぎゅつと掴んでそれを伝える。

「なくんて言いつつも、本当はもつとして欲しいんですよね？大丈夫ですよ、私はちゃんと分かってますから」

……はい。

「はい、じゃあ次はお耳のマッサージしましょうか。お耳の中に指を入れたり、塞いだり閉じたり、もみもみしたりしますからね」

どうやら今日が最期の日。

シャルはそうして亡き母を窓の外の青空に幻視しながら、途方もない快樂の中へと引き摺り込まれていくのであった。

「うんうん、やっぱり元が良いと違いますね。これからは毎日ちゃんと続けるんですよ？一夏くんに怪しまれたら私に命令されたとしても言つて誤魔化して構わないですから。」

「う、うん！わかったよ、ありがとう！」

綾崎に存分に溶かされてしまつた後、シャルは彼女にいくつかの化粧品を分けてもらつていた。

あの後なにが起きたのか……？

そんなことは今の時間があの時から2時間も後だという時点で色々と察して欲しい。綾崎はすごかった、あの細くて白い指が両耳に入った瞬間の何とも言えない背徳感と快楽は多分もう一生忘れられないだろう。まるでよくない事をしている様な気分させられて、けれどそれがこれっぽっちも抵抗出来なくて、対抗したいとは思えなくて、結局最初から最後まで全部受け入れてしまつたのだから。あれはもう罪にならない犯罪である。快楽の中で思いついた麻薬という表現はあながち間違いいではないと、今でもシャルは思っている。

「……乙コーの化粧品の種類は聞いてたけど、やっぱり凄いな。これ高かったりしないの？」

「確かに一般的なものに比べて値は張りますが、それでも一般的な家庭の人にも手の届く範囲ですよ。それに私の場合は勝手に色々と送られてきますから、気にしないでください」

ズラリと並んだ大量の化粧品。

彼女はこれをシャルに分けると言ってくれた。

一夏と同居屋になることを危惧してそういった類のものを持ってこれていなかった彼女としては、これは本当に嬉しいものだった。

しかも分けて貰った物は乙コーの化粧品の中でもシャルが名前を聞いたことがあるくらいに人気なものばかり。常時品薄状態が続く様なものをこうして使うことができるなんて、1人の女性としても嬉しい。

……加えて、こうして彼女に化粧品の使い方を実際に教えて貰っていると、昔お母さんに初めて化粧の仕方を教えて貰った時の事を思い出して、それもあってこの時間はシャルにとつて凄く楽しく感じられた。

「……さて、そろそろ私は夕食を作ろうと思うのですが、勿論シャルルさんも食べていきますよね？」

「え？綾崎さんが作るの？」

「え？ええ、そのつもりですが……」

そう言つてフラフラと車椅子から立ち上がろうとする彼女。

なぜそんな状態で当然のようにそんなことが言えるのか……

そういえばと思ひ返せば、亡くなった母も体調が悪いにも関わらずシャルの心配も他所に当然のように家事を行なつていたことを思い出す。

母というのは、どこもこんな感じなのだろうか？

思い出すとこんな姿でさえも何処か懐かしく感じるし、心が温かくなつてしまう。

……けれど、

「だめ」

「え？」

「綾崎さんは座つてて、今日は僕が作るから。そんな身体で家事なんて絶対させないよ」

「で、でもいつもは……」

「絶対だめ！いいから座つてること！ほんとにだめだからね！」

「そ、そうですか？そこまで言われては、我慢、しますが……」

その結果、母は倒れたのだ。

その時、シャルは大いに後悔した。

だから、もう二度と同じ間違いは犯さない。

……だからそんな悲しそうな目を向けられても絶対に屈しない。

ダメなものだ。

いくらそんな上目遣いでねだる様にこちらを見てきても負けない。

心を鬼にしても、あの目に勝たなければならぬ。

シャルはこれでも料理には多少の自信があった。

今彼女の心の中に燃えたぎっているのは一つ。

少しでも彼女の負担を減らすこと……！

「よし、やるぞ……！」

……なお、この五分後に気になって彼女の様子をシャルが覗いてみたら、彼女は当然のように洗濯物を畳んでいた。いや、確かに料理よりはマシではあるだろうが、なぜジツと座っていることができないのか。

これがワーカーホリックという奴なのか。

それでも、洗濯物畳みなんて面白くなさそうなことを、見て分かるほどに楽しそうにしている所を見ると、そこまでは流石のシャルでも止めることは出来なかった。

彼女は本当に自分と同じ年の女性なのか。

自分が大人になったとして同じことが出来るのか。

色々考えさせられることはあるが、こんな女性になりたいとは素直に思う。

(……一夏も言つてたけど、お嫁さんにするとしたら、男の人はやっぱりこんな人が理想なのかなあ)

その言葉が綾崎に伝われば、一体彼女がどれほどのダメージを受けることになるのか。口に出されなかつた事だけはなにより救いである。

「ぬわああああ！疲れたあああ!!」

「ふわああつ!!」

「一夏くん……?」

あれから更に1時間程が経ち空も真つ暗になり、シャルの料理も完成に近づいた頃、一夏達は漸くドタバタと寮監室へと入りこんできた。

突然扉をあけてその場で倒れ伏した一夏の勢いにシャルは思わず驚いてしまったが、それまでベッドメイクを行なっていた綾崎さんが直ぐに近付き労つているところを見ると、やはり見習いたいと思つてしまう。

「あらら、これはまたお疲れですね。そんなに箒ちゃん達に絞られてしまいましたか」

「いや母さん、今日は私達のせいではない。あのラウラ・ボーデヴィツヒとか言う奴のせいだ」

「??ラウラさんですか？」

「そうなのよ。あいつつてばいきなりやって来て『お前のことを教えろ!』つて襲い掛かってきたの。良い機会だと思つて私達も傍観してたんだけど……」

「やはりラウラさんは軍人なだけあつて強さが桁違いでしたわ」

「結局、生かさず殺さず1時間ほどかけて甚振つていたな。15回ほど一夏がぶつ飛ばされた辺りでスツキリした顔をして帰つていったが……」

「くっそーあいつ絶対許さねえ……!!次は絶対ぶつ飛ばし返してやる……!」

床に這い蹲りながらそう宣言する一夏。

しかしそんな風に憤つていても綾崎さんに頭を撫でられれば酷くみつともない顔をするのだから格好もつかない。

「えつと、一応みんなの分も作つただけど……食べていくよね?」

「二「もちろん(だ)(よ)(ですわ)!!」」

「そ、そつか。それならよかつた」

お腹が減っていたのか凄いい勢いで詰め寄ってきた4人は、シャルとしては普通に怖かつた。

……けれどこの日、シャルはようやく本当の意味で彼等と笑い合えた気がした。

34. 変化の兆し

「そんな所に立っただけは、風邪を引いてしまいますよ?」

部屋の外で隠れる様に佇んでいたラウラに対して、彼女は当然の様にその声を掛けてきた。あれほど言ったにも関わらず、相も変わらず一人で車椅子に乗りながら、ニコリとこちらに笑いかける。

「よく一人で出歩けたな」

「少々強引に抜け出してきてしまいました。戻ったらまた一言二言頂くことになってしまいますね」

「ふっ、フォローをするつもりは無いぞ」

「あらら、それは残念です」

クスクスと笑いながら互いに向き合う。

どうしてラウラがここに居たことを知っているのかは知らないが、ラウラ自身彼女とこうして語り合うことは嫌いでは無い。自販機の前のソファへと指を差し、肩を貸しながらそこへと腰掛ける。

「……生憎千冬さんは居りませんが、一緒に食事でもいかがですか?今日はシャルルさ

んが夕食を作ってくれているんです」

「悪いがそれは遠慮させてもらおう。織斑一夏とて数刻前にあれだけボコボコにされた相手と食事を共にしたくはないだろう」

「ふふ、そういうものでしょうか。確かに何やら熱い想いを滾らせてはいましたが。

……そういえば、偏見や印象を取り払って向き合ってみた一夏くんはどうでした？」

「……想定以上の実力はあったが、まだまだだな。武装というハンデを補える程の実力はなく、精神的にも未熟。あれならばまだセシリア・オルコットを含めた囲い共の方が使えるだろう」

「その割には満足そうな顔をしていますね」

「……未熟なりにもそれを認め、”強くなりたい”という本気の意思が奴の目には灯っていた。将来性のある人間に失望するほど私は腐っていないつもりだ」

「ふふ、それはよかった」

こちらの答えを最初から知っていたかの様に再度彼女は笑みをこぼす。全てを見透かされている様で気に食わない筈であるのだが、不思議とそこまでの嫌悪感はない。ムツとする程の反抗心はあっても、その笑顔と雰囲気を目の前になると自然とこちらが折れてしまうのだから不思議な話だ。

……つい数時間ほど前、ラウラは織斑一夏に喧嘩を吹っ掛けた。

綾崎奈桜との話を経て、自分のイメージや偏見に囚われず相手の本質を見極めるという事を試すのに、彼ほど適任な相手が居なかったからだ。

とは言うものの、今でもラウラの中の織斑一夏に対するイラつきは収まらない。単純な会話をするだけでは恐らくこのイラつきが増すだけだと思つたラウラは、余計な事を考える暇が無ければいいのだと思ひ付き、とりあえず殴り掛かつてみたのだ。

『お前の事を私に教えろ!!』

『何言つてんだこいつ!』

予想通り一夏を一方的に黽つている間はイラつきもどんどん和らいでいき、一夏の事をじっくりと観察することができくらいには自分の思考と感情に余裕が出来た。

そうしてラウラは見つけたのだ。

あの男の瞳の奥に滾る、決意の炎を。

アレをみた瞬間にラウラの中の一夏への評価は一転した。

確かに彼は過去に一度、ラウラの憧れの名誉を損ねる原因となつた。

しかし将来的に彼は、その汚点を払拭できるほどの、千冬が名誉を捨ててまで守り抜いたに相応しい程の人間になれると、ラウラは確信した。確信してしまつた。認めたくはなくとも、認めざるを得ない程の熱い炎がそこにあつた。

ああ、これ程に面白いことが世の中にあるだろうか。

織斑一夏の目の先にあつたものはラウラでも、ましてや千冬でもない。目標とすべき人間などそこには居らず、ただ只管に強さを求めている。一体何がそこまで彼に働き掛けたのかはラウラは知らないが、最強と謳われる千冬が最も近い場所にいる立場である筈のあの男が、その千冬の更にその先を見ているのだ。その点に限って言えば織斑一夏は、千冬の強さを限界であると、そこに辿り着けるだけで良いと満足していたラウラの先へ行っていたのだ。

心の底から気に入らない相手なのに、今なおムカつきが収まらない様な相手であるのに、感心した。見直した。だからより一層ボコボコにした。

「……貴女の言う通りだった。たつた一度人間の本质を見ようとしただけで、これほどに私の見る世界が変わった。今は感謝しかない」

「大袈裟ですよ、ラウラさん。人は他人の言葉だけではそう簡単に変わることはできません。それほどに自分が変わったと感じたならば、それは変わろうとする意思がそこにあつたからです。つまり、全部ラウラさんの力です」

「ふつ、貴女は相変わらず謙虚なのだ。だがそれでも、感謝の言葉くらいは素直に受け取って貰おう。そうでなくては私の気が済まない」

「……それでしたら遠慮なく、お力になれたのなら私も嬉しく思います」

そんなことを裏に何かを抱えている訳でもなく純粋な笑みで言葉に出せる人間が、一体この世界にどれだけ居るだろうか。恐らくラウラが無意識に奈桜を信用してしまっているのはこれがあからだろろう。

他人の役に立てる事が心底嬉しく感じるなどという異常者。

しかしだからこそこの女は、ラウラが大きく何かを仕出かさないう限り、確実にこちらに害を加えて来ることはない。……いや、例えそうなたとしても、この女は許すかもしれない。

分かりやすいその精神こそが、何よりもこちらに安心感を与えるのだ。

踏み込んでもいいのだと、受け入れてもいいのだと、彼女はそこに居るだけでそう思わせてくれる。

「……ん」

……そういえば、と。

ラウラは以前から彼女に聞きたいことがあったことを思い出した。

周囲に誰も居らず、絶好の機会。

話すならば今しかあるまい。

「綾崎奈桜、”シャルル・デュノア”はどうするつもりだ？」

「……ラウラさんも知っていたんですか？」

「あれほどの事があったのだ、ある程度の生徒の素性は調べてある。その中で私と同時に、加えて2人目の男性操縦者が入って来るとなればより深く調査を行うことも当然だろう。少々強引な手も使わせて貰った」

「と、言いますと?」

「性別を確かめる為に更衣室にカメラを仕掛けさせて貰った」

「……盗撮は犯罪ですよ、ラウラさん」

「そうは言うが、織斑一夏が同性であるはずのシャルル・デュノアに妙にスキンシップが激しかった事が私的には犯罪チックに思えたのだがな」

「……映像の方は?」

「あんなものを残せると思うか?」

「冷静な判断をありがとうございます」

「あんなもののせいで教官の名誉を削ぐ訳にはいかないからな、当然の事をしたまでだ」
恐らくは周囲に同性の居ない環境に置かれていたが故の行動だろうが、一瞬同性愛者ではないのかと勘違いしてしまう程の映像の数々に、ラウラ自身動揺したことは記憶に新しい。

映像は全て処分した。

全ての監視カメラも取り外して処分した。

誰にとつても不幸にならない判断をしたと自負している。

「デュノア社の人間がこの時期に偽の男性操縦者をこの学園に送り込んで来たと来れば、その目的は明らかだ。それは貴女も分かっている筈だろう」

「ええ、分かっています」

「ならば何故その女を貴女は見逃す？ 貴女のその行動は織斑一夏と国家に対する裏切りと取られてもおかしくない行為ではないのか？」

「……………」

ラウラの言葉に奈桜は臉を閉じて俯く。

綾崎奈桜という人間がどの様な者であるのかはラウラは理解している。だからこそ、その判断が間違つた甘やかしてはないのかとラウラは問いたい。ラウラが失敗をした様に、貴女もミスを犯しているのではないかと。そう彼女に尋ねたかった。

「…………ちなみに、なぜ私がシャルルさんの性別を知っていると気付いたんですか？」

「貴女が始めてシャルル・デュノアを見た際の反応だ。普通であれば2人目の男性操縦者など目の前にすれば驚愕か好奇の目を向けるだろうが、貴女だけは違った。特に驚く事もなく、一瞬注視しただけで直ぐに興味を失つたかの様に周囲の女生徒に向けるのと同様の視線を送り始めた。あの時点で貴女がシャルル・デュノアの何かに気付いたのは間違いない」

「……そういえばあの時、ラウラさんは私のことをジッと見ていましたね。ですがそれだけでは根拠に乏しいのでは？」

「そうだな、あの時点では貴女が異性に対して全く興味の無い人間だという可能性もあつただろう。……まあ言ってしまうえば、後は私の勘と願望だ。教官のお気に入りであり、且つ私がここまで認めた貴女ならばあの瞬間に全てを見抜いていた程には優秀であつて欲しいという、な」

「……なるほど。ちなみに答え合せをしてしまうと、両方正解ですよ」

「両方……?」

「ええ、私は確かにあの時点でシャルルさんの性別には気付いていましたし、男性に対して特別な思いを抱いたりもしません」

「……貴女は、同性愛者だったのか!？」

「女性に対してもそういった思いを抱いた事ありませんから、それは違うかもしれませんがね。……ですから、今回私がシャルルさんをフォローしている理由は他にありません」

「ほう……?」

ラウラは突然のそのカミングアウトに一瞬驚愕してしまつたが、すぐに気を取り直す。よくよく考えれば彼女は恋愛にうつつを抜かすようなタイプには見えない。反面、

好意を寄せる者は多いだろうが、そうなたたとしてもそれに応えるとは思えない。相手の面や立場がどうであろうと、誠実に断るに決まっている。

……話は逸れたが、ラウラは改めて冷静に彼女の言葉を待った。

「私だって最低限の常識はあります。シャルルさんの行なっていることは間違いなく犯罪です。ですから悪いとは思いつつも、この件については事前にある程度調べています」

「ふむ、そんなツテが貴女にあつたのか？」

「仮にも私は大企業の専属ですよ？……代わりにまた写真集の依頼を受けることになつてしまいました」

「そ、そうか……」

「うう……あのスーツを着た写真が世に出回るなんて……」

「……………」

各国の代表候補生にはそういったアイドル的な要素が求められることもあるが、企業の専属となればそれは更に顕著だ。しかも美容やファッションを中心に上がってきた乙女コーポの専属となれば、それくらいあつて当然、というか前提だつたと思うのだが……そんなに嫌がる事なのだろうかとラウラは疑問に思う。そもそも乙女コーポレーションの専属になるくらいなのだから、それは覚悟の上、どころか望んでいそうなもの

なのに。しかしまあそれは今はいいとして、

「……え、えっと。それでですね、簡潔に述べますと、シャルルさんに男装と潜入を強制したのは、どうやら実の父親だという事が分かったんです」

「とんだ屑男だな」

「しかも彼女は非嫡出子だそうです。彼女の母親が亡くなったと同時に引き取り、瞬く間に代表候補生にまで押し上げ、そしてここへと送り込んだ」

「救いようが無いな」

「以前デュノア社で働いていた方に聞いたところ、社長はシャルルさんに一切会おうとはしなかったそうです。勿論、本妻である夫人からは大いに嫌われ、彼女の周りには大凡味方と呼べる人物はほぼ存在していなかったとか」

「なるほ……いや、なぜデュノア社で働いていた者など知っている?」

「今は乙コーで働いていますので。産業スパイとして来たそうですけど、思いのほか住み心地が良くて定住してしまっただか。今はIS部門で働いています」

「技術を盗むどころか盗まれていてはいませんか……」

働いている技術者として当然の判断だろうが、それが分からないからそんな経営状態になっっているのではないだろうか。などと思ってしまうのはラウラがそういった場所で働いた事がないからこそ言える事なのか。どちらにしてもデュノア社が世間一般で

考えられているよりも追い詰められているのは間違いない。

「それはさておき、そんな訳で私にとってはシャルルさんは無視できない存在になってしまいました。彼女がその行為に罪悪感を持っている事も確認できましたし、一夏くんが想定以上に鈍感さんだったことも私が手を貸さざるを得なくなった理由の一つですね」

「……？なぜ、織斑一夏が……？」

「私としてはシャルルさんの件は一夏くんに解決して欲しいですから。きつとシャルルさんにとつても一夏くんにとつても、互いに大きな存在になれると確信しています」

「厳しいのか甘いのか分からない判断だな、それは」

「『甘やかす』というのは存外難しいことなんですよ？無思考で甘くするのでは無く、どう甘くすれば結果的に相手の為になるのか考えなければなりません。あの2人が力を合わせて解決することができると、私はフォローと根回しをするだけです」

「その間にも織斑一夏の機体データは盗まれ続けるのだがな」

「……言い訳臭くはなりますが、私だつて一夏くんの機体がもう少しまともな第3世代でしたら強引に事を進めていました。ですがあれは……」

「……まあ、参考にはならんだろうな。いくらデータを取った所で、あれが再現できるとはそうそう思えん。というか再現した所で確実に流行らないだろう。そもそもアレは

何処にイメージインターフェイスを使っているのだ、本当に第三世代機なのかすらも疑わしいぞ」

「そういう訳で、直ちに問題があるとは思わず……障害が出るとすれば、デユノア社がアレを第2世代寄りの第3世代の基本機体だと勘違いして、迷走が更に深まるだけかなあ」と

「実際に戦ってみて感じたのだが、恐らくアレは内部のプログラムすら一般的な物ではないだろう。あんなものを見てしまえばデユノア社は2度とまともなISが作れなくなる」

「何もせずともシャルルさんは自ら報復を行なっていたんですよ……」

「何もかもが裏目に出るな、デユノア社は」

「自業自得といえればそれまでですけどね……」

ラウラが聞いた限りの話ではあるが、そもそも織斑一夏の機体は装備の枠が全くないという。しかも射撃用のセンサーリンクシステムすら無く、基本性能の高さに反して圧倒的な燃費の悪さ。

一見すればただの欠陥機であるが、第一形態時から単一仕様能力が使えるというこれまでに無いような意味の分からない仕様がそこにはある。

言ってしまうえば、何の参考にもならない。

あんなものを調べても、百害あって一利なし。

プログラムのコードに作成者にしか分からない様なものがあることはよく聞く話だが、アレは存在自体がそれだ。何を思っ、どうやってあんなものを作ったのか、全く理解ができない。

操縦者の立場など完全無視であるのだから、完全に作成者の自己満足の代物だろう。

……正直なところ、それが無ければもう少しまともに戦える様になるのとラウラも残念に思ったりもした。故にいくらデータが盗まれようが、例えあれをそのまま盗んだとしても、泣くのはデュノア社でしか無い。それだけは間違いない。

「……貴女の言い分は分かった。この件に関しては私も貴女に一任しよう」

「ありがとうございます」

「だからこそ、一つ言わせて貰いたい」

「はい……？」

「……貴女は、その、大丈夫なのか？」

「へ……？」

「教官としばらくの間、話せていないのだろうか？」

「つ、どうしてそれを……？」

「私の目は基本的に教官か貴女しか見ていないのだから、それくらい分かって当然だ」

「あはは、なんだかそれは恥ずかしいですね……」

そう言つて笑つていても、悲しげな顔をしているのに自分で気付いているのだろうか。そんな顔が見ていられなくて、ラウラがふと目を下に落とせば、自然と彼女の指が目に入る。

(……絆創膏?)

意味が分からなかった。

話を聞いている限りでは、彼女は家事一般が得意だという話だった。そんな彼女が家事を失敗するのだろうか? そんな筈がない。彼女の両手の怪我也今やその跡が殆ど残っていないくらいには完治をしているはずであるのだし……

(……まさか、まだ指の感覚が?)

そもそもラウラが思い出せば彼女の怪我の中で最も酷いものが両手の損傷だったという。両足も酷かったとは聞いていたが、それでさえ未だ歩く事が出来ない有様なのだ。満足に動かすどころか、しっかりと握る事ができるかすら怪しい状態だろう。

「……そんな状態で、料理を?」

「つ……あ、あはは、バレてしまいましたか?」

「なぜそんなことをしている、誰も止めなかったのか……!」

「もちろん止められましたよ? たくさん怒られました。……けど、私にはこれしかあり

ませんから」

「なにを、言っている……」

「私の不注意で2週間も何も出来なかつたんです。これ以上千冬さんに不便をかけたくありません」

「そうは言うがな……」

「気にしないでください、ラウラさん。私がやりたくてやっていることです。それにいいりハビリにもなるんですよ？千冬さんも喜んでくれますし、良いことづくめじゃないですか♪」

「……………」

この時、ラウラの中にそれまでの自分では考えられないことが起きた。

少しではあるが、怒りが生じたのだ。

他ならぬ、あの教官に対して……

（教官はこいつを放つて一体何をしているのだ……！綾崎がここまでしているのに、なぜ避ける様な真似をしている！）

避けられても、相手にされなくても、ただひたすらに相手を想う。

食べられているかどうかも分からない食事を必死になつて作り、毎日毎日あの部屋で帰らない主人を待ち続けるのだ。

いくら相手が尊敬する織斑千冬とは言えど、盲目を脱しつつあるラウラにとって、彼女の事を認めつつあるラウラにとつて、それは到底許せる様なものではなかった。

「……すまない、今日はこれで失礼させてもらう。だが部屋までは送っていいこう、あまり無理をするなよ」

「ふふ、なんだかラウラさんには心配されてばかりな気がします」

「実際に何度も言っているからな、一向に言う事を聞いては貰えないが」

「あ、あはは……ごめんなさい……」

そうは言ってもどうせこの女は何かあれば無茶をするのだ、そうに決まっている。今のラウラにはその確信がある。そうでなければ、ラウラがこれほどこの女に入れ込むことはなかったのだから。